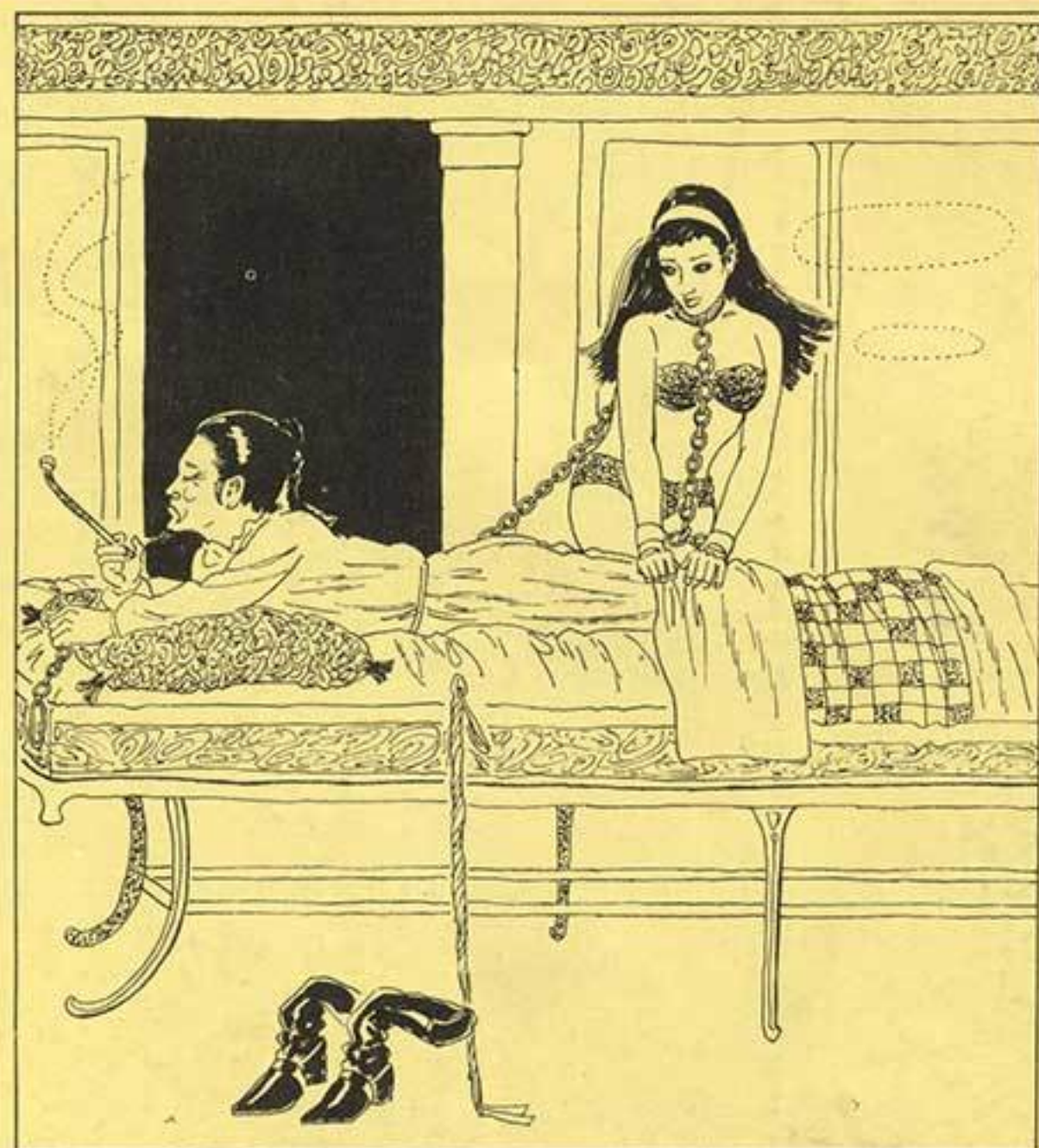


奇譚クラス

新しい風俗文献誌

1964・9

懸賞(告白、手記、体験)入選作品発表



9月号

奇譚クラス



9月号

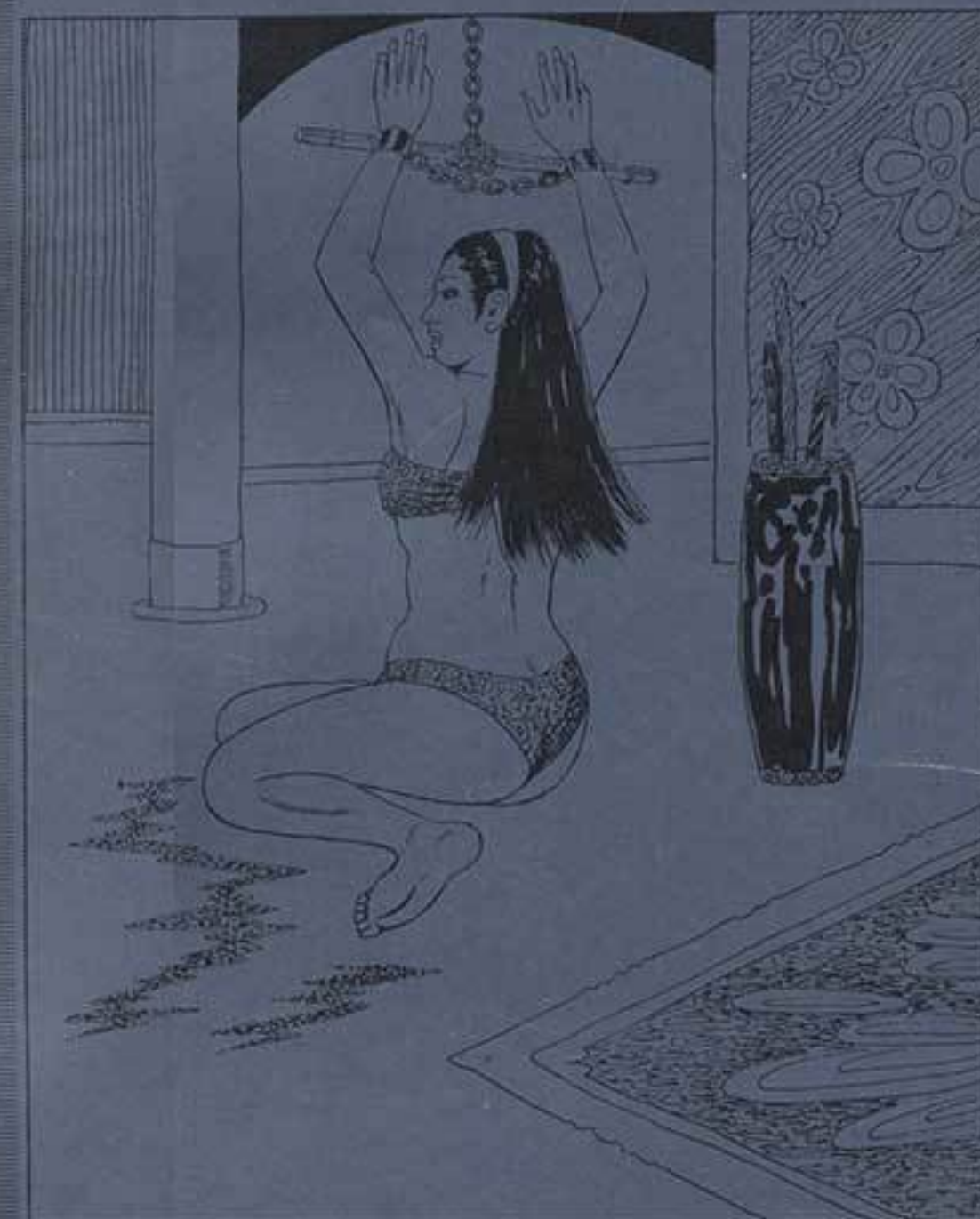


定価三〇〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



9月号

¥300

昭和三十九年六月二十日印刷 昭和三十九年九月一日発行 九月号第十八巻第九号 毎月一回 日発行 昭和二十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和二十五年六月十七日郵政大印特別郵便承認第二二二号

新しい分譲品

女子斗争場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子

略号(のわ)

フンドシ一丁の二女が豊麗な裸身を惜しげもなくむき出しにして組んずほぐれつの大格闘。若々しい肉体の躍動が手にとるように眺められる快心のフォト。

二女格闘場面写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子、玉田美佐子

略号(のか)

全身汗みどろとなつて、お互いに相手の乳房や鞭を掴みあつて必死になつて戦う女闘美のシーン。

全裸正面切腹姿態

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子

略号(のみ)

今や身にまとう何ものもかなく、柱にもたせかけて、壮絶なる女体切腹を敢行する啓子の正面像。

切腹に悶える裸身

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

大塚啓子

モデル 大塚 啓子

略号(のそ)

柔肌をキリキリと切りさばく女体切腹の壮絶な雰囲気。苦痛に悶える裸身の美しい曲線。全裸になつて演ずる啓子の切腹シーン。

浣腸と便意の苦悶

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 遠藤百合子

略号(のけ)

一〇〇〇〇〇の浣腸器でパンティを押し上げた百合子が自らの手で浣腸を施し、やがて押し寄せてくる激しい便意に、身をくねらし腹をおさえて苦しむ有様。

強烈エビ責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねむ)

足の指が全部反りかえつてしまふほど厳しく縛りあげた足首を背中との後手首と連結して、ぐいぐいと締め上げれば、全裸の美佐子はう、う、う、う、と思わずうめいて全身を揺れんさすのだった。

後手首の高縛り

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねへ)

きつちりと合せて括りあげられた後手首が首筋近くへ高々と吊り

あげられて、身動きできない全裸の女体が、縄目の痛さに転々として床の上をころがりまわる。

椅子またぎの責め

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 玉田美佐子

略号(ねと)

一糸まとわぬ肌をひしひしとまといつく高小手のきびしい縛し。無理矢理椅子をまたがせられ、佐子は白い肌を真赤に染めて素直に晒らされるのであった。

血紅切腹決定版

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(れは)

女体切腹のポーズをとつて既に定評のある大塚啓子が、今までの経験を活かして演ずる血紅切腹の決定版。一組十枚の中、そのどれをとつても、悉く素晴らしい力をもつてマニヤの皆様の胸に飛び込んでくること必至の切腹フォト。豊富な血紅を使用しました。

血紅切腹凄惨姿態

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(れみ)

短刀によって下腹を真一文字に切りさばいてゆく有様を血紅によって次々と経過をあらわし、全身

をうねらし、四肢を揺れんさして悶えるさまを刻々と描写した凄惨な女体血紅切腹の連続写真。

黒フンドシを誇る

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 達藤百合子

略号(くわ)

百合子の豊麗な裸身にきりと美しい、アクセントを添える黒フンドシ。臀部に喰い込む黒フン。

高圧空気浣腸

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(むい)

高圧空気ポンプによって、シューシューと送り込まれるエヤー。

浣腸場面大写真

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(むは)

臀部から三種の浣腸器に至るまで大写真で鮮明に捉えられました。

施される浣腸

大手札印画紙焼付

三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

略号(むろ)

各種の浣腸器で他人から施される女体浣腸の大写真。



奇譚クラブ 9月号 目次

第一 グラビヤ

マゾヒスチンのポートレート……大塚啓子
全身緊縛の表と裏の表情……大塚啓子
肌を伝う小蛇の妖美四態……梨花悠紀
煙草を吸わされる女……大塚啓子
縄に狂う美女……大塚啓子
蒲団蒸しの構想……大塚啓子
白晒六尺褌を誇る……大塚啓子
サテン囚衣に縛しめられて……東浦ひかる
長襦袢と腰巻の魅力……桜井葉子

巻頭口絵

アイデア画 縫ぐるみ囚衣……四馬孝画
傑作責画 革紐の泣け蟬……四馬孝画
女相撲 「禁じ手五題」の内……雪崎京人・提供
女体浣腸 俗世解脱の洗礼……四馬孝画
女体切腹 姫君自刃……四馬孝画
着想画 水車小屋の花……四馬孝画

第二 グラビヤ

悦唐の表情と肌の縄目……大塚啓子
新人「カーテンの前」にて……木村洋子
足首縛りと太股縛り……大塚啓子
女体切腹擬態連続フォト……大塚啓子
白バンド着用海老しぼり……東浦ひかる
逆エビしぼり二態……大塚啓子
責めの苦痛に耐える表情……大塚啓子
三五ミリ映画のワンカット……大塚啓子
光と影のモザイク模様……玉田美佐子
マスクをした女……栗本ミチ子

◆奇クサロン◆

○「白日夢」波紋……編集子(49) ○妻の告白……水野加代(50) ○全裸の解剖

射……新宮明夫(51) ○「アブ日記抄」私の日記帳から(黒皮ハンドバッグと注
射)……綾真須男(52) ○増まれ児世にはびこらず……杉原虹児(52) ○女性モ
デル募集……M・V・F・O・T・雑感……福本春夫(56) ○「SM研究」お仕置の言葉……東山映史
松原良(58) ○夫婦のSMプレイ……新宮明夫(57) ○「SM研究」お仕置の言葉……東山映史
なる……前川成雄(59) ○映画・演劇のエンマ・シン……額原実(58) ○女性モ
ならなかったモデル「可愛いグラマー」……堀本鉄三(61) ○「洗好」(60) ○「洗好」(60) ○「洗好」(60)
昌記……稲倉弘(62) ○「洗好」(62) ○「洗好」(62) ○「洗好」(62) ○「洗好」(62) ○「洗好」(62)
(63) ○「洗好」(63) ○「洗好」(63) ○「洗好」(63) ○「洗好」(63) ○「洗好」(63)
志波啓子(64) ○「洗好」(64) ○「洗好」(64) ○「洗好」(64) ○「洗好」(64) ○「洗好」(64)

△私のイメージ△飼育される女囚……近藤一……(65)

懸賞(告白、手記、体験)入選作品……羞恥の記録……吉村英子……(72)

質作・悩ましのサディズム……宇津木洋一……(76)

新連載サディズム小説 心傷たむ遍歴……芳野眉美……(82)

懸賞(告白、手記、体験)入選作品……コンフェッション……戸島雪枝……(106)

姉の責人形……SM族のホステスとして……梅川幸子……(117)

えせ巴里日記 (悦唐絵灯籠 9)……牧高志……(120)

湖畔月影抄 (上)……万田不仁……(132)

「アブ小説」へ甘い屈従……瀨川泰子……(140)

妊娠七カ月のストリップ……伊帆保膳……(154)

続十三人の女死刑囚……瀨沼五郎……(164)

ガン作マニヤのノート 濡れにぞ濡れし……芳野眉美……(178)

メロンのヴィーナス……瀨沼四郎……(186)

浣腸実験記録「ドナン」に寄せて……栗瀬長……(190)

連載小説 花と蛇 (最終回)……鬼六……(194)

本誌最近号総目次……(210)

◇読者通信◇……(212)

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

六月号の読者通信にて便りを寄せられた福岡市の田中弘氏の特別の御厚意によって、ここに妊婦フォトの方々のために、貴重な資料を提供して頂きました。

モデルの田中美佐子夫人は、本年満二十二才の初産婦で、このフォトの撮影は予定日の十日程前で文字通り出産寸前の臨月腹の写真ということがいえます。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にち)

産み月のお腹は、只でさえ動くのにも苦しいのに、後手高小手に縛りあげられて、その裸身をカメラの前に晒した可憐な初産婦。

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付

四枚一組 五〇〇円
略号(にし)

もともと普通の状態の臨月腹を、ごらんになりたいという方々のために、べんべんと膨れ上がったお腹を衣服をめぐって突き出したところを、いろいろなポーズでもってお目にかけます。オーソドックスな妊婦の生態写真。

臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付

四枚一組 五〇〇円
略号(にり)

臨月の大きなお腹を大いばりでぐいと突き出して、皆さまの目の前に、その全貌をあらさまに、ごらんに入れるフォト。

臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にす)

張り切ったお腹の中央に、むくれ上ったお臍が、出産を目前にした腹部の膨大さを物語っているのです。立ち上った妊婦のお腹だけが異様に目立ちます。いろいろの角度からごらん下さい。

柱縛りの妊婦

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(にや)

これは珍しい、床柱に後手の縄を縛りつけられたフォトです。妊婦嗜好ばかりでなく、女体緊縛マニヤの方々にも、一見をおすすめしたいコレクションです。

臨月のヌード

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にわ)

妊娠は女性を最も動物的な姿態に変えさせるといいます。着衣の上から見てさえ、異常に大きな腹部には、何か奇異な連想を起させるのですが、ここに全裸ヌードのフォトによって、妊婦の神秘のベールを剥いてみせます。

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(にた)

神々しいばかりに美しい臨月妊婦の裸身。初めて妊娠した二十二年の女性の身体的変化は、ヌードの立像によって、ごらんになる皆様の目の前に、かくすところなく提供されるのです。はちきれんばかりの若さが、健康的な妊婦の特色を内包して、輝くような美しさを發揮しています。

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円
略号(にる)

臨月腹をつき出して、後手に縛られた妊婦。両手の自由がきかないので、膨れた腹部がこれみよがしにさらけ出され、一片の布さえ纏わしてもらえぬ裸身が、美しい妊婦のペーソスを、しみじみと醸しだしている。

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にお)

このように若々しい臨月腹を手にとるように、近々と眺めることが出来るだろうか。妊婦線もあざやかな西瓜のような腹部が、触って下さいといわんばかりに、鮮鋭なレンズの目によって、はっきりとキャッチされています。

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付

三枚一組 四〇〇円
略号(にぬ)

自由のびのびと、自然のままのポーズで腰をおろした妊婦のヌードが、気どらない普通の状態でカメラに全身を晒しています。愛らしい妊婦の表情です。

突き出た臨月腹

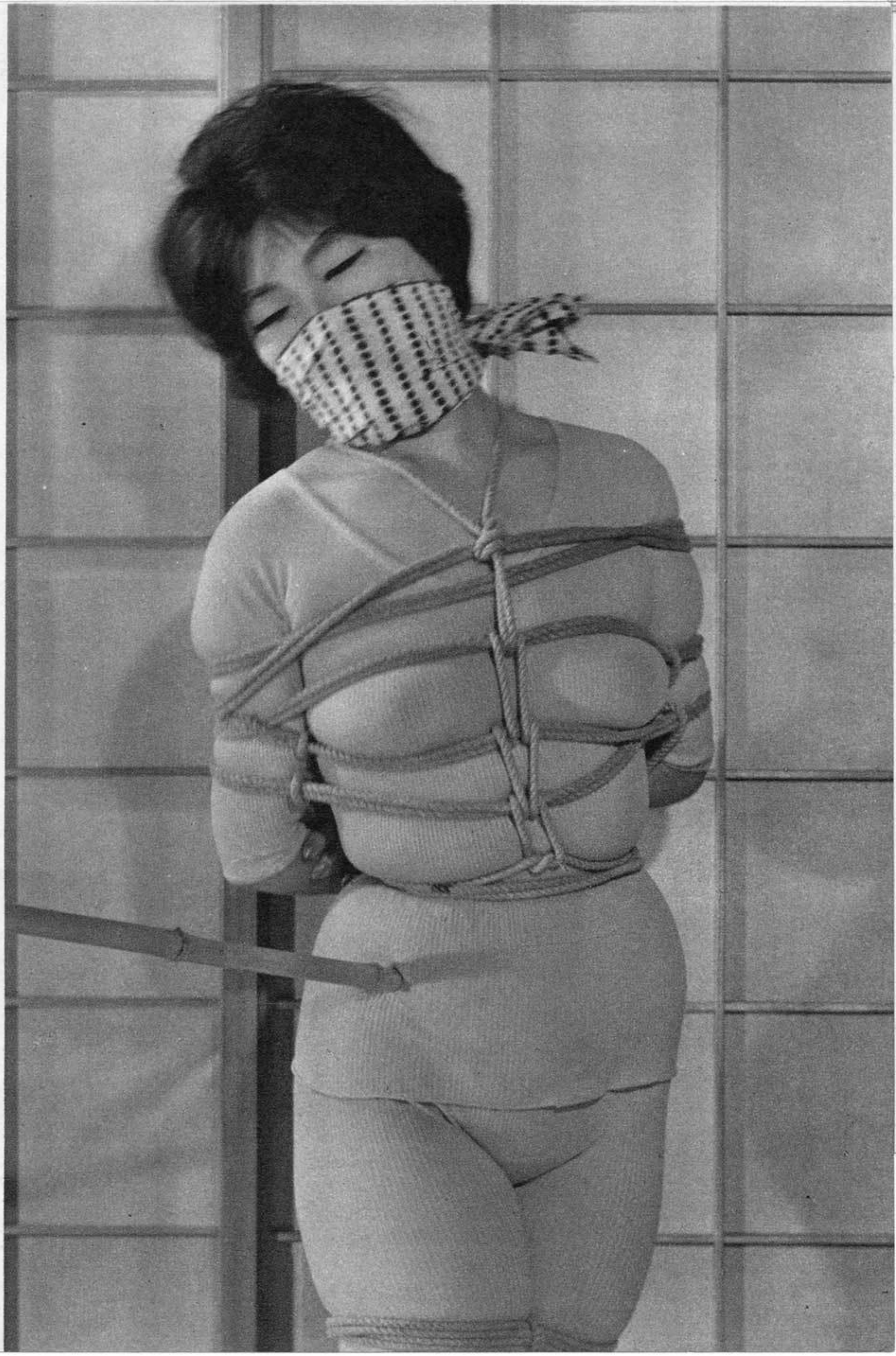
大手札印画紙焼付

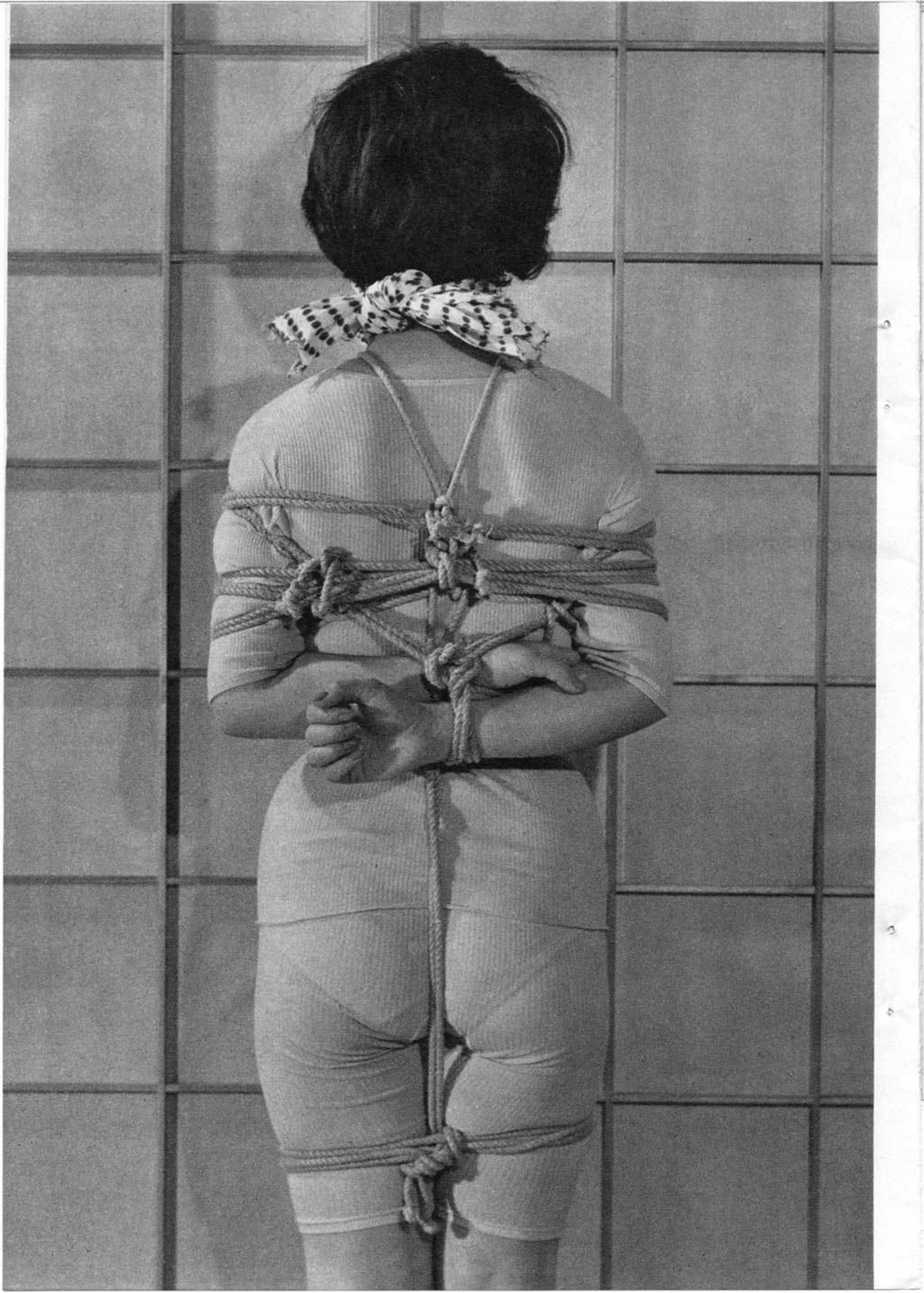
三枚一組 四〇〇円
略号(にい)

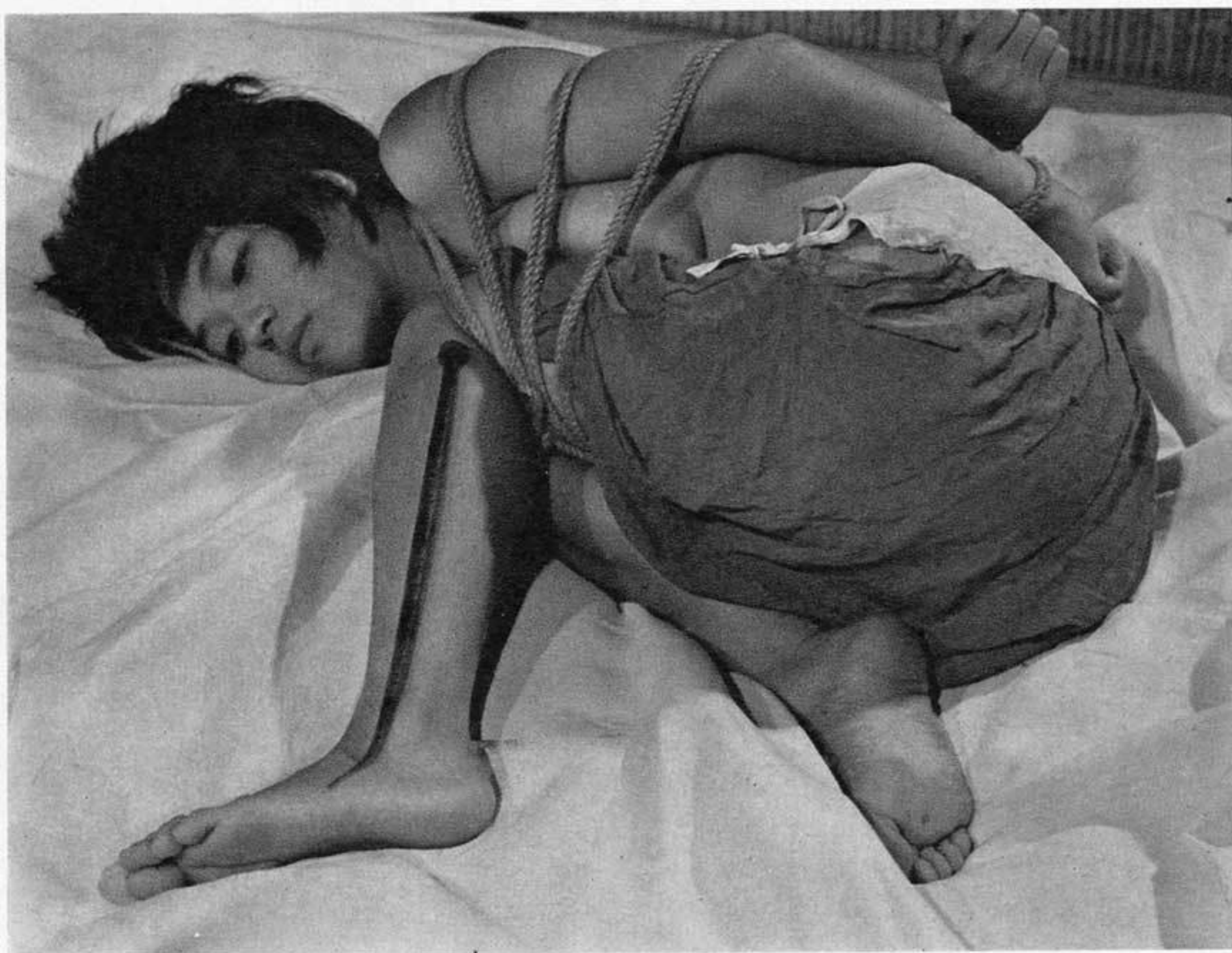
出産を旬日に控えて、もうこれ以上は大きくならないという位、突き出た腹部をもて余して、中腰になつて、休息したところをシャッター・チャンスと狙ってキャッチしました。

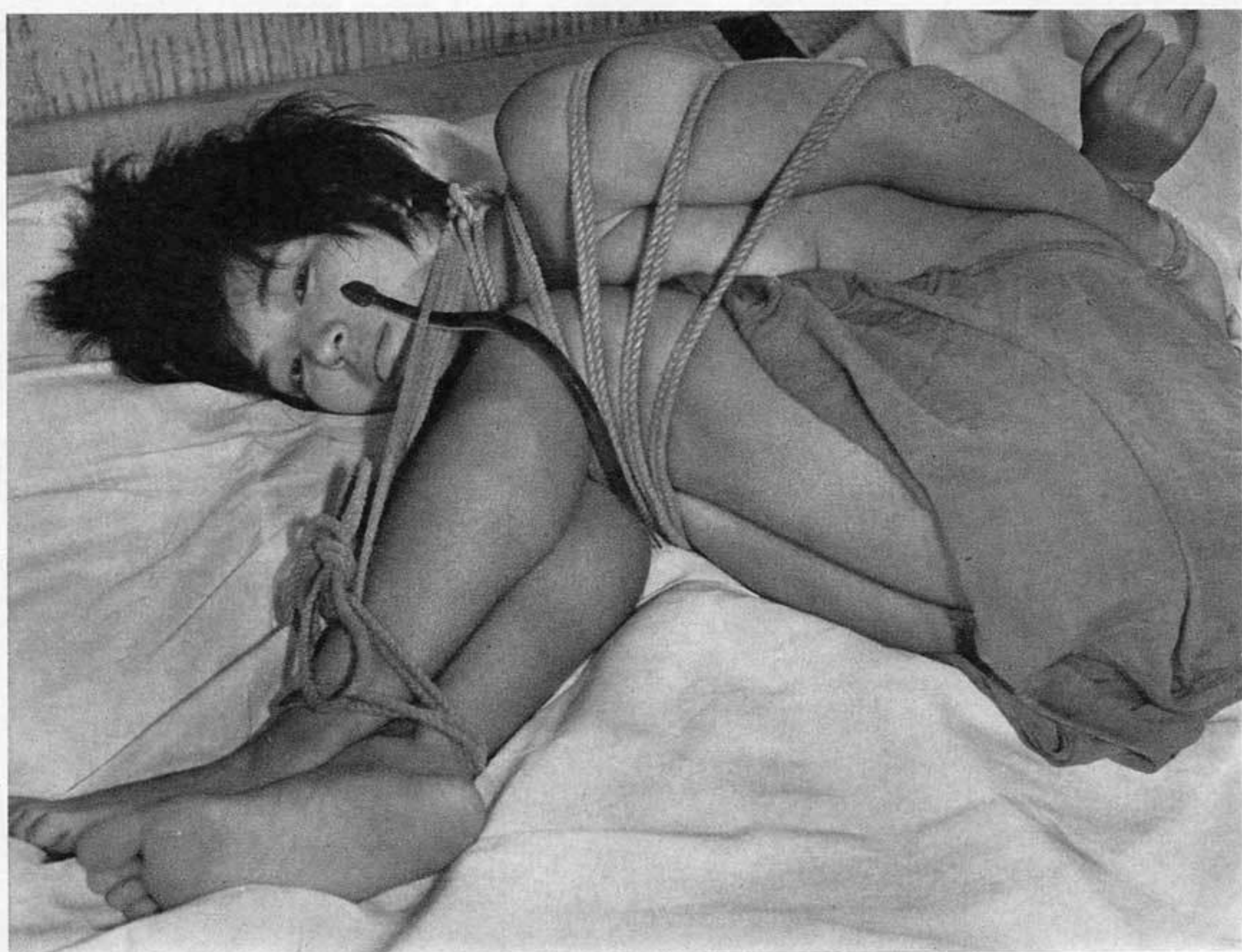
○提供者の御希望により、口絵には発表しませんから、直接お申込みの方にはみお分けします。
○お申込みは略号にて、お願います。勝手ながら一枚宛の分割はいたしかねます。













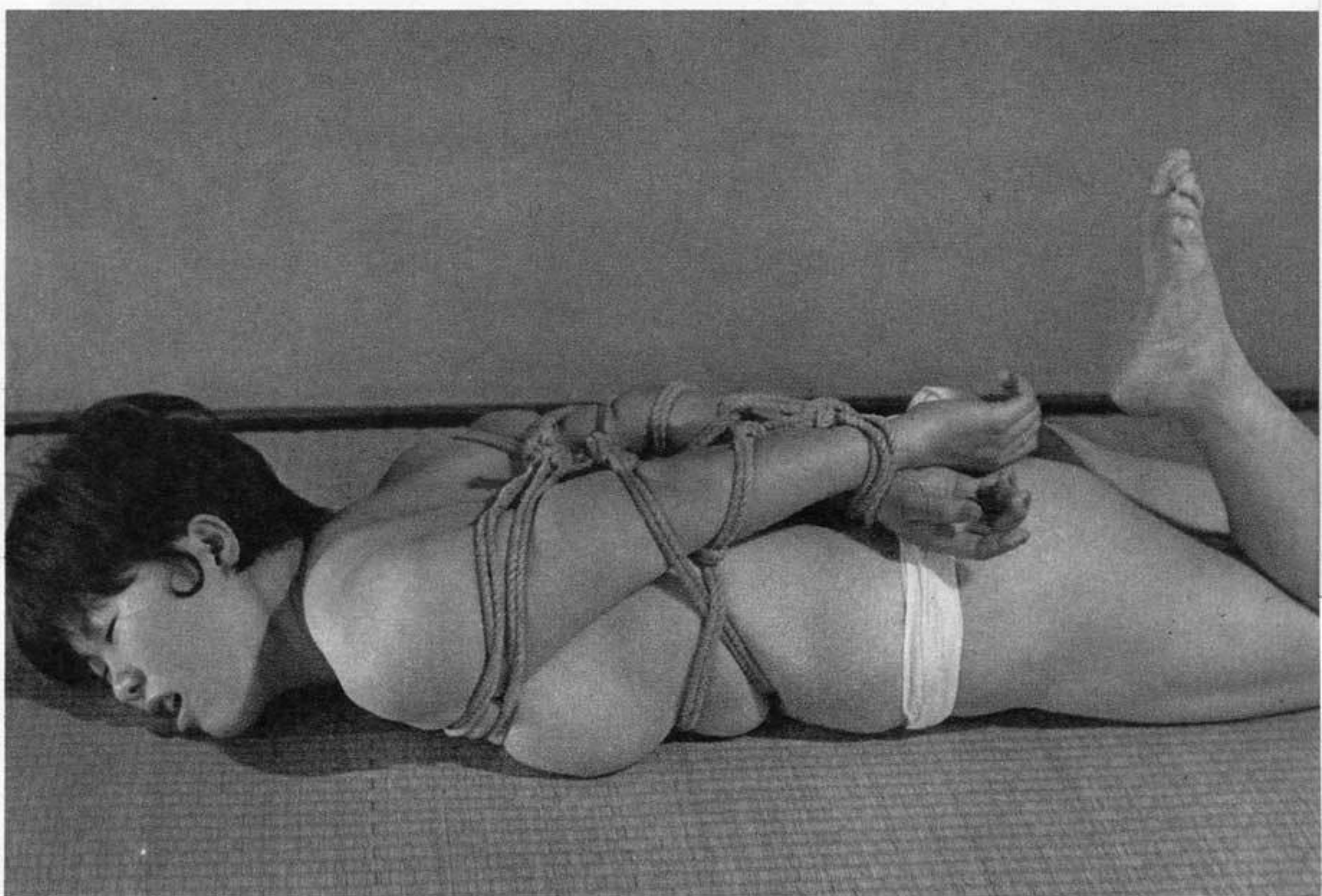
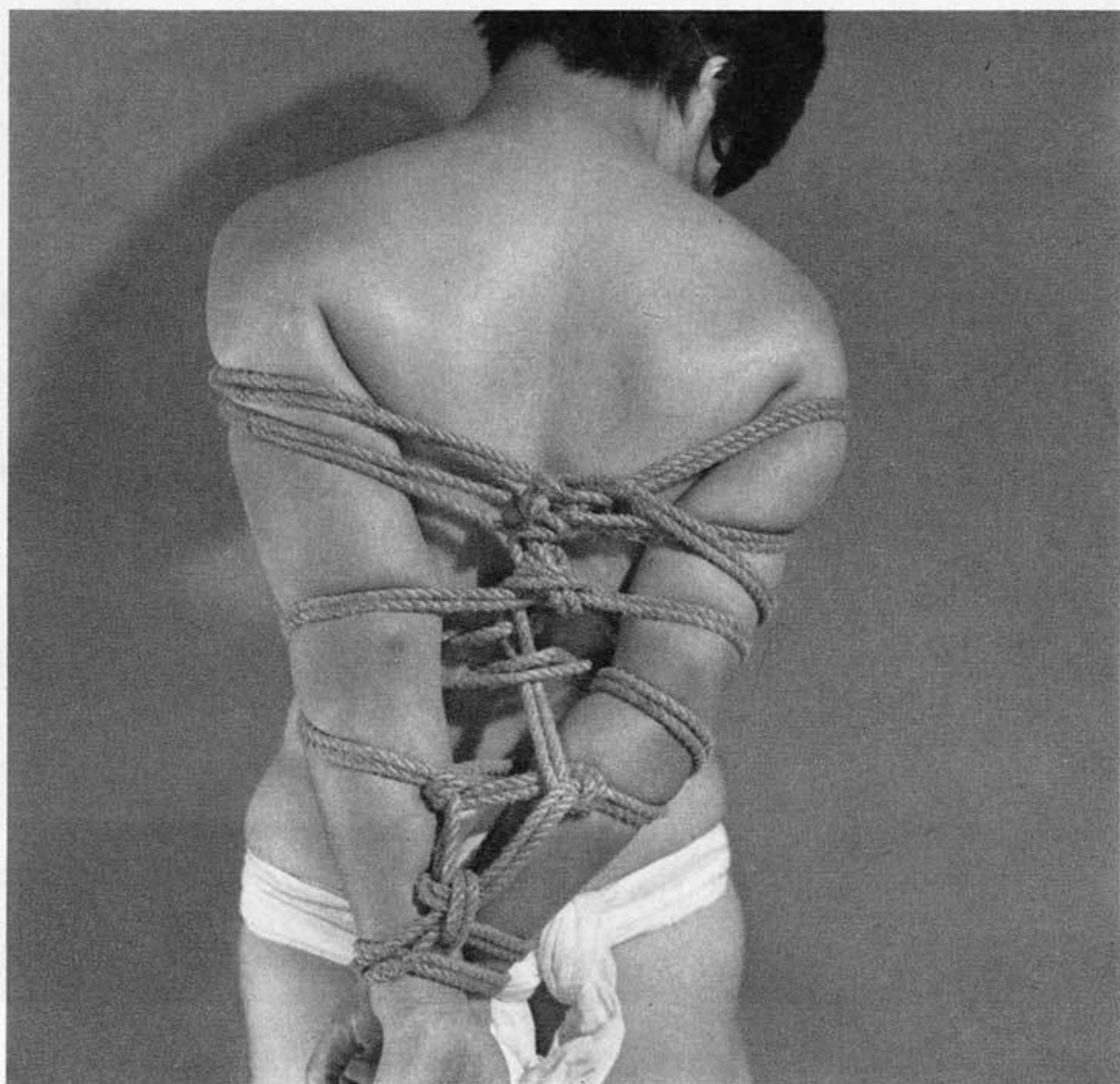


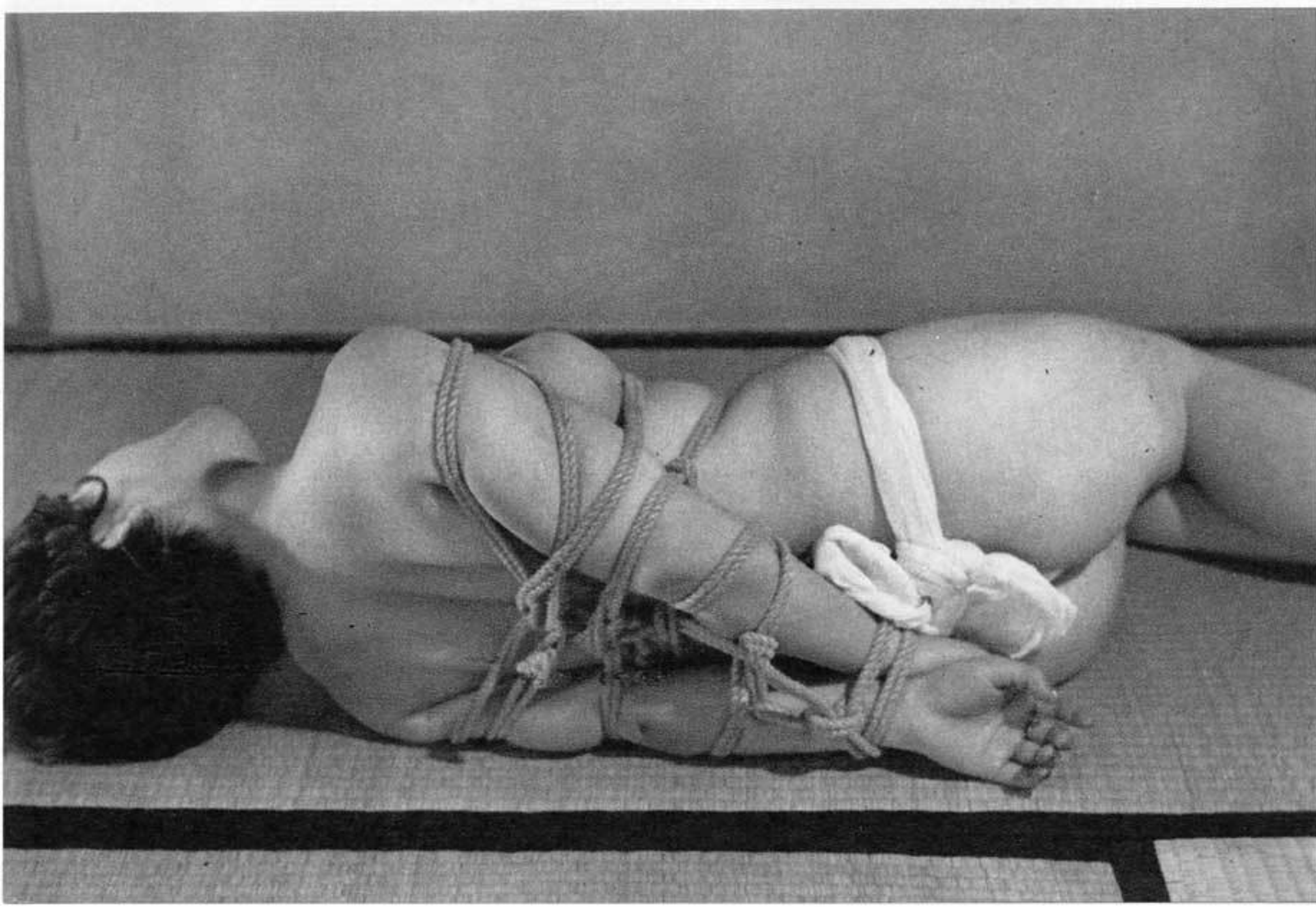


















縫ぐるみ囚衣

四馬孝・画



鳴け泣け蝉

四馬孝・画





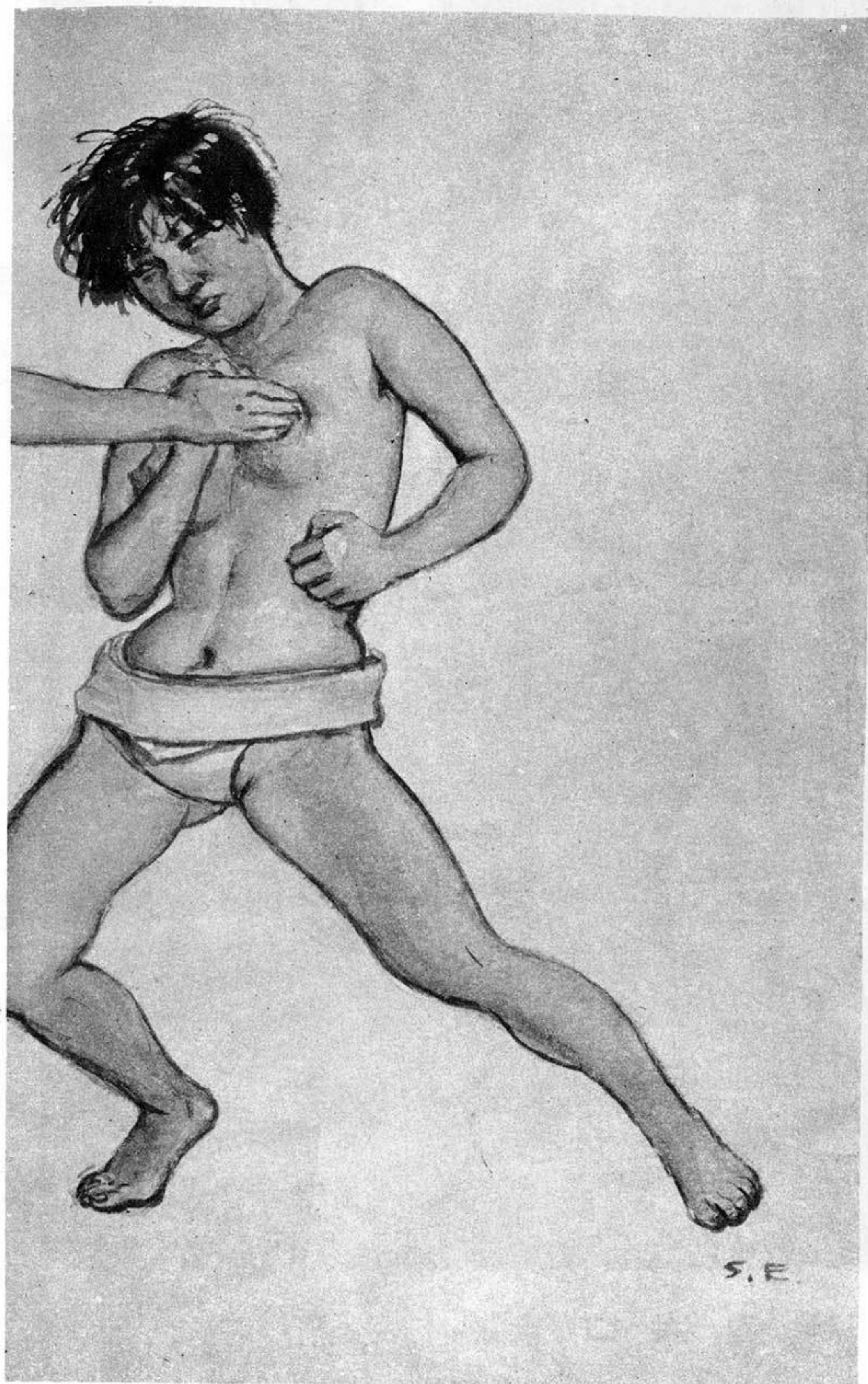
口嵌の紐草

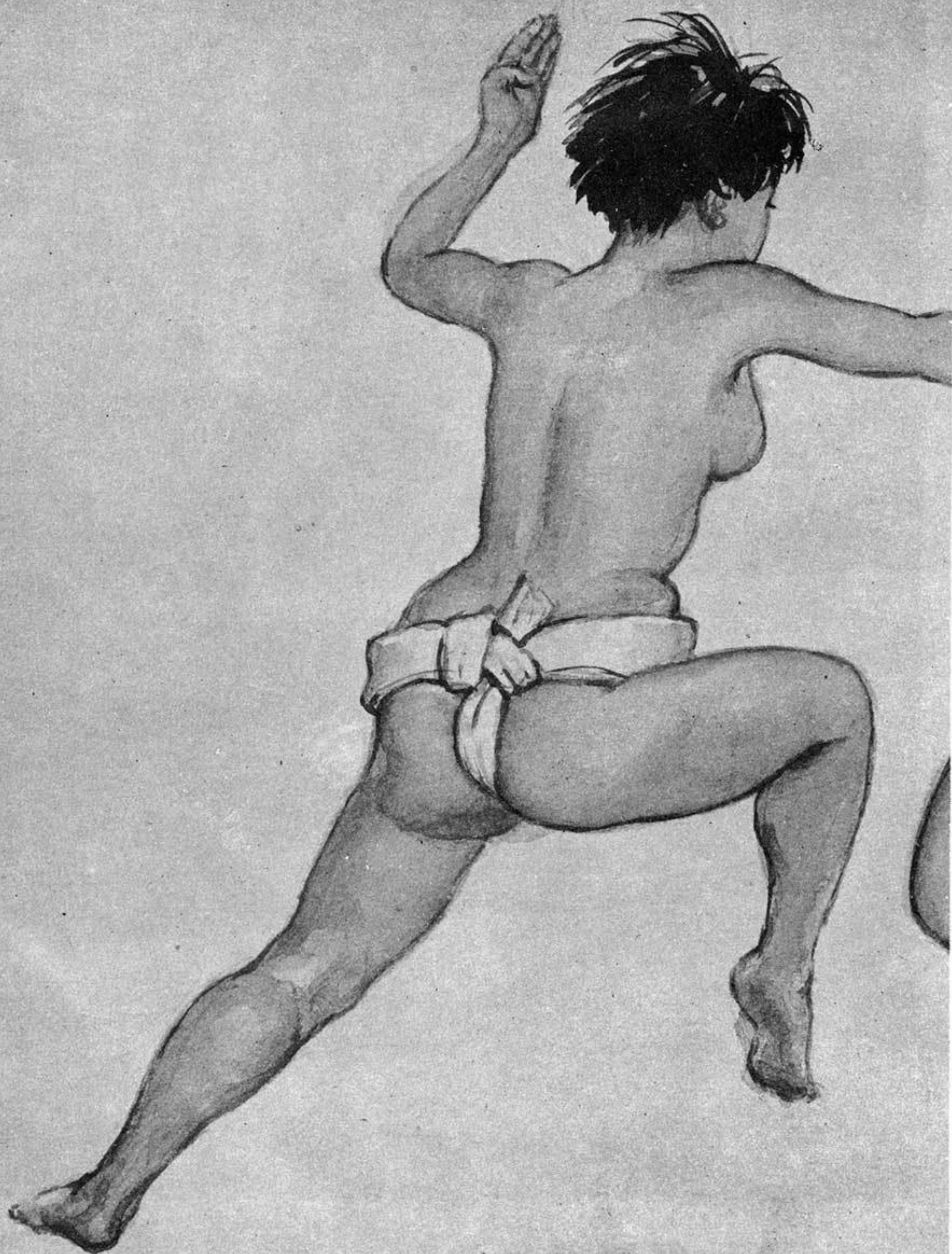
女相撲

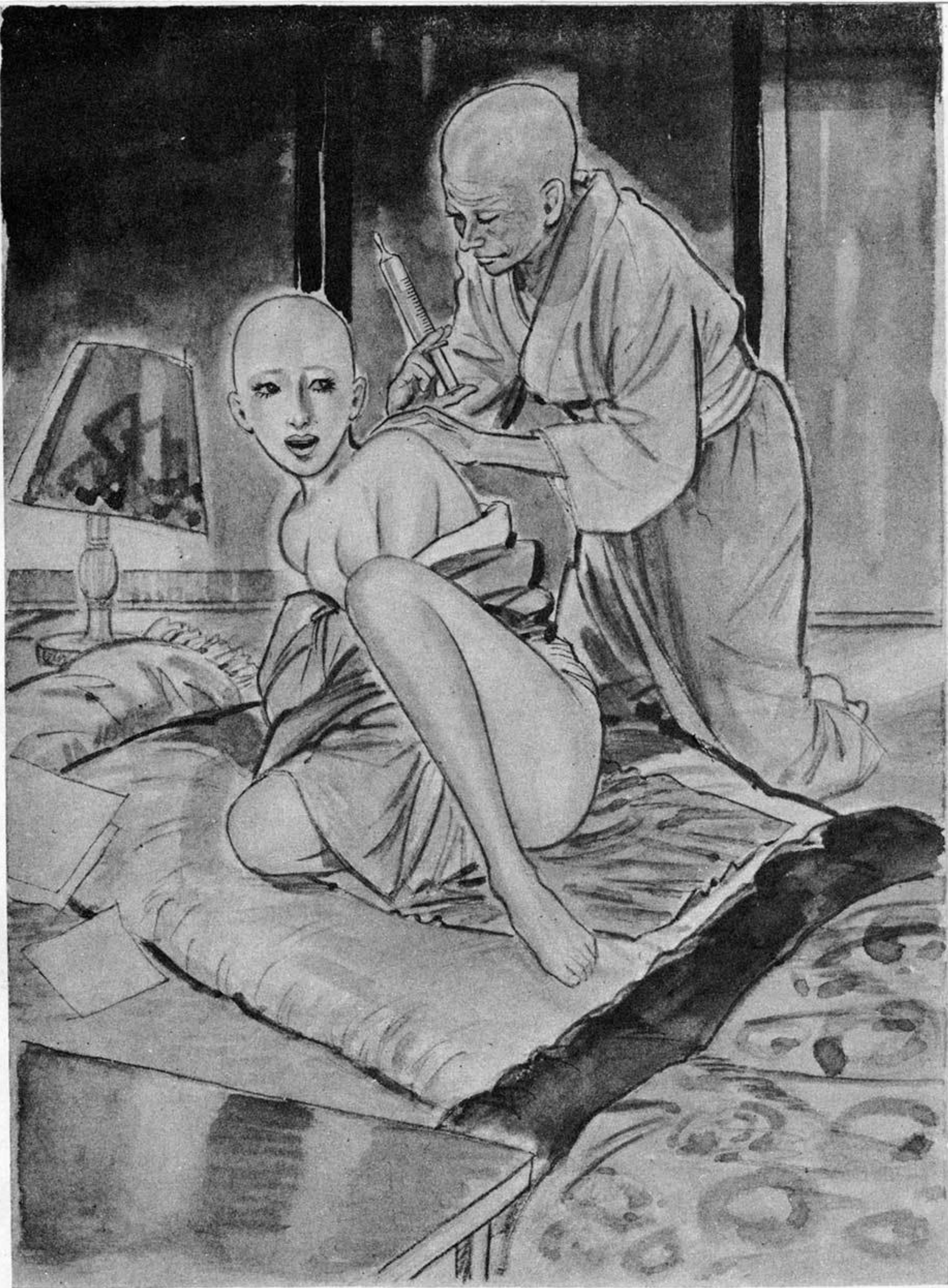
禁じ手五題の内

(雪崎京人提供)

一、突張りに際し手刀で相手の乳房を突いてはならない。







俗世解脱の洗礼

姫 君 自 刃

四 馬 孝 ・ 画





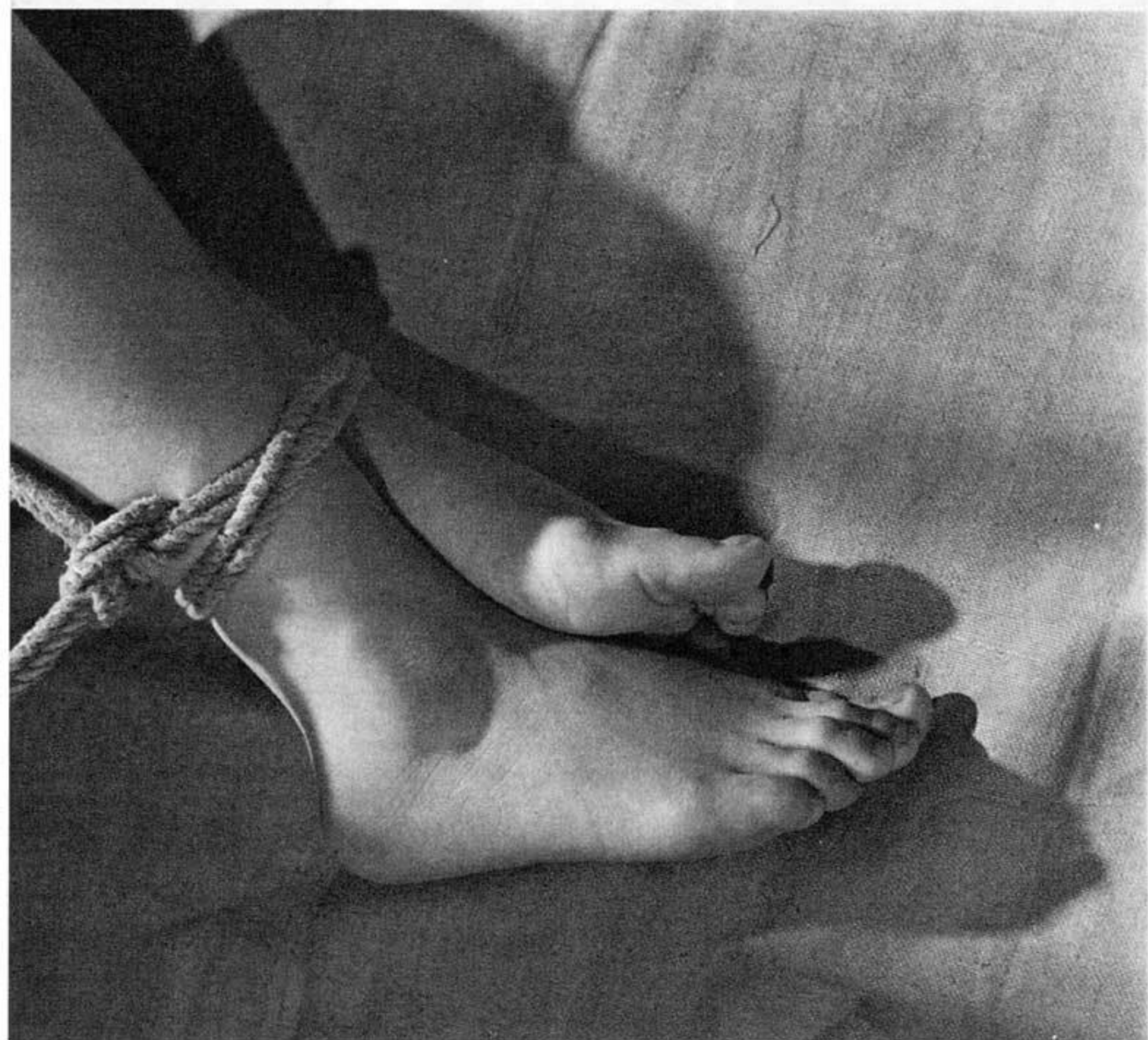
水車の花

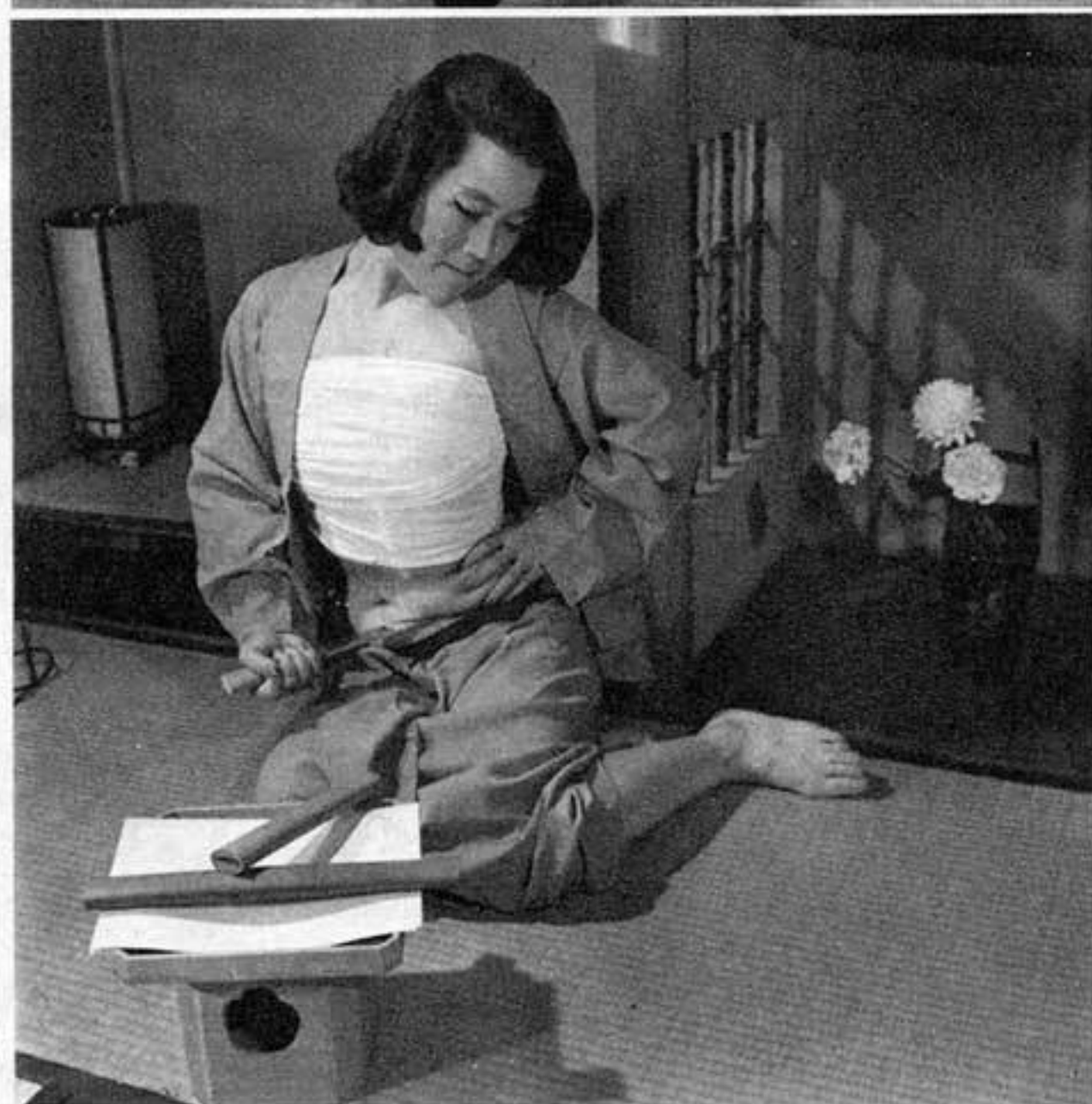
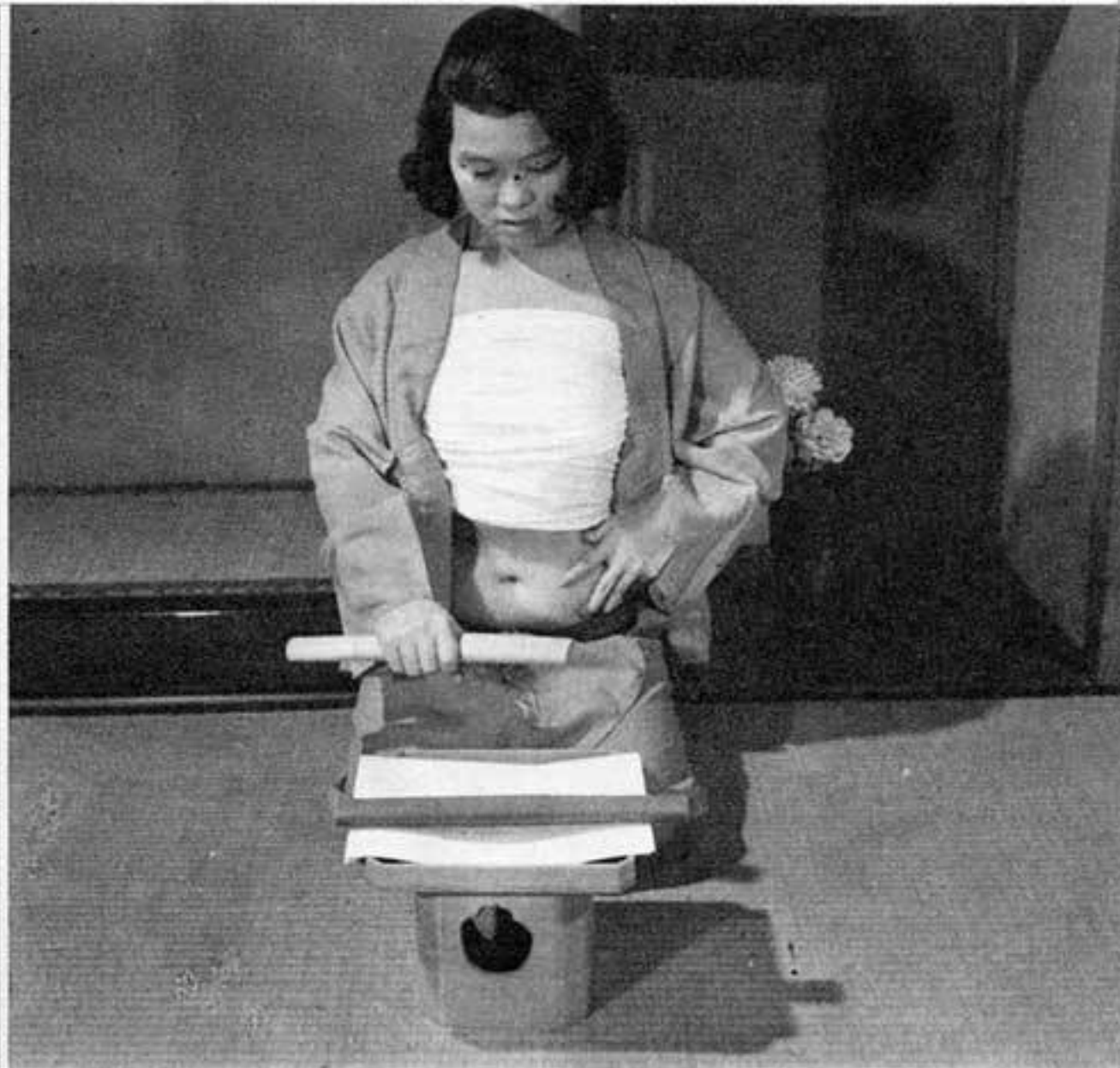




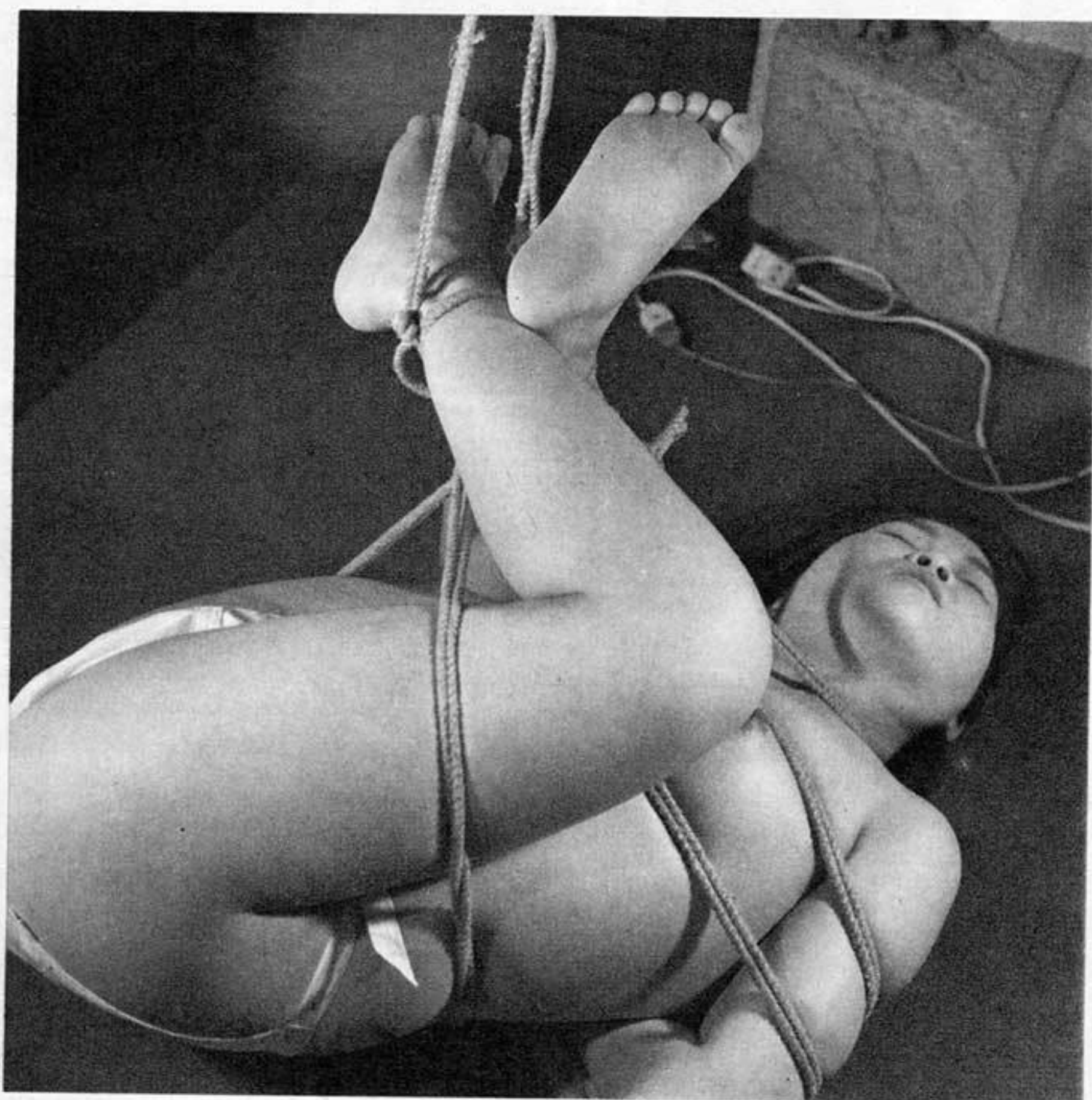




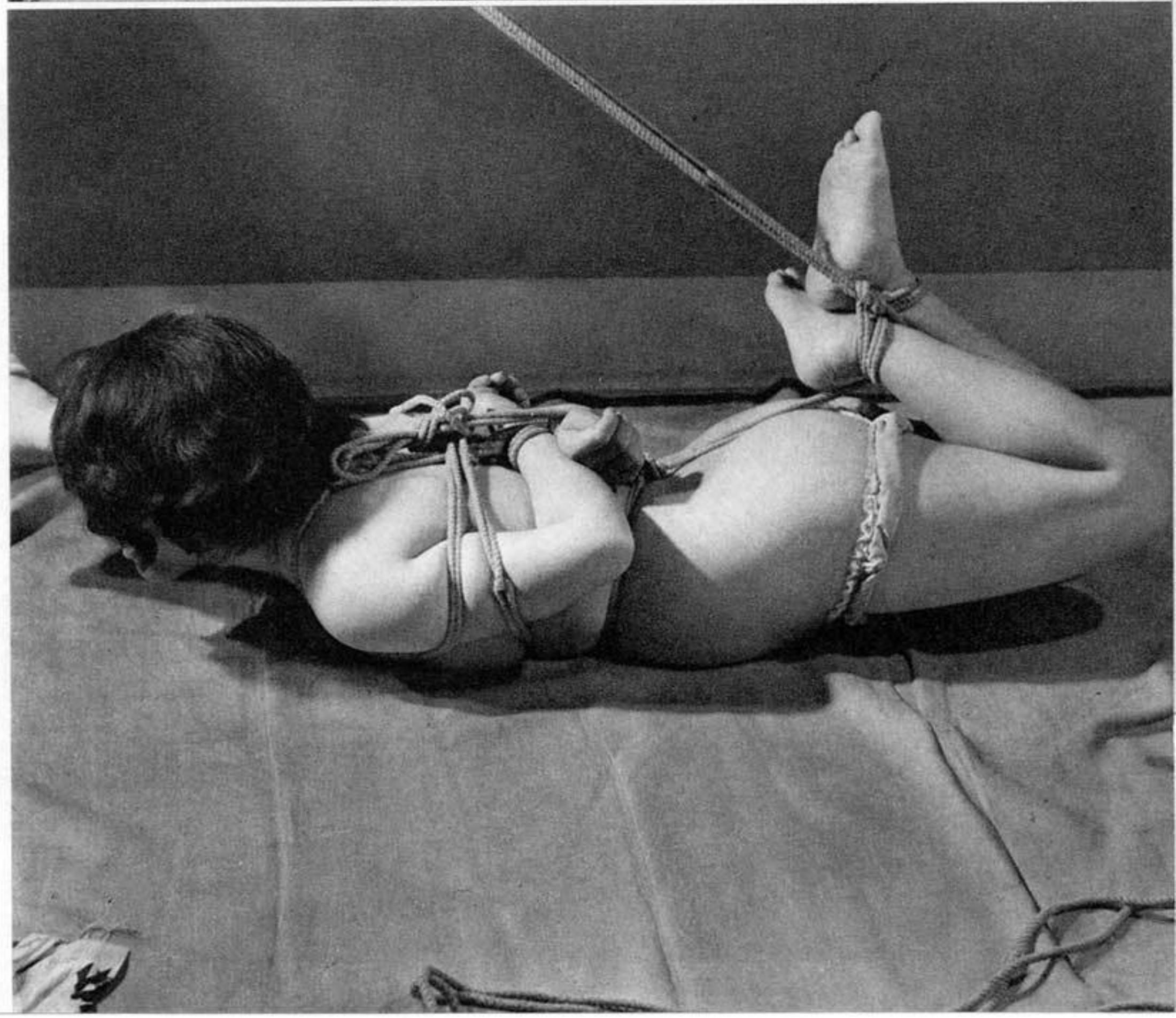
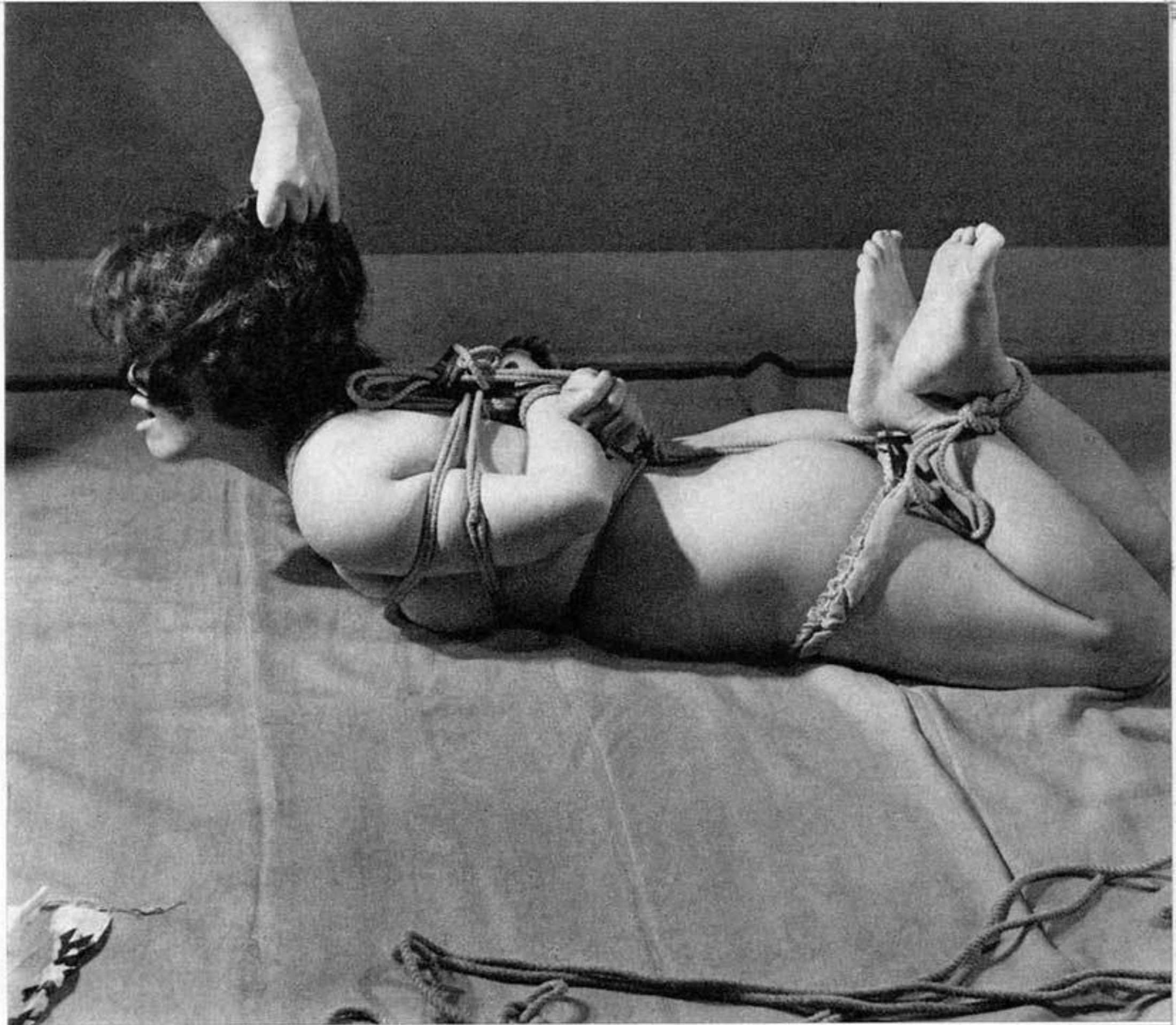




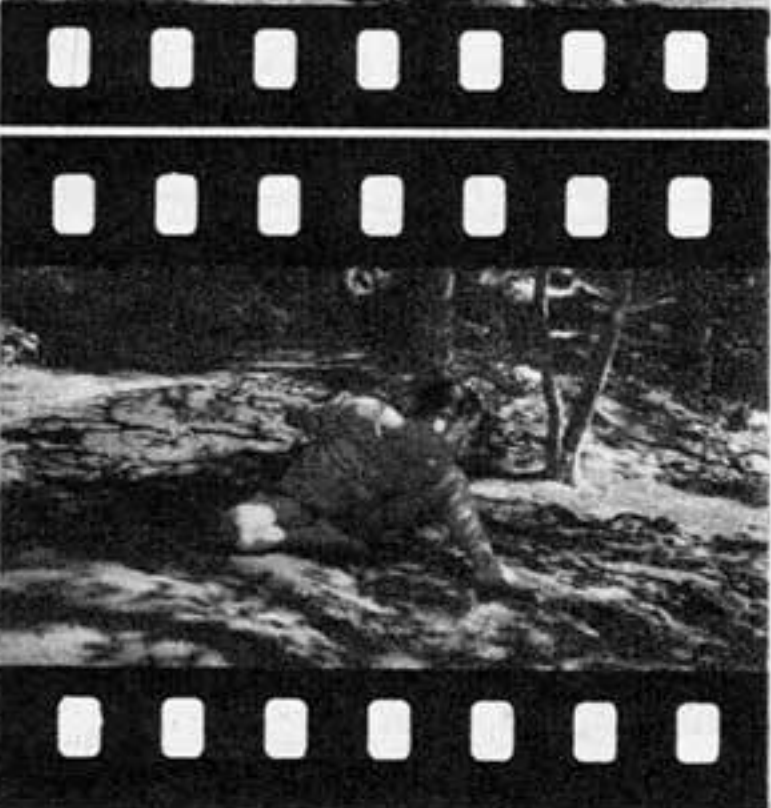
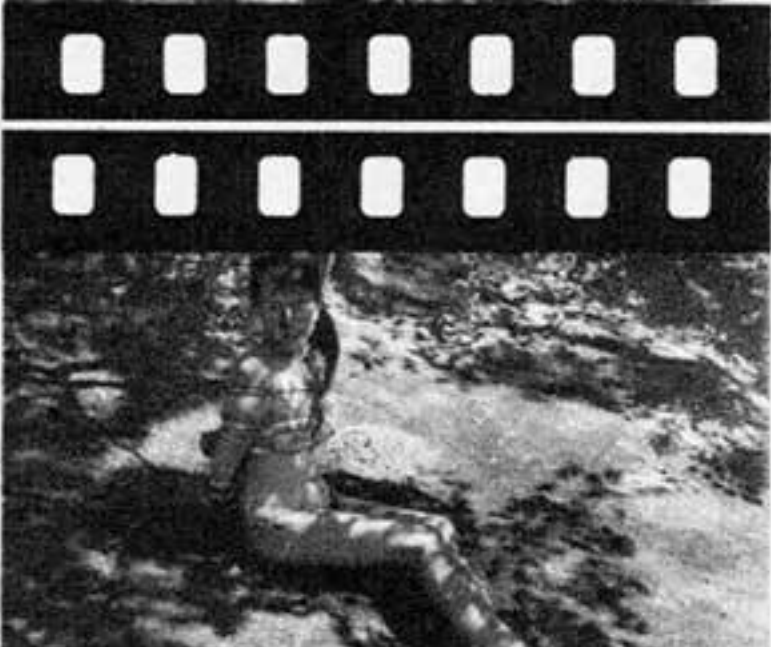
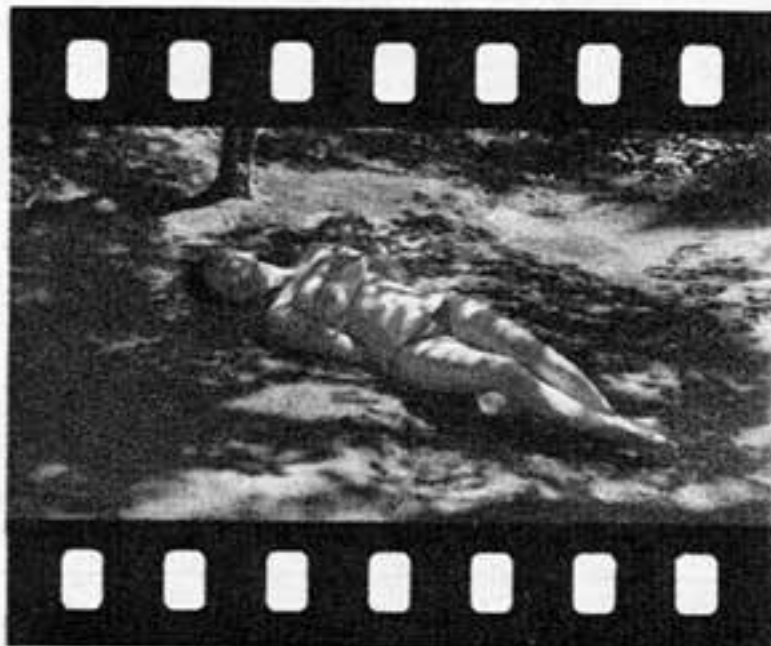




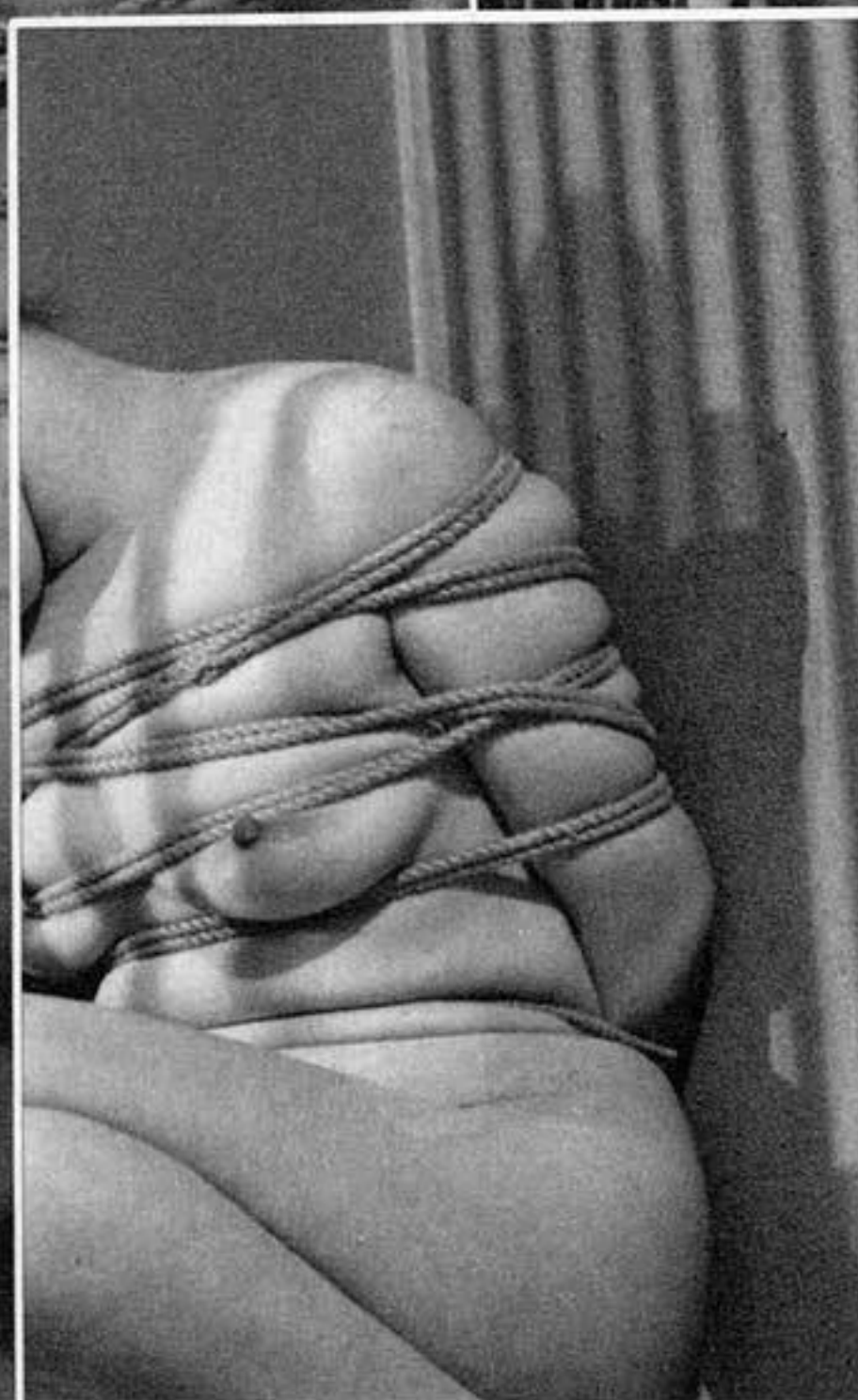
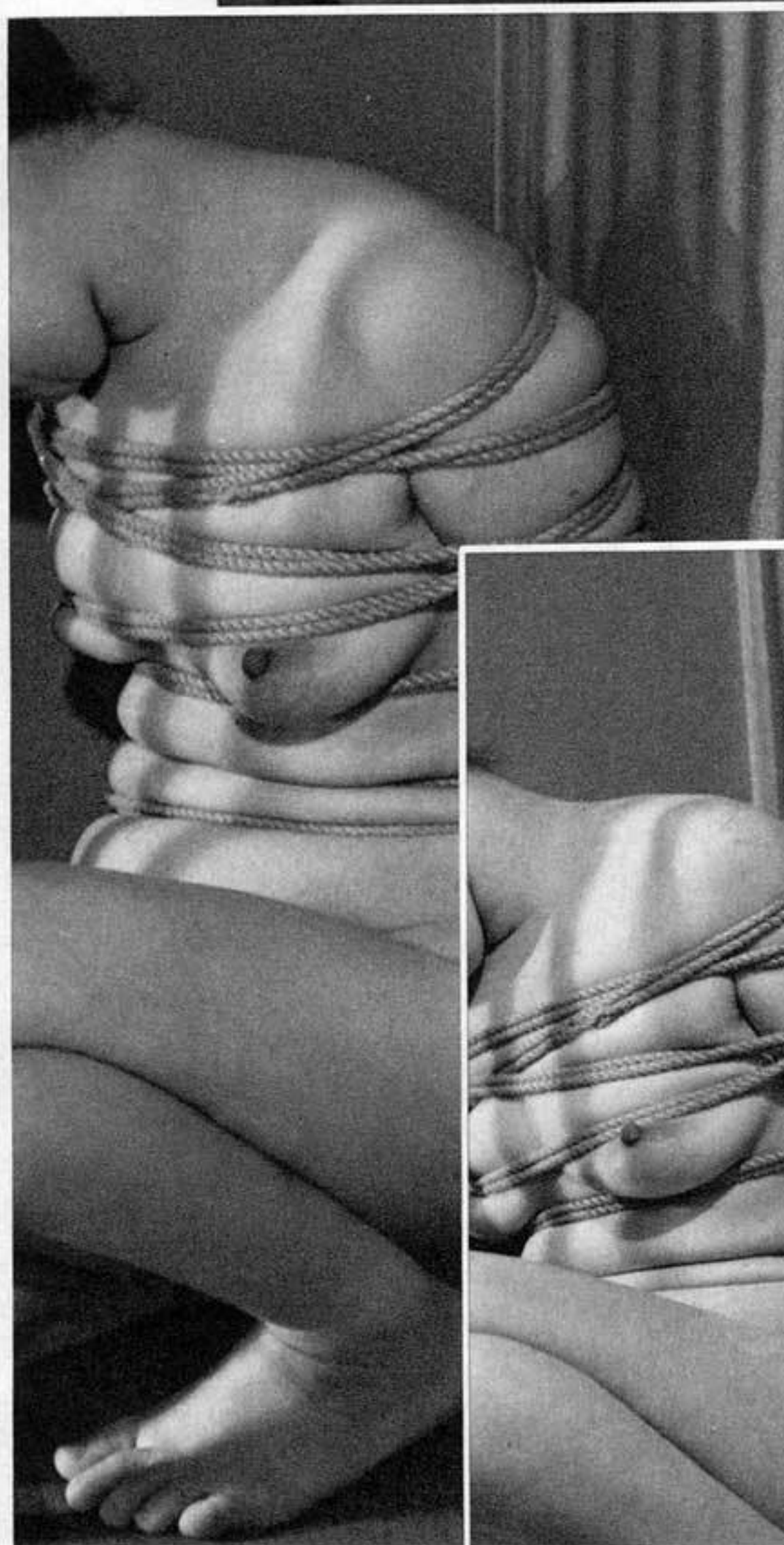
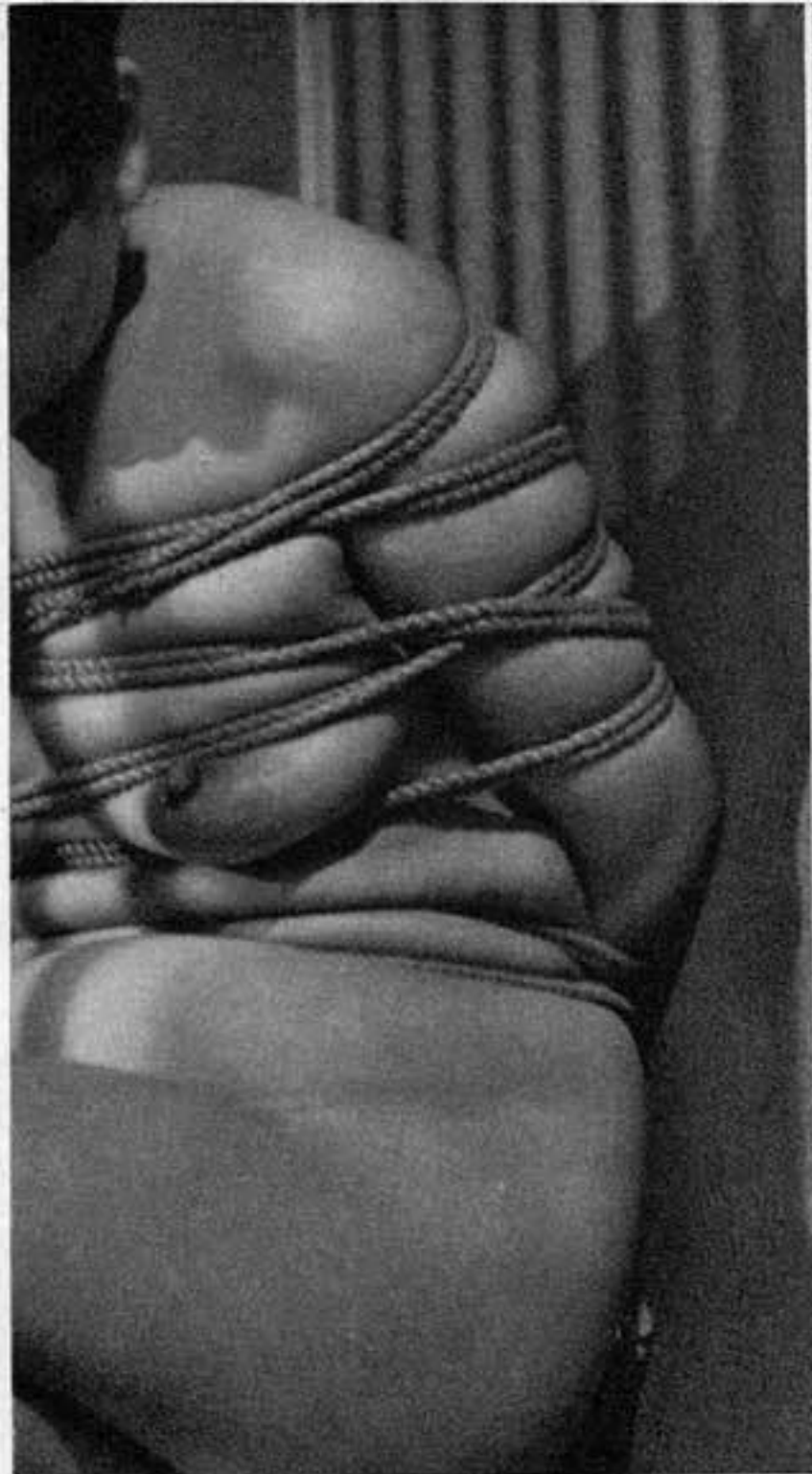


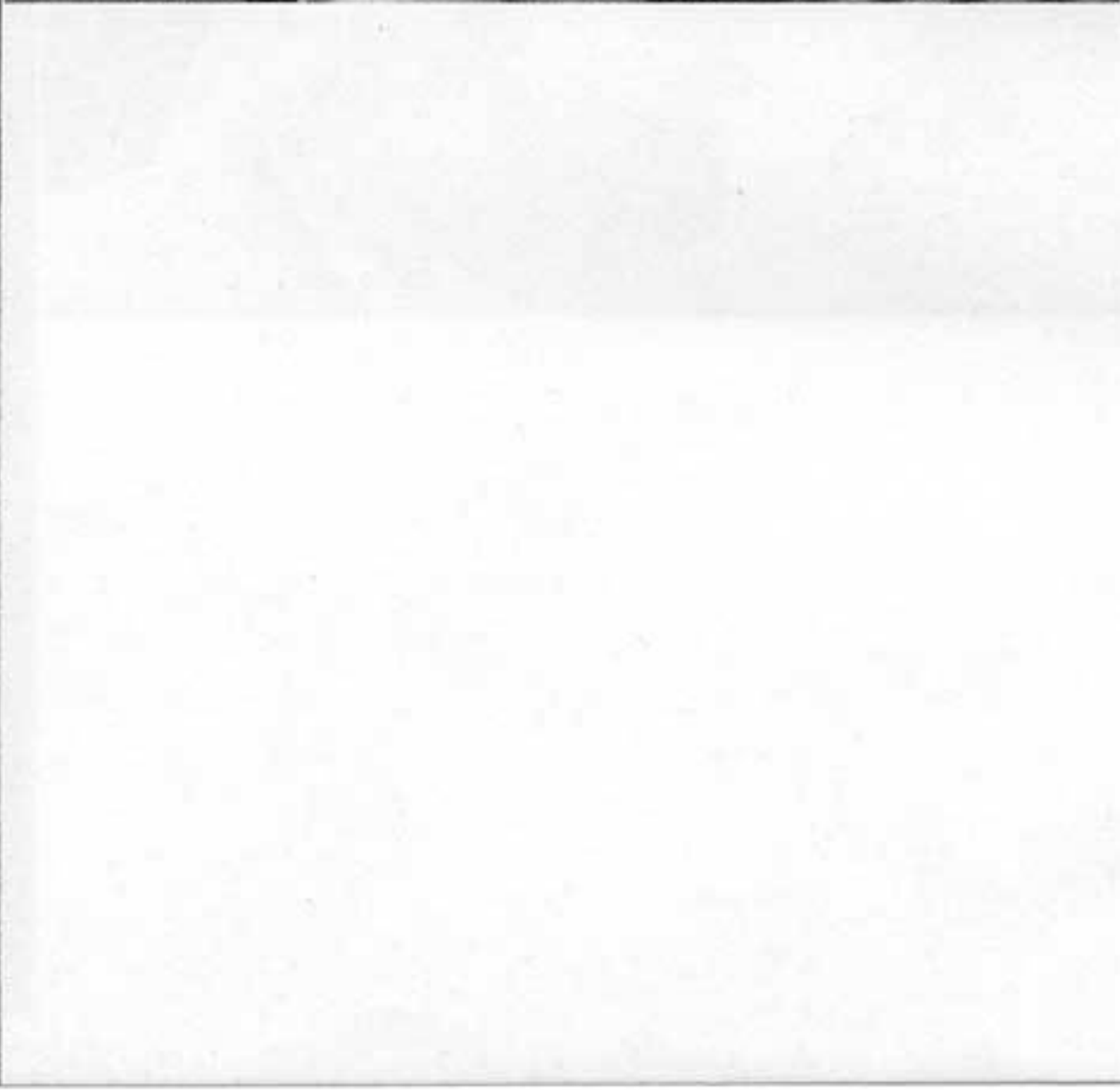
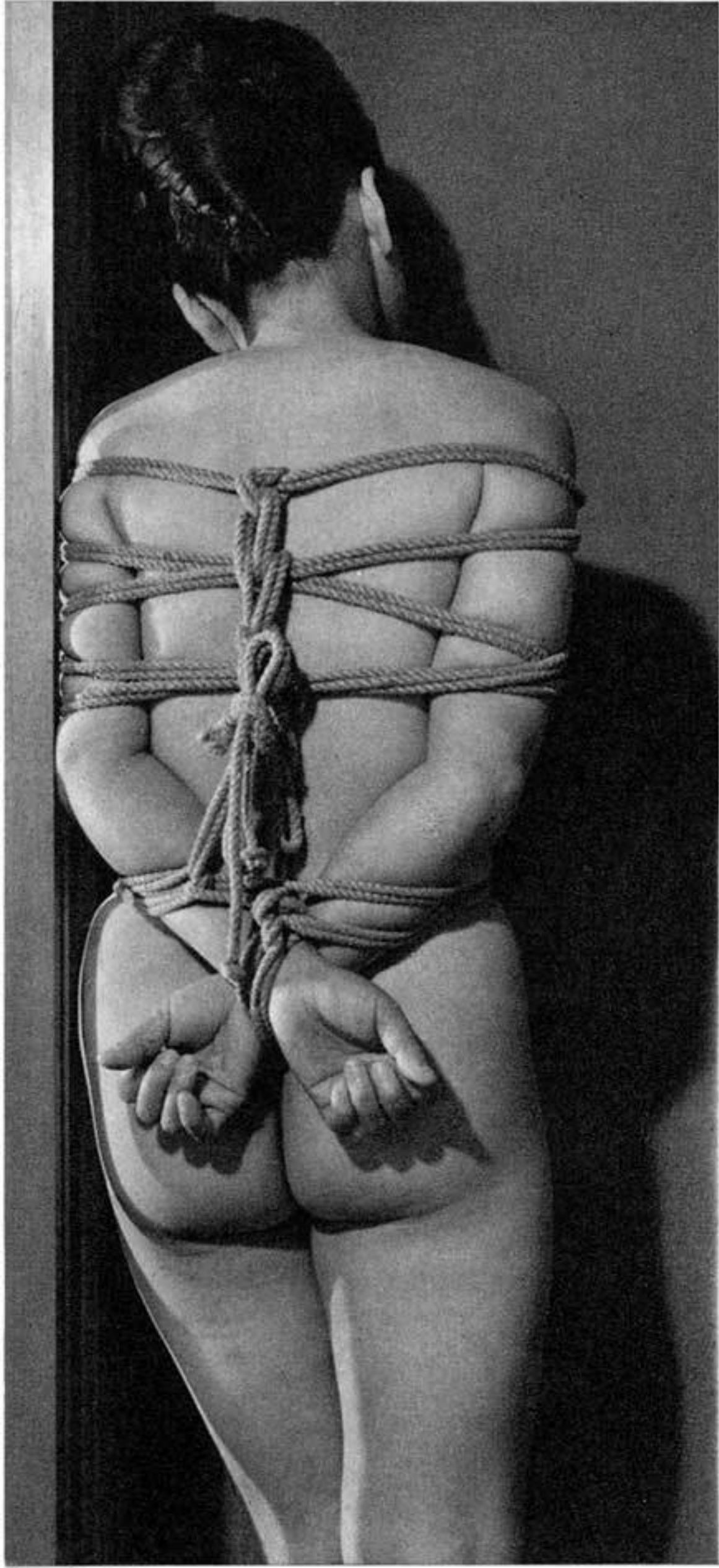
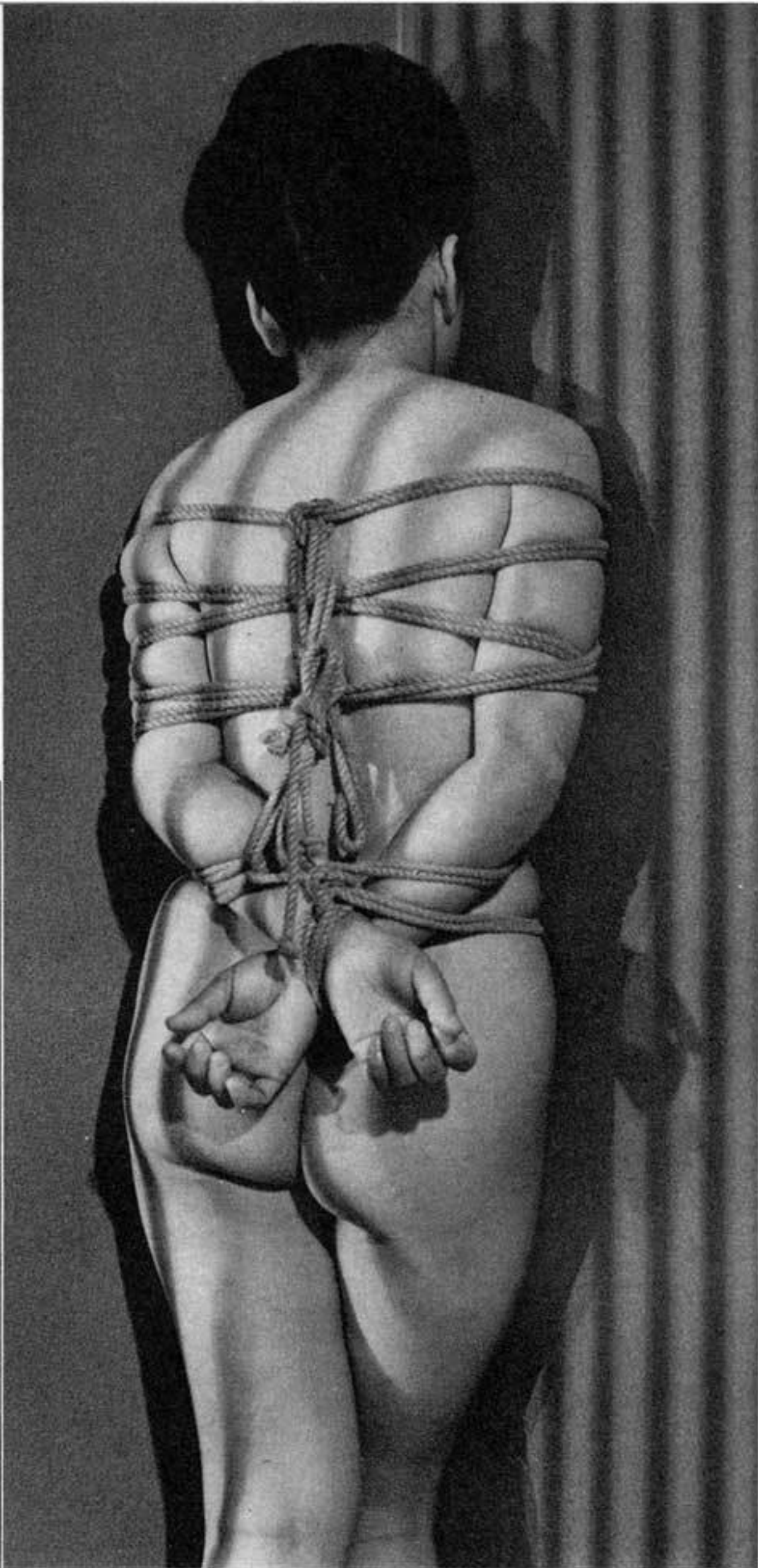
















今朝、寝そべりながらサンケイ新聞を開いていると講談社発行の週刊現代七月二日号の広告が、でかでかと十九センチ五段に亘って大きく掲載されていた。

その中で「天才芸術家はエロ気違い」か？▽史上空前の性描写映画「白日夢」からたどる武智エロティシズム——といった凡そ講談社らしからぬ宣伝文句が目についた。この週刊紙は読んでいないので、どんな内容か知らないが宣伝文句からすると、他人の裸で相撲をとることの上手な週刊紙がよくやる手で、エロとか性描写とかいう言葉を他人に転嫁して、自分の週刊紙の売り物にするといった臭気がプンプンとする。

武智鉄二氏については、「女、女、女」物語の演出に際しても、昨年六月の週刊新潮で、「武智鉄

二氏は女の疎外をテーマにしたと語ったそうだが、ああいう安手の露悪映画じやソガイのほうに可哀そうだ」（某監督談）という批評に対しては、「浣腸あそびを撮れなかったのが返す返すも残念」とこの『暴露の天才』（某演劇評論家）はうそぶくのだが——と、ここでは、氏のことを「暴露の天才」という言葉を使っている。

前衛芸術家といわれ、天才芸術家といわれ、今またエロ気違いか？とまでいわれた「白日夢」は果して、どんな映画だろうか。映画評は元来主観に左右されるところが多い。先日もテレビの、

「映画サロン」で映画『沈黙』についての感想を池田弥三郎氏、岡本太郎氏等数名の人から求めているが、人それぞれによって、その評は人の顔が違ふように異なる。武智氏演出の白日夢についても、毀誉褒貶交錯するのは当然のことであらう。実際に映画を見た者ならば誰しも一言してみたいと思うくらい隙のある材料の豊富な作品ではある。そこが又武智氏の魅力であり、本誌読者などの絶讃をまくる所以でもある。

「白日夢」で武智氏が成功した第一は、その出発点で原作に老大家谷崎潤一郎を持ってきたことであらう。それかあらぬか、週刊文春七月八日号に、——谷崎潤一郎の「とんだ『白日夢』」（武智芸術商法にのせられた人々）——として、

「『白日夢』のヒットのかげに、まんまと武智哲学にのせられた人も多い。原作者からデパートまでその表情」といった記事を書いている。

また週刊新潮七月六日号には、

「『白日夢』ヒットにてれる松竹。

と、これもまた白日夢の映画興行上の成功を物語る記事を謳っている。このように「白日夢」は週刊紙に恰好の話題を提供しているかに見える。事実、路加奈子の全裸シーンをつんだんにサービスしているのだから、世のオバサマ族が若し見たとしたら（多分見ないとは思わうが）気絶しはしないだろうかとか心配するくらいの素晴らしいシンの連続である。しかし、本誌の読者として注目しつづける場面はそんな個所ではなくて、むしろ電気ショックによって、縛られ手吊りにされた路が、二度ばかり跳びあがるように躍る場面や着衣剥奪に抵抗する場面あたりだろう。また武智氏の本作品の真意も、この辺にあるのではなからうかと、愚考された。

いずれにしても、武智鉄二氏のそのものずばりを作品化された勇氣には敬意を表する次第である。日本の映画界も、一年に一度ぐらいいは、こういった新鮮ハツラツたる作品によってテレビ攻勢の巻きかえしを策しても悪くはないだろう。隠花植物のようなワイセツ映画を排除するためにも。

（三九・六・二九）

『白日夢』波紋 編集子



妻の告白

水野加代

始めまして。私は水野弘の妻でございます。私と主人は恋愛結婚をし二人の子供にも恵まれ、今では子供たちも成長して手も掛らなくなり、主人の趣味？でありますSMプレイとやらにも協力出来ますようにになりました。

完全に主人好みの一人の女に飼育されたと言った方が本当かと思えます。俗に言います「昼は貴婦人の如く夜は娼婦の如く」と言う通り、昼は良き母、良き妻となり寝室へ入れば一個の女となる。これが夫婦生活にも大変に大切な事かと信じて居ります。

或る夜、主人は何時になく「先に寝ろ、先に寝ろ」と申しますので、何時もはテレビが終ると二人一緒に寝室に入るのに変だなと思ったのですが、元々寝坊の私ですので先に寝ることにしました。

例により素肌には赤いネルのお腰一枚になり、これも主人好みです。で、寒中でもお腰一枚で寝ることにしております。床へ入ると昼間の疲れのせいか、すぐ夢の世界へ入ってゆきました。

夢の中で主人が寝室へ入ってきて何時ものように、私を後手に縛り目かくし、さるぐつわまでして

しまいました。私は夫に縛られる妻の幸福感にしたりながら、まだ夢の中にいました。幾刻たったのか、私の肌にふれた体臭、ハッと私は現実の世界にもどりました。

目かくしされているので誰か判らない、私は主人でない他人の男に後ろより抱かれていたのです。始めて異性に、夫以外の男性に触れた私の肌はふるえていました。お腰一枚の半裸、きつく後ろ手に縛られ、しかも、何時の間にか足まで縛られていたので身動き一つ出来ず、主人を呼ぼうにも、さるぐつわまでかまされていたので声も出ない。夢の中では主人だとばかり思っていたのに、私としたことが、何んと不覚だったと思ひ、ほんとうに一時はどうなることかと思ひました。十分位だったでしょうが、私の身体を男は抱いたりさすったり寝かせて眺めたりして居りましたが、それ以上の事は何もせず庭の方へ障子を開け帰っていったしまいました。

暫くしますと、何時の間にか主人が私の傍に立っていて、「この有様はどうしたのだ」と言いました。私は只くやしう泣けてきました。主人は目かくしさるぐつわをとってくれましたが、縄は解い

てくれませんか。主人の申しますのは「お前は、他の男と姦通したのだ。これより姦通罪にて死刑だ」と言います。そしてお腰一枚の私を荒々しく庭に引つ立て松の木に縛りつけてしまいました。

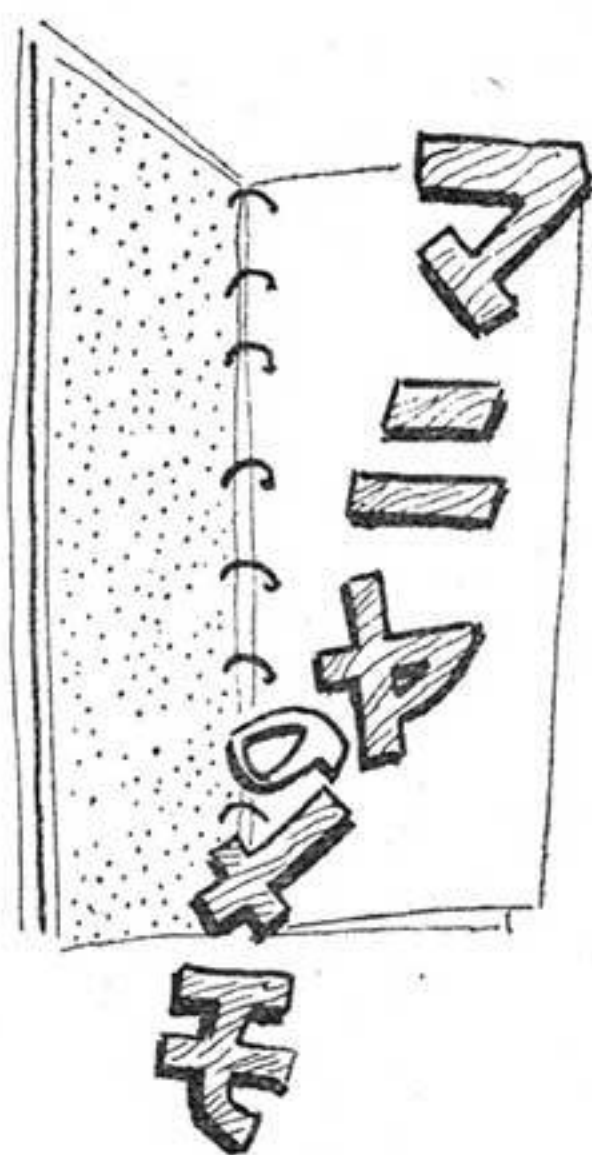
私はくやしさと悲しさで声も立てず只涙をポロポロ出しているばかりです。主人は私の目の前で首穴を掘り、荒むしろを敷き、そこへ私を引つ立て坐らせました。土のひんやりした冷たさが、私の下半身に伝ってきます。

主人は「これよりお前を斬首、獄門の刑に処す」と言つて腰の刀をスラリと抜きました。刀の白さが私の目に判つきりとうつりました。私は観念して首穴の上へ首を差し、刀の落下するのを心待ちに待ちました。すると、首すじに冷めたい刀身の肌がピタリとあたりました。私は思わず首をすくめました。すると主人が荒々しく、私の髪をつかみ、「こうしているのだ」と言つて首をのばすように首穴の上へ引っぱりました。

私はほんとうに今夜は首を切られるのかと思う様になりました。それはいつものプレイとは違う殺気だった主人だったのです。私も見知らぬ男に肌を触れさせたのだ

全裸の解剖

新宮 明夫



から殺ろされても仕方ない、又主人に切られるのだったら本望だとさえ思うようになりました。そして私の首は主人の「エイッ」という声と共に首穴の中へ切り落されたのです。その後、晒し首、獄門の刑になったのです。その後、写真にうつされ、御誌奇ク誌上に掲載され全国読者の皆様の前に完全に晒らされたのです。

私の生首写真を皆さんも見られた事と思いますが、私は満足して処刑されたのですから、どうか私の生首を哀れみの目で見ないで下さい。その後、判りましたのですが、寝室で主人が私を縛ってから主人のお友達が私の寝室に入り私の身体に触れたのでした。主人の計画に私がうまく乗ってしまったわけでした。私も男の人の名前を

聞こうともしませんでした。主人も誰だったとも話してくれませんでした。主人は、子供が大切な玩具を仲の良い友達だけにそっと見せた気が持ったと言って私にあやまりますが、私もその気持がわかるような気がします。小肥りした白い肌の私を友達に見せたかったものと思われまう。「変な夫婦」とお思いになると思

いますが、夫婦のプレーの楽しさも判ってきました。私は幸福です。そして主人の愛を全身に受け満ち足りた夫婦生活を毎日送っております。今夜も主人に縛られ全裸にむかれ、打ち首、晒らし首にされたいと心待ちに待っております。かわき女です。

水野弘の妻 加代

大阪市宇野淑子様。五月号の貴女の通信拝見いたしました。露出症的傾向があり衆目の前で解剖されてみたいとおっしゃる貴女。先日貴女にうってつけの新聞記事を発見しました。或いは既にお読みになったかと思いますが、ここに紹介してみようと思います。

大阪府宇野淑子様。五月号の貴女の通信拝見いたしました。露出症的傾向があり衆目の前で解剖されてみたいとおっしゃる貴女。先日貴女にうってつけの新聞記事を発見しました。或いは既にお読みになったかと思いますが、ここに紹介してみようと思います。

うで人目にさらされてしまいました。……その女性が、こうして無残な姿を大衆にさらされながら解剖される……もし木村さんが口がきけたら「私はここではイヤです。」と叫んだであろうと……。」と投書してありました。私はこれを読んで果して木村さんという殺された女性が「私はここではイヤです。」と叫んだであろうかと疑問に思い、同時に貴女の通信が思い出されたのです。宇野さん、貴女なら、決してそのようなには叫びますまい。戸板の上に全裸の死体として大の字に横たえられた貴女は、たくさんの人達の目にさらされながら、かねての念願がかなえられた喜びを青白い頬に刻まれることでしょう。更

に咽喉元からふくらと盛り上った腹部まで、黄色い脂肪層をのぞかせながら鋭いメスで切りさかれた瞬間、にっこり微笑を浮かべることでしょう。私は女性専門の死刑執行人です。無実の貴女に死刑を云渡し、全裸にひきむいて、大衆の見物する刑場に貴女を引き出したのち、地面に杭を打って仰向の大の字に晒し、貴女の身体のすみずみまで見物させた上、後手に縛り上げてその細首を日本刀で打落します。首は梟合に、首のない貴女の死体は肛門から首の斬り口まで青竹で刺貫いた上放置しておきます。貴女はそれでも、にっこり微笑みを浮かべるのでしょうか。貴女のお便りをお待ちします。

(和歌山八新宮明夫)

"ア
ブ 日 記 抄"

私の日記帳から

(黒皮ハンドバッグと注射について)

綾 真 須 男

○月○日

日直。事務所の机でスクラップブックに、黒皮ハンドバッグを持った美女の写真と、痛がって苦しむ男に注射をうっている美女の写真や絵を整理して貼り込んだ。他人がこれを見たら、異常さに驚くだろう。私は黒皮ハンドバッグと注射器のフェチシズムであり平手打と注射を願望するマゾヒズムを合せ持った男である。

○月○日

退屈しのぎに、女性の持つ黒皮ハンドバッグをいろいろと考案し図を描いて楽しんだ。

僕は幼少の頃は、黒皮手さげ鞆(ハンドバッグでなく大型なもの)で医者や女学生、女事務員などの持っているもの(を)を持っている女性に魅力を感じたが、今でもそんな姿を見ると興奮するが、余り多

く見かけられず残念だ。

しかし、現在では優雅なデザインの黒皮ハンドバッグが数多く出ていて、女性の魅力を一段と引立てているのは、うれしいことだ。私のようなのは、黒皮フェチシズムというのだろうか。

○月○日

注射器を黒皮ハンドバッグに入れて歩いていて女性(それも妖艶な美女)に強烈な魅力を感じるのしびれるような刺げきを感じるのだ。知的で教養深く、美貌の看護婦、保健婦等の中の一人と結婚できたら、どんなに毎日が充実した楽しいものとなることかと、秘かに願っている。

○月○日

昨夜の夢、母が女医になって黒の上等なドレスに黒皮のハイヒール、黒皮の診察鞆を持って登場し

現実の平凡な母と違って妖艶な美しさであった。

○月○日

昨夜の夢、小学校四年生の時、担任だったHという女の先生が女医になって現れた。黒い服、黒皮診察鞆で先日の夢でみた母と同じスタイル。高貴で端麗な容姿が現実のやや老けた先生とは、異なるが――。

この先生は実際、僕が教わった頃も、医師の持つような黒皮の折り鞆を持ってきたおられた。美貌で柔和な容貌の先生だった。極めて厳格で、ある時カンニングをした子供を呼びつけ「どうしてカンニングしたの」ときびしく問いつめ、いつ迄も黙って返答しなかった。その生徒の頬をパシッと力一杯張ったので、ドターンと生徒は倒れて泣き伏してしまった。あんなにやさしそうで美しい先生が僅かなことで、生徒を張り倒すとは驚きでした。

○月○日

昨夜の夢、中学三年生のR子ちゃんが、大勢の行列に予防注射をしていた。

ある男生徒が、「わあい、学生の看護婦かい、いや女医のつもりかい」とからかったら、彼の腕を

憎まれ児

世にはびこらず

杉原虹児

○昨年の秋頃から、書店で本誌の姿を見かけないという声をよく聞くが、実際に今まで出ていた書店からも姿を消している。悪書追放運動の効果が愈々あらわれてきた結果でしようネ。

○大阪でも、何んとか会とかいう夫人連が手弁当で熱心に一軒書店を回って、写真をとったりメモしたりするのだから、余程気の強い書店主でない限り店頭で置くのを躊躇するのは当然だろうナ。

○大体、悪書とか悪書でないとかいうことを決めるのは誰なのだろうか。まあ、誰が決めるのか知らないが、悪書という太鼓判を押されたら最後、親の仇のようにつけまわされるんだから助からねえや。ほんとうのところ。

○映画には成人向というのがあって、これが面白い映画という、代名詞みたいになっているが、とにもかくにも、映倫というマークがついているのだから、全裸の女の場面がふんだんに出て

女性モデル募集

○本誌女性読者の中でモデルを志願し輝やかしい足跡を残された方が過去に於て多数あります。

○本誌では、ここに改めて女性モデルの方を募ります。口絵写真又

つかんで引きよせると、ほったをピシッと殴って、「ハイ、次の方ッ」と神経質にきびしい声で言



げていた。服装は黒づくめ、靴も黒皮ハイヒールであった。

○月○日

つて腕にチクリと注射針をさしていた。

○月○日
朝、駅のプラットホームで、W高校のピチピチとした若い体育の女教師が、しなやかに黒皮ハンドバッグを腕に提

秋が深まるにつれて、女性の腕に黒皮ハンドバッグが多くなってきた。黒皮はどうして、こんなに僕を引きつける魅力があるのだろう。ハイヒールも黒皮は足を白く引立てて、ぐっと引きつける魅力がある。黒皮ハンドバッグを持った女性を写真に撮りまろうか。

○月○日

韓国にコレラが流行し、日本でも港湾関係者は、コレラの予防注射を受けることになった。テレビを見てみると、いかめしい警察官が、もの柔かで美しい保健婦さんが手にした注射器をおくびようそうに見つめ、腕をつかまれ鋭く細い針を射し込まれると、痛そうに歯を喰いしばっている情景をとらえていた。

僕も予防注射の情景を写真に撮りたいものだ。

は分譲用写真として出演可能の方は編集部宛御紹介下さい。報酬その他詳細お返事いたします。

○緊縛写真希望者は勿論のこと、女相撲、切腹、女斗美、浣腸、等をはじめとしてMフォトのサジスチンに扮して出演御希望の方を歓迎いたします。

○本誌のグラビヤ頁並に分譲品を充実するため何卒奮って御応募あらんことをお願いいたします。尚妊婦フォトの撮影可能の方は、年令、遠近を問わず御連絡願います。折返しお返事します。

大阪市阿倍野局私書箱第十四号

天星社編集部

きたって、成人向としていいの
だろうネ。

○それにひきかえ、雑誌の方はすべて青少年向として評価されるのだから、乳房をかくしたりお尻をかくしたり、お尻をかくしたりしたりしたって、おっつかない。まあ、ハダカを楽しみたい大人や子供は当分は映画の方で我慢することですナ。なにしろこうイタメつけられちゃ、雑誌なんて面白くもオカしくもねえや。

○まだまだ、都会じゃ、なんとかシラミつぶしに熱心な御仁は書店をさがしまわるといふテもあるが、これが地方となると、完全におテアゲである。どだい最初から配本してこないのだから、始末がわるい。

○もう廃刊したんだろうと諦めている中老年も多いことだろうナ。値は高くなるワ、頁は減るワじゃいくらマニヤでも頭にきてしまうのは当然だろうッて。

○ここらあたりで、憎まれっ児は姿は消したらどうだろうナ。まさか赤旗を振って応援にくる労組もないだろうし、拳銃をぶっ放してスゲにくる暴力団もないだろうから、至極安泰というものだ。

〔映画通信〕

最近の邦画
縛り映画

東山映史

最近邦画洋画ともに、サジスチック時代といえよう。これが世界の風潮だろう。テレビ攻勢に押された映画が、その巻き返しとして、大型画面で、テレビで出せない迫力を出している。

そのさいたるものが、松竹映画の「三匹の侍」である。テレビの人気番組を、そのまま映画に持ち込んだもののだが、それだけの値うちがある。五社監督、丹波哲郎、長門勇、平幹二郎ら出演トリオも同じで、ただ女優が桑野みゆき、香山美子らの、縛られ姿がまたすさまじいの一言につきるといえる。今年度の白眉といっている。

グッタリとした、その哀れな姿で「ウムウム」うめいている。そこへ丹波の柴左近が現われる。百姓は近づくに娘の生命がないと、桑野の首に刀をつきつける。のける桑野のクローズ・アップ。

そこで百姓に味方した柴の奇妙な生活が始まる。一度代官は悪浪人をかたらい、水車小屋を襲い桑野を救い出すが、柴のためにはばまれ、桑野は再び捕えられ、今度は坐ったままで柱に縛りつけられている。背後からぎっちり縛られた姿を、丹念に映し出す。

代官は悪計をあみだし、五作の娘おやす（香山美子）を女郎屋から連れ出してくる。香山は女郎屋で女将のおやすに縛りつけられている。このおやすがグラマーの三原葉子。そして喧嘩になり、香山は縛られたままで、クンズボグレッツの女斗美を見せる。そして駕籠で運ばれる。

縛られたまま水車小屋の前に連れてこられた香山は、首に縄をつけられ、犬追物というリンチで地面をひきずり回される。そして一寸きざみのなぶり殺しにあわされ、死んでゆく。

これを見た五作は「娘と同じ目にあわしてやる」と桑野に獣のようにとびかかり、長襦袢をはだけさせ、水の中につきとばす。縛られたままの美女二人の対面シーンが迫力がある。

丹波はこのみにくい人質騒動を断念して自ら捕えられていく。そして、すさまじいムチ打ち百にあう。これがまた、男性責として目をおおわしめる。そして水牢へほうりこまれる。このほか、茸京子のおみつが捕えられ、ノドを切られ、タラタラと血を流すというサジスチックなシーンを見せるが、



殺陣と美女縛りの連続という作品だった。

現代劇の庄巻は、田村泰次郎原作の「肉体の門」の再映画化である。肉体系のオーソリテイ田村泰次郎の原作で、そのリンチ場面は、戦後一大センセーションをまきおこしたものだ。日本昆虫記、猟人日記で性映画路線をしいた日



活が、ハダカとサジスチック・シーン、これでもかこれでもかと見せている。

最初、浅丘ルリ子のボルネオ・マヤが予定されたが、原作を読みおきたという、いわくつきだけにリンチ場面はすさまじい。主役の

ボルネオ・マヤの野川由美子は、ポリウムのあるグラマーだが、ラスト・シーンで高々とつり上げられ、グルグル身体が回りムチ打たれるシーンをたっぷり見せる。ワンピースのパンパンの中で、いつもキモノで上品なエロチシズムを見せる菊間町子に扮する富永美沙子は、未亡人の官能に全身をくねらせ、キモノを脱がされ、両手を広

くひろげ、両足を縛られ、女キリストのような形でピシシムチ打たれ、最後は恥毛をカミソリでそられるという迫力のあるシーンを見せる。

もう一人松尾嘉代が柱に縛りつけられ、頭の毛を切られ、ボートの中に手足を縛られ、晒しものにされるシーンもある。原作や劇では町子が長襦袢一枚にむかれ、白い太股を見せ、もだえるエロチシズムが売物だったが、今度のハダカの吊り下げは現代的といえるのか。

異色作品では、大蔵映画の「O才の女」。これが女の縛りシーンを様々見せて

くれた。これは女スパイ養成映画だ。叔父に犯されかけ、刺した女が鉄道自殺しようとしたのを助けた陸軍参謀本部二課の太田少佐が女スパイを育てていく過程を描くもので、可能かず子演じる芳子は顔のアザを整形手術でなおしてもらう。そして、少佐の命令で鎌倉へ行く。

風呂へ入って待ってくれ、といわれ、風呂へ入っていくと、太田少佐が入ってくる。あわてて出ようとすると、女が入ってきて、彼女を前手縛りにして、二人の痴態を見さす。目を閉じぬようにさせて。そして彼女は太田少佐に犯される。

捕えられたシナのスパイが密室へほうり込まれる。そのベッドには芳子が縛りつけられている。本能に狂ったシナのスパイは、彼女の胸元をくつろげ、彼女を犯そうとする。両足を縛られ、前手縛りの彼女は烈しく身もだえするがすさまじいシーンだ。

そして捕えられ拷問されている女スパイの現場を見さされる。新人女優だが、吊し責めにあい、ムチで後手縛りの中へこじ入れられる。身もだえる美女。そしてむきだしにされた乳房の谷間にもムチ

をこじ入れられ、ヒイヒイ悲鳴をあげる。その物すごい拷問ぶりに芳子は卒倒する。

それまでに太田少佐に女獣として飼育されるが、これが変わっている。ハダカにされ、食物を与えられず、キガの状態におかれ飼育される。「上向きになれ、足をひろげろ」水をほしさに、ムチのままにハダカではい回る。影絵で見せたり奇妙な図だ。そして女体の化学試験をされる。真空内でもだえる。またベッドに手足をくくりつけられ、色々の注射をされる。そして役にたたなくなった女スパイは、そのまま消されてしまう。面白いのは、白人の女性ベッドに縛りつけられたり、真空内で身もだえたりする余興シーンもある。

更に期待できる映画としては、松竹の司馬遼太郎作「暗殺」丹波哲郎の清川八郎に、岩下志麻のお連、強姦され捕えられて、清川の行方を白状せよと拷問される。そして水責め、石抱きの責にあう。桑野みゆきにつき、美女残酷物語というところ。

武智鉄二演出の「白日夢」では混血の女優路可奈子が全裸で吊責めにあったり、電気責めの刑にあったりする。



<M>フォト雑感

福本 春夫

生れて初めてMフォトなるもの
を入手致しました。
生来のM傾向が、ほぼ満足感を
味ったことは、言うまでもありま
せん。しかし、満足感が満たされ
たのも九十八%であり、残りの二
%に行き届かなかったことに、ま
だまだ私のM傾向の程度がわかり
興味深く思いました。奇クの分譲
Mフォトが、九十八%の出来であ
ったなどと、決してケチをつけ
る積りは毛頭ないことを、最初に
お断りしておきます。
昔から十人十色といわれ、人そ

れぞれに違うのは、性格や容姿ば
かりでなく、同じM族に於ても趣
味、好みが異っております。いわ
ゆる鞭打ちを好む者、人間便器を
志願する者、あるいは人間馬、又
は女王様に奉仕……等々。それぞ
れ同じM族でありながら、その郷
愁は違うものです。
かく言う小生もM族であります
が、人間便器など、とても志願で
きるほどの勇気も持ち合せていま
せんし、又鞭打ちだの縛りだのと
望むだけの体力も持ち合せており
ません。唯単に異性と相対でプレ

イに興じて、そのムードに浸ると
いった程度しか望めない気の小さ
い臆病な輩なのです。
そんなわけですから、分譲品の
Mフォトを眺めて一番初めに気の
つくことは、それらが余りにも露
骨なものであったことに、僅かば
かりの(二%ぐらいの)不満を覚
える所以でしょう。
小生も以前からMフォト制作の
夢、そしてMプレイ実現への夢を
抱いてはおりますが、今までのと
ころ未だそれを果してはおりませ
ん。どちらにしても甘いムードを
持ったものを夢見ております。
馬乗り、女性の下敷き等では許
せるとしても、顔面に坐られる事
などは、考えただけでも、息苦し
くなります。グラビヤ或は分譲品
の企画に於ても、必ずといって良
い位、女性はパンティ一枚或はそ
れに近いスタイルで私の目に入っ
てきます。そこで一つ、次のよう
なものの企画も立てて見ては頂け
ないでしょうか。
一、男女互いにちゃんと衣服を
纏ったままのMフォト。即ち背
広の男を事務員服或はBGスタイ
ルの女性が、事務室のようなとこ
ろで組み敷いている。
二、新婚らしき二人の男女が、

高原で格闘している。
三、和服姿の女性が、紋付羽織
袴の男を畳の上で下敷きにして弄
んでいる。
四、登山中の二人の若い男女が
登山服姿でプレイに興じている。
その他、種々のその場面場面に
応じた衣服がある筈です。その中
でも、タイトスカートをたくし上
げて太腿も露わに、といった設定
は小生も大歓迎です。更にそれら
のシーンを織り込んだ一つの物語
を設定して、フォト・ストーリー
形式をとった場合、M族にとって
かけがえのない宝物となることは
必至です。
以上のような意味あいから、M
フォトを考えると昔従来にはない
ところのムードを持ったものが出
来るのではないかと思います。
すなわち、男女ともに平常あた
りまえに着用しているところの服
装でMプレイを演じているという
ことに、妖しい刺激を感じるので
す。特別な服装やスタイルでない
だけに、私のようなM傾向の者は
身近かに感じられるのです。こう
いった好みは、特に変わっていると
は考えられませんが、共感を抱か
れる方はおられないでしょうか。

お仕置の言葉

森 利夫

『責め』という言葉は、たしか伊藤晴雨氏が使い初めて、今日のようになんて流布されたように思う。勿論文字としては、以前からあっただろうが、八女を縛ってはいじめるといふ意味に使いだしたのは、晴雨氏だろう。本誌でも、『緊縛』とか『悦虐』とかいう言葉を、SMの専門語のように使い初めているし、土俵四股平氏の『女斗美』という言葉も独創的なものだ。



ここで、お仕置に関する言葉を若干挙げてみよう。日本語に於ける語彙の豊富さをSM用語の域でも活用してみたいと思うが、ここに挙げるものは、私の思いついたものだけであるから、何れ補充したい。

〔お仕置の種々相〕

抓る。小突く。押し倒す。引きずる。押し入れる。縛る。お灸をすえる。叩く。殴る。後手。高小手。捕える。掴まえる。奴隷。折檻。吊る。張る。海老責。枷をはめる。石抱き。晒す。衣服を剥ぐ。股間縛り（吾妻新氏から）水

責め。等々。

〔連想させる言葉〕

妊婦。浣腸。腓。太い脚。きつい目。足首。哀願。泣く。臀部。勘忍。ポリウム。恐怖。羞恥。

〔小道具として〕

縄。くさり。手錠。ムチ。竹。皮革。ソロバン。棒。猿ぐつわ。紐。浣腸器。ゴム衣。ローソク。モグサ。皮手袋。革紐。滑車。荒縄。しごき。綿。ロープ。コード。ヤットコ。拍車。ベルト。首輪。五寸釘。羽毛。毛筆等々。

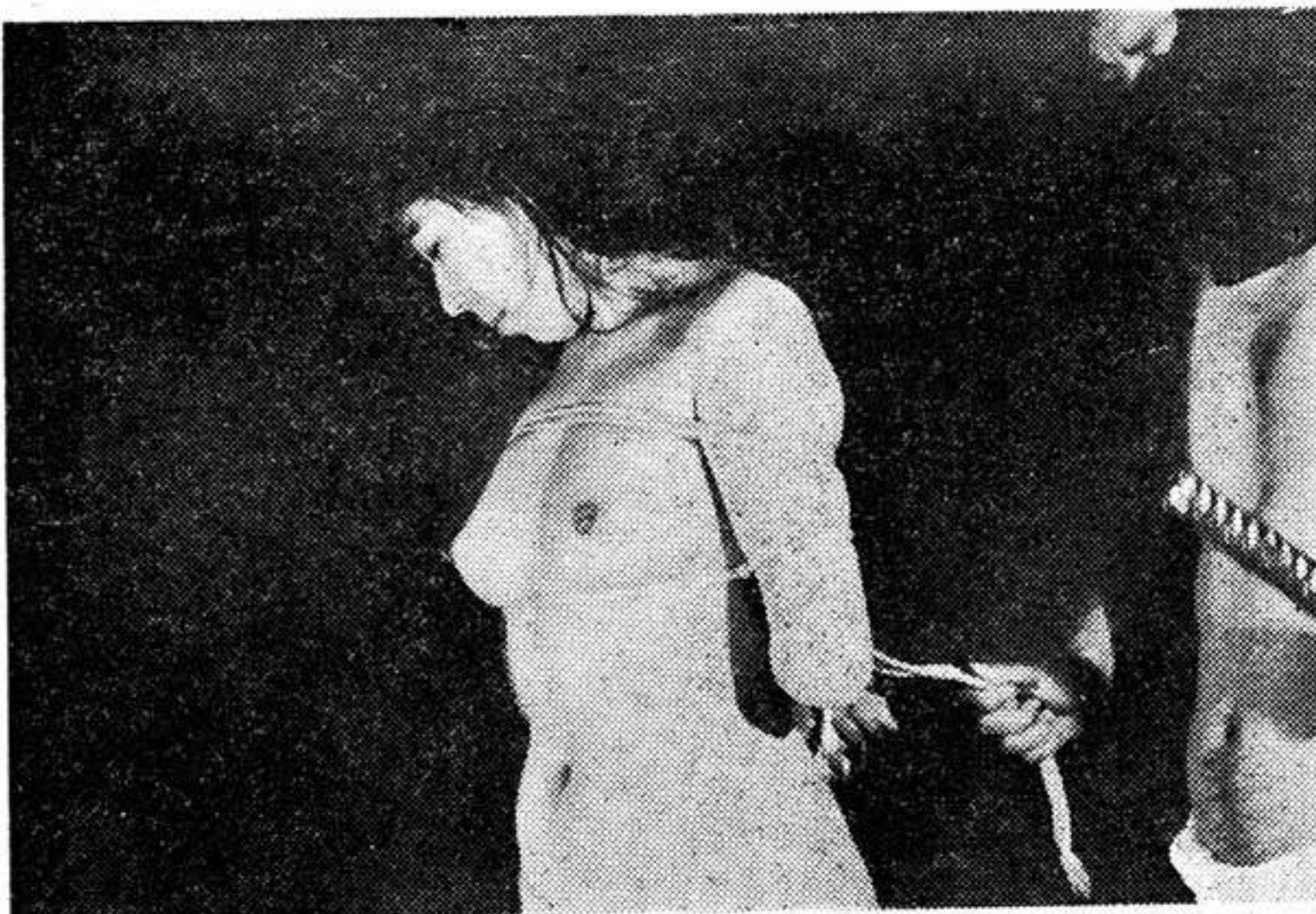
〔アイデアから〕

鼻責め。両手吊り。お灸責め。浣腸責め。蠟涙逆さ吊り。磔。足首縛り。乳房縛り。臍いじめ。黒髪吊り。エビ縛り。逆エビし。顔枷。片

足吊り。晒し。虫責め。水責め。鞭打ち。雁字搦目。便器使用。足舐め。擦り責め。顔面玩弄。など。

夫婦のSMプレイ

新宮明夫



「M女性」

の方々へ

松原 良



永年奇クを愛読し毎号発刊を心待ちにして居るものです。奇クは小生にとって唯一の心の慰め支えとなつて現在まで続いてまいりました。もう、ずっと以前になりました。復刊号以前ですから。読者通信を通じて、同好者の方々に文書を、出来ますればお会いしてお話してもして意気投合を、そんな事を考えまして、拙い文章を掲載頂きました。ところが、その共鳴は思ったより大きく、はるばる九州から、しかも女性の方々からも相当お便りを頂き、一部の方にシボって文通するほかありませんでした。お会いした方は男女性三、四人に過ぎませんでした。現在はいは全く皆無の状態、寂しさの限りです。

ハイセンスの教養と理性的コントロールをもってするS・M通信、交際は在ってしかりと存じます。空想と現実、それは強いて一致するものでなく、また一致せるものでもありますまい。内攻的に煩悶しバラ色の樂園も、孤独な灰色の殻の中に閉じ籠った世界で終るほか仕方ない事でしょう。越えてはいけないライン、これは何にでもあります。現代の同好者のモラル、エチケットからしても、

それは堅く守らねばいけない事で相互の理解ある理性のセーブがあつてこそ、プレイも救われるものと言えましょう。何によらず、現実に情熱を傾けて生きてこそ、幸はそこにあり得る事です。紳士の行動、それは余り短兵急な常識を逸脱する様な行為に煩悶し、ある程度消極的にならざるを得ないのかもしれないですが、S・M相互の理解あるプレイまで発展させるのが、却ってノーマルだと言えない事はないでしょう。確かにそう想います。S・M共ある一定のラインを越せば、精神異常者、精神倒錯症などと言われるのが、世間一般の観方です。しかり、S・M共四十五度まで傾いてしまつては、もう人生の破壊者にはかならない事は言うまでもありません。

最近の奇ク内容に就いて申し上げますればもう一寸、バラエティーに富んだ企画編集をお希い致したいところですが。お灸ファンも相当にある事を忘れてはなりません。治療と偽わり、鞭打、緊縛が、お灸に変わる場合もあり得る訳です。ムードと余韻は、エネルギーなものでなく、落ち付いた雰囲気、S・Mの世界へ誘ってくれるものと想います。お灸に関

心をお持ちの殊に女性の方々の告白、体験談等をご発表頂き度く存じます。小生Sの申度、三十四才独身男性です。デザイン研究所に勤んで居ります。お灸、浣腸、緊縛、鞭打等々に関心をお持ちのMの殊に女性の方々のお便りを鶴首致して居ります。

横溝とみ子様に

捧げるお願い

額原 実

とみ子女王様、私は学生時代から今まで、ずっと奇クを読み続けて参った二七才の独身サラリーマンで御座居ます。そして、体験談の寄稿、読者通信その他で、幾人かの女王様のお便りも拝読致して参りました。しかし、貴女様程、私の御主人として、私を飼つて下さるのに適された方のお声を拝したことはございません。結論を急ぐならば、それは、貴女様が、弱

々しい小柄な奴隷を御所望だから
でございます。以下に記します私
の身上書を御高覧下さいませ。

昭和十二年某月某日生

本籍、現住所共東京都

現在両親の家から通勤

身長 五尺三寸

体重 十三貫

趣味 観劇等、スポーツは一

切致しません。

勤務先 某化学メーカー

(おそろくは女王様の

特技

お勤め先から地下鉄で
一駅位と思われます)
御主人がネグリジェ・
スカート等をお召しに
なつたままで、お小水
を絶対こぼさずに頂く
自信が御座居ます。
身体頑健でないため、
強度の緊縛、逆吊り、
鞭打ち等は、お慈悲を
もちまして御容赦下さ
れば幸甚に存じます。

お願い

御用達 仕事の忙しさからして
週に一度の御奉仕は可
能と存じます。
特技に書きました項は、職業的
なドミナにお願いして、たった一
度だけ試したにすぎませんが、自
信を持って居ります。より一層、
御足下でお仕込頂ければ、お大便
の御用も無事に勤めさせて頂ける
と信じて居ります。
私のような貧弱な身体の方では
とても、とみ子女王様のお馬とし



女の首級

を挙げる

前川 成雄

月岡芳年描くところの武
士が敵の首級を掲げて、そ
の切口からしたたる血汐を
すするといった無惨絵を摸
して描いたもので、女の首
級とし、掲げる方も女性と
して美しさを求めた。拙い
筆のため予期の効果はでて
いないが御一見を乞う。

て、十五分も保つまいとは存じま
すが(今まで、私のような瘦馬に
お騎り下さる女王様はあるまいと
あきらめて居りましたが)もし、
お馬として、犬として、或は、お
虎子として私の肩や口を御使用下
さいますならば、生命を保証して
頂けること、不具者にはなさらな
いで頂きたいことのみを条件に、
どんな恥かしさも必ず耐えて御覧
にいたします。それに、私はなにし
る身体も貧弱で、非力でございま
すので、腕力によってすら、女王
様に抗う術もございせんから、
その点は御希望通り、弱々しい奴
隷をおみ足の先で御意のままにお
召し使い頂けることと愚考致す次
第でございます。

もし、私奴を調教して見ようと
思召すならば、七月十七日(金
曜)と二四日(金曜)の午後六時
に(私奴は両日共参上致します)
日比谷の日活国際会館地下の、千
匹屋のフルーツ・パーラーでお待
ち申し上げて居りますから、御都
合の宜敷い方のどちらかの日に
御高臨下さいませ。胸のポケット
に鉛筆を三本差している男の靴先
を黙って踏みつけて下されば、そ
の男は、その瞬間から貴女様の犬
となり如何なる御命令にも易々と
して従うでしょう。

(東京・一匹の犬より)



映画・演劇の

エネマ・シーン

浜 浣 好

最近、映画にホモ・サド・マゾ等のストーリーやシーンはよく出てくるが、浣腸となると絶対といってもいい位無い。武智鉄二が「日本女性残酷物語」で浣腸遊びの場面を入れると云って問題となったニュースは未だ耳新しい。先日東宝の「ただいま診察中」を一寸覗いたら、お産のシーンで、大きなイルリガトールが二つ画面の右後方に、一つは空だが、もう一つには石鹼水がなみなみと入っている。リンゲル液では無い。俄然いろいろと想像を廻らせて、嬉しくなった。

三年程前のイタリヤ映画「豊かなる成熟」の中の第二話「子供の遊び」で、母親に連れられて、郊外に出掛けた子供達が、お医者さ

んどっこをやり、子供はどうして生れるのかと母親を困らせる挿話の中で、小さな幼児が人形を膝の上に俯伏せにしてイチジク型の浣腸をして遊んでいるところがあった。子供といえば、数カ月前に封切られたアメリカ映画「けっさくなエディ」で主人公のエディ坊やが、発熱して、ア・パートの隣室の父の恋人の看護婦に検温される場面で、パジャマを脱がされ、ベッドで俯向けにされ、肛門検温されるシーンが一カットで、撮られていてドキリとさせられた。

それから、これも三年前に「女性美」についての短篇で、中世紀のフランスでは美容として浣腸が盛んに用いられたと云って、貴婦人が大きく開いたスカートを持上

げ、侍女が大きなシリンドラーを持つている画がスクリーン一杯に出た事があった。是非見度いと思うのは未輸入のアメリカ映画「不思議な男」である。陸軍士官学校を舞台に、学校中で最も性質の良くない男に対立した優秀なる生徒が遂に殴り倒され、新入生の部屋にあって浣腸器を口の中へ無理に押し込まれウィスキーを注入され、そのため酔払って喧嘩したものと思われ放校になるという物語。浣腸器を押し込まれる二枚目の顔。浣腸器を持つている新入生の顔。それに注入されるのが、上の口より下の口だったらしいのだが。さて、舞台の方では、以前本誌上で矢崎竜一兄が「灰色のノート」の中で、モリエールの芝居に

浣腸を主題にしたのが二つあると紹介しておられた。私が知っているのでは、新劇の初期に「緑の朝」という芝居で小山内薫が、本物の牛を舞台に出し、肛門検温を覗かせたそう。それから「シラノ・ド・ヴェルジュラック」の終幕、尼僧院の場でロクサーヌに、その週のニュースを報せるシラノの台詞に「×月×日、〇〇伯爵夫人の愛犬、遂に浣腸さる。」というのがある。

処が計らずも、六月の松竹新喜劇の「市長さん」という狂言に、ある小さな市役所へ警察から自殺未遂が出たので誰か来てくれと電話がある。藤山寛美の衛生主任が「二十二・三才の美女だそうですが、手当が大変だね。口から管を入れて胃を洗ったり、オイドからポンプで浣腸したり」と云うと、若い吏員二人が「僕が行きます。」「いや、私が。」と争って出て行く。と、これが主任の悪戯で、実は六十五才の老婆。帰って来た若い二人は課長から「浣腸の手伝いはどうだった。」とからかわれる場面があった。浅学寡聞な私。まだまだいろんなエネマ・シーンがあると思います。諸兄姉のお教えを待っています。

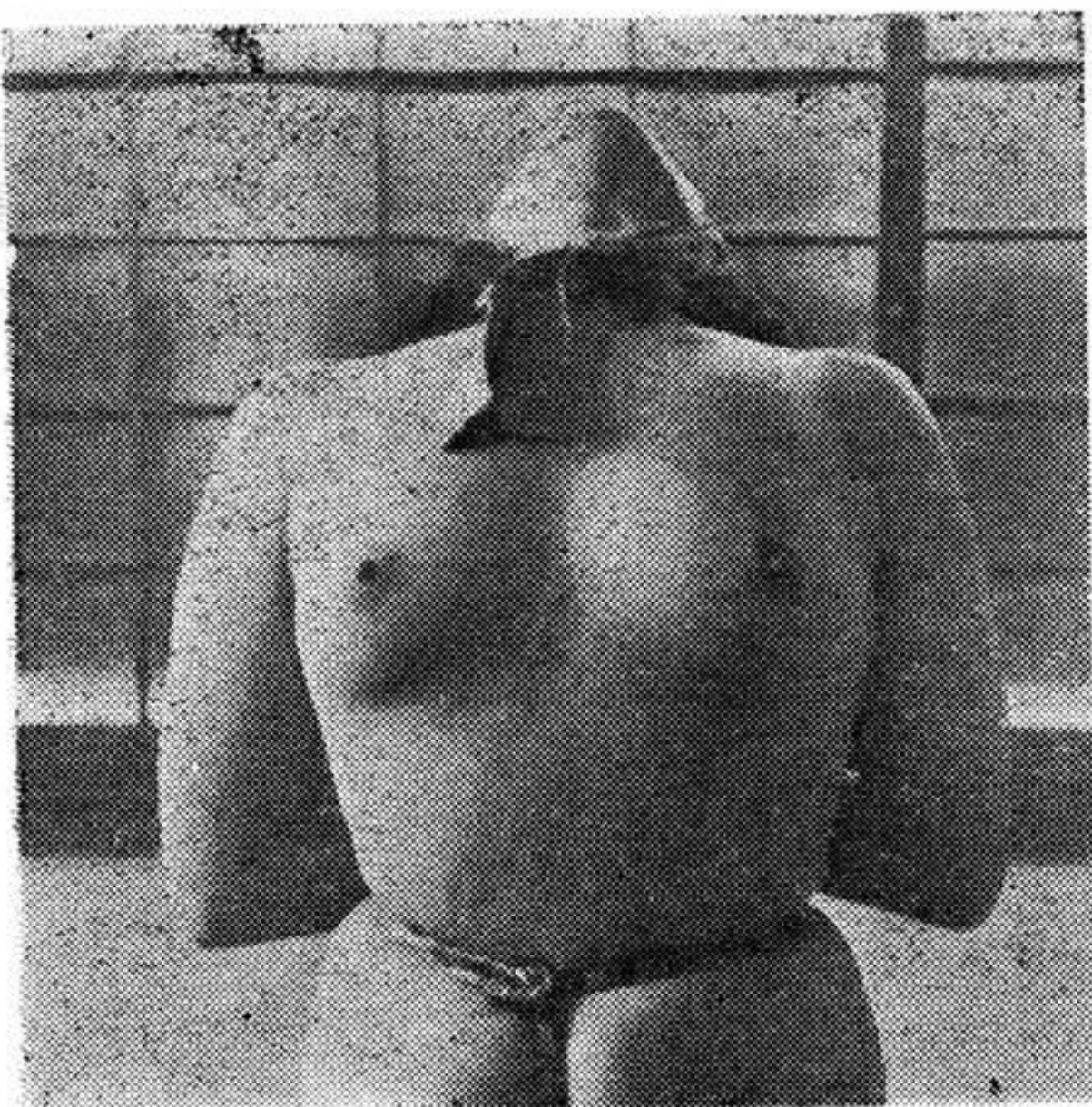
写真にならなかったモデル

可愛いグラマー

塚本鉄三

年は十九か二十才か、せいぜい二十一才ぐらいだろう。よく発達した上半身中でも特に乳房が素晴らしく立派だった。ぐっと暗く窪んだ臍窩が腹部の皮下脂肪の豊かさを物語っていた。

「貴方と一緒にいたら入るワ」
 なんとという殺し文句だろう。私がお風呂へ入りますかと尋ねた問いに対する返事がこれである。恥かしがって、「いいえ」と答えるだろうと予想していた私は、一瞬どきもをぬかれた気持ちだった。



こうして私は、彼女の素晴らしい肉体を湯気の中で拝してもう光栄に浴したのである。
 「もう読者通信に載せているひまはないから、君、手がすいていたら行ってみたら、どうだ」
 そういつて

手渡されたメモには八浜寺公園駅上りホーム。リボン付ツバ広帽子、チエックのワンピース。手に色物ハンカチ。横野千代子。Vと書いてあった。

乗降客の至って少い駅のベンチで難なく私は彼女を発見することが出来た。上り普通電車の通過した直後のこととて、ホームには彼女以外誰もいなかったからだ。六月二十七日午後一時半のことだ。それから難波へ出て、ホテルの一室に落ち着いたのは四時近かった。ギャジッド・バッグからカメラをとり出して準備をする私に対して、顔を写すのはいや、身体だけならいいが、それも単に写すだけで雑誌に載せるのならいやだ、というのだ。

澄んだ瞳、可愛い丸顔で片方の頬にえくぼが出る。色が小麦色なのは難点といえば難点だが、写真には一向に差支えない。この顔なら素晴らしい表情のものがとれるぞ、と内心大いに期待したのだが彼女の一言で、その希望も期待も一瞬にして濁んでしまった。

こうして横野千代子のフォトは日の目を見なかった。
 「プレイだけなら、いくらでもOKよ」

と言っていた彼女。洋服を着ているときは、上品なお嬢さんタイプなのに、一旦洋服をかなぐり捨てるとヴァンプのような態度に急変する女。どちらの彼女が本当なのか私にも一寸見当がつかない。結婚したら、きっと彼女はよい奥さんになることだろう。

昼は淑女で夜は娼婦——か。私はふっと、そんな文句を思い浮かべていた。二人の女と結婚したような気持。これはきっと素晴らしいことに違いない。

もう少し強引に口説いたら、案外、口絵登場も承知したかもしれない。と考えると、再会を約束しなかったことが今になって心残りだ。私は時々、彼女の素晴らしい肉体の写真をとり出して眺めるのを楽しみにしている。

奇クサロン向原稿募集

○皆さまの共通の広場としてのこのサロンは、どなたでも叩けば開かれる、楽しくて身近な集いにしたいと思えます。マニア通信、短信、文通、呼びかけ写真、絵など、何んでも結構です。から、おしお寄せ下さるようお待ちしております。
 ○採用篇には、編集部保有の特写真あるいは、雑誌を贈呈いたします。奮て御投稿をお願い致します。

東西アブ映画繁昌記

稲倉 弘

このところ、洋の東西を問わずアブ映画が大氾濫している。

六月二十一日、松竹系で封切した谷崎潤一郎原作、武智鉄二演出の「白日夢」は、世にも不思議なセックス・ドラマというキャッチフレーズで新聞紙上の宣伝文句を見ても、次のようなすさまじいものである。

——全裸で吊された女が体に電流を通され、はじめは羞恥にもだえるが次第に乱れてゆきついに射精して失心するシーンなどセックスを真正面から捉えたシヨッキングな場面

が登場する。全シーンの六〇%がハダカ、セリフの四〇%がコトバにはならない声——。

同時上映のロベルト・ビアンキ・モンテロー監督の「世界の裏の裏」総天然色長篇記録映画と銘うった残酷な遊びに溢れるお色気世界めぐりというアブ映画。

スカートまくりコンクール。頭蓋骨のおまじない。尿瓶の行列風景。風船破りの女プロレス。ラクダの尿で染髪。キッス当て遊び。ゲイボーイとシスターボーイ。残酷サディズム・ショウ。快力スタ一の楽屋うち。砂漠の売春婦。ナポリの密輸船。性の倒錯。ジャマイカの夫婦多夫。国際的ガール・ハント。有閑マダムとボーイ・ハント。仮面のヌード美人の名当て遊び。というすべてマニア好みのものばかりだが、そのいずれも、宣伝文句ほどの内容ではない。それよりはむしろ、アブ映画としては、日活の「肉体の門」の方

がマニヤにはアツピールするかもしれない。ボルネオ・マヤに扮する野川由美子が地下室で下着一枚にされてムチ打たれるシーン。吊され、棒で打たれる町子に扮する富永美沙子。仲間のオキテを破ったため、全裸で柱にしばりつけられ松尾に髪を切られてしまう若葉めぐみ等のシーンはサド・ファンにとって見逃せないだろう。

東宝の「肉体の門」には、ボルネオ・マヤには団令子が扮するが期せずしてアブ競演という恰好になった。

日活の「砂の上の植物群」は中平康監督で津上明子の役には、西尾三枝子が抜擢されたが、アブ映画としてこれも期待される作品である。

アブ映画といえは谷崎潤一郎の作品が先ず頭に浮んでくる。「癡癡老人日記」では、美女の足に憑かれた老人の生態を描いてマゾの場面を濃厚に展開したが、今度大映で映画された「花」は、若尾文子と岸田今日子が火花を散して同性愛を演ずるというアブ的なものである。「砂の女」で熱演した岸田今日子の演技にも興味がある。性的不能者、同性愛など谷崎文学のそのものずばりの変態性欲がど

こまで、執拗に追求されるか、その成果如何では、今後更にアブ映画の黄金時代を現出するかもしれない。

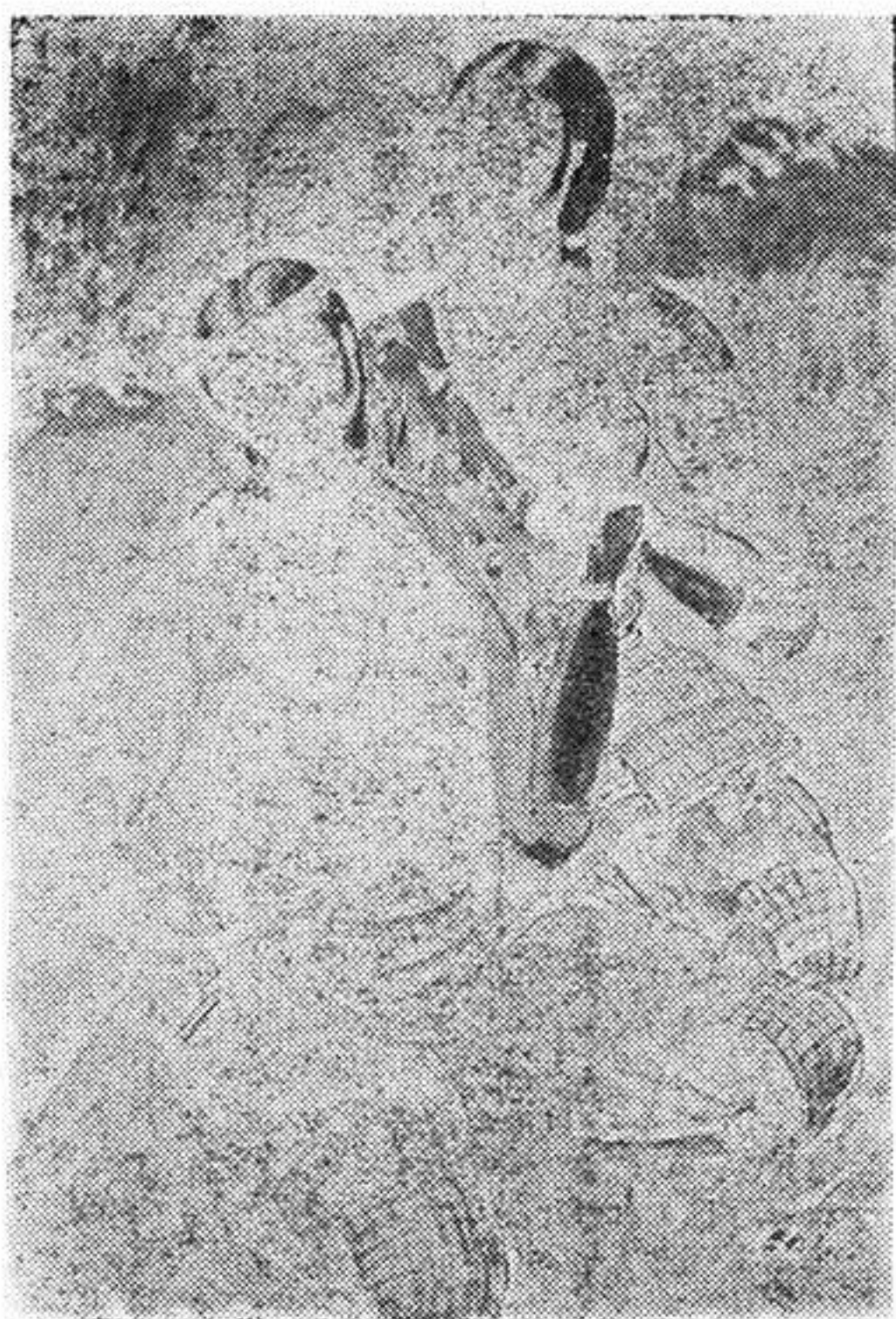
忍者ものにもアブの要素が多いというより、忍者というものの自体に、常人でないエキセントリックなものが魅力を持つのだ。大映の「忍びの者・霧隠才蔵」(監督田中徳三)では磯村みどりが荒縄で縛りあげられて天井から吊られて拷問されるシーンがアブ・ファンには期待されるだろう。

見るサディズム

城 進

人間には誰しも、加虐性と被虐性とをいくらか宛持っている。どっちが強いのか、或はその両方がそう激しくないだけの事である。

いえば程度問題という事になるのだが、その程度というものが三八度線のように劃然と区切られるというわけにはゆかない。従ってノーマルであるか、アブノーマルであるかということの区別は中々困難といっている。



永井荷風の『腕くらべ』の中に女が電灯の下で裸身を羞じるさまを見下しながら「おのれという男性の力のもとに、女が寧ろ死を叫ぶ迄総身の快感に転々悶々する其の裸身と其の顔、其の表情とをはつきり限なく熟視しようと思ったのである。」と綴っているような／＼見るサディズムも、男性の嗜虐趣味としては、最もありきたりのものだろう。

又、女性の方は一般にマゾヒズム的傾向が強いが、たとえ妖婦とか烈婦とか云われる様な人でも案外いじめられる気分には酔う事が多いと言う。

近代の名舞踊家として、又世界の名士を手玉にとった妖婦として名高いイサドラ・ダンカンが、最後にはソビエトの青年詩人エセーニンに夢中になって、「犬め、踊れ！」などどどなられると、涙を流しながら雌犬のように舞い狂っ

たり、時には、なぐられながら「エセーニン、エセーニン、貴方は強いわ！」

と、男の脚に纏って狂喜したという。妖婦ナナが冷酷な喜劇俳優フオンタンに足蹴にされながら、まつわりついた生活もそうだし、ドーデエ作「サッフォ」も、結局はならず者の情夫から離れられない。こうしてみると、私がじかに聞いた事実も入れると、フランス文学には、この様な傾向が多いといえよう。

古い映画であるが「甘い生活」の中にもサド・マゾ的な要素が多分に含まれていた事を記憶している。サド・マゾ的要素は、男女とも多分に持っており、何らかの折り、それが開眼するのだといえる。女というものを極地まで理解し、見きわめる事は、サド・マゾ的要素の研究なくして果されないと思うし、文化生活者の男女がお互いに満足を得るためにも、見るサディズムを十分に理解する必要がある。

落城の女

飯 森 潔

城外に出て転戦の後、戦い利あらずして引き上げる途中、城下はずれの小高い丘にまで辿りついた時、すでに城は火に包まれているのを見た。

今はこれまでと母に見守られながら、雄々しくも腹を掻き切った城と運命を共にしようとする健気な娘。雪もあざむく十八の乙女の肌を惜しげもなく、さらけだして鎧通しで臍の下を、えいとばかり

に突き刺す。

「う、ううう！」

と、思わずうめいて、豊かに肉づいた下腹から胸へかけて、激しく苦痛に波うった。

「なんのこれしき」

きりきりと下腹を左から右へと切りさばいてゆく。鮮かな血が、ふつつつと溢れて白い下着を染めてゆく。母上の見守る前で、このように立派に腹を切る誇りに、娘は、尚も右脇腹まで一気に、真一文字に切り進んでいった。

「さあ、もう一息ですよ」

母のはげましによって、娘は更に下腹を切りさばいてゆく。

総ゴム製のズボンをはいたり肌につけ、乗馬靴をはいた均整のとれた美しい女であった。

彼女は一瞬冷静な眼ざしで私をみつめた。一言も言わない。一分余り沈黙が続いた後、突然奇妙な声が聞えた。何だかしやがれた様な声であった。「ヨウコ」そう言っているようである。

私は猿ぐつわをかまされていなかったの、無意識のうちに「ハイ」と言ってしまった。

「お前は、前々から浣腸を受けた」と言っていたな。

あざけ笑うようないやらしい声であった。いや、私にはマイクを通した声が、そのように聞えたのかも知れなかった。私は前々から一種の浣腸マニアであった。だから自分ではいつも浣腸して楽しんでたのだが、もの足りなくなり、誰か浣腸してくれる人がいないかなあと、秘かに心に思っていたのである。

私は突然の事にびっくりしてしまった。言葉は咽喉元につかえ、隣で何にやらしている女を見ると恥しさで顔が赤くなった。更にスピーカーから言葉が流れた。
「ナンバー・ツー、例の所からあれを取り出せ」

「Z.O.N」とは、あの美しい女のことらしい。私が寝かされている寝台から二メートル程離れたカーテンの扉を開いて手術台のようなものを引っ張り出してきた。その上にどんなものがのっているのか、私には見えなかった。が、それが近づくにつれて、ゾッと寒けとも恐れともいえない戦慄を感じた。その上には、私の今まで見たこ

下にあるスイッチを押した。私は思わず息をのんだ。寝台が動くではないか。両手両足は寝台の両端に固定されたまま、その寝台の中央部、ちょうど私の尻にあたる部分がぐんぐんもち上ってくる。それと同時に足の部分の固定された個所が寝台の中央部へと動いてくる。そうだ。女にとっては最も恥しい姿勢、即ち尻を上につき出し

私の顔は真赤にはてった。女は素早く何か持ち出してきた。私にはそれが何だかすぐわかった。エネマシリンジである。私は自分でも用いたことがあるので、そんなに恐れはしなかった。それでも、恥しさから極度に緊張した。その嘴管は私の用いたものより遥かに太かった。

浣腸に憧れる女

志波啓子

ともない巨大な浣腸器、嘴管だけでも、直径四・五センチはありそうである。

「ナンバー・ツー、第一回目の用意」

スピーカーからは容赦なく命令が飛ぶ。女はその声と共に台の上で何やらやっている。

「ナンバー・ツー、スイッチ」
彼女は命ぜられるまま、寝台の

た姿勢になったのだ。私は恥しさにもだえるが、それは尻を左右に波打たせるばかりだ。

「いいでしょう」
その言葉に、はっとして前を見た。

「あッ」私は思わず息をのんだ。何んということだろう。前方は特殊しかけの鏡らしく、その鏡にぱいに自分の全開放された臀部が見えるではないか。

「二回目」
スピーカーからは容赦なく命令が流れる。今度はさすがの私も愕然とした。さっき見たあの巨大な嘴管が迫ってくるではないか。

「あああッ」
その時、ガチャンという音にびっくりした。おや、あの女は、浣腸器は、何にもない。――それでは今のは夢だったのか――。

それでも、私のお腹は重苦しいのだけは現実である。ああ、そうだ。もう四日もお通じがない。

「浣腸しなくては――」
私は独り言をいいながら、寝台から起き上った。

△私のイメージ▽

飼育される女囚

近藤 一

私は、もと、大森啓美（ひろみ）という名前を持っていた娘です。歳は十九。

あるお金持の家の小間使いをしていて、平凡で満ち足りた毎日を送っていましたのに、只今の私は、罪に穢れた女囚として毎日毎日浅ましい姿を晒し、しかも次々と考案される責めのモルモットにされ、呻き、喘ぎ、悶えフィルムに収められる女畜なのです。ふとした心の迷いから、私は盗みを働いた女として、御主人様の不浄の縄目を頂戴し、女らしく息づいている肉体の隅々までを鞭りものにされながら生きているのです。それが私にふさわ

しい青春なのでしょう。

私が高校二年の秋、私の両親は交通事故で一瞬に亡くなりました。私と妹の康代があとに残されて途方に暮れていたとき、父のお友達である今の御主人様が私達を拾って下さいました。私は奥様（御主人様のお世話を受けていらっしゃる、上品で美しい御婦人なのです）の小間使いになり、学校も卒業させて頂きましたし、妹は御主人様のお宅へ引取られて可愛がって頂いています。

昨年の九月の中頃でした、御主人様が私に

宝石をお預けになりました。黒檀というのでしょうか、黒く古めかしい小函に、水晶のネックレス、ダイヤモンドを散りばめたペンダント、プラチナ台にサファイアの指輪、オパールイヤリング、その他名も知れない宝石が幾つも入っていました。これは御主人様から奥様へのプレゼントですが、奥様のお誕生日まで大切に預かっておくように云付かったのでした。

私はその黒い小函を私の筆筒の一番下の抽出しに入れましたけれど、誰もいない時にはこっそり出して眺めたりしました。そのうち

手でさわってみました。閉めきった小間使いの部屋で鏡台に向かい、気に入った物を一つ一つ出しては身につけてみました。

鏡の中の私は妙な具合でした。高校を卒業したての女の子の身につけられた宝石は、やけに輝やいていました。私がオパールイヤリングの片方を耳朶に付けているとき、玄関のベルが鳴りました。私は慌てて宝石函をしまつて玄関へ出ようとし、イヤリングをしたままでいるのを思い出して廊下ではずして傍の電話用の卓に置きました。確かに置いたのです。

お客様のお相手をするのに気を奪われて、私はついすっかりしてイヤリングのことを忘れていました。暫らくして思い出した私が、慌てて電話の所へ行ってみた時は、見当りませんでした。お客様がお持ちになる余裕はなかったのです。

私は躰中がカアッと熱くなりました。一生懸命探しましたが、どこからも見つかりませんでした。

私は隠しきれず、裁きを受けることになりました。

応接間で御主人様と奥様が尋問をなさり、私は絨緞に正坐してお応えするのです。

「啓美は預かっておくように言付けられた主人の品物を勝手に出して使ったのだな。」

「ハイ」

「そして紛失してしまったのだな。」

「アノ、私は、別に……」

「余計なことは言わないで！ 聞かれたことだけに応えればいいの！」

「ハ、ハイ。」

「啓美、お前は主人から預かった宝石を無断で持出し、無断で着用し、紛失したのだから？ そうだな！」

「ハ、ハイ、その通りです。」

私は有罪でした。当然のことでした。私は泥棒女として警察へ突出されることと、御主人様のお側で罪の償いをするのとどちらかを選ばせられた結果、即座に罪に服しました。

「ヨシ！ お前には充分に罪の償いをして貰おう。」

私は神妙にしていました。

「啓美ちゃん、貴女はもう今日から名前が変ったのよ。貴女の名前はお케이よ。いい？ 刑罰を受ける女という意味もあるし、貴女のヒロも啓の字だから分り易いわね。」

奥様の言葉に私は項垂れてしまいました。

「お前は、紛失したイヤリングが発見されるまで、罰として罪人の扱いを受けるのだ。見つかからない限り、お前は女の罪人で一生を送るのだ。いいな。」

私は正坐して垂れた姿で御主人様の言葉を味わっていましたが、奥様はそのような怠け心を許し、下さいません。

「これからは旦那様と私の言付けはもう一度言うのよ、自分で。復唱っていうの。これを忘れたら特に厳しくお仕置するわよ。さ、さっきからの分を言って御覧なさい。」

私は少しテレ臭さとみじめさを感じて、命じられたことに、オドオドと服しました。

「私、大森啓美は、御主人様からお預かりした大事な宝石を無断で持出し紛失したと申しました。それは啓美が泥棒女であるということと同じです。ですから啓美は只今から女囚になって、宝石が見つかるまで、御主人様と奥様からお仕置して頂きます。もし宝石が見つからなければ、啓美は一生女囚で過ごすことをお誓いします。啓美は罪を犯した女囚ですから、啓美という名前を取上げられることになりました。そして、奥様がつけて下さった「お케이」という名前で呼んで頂くようお願いいたします。」

私の刑罰は即座に執行されることになりました。

「お케이！ 着ている物を全部脱ぐのだ！」

「エッ？ あの、ここで？ 今？」

「勿論だ！」

「さア、ぐずぐずしないで！ ちゃんと復唱して、裸になるのよ。」

「裸」という言葉で、私は恥ずかしさにカッとなってしまいました。そして、お尻をビシヤリと叩かれると、すっかり縮み上って、言われたとおりにしないではいられませんでした。

「啓美、いえ、おケイは、只今、ここで、着ている物を、全部、すぐ脱いで、裸に、裸になります。」

私の背は高い方ではありません。むしろ、現代女性では小柄な方です。そして肥えています。顔も丸く頬などふっくらしていますし、肩も腰も手足も、全体にムチムチと丸味を帯びています。お乳は中学卒業頃からプックリと盛上って、恥ずかしい位に大きくなり、お友達から「大きいわねエ」と言われましたし、お尻は逞しく張切っていて、男の子たちによく「大森はチビの癖にケツがでかいんだなァ！」と言われたものです。肉がついたの

か脂肪がたまったのか、下腹がプックリと膨れ、丁度妊娠三カ月位の大きさになっているので、便秘が続いたりすると五カ月程度の大きさに膨らむのです。

私は催眠術にかかったようにボーッとしたり、スリッパを脱ぐと、フラフラッとしてしまいました。パンティだけの姿なのです。

「おケイはこれを着るの。女囚の着物よ。ずっと着るのだから大事にするのよ。」

奥様が背中へかけて下さったのは、昔の女の罪人が着せられていたような着物でした。囚衣でも膚を覆う安心感に袖を通していただくとまたお尻をビシヤンと叩かれました。

「おケイは罪人よ、女囚なのよ。女囚がパンティなんかはいて何ですか！ 駄目々々！ さ、ぐずぐずしないですぐ脱ぎなさい。」

内腿に空気がひんやり触れる思いで、私は足がすくみましたが、囚衣の裾を合わせると外からは見えないように思われました。

私の編んだ髪の毛は解かされました。髪が多く長いので、背中の方にまで髪を垂らし、私は御主人様と奥様の足許に引据えられました。

「これがお前専用の縛り縄だ。」

御主人様は私の眼の前に、エビ茶に白の混

った木綿らしい縄を見せてから、ゆっくりと私の軀に掛けたのです。かなり長い縄でしたが、まず二つ折にして真中の辺を私の首筋に当て、前へ廻して喉許で一つ結んで、丁度首に輪をかけたようにされたのですが、とてもみじめで、私はこれでもう本当の罪人になってしまったのだと思います。

ワッと泣出したい、抵抗したい、逃出したい、身をよじって許しを乞いたいような、複雑な気持で、カァッとしてしまいましたが、でも、私が悪くてお仕置を受けるのですから一生懸命自分に云い聞かせて諦めました。

両腕は脇にぴったり抑えられ、脇の下に汗がにじんでいました。お乳の膨らみを囲むように胸の前で菱型の縄目ができ、胴もギュッと絞られ、首筋の縄はグッと下へ引っばられ両手が重なって動かせなくなりました。俯向いて見える私の縛られた姿は、正に昔の女囚、映画やお芝居で観る江戸時代の女の罪人のようでした。

「さ、できた。立ってみなさい！」

私は、自分の肉体がこんなにもどっしりと重いものとは知りませんでした。縛り上げられて両手が使えない女の体は、立上るだけでも不自由でした。

お尻を浮かせ、膝を立て、爪先の蹴りと腰のひねりを利かさなければよろけてしまいます。

お尻を思いきって振らなければ、立上れないのです。恥ずかしさで全身を火照らせながら、やっとのことで立上ると、次の命令が来るのです。

「よし！ 坐れ！」

「よし！ 立て！」

「よし坐れ！」

何度繰返したでしょうか。囚衣の裾が脚にまっわって邪魔でした。次第に汗ばんで、肥えている私の肉体からは、女のほのかな匂いが立昇るようでした。

「暑そうね、風を入れて上げましょう。」

「あっ、ああっ！」

私の胸の菱型の縄目の中は、奥様の手でむき出しになりました。私の人一倍大きくて弾力に富んだお乳がムックリと突出されてしまったのです。

恥ずかしさが一杯でした。で



も悲しくはありませんでした。却って心のどこかには誇らしい気持ちさえありました。私は、私のこの充分に女らしく息づいている裸体を、もっともっと恥ずかしめ、もっともっと鬨りものにされたいとさえ思っていたようです。私の心を察してか、奥様の手は私の襟許を拡げ、首からお腹の辺までを露わにしてみました。

そして御主人様の命令は、私の囚衣の裾を乱し、腿の付根の辺りまでが露わになってしまったのです。

奥様はそのような女囚の私に次のような言葉を唱えるよう命令されたのです。

「おケイは、慎しみのない娘です。普通の女の人なら努めて隠そうとする素肌を、自分で露出してみんなに見せようとしています。しかも、女の罪人という汚らしい姿でいながら少しも恥ずかしいと思わず、縄で浅間

しく縛られても、却ってお乳やお尻を突出して、プリプリ動かして、歓びに悶えているのです。どうぞ、この淫らで女臭いおケイを存分にお仕置して下さい。お気の済むように辱しめて下さい。」

私はいつの間にか、顔にかかった長い髪をくわえていました。

「どォ？ 嬉しいでしょ？」

私は項垂れていました。

「恥ずかしいの？」

「ハ、ハイ、」

幽かな声で答えた私に、御主人様がおたずねになりました。

「どうだ？ そのままの姿で晒し者になっているのと、着物をきちんと着るのと、どっちがいい？ お前の大きなオッパイや太った腿の附根まで剥出しにされている方が嬉しいか？ いつまでも、そうしていたいのか？」

「嫌、嫌！ 許して、許して下さい。おケイは今恥ずかしくて、気が狂いそうなのです。着物をきちんと着せて下さい。胸や脚を隠させて下さい。せめて、せめて、襟許を合わせて下さい。お願いです！」

縄を解かれた私は急いで襟を搔合わせ、そして肌をかくしました。そして正坐して、両

手首の縄目の痕をそっとさすってみました。

「さ、手を後へ廻すのだ！」

「え？ あの、まだ？ 縛られるの？」

「お前は罪人だよ。女囚なのだよ。」

「ハ、ハイ。」

また首に輪がかけられました。でも今度はお乳の辺を菱型にしないで、縄は胸で十文字に交又しました。二の腕を締付けられ、胴を締付けられ後手に括られたのは同じでした。

けれど、今度は体が伸ばせないように、背後へ倒れないように、二の腕の縄目と腿の縄目を胴の縄目に集めて括られました。私は正坐を強いられ、横坐りもできなくなりました。

胸の方は逆三角形、お腹の方は三角形の縄目ができ、私の丸味のある肉体は、奥様のお情で許されたピンク色の腰巻を少し覗かせた程度で、先程に比べて多くなった縄目に締上げられ、大分悲惨な女囚らしくなりました。

奥様が太めの薪を七、八本運んで来て、板の間の柱の前に並べて置くと、御主人様から次の命令が下りました。

「おケイ、お前はこの上に正坐して晒し者になるのだ。いいな！」

とても痛そうでした。でも、私はお乳や太腿を隠せたのですし、どんなお仕置を受けて

も文句の言えない泥棒女の女囚ですから、お尻をピンピンピシャン叩かれたり、お乳をグリグリ揉まれると、諦めて、御主人様と奥様の手で薪の上に正坐したのです。

他のことを想う余裕はありません。ただ、脚に喰込む薪の角が痛く、骨が軋むようで、この痛みから何としても逃れたいという一心だけでした。御主人様は身動きのできない私の頬や乳房を、竹刀でグイグイ突いたり、胸や腹や腿や肩から背にかけて、少しの手加減もなくピンピン叩いたりしました。自分でも驚ろく程、私の肉体は良い音を立てて竹刀を弾き返すのです。私は、豊満で健康な私の肉体に恨めしい想いもしました。でも、竹刀の責めが痛ければ、その瞬間は、脚に加えられるソロバン責めの苦痛を紛らすことができました。

私はもう、本当に女囚でした。罪を犯したために残忍な責め折檻を受け、若い女の肉体を捧げて刑に服しているのです。

私の下半身は何かギュッと枷をはめられたような窮屈と痺れを感じ、それが次第に上半身にひろがって行って、息苦しさを覚えしました。竹刀でぶたれても、もう余り痛いとも感じないで、只、脚を伸ばしたいナとだけ思い

ました。

「お케이、脚が痛いかな？」

「ハイ」

「伸ばしたいかな？」

私はこっくりして頷きました。

脚の血が流れなかったため、両足とも、膝から下が萎えたように利かなくなつて、すぐには立てません。一旦縄を解かれながら、私は足をそつと伸ばして、痺れた手でさすり、じつとしていました。

今度は、巾の広い柔らかな紐で縛られました。後手の手首をきっちり交叉させられ、囚衣の上から、お乳の上下を思いきり絞り上げられたので、お乳だけが別にくっつけた物のように異様なとび出し方をしていました。

「？」

今度は何をされるの？ という思いで、私は御主人様を見上げました。

「お케이の脚を素直に伸ばさせてやるのだ。望みどおりにな。」

私の体は鴨居から吊り下げられたのです。肉づきの良い私の重みは、御主人様と奥様の二人がかりでなければ宙に浮上りませんでした。胸を縛った紐を吊られたので、手首を骨折したりしませんでしたけれど、私は自分が

どんなにドッシリした肉塊であるかが身にしみて分りました。

「イ、イイイ、イイ！」

アという音は声になりません。唇を開くときは短かくて荒い喘ぎだけです。吊縄のよじれが戻つて、私は畳から一尺と離れていない宙に足先を泳がせながら、ゆっくり回転していました。胸の紐は体に喰込んで、胸の厚みが半分以上も絞り切られた気持でした。何か云おう、赦しを乞いたいと思つても、顔を上げていられず、ガクリと頭を垂れてしまいました。

（胸が、胸が！ 息が停る！ 苦しい！）

私の肉体は、鴨居の下に、妙に折れ曲り、のしのような形になって、ダラリと垂下っていたのです。

奥様が私の足首を持って下さったとき、私の胸の苦しみは、半分に減った思いがしました。私の足首は細長い布で括り合わされ、そして、今度は胸を縛った紐と足首を縛った布との二ヶ所に吊縄を結んで、私の体は下向きに、ほぼ水平に吊下げられました。

滑車を二つ使い、御主人様と奥様は力を協せて、今度は楽に私という女囚を三尺以上も吊上げたのです。私は首筋を一杯にのびし、

永い髪を畳すれすれにまで垂らして、吊られていました。回転はしませんでした。

私の体には、不思議な精気が満ちていました。もちろん、苦しいことは苦しいし、痛かったり、痺れたりします。でもヘトヘトにへたばったりしないで、却ってファイトが湧くのです。私は水平に吊られても、少しも参っていませんでした。

「素敵！ いいポーズだわ！」

奥様が感激したようにおっしゃいました。

「お、おケイは、ハア、可愛い、可愛い、女囚、です、ウッ！ 若くて、遅ま、しい、肉体、をした、女の、罪、人です。どうか、どんな、辛い、拷問、でも、お仕置、でも、どんな、加えて、下さい、イイッ！ おケイ平気、嬉しい、です。それから、おケイ、を写真、撮つて！ とつても、浅、ましい、恥ず、かしい、姿、大勢の、人に、見て、貰つて、下さい！ お、お願い、します！」

私は、奥様の命令どおり、とぎれとぎれだったけれど、一生懸命に言いました。そして写真を撮られていたのです。

ジーンと痺れていく感覚の中で、私はもうどうなってもいい、これ以上墮ちることのないところまで私は墮ちてしまったのだと感じ

ていました。

そして、ヌードの、悦虐モデルの現在の私が誕生したのです。浅ましく括り上げられ、淫らなポーズをとり、吊られ、鞭撻たれ、磔られ、苦縛や、蹂躪に呻き、浣腸に脂汗を浮

かべ、切腹に陶醉し、良質で豊かな髪と乳房や腰のまわりの量感に自ら惹かれ、悦虐の日々に生甲斐を感じ、妊婦ヌードとなれる日を待ち詫びている異端の女、私が誕生したのです。

昭和三十三年七月発行の「S特号」のグラビア所掲特写ファト、「囚衣、拷問（ソロバン責め）、懸崖」のモデル大塚啓子嬢を想いながらの文章です。

〔新版〕 女体悦虐フオト七十選

Z組七十集 大手札印画紙（9×13寸） 焼付各組一枚一組（送料共）

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1	ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z 2	囚女第六十三号	(柳)
Z 3	猪型手足吊り	(梨花)
Z 4	逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z 5	ローソク責め	(四浦)
Z 6	豊賢への珍責め	(絹川)
Z 7	淫らな変型縛り	(愛川)
Z 8	ザリガニしばり	(梨花)

Z 9	引き回しシーン	(東浦)
Z 10	全裸後手高手小手	(加茂)
Z 11	豊満な肌の被虐	(大井)
Z 12	黒髪いたぶり	(大塚)
Z 13	足吊り媚態責め	(絹川)
Z 14	黒縄高手小手縛り	(四方)
Z 15	強烈荒縄しばり	(梨花)
Z 16	肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z 17	くの字の足指苦悶	(桜井)
Z 18	裸身にいどむ縄	(前本)
Z 19	無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z 20	ハリツケの女体	(梨花)
Z 21	おへソなぶり	(大塚)
Z 22	逆手足吊り	(竹野)
Z 23	美肌のいたぶり	(絹川)
Z 24	仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z 25	恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z 26	火箸で責める乳房	(梨花)

Z 27	全裸の海老責め	(熱海)
Z 28	ベッド上の痴態	(絹川)
Z 29	足の裏の櫛り責め	(大塚)
Z 30	閨の女体飾り縛り	(竹野)
Z 31	首絞め晒しもの	(大塚)
Z 32	鼻孔に加虐	(若原)
Z 33	悦虐責放心状態	(梨花)
Z 34	手枷足くさり	(四方)
Z 35	寝室でのプレイ	(花本)
Z 36	猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z 37	首縄、柱しばり	(絹川)
Z 38	巻煙草責め	(大塚)
Z 39	尻立て縛りポーズ	(桜井)
Z 40	厳しきエビ責め	(東浦)
Z 41	ゴムのカバール縛り	(竹野)
Z 42	ワンピースの縛り	(花本)
Z 43	荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z 44	尻を突っ立てて	(大塚)
Z 45	鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z 46	苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z 47	酔後の淫らしばり	(絹川)
Z 48	逆十字エビ縛り	(大塚)

Z 49	全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z 50	欄間に宙吊り	(梨花)
Z 51	全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z 52	荒縄のお仕置室	(梨花)
Z 53	庭園の惨酷風景	(館)
Z 54	被虐の果て	(大塚)
Z 55	痛められた裸身	(大塚)
Z 56	鏡の中の全裸像	(愛川)
Z 57	セーラー服縛り	(梨花)
Z 58	檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z 59	全裸の股間縛り	(絹川)
Z 60	オムツ逆エビ責め	(田中)
Z 61	胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z 62	ゴム人形の女	(竹野)
Z 63	荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z 64	女子大生恥態責め	(田中)
Z 65	白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z 66	強要する開股縛り	(絹川)
Z 67	強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z 68	亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z 69	ベッド上のもだえ	(愛川)
Z 70	恥しさに耐えて	(館)

懸賞【告白、手記、体験】入選作品

羞恥の記録

吉 村 英 子

×月×日

もう一週間をゆうに越える便秘のために顔はかっかとはてり、下腹部から腰へかけて鉛のようなおもさと鈍痛がある。きようは勤めを休み、午前中に病院へゆき、内科の外来で診察を受けた。

形どおりの問診の後、ブラウスとスカートを取り去り診察用のベッドに臥て腹部を露出する。まるで妊婦のようにパンパンに張ったおなかを、医師は丹念に撫でたり圧したりしていたが

「直腸をみますからパンツを脱って下さい」

「截石位というのであろうか、仰臥したまま両膝を両手で抱えた姿勢をとると、棒状の直腸鏡を挿入されて内診を終った。

しばらく待合室で待たされた後、

「吉村さん―処置室へおいで下さい」

というスピーカーのアナンスに促がされて処置室に入った。スクリーンにさえぎられてベッドが三つ並び、消毒薬の強い臭いが漂っている。

「吉村さん、浣腸しますからパンツをとって

ベッドに臥て下さい」

という看護婦さんの言葉にベッドに上ると裸のお尻に黒いレザーがひんやり触れた。やがて腰の下にビニール布が敷かれ、「右枕に臥て左膝を曲げて下さい」という指示どおりの姿勢をとると、

「ずいぶんひどい便秘ですから、すこし時間がかかります。がまんして下さいね。」

一〇〇〇CCのイルリガートルが二本、懸架にかけられ、嘴管が挿入されて浣腸がはじまる。二分、三分、五分―イルリガートル

の液面はしずかに下降をつづけ、それと共に下腹部にずーんとおもひ緊張感がみなぎってきた。

注腸は五〇〇CCでいったんストップし、嘴管がはずされ、分厚い脱脂綿でアヌスをおさえた看護婦さんが、

「どう、便意がありますか」

と私の顔をのぞきこむ。下腹部の膨満感はまだ限度に達し、内臓が突き上げられるように苦しいのだが、便意はまだまったく起って来ないのだ。黙って首を横にふるのを見ると「そうですか、じゃ一度出しましょうね」

とアヌスに太いゴム管が挿しこまれ、体内の石鹼液は再びベッドの下に置かれたガラスの容器へ流れ出てゆく。そしてまた嘴管を挿入、五〇〇CC毎に注腸と排出を繰り返す。

そのたびにすこしづつ便意に似た感覚が下腹部に強まってゆくのが判る。ときどき、ぶくぶく—と泡だつのは、腸内に鬱積されていたガスであろう。そして遂に三本目のイリガートルが架けられた。

「今度は少し苦しいでしょうけど、できるだけがまんして下さい。」

という声とともに、最後の注入がはじまった。二〇〇—三〇〇—五〇〇—七〇〇—液面

はずんずん下り、再び下腹部に耐えがたい圧迫感がおしよせてくる。遂に一〇〇〇CCの注入は終り、嘴管がはずされた。

「ベッドを汚してもいいですから、できるだけがまんして下さい。急いで出してしまっただめです。」

私は必死に耐えた。もうおなかの中はひどい嵐だ。断続的におしよせるはげしい便意は私の努力を嘲笑うように少しづつ体外に洩れてゆく。

「Sさん、オムツを取って！」

看護婦さんの圧えている脱脂綿はもうすっかり濡れてしまったのか、新しい脱脂綿に替えると同時に、その上から見習看護婦らしい少女のさしだすオムツでびったり押えられる。羞恥と、怒涛のような排泄感の波間に翻弄される小舟のような私。

「ああ、もうだめ、トイレへ行かせてー」

「もう少し、もう五分がまんしてね」

看護婦さんはそう言いながら、左手で私のおなかを時計の針のようにマッサージをはじめ、そのうえ、お尻をおさえている右手を、こきざみに揺るようにするのです。もう限度にきていた私が、それをがまんできようはずはありません。

「あーかんにんして……」

と叫ぶのと同時に、ドドドとはげしい排泄ははじまりました。

「便器をー」

お尻の下に便器が挿しまれると同時に、私は仰向けに直され、看護婦さんはやっと右手をはなしてくれた。

はげしい排泄の後、べとべとに汚してしまったベッドを降りた私は、そこで再び、蹠んでお尻をつきだしたはずかしい姿勢で、若い見習看護婦さんに熱いタオルで清拭されなければならなかった。

×月×日

病院で処置をうけてから三日目、お通じはまたびたりと止ってしまった。浴室の鏡に映るおなかのふくらみを撫でたりしているうちに私は或るプレイを思いついた。

そっと部屋に戻り、エネマシリンジとグリセリン液をとりだして再び浴室に入る。

冷たいタイルの上に横臥してゴム球をしずかに圧すと、グググ・グググと腸内に空気が満ちてゆく。ときどきシリンジの端を洗面器に浸すと、冷たい水がツ—と腸に入ってゆくのを感じられる。その感触を繰り返したのし



んでいるうちに、私のおなか
はポンポンにふくれあがり、
息が苦しくなってきた。羽村京子さんの蛙腹である。尿管をはずし、もう一度お湯に浸ると、水圧で息苦しさは倍加し、全身の力を抜くとおなかを上にして、すーっと浮き上りそうになる。変な気持だ。しばらくしてお湯から上り、用意したグリセリン液をゴム球一杯に吸いあげて注腸、タオルをオムツ代りにあてて横臥する。やがてはげしい蠕動とともに、異様な音の断続が私の頬を羞恥に染めた。

×月×日

ストップして今日でちょうど一週間になる。幸い家中親類のおよばれでみんな不在、たったひとりで留守番を買ってでたのも下心あつてのことだがー。

さんざん迷った挙句、ムードを尊重して場所
所は自分の部屋に決め、仕度にとりかかる。
まず床をのべ、挿入便器と尿器をととのえ
る。私は身うごきもできぬ重病人なのだから
ー。オムツとオムツカバーも必要である。

しかし、私は同時に医者であり、看護婦で
もあるのだから、冷静な目で患者を見守らね
ばならない。そのためには鏡を用意し、あら
ゆる角度から観察できるように配置しなけれ
ばならない。床の上でさまざまな姿勢をとり
慎重なテストの末、やっと用意はできた。

寝衣に着換えて床の上に横たわる。私は病
人なのだー。

「おしっこがしたいの」

鏡の中の、看護婦である私に、私は恥しそ
うに小声でささやく。

「はいはい。いま尿器をあてますからね」

寝衣の裾がひらかれ、腰の下に花柄のきれ
ないビニール布が敷かれると、肌に硝子器の
ひややかな口が密着する。

「なかなか出ませんのね。遠慮なさらなくて
もいいですよ。おなか撫でましょうか」

恥しい努力の末、やがてやさしいせせらぎ
の音がしてやむと

「あら、これっぽちーあまりお苦しいような

「その後で先生に導尿して頂きましょう」

私は大急ぎでいやいやをする。

「じゃ、お熱を計りますから——」

体温計の一本を口に、一本をお尻に入れて私は十分間、みじろぎもせず目を閉じていた。

「お熱ずいぶんありますよ。そおそお、お通じがありませんでしたね。ちつとそのまま左膝を上に向けて——いま見てあげますからね」

指がしきりに直腸内容を探る。

「まあ、ひどい便秘！ もうかちかちに固くなってるんですよ。お気持ち悪いでしょ。すぐ浣腸しますからね。」

まずガスを抜くから——と太い直腸カテールを挿入し、その先に接続したゴム管の一端をコップの水に浸すと、やがてぶくぶく・ぶくぶく……とはげしい泡が立った。

「ほら、こんなにガスが溜ってるんですけど、苦しかったでしょ。」

彼女の掌が私のおなかを圧すたびに、ゴボゴボゴボと排出されるガスの水泡——でもこのはずかしさはまだ序の口、後には更に浣腸の羞恥と苦痛が待っているのだ。お尻からしっぱのようにカテールをぶらさげたまま、

私は浣腸の仕度のできるのを、じっと待たなければならぬ。

グリセリン五〇パーセント液をたっぷり吸い上げたガラス製浣腸器の嘴管がカテールにつなぐられ、まず三〇CCが注入された。一度に大量を入れると、刺戟が強すぎて液だけが排出されてしまうからだ。

一分・二分・三分——五分——洩れたグリセリン液が、銀色の糸のように一筋白い半球をすべりおちる。すかさず五〇CCを注入、こんどはカテールを抜き去り、しっかりオムツをあてておさえる。はげしく迫る便意、おもわず叫び声をあげ、身をかめてこらえる。少し洩れたろうか、オムツを圧える掌にはげしいけいれんがつつたわり、じつとりと湿ってくる。

十分・十五分——嵐はすこしおさまり、左手を伸して用意のおしぼりで汗を拭う。

二十分——嵐はまったく静ずかになり、ときおり腸内を吹きぬけるガス音が遠雷のようだ。洩れた液の補充に三〇CCを注入する。

三十分・四十分——突然狂ったように便意が殺到してきた。あわててオムツをおさえ、便器をしっかりと当てる。必死になって圧える掌の下で、便意は猛獣のように荒れくるって

膝はがくがくふるえ、もう耐えることは不可能なのだ。

あきらめて手をはなし、鏡の中をみつめる。はげしくあえぎ、間歇的に奔流する溶岩群——ときおり火山の鳴動を加えてそれは五分間も続いたろうか。私はぐったりと疲れてほんとうの病人のように汚れたお尻を曝したまま眼を閉じて突っ伏していた。

一時間後、汚れたお尻を濡れたタオルできれいにふきとると、私は、最後の仕上げに再び三〇CCを注入し、オムツとオムツカバーをしっかりと着けると、満ちたりた気持で今日のプレイの後片付けにたちあがるのだった。

——了——

〔お断り〕○本誌は雑誌の発行を目的としておりますので、文通や交際の斡旋或は同好者の紹介、文書の仲介転送などといったことは、原則として一切行っておりません。文通交歓等はすべて読者通信の誌上にてお願い致します。近時金銭の詐取とか悪戯行為などにより迷惑を蒙る方もあるように仄聞いたしますので、何卒御留意下さるよう御願ひ申し上げます。

(編集部)

懸賞【告白、手記、体験】入選作品

パ ト ス の 宴

(うたげ)

宇 津 木 洋 一

〔一〕

『三光石油販売株式会社』は資本金一千万円で、東京都内に三個所、横浜市内に二個所のガソリン・スタンドを経営していて、本社はその横浜に在るガソリン・スタンドの一つである、中区尾上町にある。シエルの特約店であった。

——私が意外に思った事は、三光石油の社長が三十四五才とおぼしき女性であったというばかりではない。私は以前に、たしかに彼女と会っていたのである。いや、会っていたといえは語弊があろう。多分、相手は私を知

らないだろうけれども、私は彼女を見知っていた。私は思い出せないままに、二階のオフィスの奥に、ガラス張りで分離している社長室で、およそ社長らしからぬ、そそたる風情の和服の美人といってもいい過ぎでない彼女——

——勝見時江——と向かい合っていた。

私は求職者であり、彼女は雇用者であったが、そんな感じはいささかもしない。

——ちょっと池内淳子に似ているな——

——そうか、池内淳子に似ているから、前に会ったような(TVや映画で)気がしたのかな——

などと、この求職者は、極めてのん気な事を考えていた。

相手を女性と見て、気を楽に持つのは卑怯である。私はつとめて、真面目な気持ちになろうとした。

「履歴書で拝見しますと——雑誌の編集者をなさっていたんですね。——文潮堂といえはたしか、読切何とかを出していたでしょう」

「はい。読切Kです」

「その読切Kの編集をなさっていた？」

「いいえ、私は読切の方でなく——」

いいかけて、私はとどまった。と、いうの

は、私が担当していた雑誌は、いわゆる低俗雑誌で、一種のコンプレックスのはけ口として、又、昇華——人をなぐりたい欲望、女の裸体を眺めたい欲望、人を八つ切りにしたい欲望、人をいじめたい欲望等はいずれも社会生活において禁止されなければならない欲望である。しかし、人をなぐりたいから拳斗家になり、女を裸にしたいから画家やカメラマンや映画監督等になり、人を八つ切りにしたいから外科医になり、人をいじめたいから先生や刑事になり、ウソをつきたいから小説家になり、それぞれの欲望を一応満足させながら、しかもこれを社会的に有意義なものとする事は出来る。このように、低位の欲求を善用して高位な目的を実現せしめる事を、昇華といっている。——という点で、そういう雑誌の必要性もたしかにあるのだから、かまわないようなものの、やはり求職者の立場としては素直に口をついて出ない

のである。

「週刊の方です」と、私はいった。

文潮堂からは、読切K、週刊S、それに私が担当していた内外Aが出版されていた。私は、その内外Aの編集長のような立場であった。正式には次長であったが、文潮堂には編集長という職名は三誌を綜合して一人しかいなかったもので、それぞれの次長が各誌の事実上の編集長であった。

経営が思わしくなく、倒産したのは今年の夏である。しかし、十二月には資本を、中京財界人の某氏から導入して再建され、装いを新にして現在皆さんの眼にもふれているはずであるが、私はこれには加わらなかった。

「倒産したのですね」

「はあ。しかし——」

私は前後の事情をくわしく説明しようとしたが面倒なのでやめにした。そして、たしかに、文潮堂に再建されたの

だが、私が情熱をそそぎ込んでやまなかった内外Aは廃刊されたのである。私は情熱のより所を失ったのである、その意味で、私は倒産した。私の心は倒産したのである。

「文潮堂からは、たしか、

——」

と、この時、社長勝見時江は、ちょっと次の言葉をいおうかいうまいか、決断しかねるような微妙な間を彼女の瞳の中において、私を見た。その瞳の色が、ぐ



つと強く、あやしく、私に迫ったと感じられた時、彼女は結局いった。

「パトスとかいうマニア誌を出版しておりますね」

「——？」

はアッと思った。あやうく声が出そうになった。知っている。彼女は知っている。

何故？——

〔二〕

私の驚きは、あの人たちでなければ知っていない事を、この人は知っている、という事だった。

私が次長に昇格して、内外Aの編集一切に責任を持たされるようになったのは、昭和三十六年の十月からである。と、いうのは、二月月早い出版界の常識では次の新年号からという事になる。その頃、内外Aの売れ行きはあまりかんばしいものではなかった。いや、その頃から、といった方がいい。

ただ、若いきれいな女の子のヌードでグラビアをかざり、せん情的な小説や実話や、らしいさし絵で、内容をうめる編集は、もうちっともシヨッキングでもエキサイティングでもなくなってしまうていた。社会はもっと刺激的な事を求めている。もっと刺激的な事を。

マニア誌『パトス』の出版が話題にのぼったのは、新年号の売れ行きも相不変かんばしくなく、部数を二万部にへらすよう社長命令が出た当座の、二月号総合編集会議の席上であった。いい出した者が誰であったかは、はっきりしないが、

「奇譚クラブや裏窓や風俗奇譚のような行き方も面白いんじゃないのかな」

と、編集長が発言した事からはじまったのである。私たちは、この三誌を称して『三大特誌』といっている。特別の雑誌、特異の雑誌といった意味で、いわば編集者仲間の仁義である。しばらくは、三誌に話題の花が咲いた。奇譚クラブでいえば、「箕田京二」「辻村隆」「塚本鉄三」「近藤一」諸氏、モデルの「絹川文代」「大塚啓子」「梨花悠紀子」諸嬢に話題が集中した。と、いう事は、当然の事であるが、私たちはこれ等の雑誌をよく読んでいた。そして、編集上の苦労も察している。被虐、加虐の欲望は、人間誰にしもある。これ等の低位の禁じられた欲望を、いかに社会生活の上に導入し高めて行くか、これ等の雑誌の理想とする所はそれである。いいかげんなエログロ雑誌より、よほど真面目である。人間にはロゴス（割り切れる部分）な

面と、パトスな面（割り切れない部分）がある。これ等の雑誌はパトスな面にのみ窓を開いているという点で、勇敢であり、危険であり、そして傲慢である。私はそれを真面目という。

「エロの極まる所は、結局はサドであり、マゾであるのかな」

「愛といってもらいたいな。要するに、男が女を愛する極限はサドだよ、愛される極限はマゾだよ。——殺したい、殺されたい。愛とはそういうきびしいもんだ」

「おれたち夫婦なんか、結局はちっとも愛し合っちゃあいがないんだな。互いにごま化し合って十年になる。やれやれ」

「それが常識さ。つまり、常識社会には、愛という言葉はあっても、実体はねえんだよな」

「言葉で思い出した。東洋のマゾというのがあるだろう」

「いつてくれるなよ。東洋の魔女だろう」
「東洋のマゾさ、あれをいい出したやつは、バレーボール協会の反大松派の某氏だというけど、きっとマゾを想定してマ女といったに違いないんだな」

私たちは、そんな事をいい合いながら、次

第にマニア誌「パトス」出版の構想を高めて行ったものと思われる。

「パトス」はサドマゾのマニアのみを対象とした完全な秘密出版であった。完全なといった意味は、私たちの雑誌はもとより、姉妹誌にも他の類似誌にも、その為の広告は一さいせず、特殊なルートでマニアを求め、確実にその数を増加させて行ったからである。

このルートには、東京の二つのヤクザ団体が介入していたようだが、私には一さいわからない。ただ、私が知っている事といえば、「パトス」は昭和三十七年一月、八月、三十八年二月の三回、発刊され、一部五千円で各二万近く出たのだが、その三回をもって私たちの手から、他の団体に取り上げられて行ったという事実である。他の団体とは、多分インテリヤクザが多いといわれるM会である。

この秘密出版にまつわるいまわしい数々の出来事については、いずれ私も稿を改めたいと思うのだが、今は適当でない。

ところで、私は「パトス」の編集責任のみを三回にわたって負たんしたのであるが——編集のみと特にことわった意味は前述の通りである——昭和三十七年八月発刊のものに、「狂い泣く人妻?」「もだえる中年女」とい

った平凡な題を私がつけて、そのものずばりだった数枚のフォトがある。

どういふものであったかは、奇譚クラブの読者は「関谷富美子夫人」のグラビアを想いわずらっていただければ適當かと思う。くわしい言葉の説明以上に「関谷夫人」の悦虐の表情こそが、それに似つかわしい。

もしも、「関谷夫人」を御存知ない読者には、PRをするわけではないけれども、その分譲フォトをおすすめたいくらいである。私には、そのフォトが何故だかひどく印象に残っていた。秘密出版である限り、もちろんあからさまである。

その写真の女と現実のその人とを一致させるのに、私はさほど手間どらなかった。

「御存知なのね」と、女社長、勝見時江がいった。

「知っています」と、私はいった。

「何故なら、あの本は、私が編集していたんです」

どうにでもなれといった感じ、それもたしかにあった。しかし、それ以上に、あなたのいまわしい秘密を私は知っている、といった暗いじめな優越にも似た感情もあった。

勝見時江はおどろきはしない。「パトス」

の事を自からの口からいい出した以上は——覚悟は出来ているわ、といっているみたいだった。

「私の事を御存知ね。——そういう女なのよ私は——絶望的な女なのよ。そして、事業の方も絶望的——」

「はあ——?」

私は、求職者として、その方にこそ驚かねばならなかった。

「借金で首がまわらないの、本当の事をいうとね。新聞広告がハタタリよ」

「じゃあ、私は無駄足でしたね」

「でもないでしょう」

「ハア?」

「ぐうぜん」と、時江はいった。

「私のヒミツを知っている人が職を求めているらした。だから私はこの求めに応ずるパンスビリティがあるわけだわね」

と、意味を含めるのだ。

「すぐ倒れてしまいそうな会社に、私はつめは出来ませんよ」と、私も応ずる。

「すぐには倒れないわ」

「どれくらいもちます」

「ためして御らんになる? 御経験は?」

私はうなずいた。

〔三〕

人生にはネセサリティ（必然性）はない、というのが私の哲学である。総てが、偶然の所産である。第一、私という人間それ自体、父たる大阪の男と、母たる横浜の女が、偶然奉天でめぐり合った結果の存在なのである。私はたまたまこの世に存在したにすぎない。たまたま、今日という日に存在したにすぎない。昨日もそうであり、又、今日もそうであったから、明日も必ず今日の如くに存在出来る保証は何もない。

だから私には、今日というたまたまの日はたまたまなくいとおしく貴重なのである。

たまたま、その人と会ったら、その機会を私は決して無駄にはしない。

その夜、女社長勝見時江、いやその夜の私の女時江は、私の激しい、ひつような、加虐の欲望の爆発に、たえ切れず、遂に泣きながら、明日を絶叫した。

「許して、もう、今夜はこれで——。あとは明日にして——」

が哀願も私の揮う鞭にかき消される。私は叫んだ。

「おれには、明日はないんだよ。そして、お前にもない」

「ヒー!!」と、時江が叫ぶ。

「もっと尻をあげろ!!。尻をあげるんだよ。あの写真では……打たせたお前じゃあないか」

その時の私はといえば、海水パンツ一枚——いや、もはやそれもかなぐり捨てて、四つん這いにさせ尻を高々とあげさせた時江の、その尻をなぜながら皮ムチで打ち、打ってはなぜして、明日という日はもう永遠にないのだと思っていた。

もし、明日があるとすれば、明日の私はこの時の私ではなく、明日の時江はこの時の時江ではない。この道の極まりはセツナである。加虐被虐の奥にひそむ哲学はセツナ主義である。セクショナリズムの行動こそがサドでありマゾである。

プレーは続くのだ。二時間、三時間、……しかし、遊戯めいて感じられるプレーという言葉は適当ではない。私は挑戦していた。何かに向かって——。

それが空しいものであるとわかっていながらも、そのむなししいものに向かつて、私は挑戦していた。

思えば、あお向け緊縛の馬乗り、エビしぱり、吊し打ち、胴絞め、尻乗りと、私は彼女に極限の責めを強いたのだった。欲求の充足

感に、私も、そして恐らく彼女も、たしかに二人共生きている事を痛烈に認識した。そして、やがて——もはや、われわれには言葉は必要でなくなってしまうていた。

彼女は次第に無表情になり、無表情の中に身を置く自分をはるけく眺め、とう然たる心境のようであった。マゾの極致、それはどうにでもなれ、どうでもしてちょうだい、といった完全の投げの心境に他ならない。その投げやりの気持が核となり、その核を肉体の責めによって刺激される陶醉に他ならない。

もちろん、どうにでもなれという気持は男にも旺盛である。しかし、男はそれを破壊する欲望に充たさせ、女はそれを破壊されたい気持に転嫁する。

その両性の感情の燃焼こそが愛である。従って、愛は絶望であり、死である。この世に存在する限り、愛は遂にないのである。

「愛して!」と、女がいう。

「死のう!」と、私は答えるだろう。

「殺して」と、女がいう。なのに、どうして私は

「生きよう」と、いつてしまうのだろう。

私は何度かそういう激しい経験をしてきている。だから私はまだ独身である。

「もう、やめて！。本当にやめて！」

と、時江がいった。

正直に告白すれば、私には相手に誘われる以外、そういう機会を持つ資格はない。

絶頂、そして、空虚への転落。

私たちの時間はおわった。

私は又、もとの紳士になり、彼女も又、もとの淑女にたち返った。つまり、いつもの人間に——。

「私とあなたは、たまたま会って、こういう結果になったけれども……」

と、私は二の句を切って、煙草に火をつけた。別離の、適当な言葉を考えていたのである。が、それより、早く、

「そのたまたまが、明日も来ますかしら」

と、時江がいった。

「来ないでしょうね、おそろく——」

「じゃあ、これでエンド・マークってわけ」

「私は、こういう事を同じ相手と二度とはいささない主義でしてね」

「だから激しいのね。——こんな乱暴されたの初めて——」

私と彼女は、そのホテルを出た。すでに十一時を廻っていた。そして、やがて日之出町駅の見える暗い町角（悪名高き麻薬の町）で

彼女の方から、

「じゃあ、サヨナラ」と、いった。

「サヨナラ」と、私もいった。

（さようなら）——成る程、これ程、適当な別れの日本語はありはしない。実感だ。

私は口笛を吹きながら、残り少ない今日に向かつて歩いて行った。

「ボンソワール、ムッシュ」

突然、私は呼び止められた。相手は、もちろん、日本人だ。そして女だ、そして美人だから、カモだ。

「ボンソワール、マドモワゼル、——ウーアレ、ザー？」（今晚は、お嬢さん。どちらへ？）

？

「プロムナードウ」（散歩よ）

「出来るんだね。フランス語が——」

「少しはね。——つき合う？」

私は、「ウイ」と、いって、彼女の腰を抱いた。この量感。これはたしかに、私のものだ。

「高いわよ」

「だ、ろうね。ずばり行こう。——五千円でどう？」

「ウイ。——でも、ことわっとくけど、私はそういう女じゃあないのよ」

「わかってるよ」

「どうわかってるの——？」

「ヤクを売っているんだらう。フランス語は合図だった——？」

私は決してでたらめをいっているわけではなかった。以前、そんな話をちょっと耳にした事があるのである。

「アラアラ。そんな重大な事を知っているあんたは、きっと刑事ね」

女は笑った。違うらしい。しかし、違っても、違わなくても、私の明日はその女と共にはじまっていた。

「行こう」と、私はいった。

「どこへ？」

私は黙っていた。私にどこへ行くあてなどありはしない。何時でも、私には、どこへ行くあてなど、ありはしないのである。

私とその女と心中をはかり、未遂におわたのは、その翌日の事である。

（おわり）

× × ×

贗作・悩ましのサデイズム

△森山美歌夫人に関する小品▽

芳 野 眉 美

A 土曜日午後一時

美歌夫人の寝室は、中央にゴージャスなダブルベッドが置かれてあった。

真赤なレースのカーテンが、美歌夫人の妖しい遊戯を象徴しているかのようにベッドをおおっていた。

「そんなにめずらしいの、私の部屋が」

美歌夫人が部屋を見廻している古城真に云った。

「だって、ここ寝室でしょう」

「そうよ」

「御主人に悪いな」

「馬鹿ね」

白鳳天平のムードをテーマにした「その優美さ、豊麗さの流れ——飛鳥」と名づけられたヘアースタイルの美歌夫人は、静かな微笑を浮かべて真を見つめていた。

「不思議そうな顔をして、何を見ているの」

「あのカーテンレール、鉄の棒ですね」

と真が云った。

「そうよ」

「カーテン掛けにしては太すぎませんか」

「そうすぎるわね」

カーテンレールも室内装飾の一部には違いない。

「気になる」

「——」

「どうしてもだか、教えてあげましょうか」

「ええ」

「あとで」

「あとで？」

「そのうち、いやでもわかるわよ」

レースのカーテンを開けて、美歌夫人はベッドに腰をかけた。

「いつまでも立っていないで、お坐りになっ

たら」

寝室は和室に真赤な絨氈を敷きつめてあったが、椅子はおいてなかった。絨氈に坐っているものかどうか、真は迷った。

「床にお坐りなさい」

と美歌夫人が云った。

「犬は床にうずくまっているものよ」

「――」

「げんな顔をして、どうしたの」

「ぼくが犬ですか」

「怒ったの」

「いや」

「怒ってはだめ」

床の絨氈に真は坐った。ベッドの美歌夫人を見上げた。

「犬は怒らないわ」

美歌夫人が不意に真の鼻の頭をこづいた。

「かわいている」

ゆっくり云って、くすつと笑った。

「怒っている顔って、可愛いわね」

「怒ってなんぞいませんよ」

「いいのよ、無理しなくても」

「かなわないな」

真は苦笑いした。すっかり美歌夫人のペースに巻き込まれているじゃないか。

「寝室に入れるのは、わたくしが飼っている犬だけよ」

「犬を飼っているんですか」

「あなたで三匹目」

「三匹目」

「わたくしの淫らな遊戯に必要なの」

淫ら、と一語々々ゆっくり云って笑った。

天女のような微笑だった。

吸われるのを待つ果実のような赤い唇、肌を舐めるようなハスキーな声が真をいたく魅惑した。

「寝室に入ると、わたくしは残虐なサディストになる」

「――」

「寝室はわたくしの拷問の部屋」

美歌夫人は古城真に裸になるように、こともなげに云った。

「裸に、ですか」

真は狼狽した。

「犬は服を着てないわ」

「でも」

古城真は美歌夫人と初対面だった。美歌夫人に指定された喫茶店で会ってから、一時間とたっていないのだ。予期はしていたものの真は気持の整理がつかなかった。

「服を脱がなければいけませんか」

「いいこと、月曜の朝まで、あなたはわたくしの雄犬なのよ」

「――」

「月曜の朝までは、わたくしのいいなりになるお約束でしたわね」

「それはそうですけど」

「それならば、服も下着も何もかもお脱ぎなさいな」

真はうつむいた。

「それとも、このまま何もしないでお帰りになる」

「サポーターだけは、いいでしょう」と真が小声で云った。

「そうね」

美歌夫人はちよつと首をかしげた。

「サポーターもお脱ぎなさい」

「――」

「箆笥の抽出しにわたくしのメンスバンドがあるわ。それになさい」

「メンスバンド」

「さ、早く、わたくしは気が短いのよ」

箆笥の抽出を開けた真は、その中に犬の首輪や、革の手枷足枷、鎖、ロープ、滑車、数本の乗馬用の革鞭、竹の鞭などを発見した。

「驚いた？」

美歌夫人の涼しい眼が笑っていた。

「これから、いろいろな面白いお遊戯をしましょうね」

楽しそうな声で云った。

「時間はあまるほどあるし」

古城真は美しく成熟した豊潤な美歌夫人の熱気に圧倒されて、おずおず背広を脱ぎ始めた。観念はしたものの、真の動作は、なんとなくぎこちない。

「わたくしに、素っ裸で縛られるなんて最高じゃない」

真の指が硬直したように動かなくなった。なんともいえない羞恥心が全身をおそったのだ。

美歌夫人がベッドから立ち上った。もたついてゐる真に近寄ると無造作に脱がせにかかった。

「だめねえ」

全裸の真を美歌夫人は、ちらっと見て眼を伏せた。ほんのりと美歌夫人の顔に赤味がさした。

裸にされた真はぶすつとして突っ立っていた。苦虫を噛みつぶしたような顔というのはこういう顔をいうのだろう。

美歌夫人が筆筒の抽出からメンスバンドを取り出した。

「あら、まだ、お洗濯をしていなかったかしら」

真を振り返って云った。

「昨日終ったばかりだから、わたくしの身体はいつもと違うのよ」

「――」

「ちよっとしたことで、何をしでかすかわからなくてよ」

美歌夫人のしなやかな手で、サポーター代りに使用したばかりのメンスバンドを穿かせられると、激しい屈辱感がこみあげて、真の両足はこきざみにふるえ始めた。

美歌夫人に飼育されるという真が求めた感情とは反対の結果が表面に現れたとしても、それは仕方のないことだろう。そう簡単にスムースにいくものではなかった。

「恥知らずの恰好をさせられ、奴隷よりももっと酷いあらゆる恥しめを受けて、苦悶にのたうち廻るのを見るのがとても愉快ですわ」という美歌夫人の手紙を真は思い出した。

美歌夫人は真を奴隷としてではなく、犬としてあっかっている。その美歌夫人の責めがこれから始まるのだ。

「ふるえているのね」

と美歌夫人が云った。

「恥かしいの」

くっくと、のどの奥で笑った。

「両手を組んでうしろに廻しなさい」

美歌夫人は荷造り用のロープを取ると、背中に廻した真の両手首を慣れた手つきで縛り上げた。

「そう、おとなしくしているのよ」

更に足首をそろえて縛ると、真を乱暴に床に転がした。

「初歩から飼育してあげるわね」

美歌夫人は真の頭を足でこづいた。足袋のまま真の背中を踏みつけた。胸が圧迫されて息苦しい。

「意外におとなしいのね」

美歌夫人は壁に手をささえて、背中をゆっくりと歩き、真の頭に両足で立った。そのまゝ、反動をつけて頭を踏んづける。

「重いでしょう」

真は呻いた。鼻が床に押しつけられてつぶれそうだった。おさえつけられた歯で口の中を切ったらしく、生暖い血が口中にひろがった。

「足で踏むのって、とても気持ちいいの」

厚い絨氈に鼻口をふさがれて息苦しく、ころうじて口を開けたときに、口中の血が外に染み出た。

美歌夫人が真の顔を抱いた。ハンカチでやさしく口のまわりに垂れた血をぬぐった。

「痛かった？」

「大丈夫です」

美歌夫人の膝のぬくもりが、真に羞恥と屈辱を忘れさせた。不思議な甘美な陶醉がそ

こにあった。美歌夫人に飼育される感情に、ためらいもなくついていけそうだと真は思った。

「ごめんなさいね」

「いいんです」

「わたくし、どうかしているわ」

「もっと責めて下さい」

美歌夫人のふくよかな膝に顔を埋めながら真は云った。幸福だった。



スプレーされた香水がミックスした馥郁した美歌夫人の体臭に真は酔い痴れた。

「いじめていい」

「血がなんです」

「馬鹿ね。わたくし、血をだしたり傷つけたりするのはいや」

「好きなようにして下さい」

「やさしくいじめてあげるわね」

真が顔をあげたとき、美歌夫人の顔がおおいかぶさぶさってきた。燃えるような熱い唇だった。

真は美歌夫人に抱きしめられて呻いた。異常に強い力だった。

真は自由を奪われた両手をもどかしく、うらめしかった。力一杯両手で美歌夫人を抱きしめたいと思った。しかし、それは許せないことだった。

口中の血はすぐ止まった。

B 土曜日午後二時

床の真赤な絨氈に手足を縛られて横たわる真の背中を、美歌夫人が筆筒の抽出から竹の鞭を取り出して目茶々に打ちすえたのは、口の血を見てあわてて真を抱いてしまった後悔が、そうさせたのかもしれない。

また、やさしい感情に負けて唇を許してしまったサディスチンの誇りを傷つけられた、なんともいいようのない怒りだったのかもしれない。

美歌夫人の振り下ろす竹の鞭は、真の裸の背中を苦痛で舐めまわした。打たれる度に、真の全身は飛び上り、跳ねかえった。無残なはれが真の背中に盛り上った。

真は歯を喰いしばって堪えた。悲鳴は絶対にあげられないと真は自分に云いきかせていた。美歌夫人の責めはまだ始まったばかりなのだ。おおげさな泣声をたてて、美歌夫人に嘲笑されたくはなかった。

しかし、かすかな呻き声が真の口から断続的に洩れた。

竹の鞭は容赦なく真の背中を襲撃した。美歌夫人は無言だった。

はれている部分に打ち下ろされても、不思議なことに、それほど痛さを感じなくなっていた。強烈な刺激が真ののどを、からからにしていた。

美歌夫人が竹の鞭を投げ出した。

荒い息を吐いてベッドにくずれ落ちた。しばらくは立たなかった。

やがてベッドから身を起した美歌夫人は、

乱れた着物の裾を直すと、室内の電気冷蔵庫からビールを取り出し、一息に飲み干した。額にべっとりと汗がにじみ出ている。

「男を責めるのって、とても疲れるものなのよ」

美歌夫人は真を見下しながら、やさしく云った。

「悲鳴をあげなかったわね」

「ここから、追い出されたくありませんからね」

「えらいわ」

「帰りなさいと云われるほうが、もっとくい」

「フフ」

美歌夫人の口から一条の水流が真の顔に注がれた。美歌夫人が口に含んだビールは、真の乾ききったのどを潤おした。

そのとき、一滴の唾液が尾を引いて真の口に垂れた。

「立ってごらん」

美歌夫人が真に云った。

真は身体を曲げて立ち上ろうとした。が、そう簡単にいくものではなかった。やっと立ちかけたとき、美歌夫人が、真の顔を蹴飛ばした。

真の身体が、勢よく反転して仰向けになった。床に背中傷跡のが触れたとき、真はおもわず呻いた。

「もっとはずかしめてさしあげましょうか」

美歌夫人は、筆筭の抽出からナイフを取り出すと、

「いいこと」

真に穿かせたメンスバンドを乱暴に切り取った。

瞬間、真は眼をつぶった。

「これからすることは、声をたてるなっというたって無理なのよ」

真に背を向けると、美歌夫人は和服用の小さなパンティを脱いだ。

官能的なチュールにソフトなフリルをトリミングした薄紫の透明なパンティだった。

美歌夫人は真の鼻の先に、その美しいものをひらひらさせた。

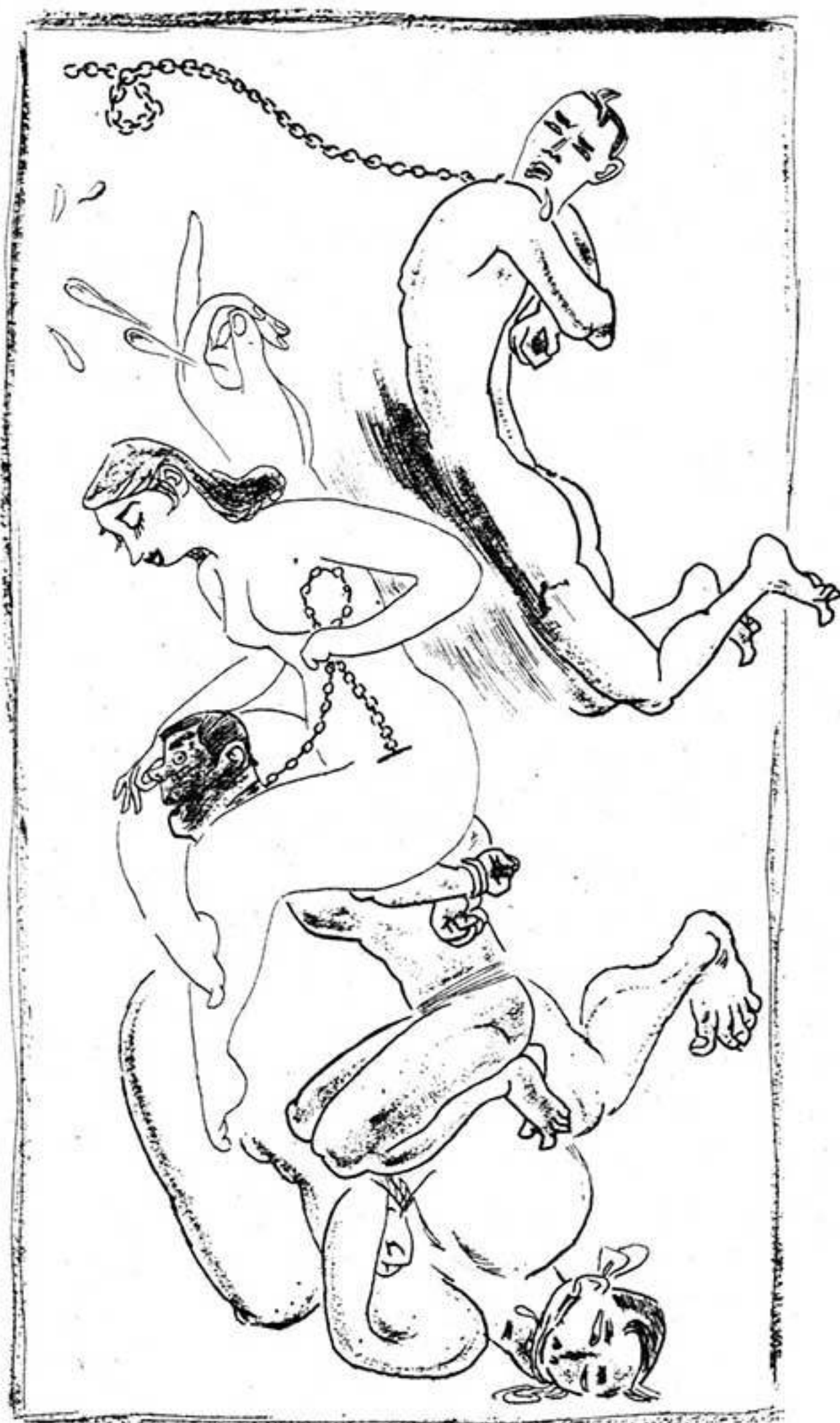
「あなたのお望みの通り、汚して差し上げました」

薄紫のパンティを丸めると、

「これを口に喰えたいのでしょう」

真の鼻をつまんで口に押し込んだ。その上からしごきで猿ぐっわをかませた。

小さな透明なパンティは、美歌夫人の汗で



しっとり濡れていた。そして、脱いだばかりの天女の肌のようなぬくみが真を狂喜させた。

真は眼を閉じて、美歌夫人の秘密の香を味わった。息を吸うたびに、また、吐くたびに美歌夫人の馥郁たる香は、真の体内深く浸入した。

「いかが、わたくしの匂い」

真は叫ぼうとした。が、言葉は真の耳の内

で大きく反響するだけだった。

「あとで、直接に味わっていただきますからね」

美歌夫人の静かな微笑は、妖しい香気を吐く毒の花の咲き乱れる快楽の花園に真を誘い込んでいった。

柔軟な革・鞭が、うなりをたてて真の腰にすいつくようにからまった。美歌夫人の飼育している犬たちの脂を吸った乗馬用の鞭であ

る。

竹の鞭とは比べものにはならない痛さに、真の全身は激しく伸縮した。忽ち、真の肌に一条の真赤な鞭のあとが残った。

美歌夫人の攻撃は、益々昂じて激しくなった。

弾力のある乗馬用の細い鞭は、連続して真の内股に、脛に、足の裏におそいかかった。気絶しないのが不思議だった。

あまりの責め苦に、失禁しなかったのは、真のぶぶとい精神力が美歌夫人の残酷な遊戯に勝っていたのかもしれない。気絶するよりも、真は失禁するのをおそれていた。

美歌夫人の濡れるような瞳が、異様に輝いた。

あっさりと革の鞭を投げ捨てると、美歌夫人の白魚のような指先が、真が最もおそれている部分に近づいた。

真は身をのけぞらして逃げようとした。

「逃げようたって、逃げられないわよ」興奮をおしこらした冷たい美歌夫人の声がゆがんだ口から吐き出された。

美歌夫人は真の放心したような表情を見つめながら、手の指が敏捷に働くのを止めようとしなかった。

全裸にされ、拘束され、鞭打たれたなど、想像に絶した美歌夫人の凌辱が真を襲ったのだ。

「だめだ」

声にならない声で真はつぶやいた。

「だめだ」

「古城さん」

と美歌夫人が、はじめて真の姓を呼んだ。

「古城さん、童貞だったわね」

真ははっとして美歌夫人を見た。

「古城さんの童貞、わたくしに下さるわね」

美歌夫人の着物の裾がひるがえった。

C 土曜日午後五時

シャワールームから出て来た美歌夫人は、裸のままベッドに横たわった。考えてもいなかった情痴の余韻が長く尾を引いて寝室にただよっていた。残虐のけだるさといってもよかった。

脂の乗りきった豊潤な美歌夫人の肌は、眩しいほど白く美しかった。真はベッドの美歌夫人を盗み見、眼をしばいた。

一瞬の嵐が過ぎ去って、猿ぐつわはずしにくれたけれど、真はまだ縛られたままだった。生気をぬかれたように、ぐったりと床の

絨氈の上にのびていた。

どのくらい時間が経っただろう。

ひそやかなやさしい衣づれの音が近づいて美歌夫人の足が真の頭をこづいた。

ロココ朝の貴婦人かと思まごうばかりの、薄地を重ねレースとフリルをたっぷりあしらったゴージャスな黒いネグリジェを素肌の上にまとった美歌夫人が真を見下していた。

「疲れない？」

美歌夫人が云った。真は首を横に振った。

「縄を解いてあげましょうか」

「このままでいい」

「フフ」

いきなり美歌夫人の足の指が乱暴に真の口をこじあげた。三本の指が真の口に浸入し、口中をかきまわした。

「やっと夜になったわね」

足の指をほうばりながら、真は美歌夫人を見上げていた。

「これから、もっともっと凄い遊びも、しましょうね」

足の爪は形よく整えられ、薄紫に美しくペデキュアされていた。

その時、電話があった。

美歌夫人は縄を解くと、

「シャワーを浴びていらっしやい」と真に云った。

「十分間、休憩をあげます」

手足が自由になった真は、美歌夫人をうしろから抱きしめたい衝動におそわれた。いけない、と思った。激しい慾望をかううじてこらえた。

勢よくシャワールームに飛び込むと、狂人のように水を浴びた。

「乱暴ね」

ドアを開けて美歌夫人が云った。

「主人からの電話よ」

「御主人」

「今夜出張から帰って来るかもしれないわ」

真はシャワーを止めた。

「おいとましましょうか」

「馬鹿ね」

「でも」

「大丈夫、仕事の都合で、あと一週間帰られないんですって」

「本当ですか？」

「うれしい？」

「そりゃ」

「フフ」

「しかし、本当かな」

「あら、わたくしがうそを云っていると思うの」

「いや、御主人が」

「あ、そうね」

美歌夫人がちょっと首をかしげた。

「そうだわ、うそかもしれない」

その眼が笑っていた。

「帰ります」

と真が云った。

「帰りたいの」

「帰りたくありませんよ」

「フフ、怒った顔って、本当に可愛いわね」

「からかわないで下さい」

「それぞれ、その顔」

「帰ります」

「帰れるものなら、お帰りなさい」

真が勢よくシャワーをひねった。

「冷蔵庫から好きなものをだして、勝手に、

お食事なさい」

美歌夫人が涼しい声で云った。

十分の休憩が一時間を経過していた。美歌夫人の化粧直しが手間取ったためだった。やはり御主人が帰宅するのだろうかと思はれていた。美歌夫人は真はいぶかった。

シャワールームから出た真が、身にまとう

ものを許されたのは、スポーツ用のサポーターだけだった。

真の体力はすでに回復していた。竹の鞭のあとも、革の鞭のあとも、うすく四糸五糸と残っているだけで、かすかな赤味が逞ましい筋肉質の肉体を染めていた。

三面鏡の前の美歌夫人が、

「首輪を取っておいで」

と真に云った。

「首輪、ですか？」

「そうよ、犬の首輪。箆筒の中にあっただしよう」

真が抽出から犬の首輪を取り出すと、

「それを首にはめるのよ」

と真に命じた。

「首にはめる」

「わたくしの飼犬なんでしょう。登録しておかないと、犬殺しに殺されると困るわ」

「――」

「なんていう顔をしている」

美歌夫人がやさしく云った。

「かしてごらんなさい。わたくしがはめてあげるから」

美歌夫人は真につけた犬の首輪に鎖をつなぐと、

「さあ、四つ這いにおなり」

鎖の端をにぎって真の首を引っ張った。真は膝を折った。

「SとMという二人の男がわたくしに奉仕していますの。男なんて云ったら勿体ないわ。わたくしのおもちゃに過ぎない二匹の雄犬よ。わたくしの情痴の部屋に居る間は、二匹共四つん這いで二本足で歩くななんて許さないの。二匹の雄犬を思いの儘にいじめるのってとても愉快なものよ」

という美歌夫人の手紙を真は思い出した。

「三匹目」

美歌夫人が真の背中に馬乗りになった。

(一部終)

(追記)

昭和二十七年十二月号

「ロマンチックなサディズム」

昭和二十八年二月号

「悩ましのサディズム」

昭和二十八年九月号

「続悩ましのサディズム」

を参考にしました。

新連載サディズム小説

心 傷 た む 遍 歴

西 条 操

第三章 そのかみのこと (三)

「転落への道」

シャルルには近しい親類はなかったとは云え、それでも遠縁に当る者はかなり居た。遺産関係の処理、そして身の回りと心の整理に一カ月余り、ミシュリーヌは晩秋の一日、コモ湖を向う岸へ渡った。ジェラル・トリフォーは広い邸に唯一人住んで居た。邸も調度も、富裕な未亡人から手練手管で巻き上げたものだ。自ら訪ねて来たミシュリーヌを見て

遊蕩児ジェラルは、忽ちその本性を發揮し初めた。彼にとってはよきカモであった。

「淋しいんだ。君とのこと、一日も忘れたことはないよ。だからこそ、こうして独りで暮らしても居るんだ。君が向う岸に住んでることとはとうに知ってた。けれど、君の倖わせのために我慢してたんだ。しかし、もう……」

そして、其の夜、ミシュリーヌとジェラルは六年の歳月を隔てて再び結ばれた。モリスの云ったことは本当だった。初めての男だったジェラルの愛撫に、ミシュリーヌの若い体は激しく燃え上って行った。

彼女には、ジェラルの根性は見抜けなかった。いや、眼を掩うて見ない様にしたと云う方がいいかも知れない。彼の財政は危殆に瀕して居た。年が明けると、彼女はシャルルの墓前に泣いて許しを乞い、由緒ある館や調度を処分して、得た金をすべてジェラルに与えた。預金や証券の類は夙に処分して居た。

「ね、ジェラル。きっと立ち直って頂戴。立ち直って立派にやると誓って！ 私達にはジュヌビエーブが居るのよ。早く探し出さなくちゃ。」

「分ってるよ。それに付けても、パリに出て一旗上げなくちゃ。ところで、おい。未だ宝石やなんか残ってるだろ？ 凄腕輪もあつたじゃないか。」

「駄目よ。せめてあの位の宝石は、ジュヌビエーブのために取っておかなくちゃ。それにあの腕輪は絶対に手離さないわ。母さんの形見だもの。」

彼女は母の形見と嘘をついたが、本当はシャルルの呉れたものだった。ルイ王朝にも其の名を留めた其の素晴らしい腕輪の一对は、亡きシャルルが苦心の末、手に入れて、ミシュリーヌ二十才の誕生日の贈物として与えてくれたものだ。金額はさておいて、亡き良人の愛の形見として、せめてそれだけはと思えば手放す気には到底なれなかった。

ジュエールも自邸を処分して、其の年の秋二人はパリに出た。彼の立ち直りと愛情を信じて、狭いアパートでの二人きりの生活は、ミシュリーヌにとっては、幸福そのものだった。しかし、それも束の間、ジュエールは一体何をして居るのか、ミシュリーヌは佗しい台所に独り佇んで、淡い後悔と疑惑を打ち消し打ち消し、ぼんやりと時を過ごす日が次第に多くなつて行つた。酒と女、そして泡沫の

如き事業とやらに手を出しては失敗し、尾羽打ち枯らして戻つて来るジュエールだった。二年経つて、彼女は泣き乍ら、宝石類の最後の一つを売り払った。三晩、胸に抱き締めて寝た末、断腸の思いで腕輪も処分した。

「何に使うの？」

「事業をやつて経営者ともなれば、大きな金を動かさなきゃならないんだ。出せ。」

「こんな社長夫人なんか嫌。ぜいたくはしなくていいの、もっと地道に暮してよ。」

平手打ちを喰わせたジュエールは、其の大金を彼女から奪い取り、夢の様なことを大言壮語して出て行つてしまった。

「私、馬鹿だったわ。けれど、どうすればいいの？ いくら昔の物がいいって云つたって今年の冬にはコートだって新調しなくちゃ……」

母の形見の古風なコートを丹念に手入れして納めたミシュリーヌは、伝手を求めてラグランジュ商会に勤める身となった。二十九才の春のことだった。彼女の境遇に同情し、家柄と育ちを信用したラグランジュ氏は、日ならずして彼女を秘書の様に扱って、会計の一部を委せる様になった。

「ミシュリーヌ。今夜、一緒に食事でもしな

いかね？」

「いけませんわ、ラグランジュ様。三日前にもナイトクラブへお供したばかりですのに。」

答えるミシュリーヌは、つつましかだった。

「ラグランジュ様はよしてくれ給え。ジャンと呼んでくれないか。ね、いいだろ。もう、秋だね。いいコートと帽子を見付けてあるんだ。よく似合うと思うよ。」

「かんにんして。だって、リュシェンヌ奥様に申し訳ございませんもの。昨日もお留守中に見えて、いろいろと嫌味をおっしゃったのよ。綺麗な方。いつお逢いしても美しいわ。」

「リュシェンヌか。今夜もおそくなると云つてた。どこへ行くのか知らないけど……」

ラグランジュ氏は淋しげに云い捨てて、ミシュリーヌをいとおしげに見やりつつ、銀髪

のふえた頭を撫でつけた。

「正直云つて、君の方が美しいよ。第一、女らしい……」

「あら、いけませんわ。そんなことおっしゃっちゃ……」

否定し拒みながらも、自分の美しさを、なお今も確かめ得て、ミシュリーヌは心嬉しい女心だった。そして、三度に二度は断わった

贈物やデイトが、三度に二度は受け入れる様になり、やがて全面的に受ける様になって、ほだされた彼女は、そうして遂に一線を越えた。セーヌの上流の閑静なほとり、ホテル『シャトー・ド・セーヌ』の一室、初秋の風が川面を吹く一夜だった。内縁ながらも心に定めた夫ジェラルに冷たく扱われて暮らす淋しさと不満も、静かな愛情に満ちたラグランジュ氏との逢瀬ごとに、しつとりと癒されて行く心地だった。その様なことには敏感なジェラルは、忽ち感付いて牙を剥いた。彼女が委されて居る小切手を不正に振り出せ、と迫るのだった。でないと、二人の関係を世間に、とりわけリュシェンヌ夫人にばらす、と云うのだ。

（お気の毒なジャン。奥様には頭が上がりな
いらしいのね。それに、やはりジェラルに
は済まないことをしてるんだもの、私……）

脅かされずかされたミシュリーヌは、十月の初め遂に、署名は既に入って居る小切手の一枚に金額を記入し、自分が銀行へ行って、震える手で現金に換えた。ジェラルがそうしろと命じたのだ。金額は小さかったが、彼女にとって死ぬ思いだった。一枚が二枚になり、すぐ五枚になって、金額も大きくふく

らんで行った。悪智慧なんかは、少しも回らないミシュリーヌの犯行は、二カ月経たない中にばれてしまった。

「何故、僕にそう云ってくれなかったんだね？」

底おうとするラグランジュ氏の情けも空しく、リュシェンヌ夫人に手なずけられて居た女子社員によって、事情は夫人に筒抜けだった。

十二月の初旬、ミシュリーヌは朝の事務室で逮捕された。ラグランジュ氏や同僚達の前で、刑事はふくよかな手に容赦なく手錠をかけた。崩折れた彼女は、そのままラグランジュ氏の方に跪まずいて赦しを乞うた。自白したも同然だった。

「さ、立つんだ。来い。」

手荒く片腕を掴み上げられたミシュリーヌは、両手に嵌まった鋼鉄の硬さを忽ち思い知らされた。

「い、いたいッ」

「痛けりや、さっさと立って来るんだ。」

コートを羽織られ、その袖に通すことの出来ない手に検査済みのハンドバッグを持たされた。白い眼で見送る女性達に混って唯一人、温かいまなざしを注ぐラグランジュ氏の

視線を感じたミシュリーヌは、ほろりと泣いた。

犯罪容疑者としてパリ警視庁に連行されるや、忽ち受けた辱かしめに、彼女は舌を噛みたいと思ったことだった。デスクの前に手錠のまま立たされ、そばにある椅子に掛けさせてもくれない。噛みつく様な見幕で訊問する刑事の口調は荒々しく横柄だった。

「前科は？ 生れはどこだ？ ほんとに前科はないんだな。調べりやすぐ分るぜ。」

茫然と半ば夢見心地で、簡単な取調べを受け終えた彼女は、やがて定かになって来た眼に耳に映じ聞えるあたりの雰囲気打ちのめされ、ガクガクし初めて来た膝を必死に踏みこたえて刑事に頼んだ。

「あの……掛けてもいいでしょうかしら？」

自分の言葉のみじめさに、彼女の語尾は震えた。

「駄目だ。立ってる。もうじきに、飽き飽きするほど腰掛けさせて貰えるからな。」

打ちうなだれたミシュリーヌは、両手首に冷たく光る手錠を見詰めて絶望を感じた。

「シモール君、どうやら初犯らしいからな。調べて見なくちゃ断言は出来んがね。」

ミシュリーヌは、やって来た婦人警官に引

き渡された。勿論帰して貰える筈もなく、留置されるのだ。

「そうお。割と上品な女じゃないの。何をしたの？ 殺し？」

「なあに、小切手の偽造さ。おい、手を出せ。社長に惚れられたのをいいことにして、亭主みたいな男も一応あると云うのに……」

くわえた煙草に顔をしかめながら、刑事は乱暴な手付きでミシュリーヌの手錠をはずした。

「自称元伯爵夫人だってよ。社長の奥さんと張り合って、うまいことたぶらかしたって訳さ。ばれても未だたらし込めると思ってたんだな、呆れる程に図太いやり口さ。」

ミシュリーヌの胸は、こみ上げる怒りに熱くなり唇がわなないたが、余りの辱かしめに言葉も出なかった。漸く外された手錠の跡を撫でるミシュリーヌの利腕を、シモール婦警が強く握む。婦警は五つも年下か、其の制服を見たミシュリーヌの全身は恐怖と屈辱に震えた。みじめに腕を扼されたまま地下へ降りると、両側に取調室の扉がずらりと並び、コンクリートの壁は灰色に冷たい。

（私、牢に入れられるんだわ。留置場って云

うのかしら。どうして、私あんなことを……）

陰惨さときびしさに打ちひしがれたミシュリーヌは、そう考えて悲しかったが、不思議と涙は出なかった。

「あんた、初めてなの？ 留置場は。」

コックリとうなずくミシュリーヌを横眼で眺めたシモール婦警は、女の涙声が洩れる扉の一つに腕を延ばして隙間を閉じた。突き当りに、鉄格子扉が通路一杯に遮ぎって居た。眺めたミシュリーヌの脚がもつれてよろめく。鉄格子の手前のカウンターでコートとハンドバッグを取り上げられ、シモール婦警が身体検査をした。服の上からだったが、みじめさが胸にこたえる。手首を握まれて指先にインクを塗られ、十本の指紋が黒々と台紙に採られた。何とも云えない悲しくもみじめな心地だった。

「ここへお立ち。まっすぐ前を見るのよ。」

顔写真のシャッターの音を聞いたミシュリーヌは、ややあって忽ち肩をわななかせた。（これでもう、私、罪人としての記録が残ったのだわ。指紋も採られてしまったし……）

そう思うと、情けなさがひしひしと胸に迫って、カウンターに突伏して慟哭したい。しかし、やはり不思議にも涙は出なかった。

初めての者は却って涙を流さないものだ。

「初めてだな。檻は勘弁してやる方が、いいんじゃないかな。お嬢さん。」

カウンターの向うの警官がミシュリーヌをまじまじと眺めて婦警に云った。

「そうね。けど、独房が空いてるかしら。さ、おいで」

潜って入った背後で鉄格子扉が再び閉じて錠が鳴った。耳掩う心地で思わず足を止めるミシュリーヌの腕を、シモール婦警が握み直してぐいと引張る。よろめいて左の方へ行く。と、そっちが婦人留置場だ。殺風景な、しかしやけに明るく照明された小さい室へ連れ込まれたミシュリーヌは、又も身体検査を受けた。肥った年配の婦人警官もやって来て、今度は二人がかりで本格的な搜検だ。

「着てるものを脱いで。」

「な、なんにも持って居ませんわ、もう。先刻、みんなお出ししましたのに。」

ミシュリーヌは胸を押え、思わず喘いで訴えた。

「口答えするんじゃないのッ。脱ぐんだよ。早くおし。」

肥った婦警は面倒そうな声で事務的に、しかしきびしく命じた。冷たく見据える眼と態

度は威圧する様に鋭くきつい。

「規則なのよ。仕方ないじゃないの。さ……」

スーツの上衣をミシュリーヌの体から引きはがしながらシモール婦警が云った。

「此のひと、育ちはいいらしいんですのよ。」

脱がせた服の裏表を調べながらシモール婦警が又云う。

「伯爵夫人だったんですって。」

「ふん。本当かどうか、分ったもんじゃないよ。上品にしおらしくしてて案外喰わせ者が多いんだからね。これッ。ぐずぐずしてないで、それも脱ぐんだよッ。全部だよ。伯爵夫人だか王妃様だか知らないけどね、ここじゃもう通用しないんだから。お前、何故ここへ連れて来られたのか、分ってるんだろ？」

屈辱に全身を熱くしたミシュリーヌは、それにかけて指先がぶるぶる震えた。泣けど喚けど逮捕された身は、どんなに情けなく口惜しくとも、受けねばならぬ屈辱なのだ。「ふーん。割と清潔な女なのね。両手を上げ



て、こっち向いて真直ぐお立ち。手をおろすんじゃないよッ。」

明るい電灯の光を真向から全身に浴びて、ミシュリーヌは眼をつぶり脚を合わせて立ちすくんだ。同性の婦警達とは云え、見も知らぬ他人の眼前に生れたままの姿を晒す恥かしさ、しかもこれは未だ序の口なのだ。

「よし。うしろ向いて、脚をひろげて。もっと、もっと……」

頭上に上げたままの両腕をわななかせてためらうミシュリーヌの尻に平手打ちがピシャリと鳴った。十才から以後は、他人にはおろか両親や伯父母にすら打たれたことはない体だ。ミシュリーヌの閉じた両眼から、ここへ

来て初めての涙が溢れた。

「痛かったかい？ お尻、撫でてないで両手を前についてッ。馬鹿。そのまま、膝も延ばしたままだよ。」

如何に情けなく悲しくとも、命じられる通りにするしかないのだ。のろのろと両手を床についたミシュリーヌは、突然こみ上げて来る怒りに薄眼をあげ、背後に立つ婦人警官の太い脚とスカートを両脚の間から見て、掴みかかってやり度いとさえ思った。しかし、そんなことは到底出来はしない。押え切れない嗚咽が一声、ミシュリーヌの咽喉をヒーンと絞り出た。

「動くんじゃないのッ。じっとしといて。まだ検査が済んでないのよ。」

みじめな恥かしい姿の数十秒は、数時間にも感じられた。

「よし。立って、こっち向いて。」

次には、脚を大きくひろげたまま、十回ばかり跳び上がらされた。もう、やけくその様な心地だった。それで済んだのかと思うと、「跪まずいて上を向いて。口をおあけ。」

今度は口の中、鼻の穴、耳の中まで調べられる。手荒につまんで乱暴に振り回された鼻の奥がツーンと痛んで涙が滲んだ。

「ヒーン……」

思わず挙げかけた手の甲を、ピシヤリと叩かれた。

「何も……何も、隠してなんか居ませんわ。そんな所に何も……。い、いたいッ……か、かんにんして……」

「口答える気？」

いきなり頬に平手打ちが飛んだ。

「ここじや未だまあ何だけど、追々に行く所へ行くと、こんなことじや済ませて貰えないよッ」

（行く所とは、どこかしら？）

余りの屈辱に完全に打ちのめされたミシュリーヌは、ヒリヒリ痛む頬に顔をしかめつつぼんやりと考えた。

（あ、監獄だわ）

ミシュリーヌは、眼前の昏くなる心配だった。豊かな金髪が掻き回され、ピンの類は残らず取り上げられた。

「さ、着ていいよ。」

飛び立つ思いで身にまとう服の、最後のホックを留める間もなく、肘を掴まれてグイと引かれる。

「ちょ、ちょっと待って。あの、ベルトがないんですけど。」

「何云ってるの。ベルトは駄目よ。」

「髪なんか撫でつけなくていいよ。殿方はいらっしやらないからね。」

スーツの上衣を締めるベルトもなく、コルセットにつけたガーターも外して取り上げられて居た。ブラジャーも靴下も見当らず、そしてハイヒールも無論取り上げられて、代りに汚れた布スリッパを素足に穿かされた。

「さ、これを持ってるのよ。お前の番号。なくしたら駄目よ。」

渡された木の丸札には、二十六と記してあった。

「ここに居る限り其の番号で呼ぶからね。呼ばれたら、すぐに立って返事をするの。分った？」

番号札を握り締めて、ミシュリーヌは首を垂れた。

「何もそんなに悲しがることはないのよ。同じ名のひとが居ると紛らわしいでしょ。さ。」

シモール婦警は少しは哀れを感じたのか、女囚の腕を曳き乍ら慰め顔でそう云った。

「あ、あの……水を飲ませて下さいませんか？」

咽喉はからからだし、インクに汚れた指先も洗いたかった。

「我慢なさい。もうすぐにおひるだから。」

狭い廊下の突き当りに、上半分が鉄格子の扉があった。右腕を掴まれたままミシュリーヌは、屈んで、ぬげかけた布スリッパを足先でまさぐり、そして眼を上げて息を詰めた。扉の鉄格子越しに大きな鉄檻が、そして其の中には多勢の女達が入れられて居る。

「云々とくけど、どんなことがあっても扉を自分で開け閉めしないこと。どの扉もよ。絶対によ。それから、無論、扉の把手や錠に触っちゃいけないの。いいわね？」

その言葉の意味するまじめさに、ミシュリーヌは自分の境涯の哀れさを、ひしひしと味わった。

昼間は鍵を掛けない其の扉の内側では、婦人警官が一人、退屈そうにデスクで本を眺めて居た。デスクの上には大きな輪に通した鍵。デスクの後ろの壁には束ねた鎖や革ロープが吊られ、革鞭さえも二本ばかり掛けてある。太い鎖の両端に鉄環のついたものは足錠だろうか。革と金具で作られた妙な道具。その時のミシュリーヌには何だか分らなかったが、それは嵌口具だ。被留置者を威嚇するために並べてあるそれらのおぞましい道具の数々を眺めて、ミシュリーヌは膝も萎えてうなだれた。眼を伏せると、デスクに並ぶ台の上

に置いてある手錠の数対が銀色に光って眼を射る。息が詰まってめまいがする心地だった。デスクの婦警官が眉をあげてミシュリーヌを鋭く見やり、シモール婦警官からカードを受け取って出入簿に記入する。

「二十六号ね。二号檻と……」

番号を打たれて区別されたのだ。又しても激しくこみ上げる屈辱の思いにミシュリーヌは唇を噛んだ。扉を入れてすぐ左右に延びる通路は独房区画。通路の両側に鉄格子扉が一枚一枚並ぶ。ビツタリと鉄扉を閉じたのも三つ四つあった。デスクの前をまっすぐに行く雑居房の大部屋だ。逮捕歴のないことが明らかかな者、又、生活程度や社会的地位の高い者は独房に入れて貰える。又甚だしくあばずれ女や兇悪な女で他に悪影響を与える恐れのある者も独房だ。しかし、ミシュリーヌは雑居房へ連れて行かれた。

窓一つない地下の広大間。上下四方がコンクリートの其の大部屋には、すえた女の匂いがむんむんともり、七米四方位の鉄の檻が四つ、周囲にそれぞれ通路を広く取って並べられて居た。檻の天井も鉄格子、その更に上方二米にコンクリートの天井、その天井の電灯の光に鉄格子が幾重にも重なって鈍く光

る。各鉄檻の中には、一方の鉄格子に頭側をくっつけて鉄製三段ベッドが六組。他の三方の鉄格子の内側に沿うて、鉄製ベンチがコの字形においてある。鉄檻は勿論のこと、ベッドもベンチも床に造りつけの頑丈なもの、コンクリートむき出しの床には其の他に何もない。いや、片隅に水洗便器が一つ、これも造りつけに何の囲いもなく設けてあった。檻の一個が十八名。雑居房の全定員は七十二名だ。超過してぶち込まれると、ベンチに寝なければならぬ女も出て来る。しどけない恰好の女達が各檻に今はそれぞれ十名足らず、ベンチに坐ったり床に立ったりしてうごめいて居た。ベルトや紐類は無論のこと。二十センチ以上の長さの物はすべて取り上げられ、髪にはピン的一本もないのだから、だらしない姿になるのも無理はない。

（あの鉄の檻の中へ入れられるのね。そうして錠をおろされて、獣みたいに閉じ込められてしまうのね）

そう思うとミシュリーヌの脚はすくんで、思わずあたりを見回わしてしまう。しかし、誰も救いには来ない。第二号檻の鉄格子扉が大きな鍵で開かれた。シモール婦警官が眼顔で促がす。どうしても此の檻の中に入らねばな

らないのだ。踏み入れたミシュリーヌの背を押して鉄格子扉がガチャーンと閉じ、錠がビシッと鳴った。十名ばかりの女囚の視線が、或いはまっすぐに或いは横眼で、一斉に浴びせられる。鉄格子扉と錠の音はミシュリーヌの耳に裏き渡り、脳天をガーンと撲りつけてもされた様だった。

（とうとう、私、留置場に入れられたのね。いくら頼んでも、ここからはもう出して貰えないのだわ）

絶望に眼も昏んで立ちすくんだミシュリーヌは、ややあって、あたりをおそるおそる見回した。

「ね、お願い。もう赦して。」

金髪を振り乱した若い女がそう喚き、鉄格子に顔と胸を押し当てて二人の婦警を見上げた。背に回した両手首に手錠が、がっちりと喰い込んで居た。

「もう、決して喧嘩は致しません。お願い。おとといの夜からずっとなんです。もう腕が棒みたいで肩がもげそう。苦しいの。お願いだから外して」

鉄格子扉を胸でこすり、ミシュリーヌの横でずるずると膝を落した後手錠の女囚は、乱れ落ちる金髪に頭を振り乍ら身もだえして哀

願した。

「駄目ね。もう暫くそうしてるがいいわ。」

シモール婦警は微かに眉をひそめて見下ろしたが、もう一人の婦人警官は冷たくそう云って鍵の輪を指先にクルクル回す。

「じゃ、ちょっとだけ外して下さいませんか？体を掻きたいの。ほんの五分だけ。お願い。」

「駄目ったら駄目。おとなしく坐ってなさい。くつわかませて上げようか？」

「どうしても駄目？ なら、せめて少しゆるめてよ。きつくて痛い。ストップ掛けといて呉れないんだもの。手がチ切れそうよ。」

「よく、つべこべ云うのね。おとなしくして居ないから締まって来るのよ。我慢するのね。」

二人の婦警は立去りかけ、跪まずいたままの女囚は涙声を出した。

「あの…今朝からあれなんですの。お願い。」婦人警官は顔見合わせて苦笑した。

「嘘もいい加減におし。検査して上げようか？」

ク、クッと泣いた女囚は、立ち去る婦警達の背を恨めしげに睨み、肩と胸で鉄格子を押し揺ぶって居たが、やがて諦めて立ち上がり顔をくしゃくしゃに歪めつつベンチに腰をか

けた。別の鉄檻の女囚が一人、鉄格子にしがみついて、通り過ぎる婦警に声を絞った。

「未だ保釈して頂けませんの？ 弁護士さんは未だ見えませんか？ ね、調べて見て頂戴。」

「未だよ。静かにして下さい。」

鉄格子を握った手を放した其の中年の女囚は両手で顔を掩って啜り上げた。

初めて入れられた留置場の有様は、ミシュリーヌにとってはおぞましくも浅ましい限りだった。ふてくされて膝を抱く女、思い詰めた表情で宙を見詰める娘、髪かきむしって身悶えする中年の女。忍び笑いと共にひそひそ交わされる卑わいな会話、やけ気味の大きな溜息、狂った様なかん高い笑いも時折り聞え思い出した様にシクシク泣く声……。

「あんだ。立ってないで、ここへお坐りよ。」品定めでもする様に探ぐる視線を浴びて立ちすくんで居たミシュリーヌは、声をかけられてビクッとわなないた。

「うん。なかなか可愛いわね。何んて云う名？」

がっちりした体つきの四十がらみの女が、鼻をほじりながらそう云い、品定めを終えた眼で今度は舐め回す様に、ミシュリーヌの体を眺めた。

「ミシュリーヌ・ダリユーって云うのね。可愛い名なこと。あんた、初めてだね。何したのか知らないけど、ま、クヨクヨしたって初まらないよ。」

この女はジゼルと云って、売春斡旋、婦女売買、脅喝から傷害沙汰までの前歴を持つ逮捕歴十回前科四犯のしたたか者だ。

「うるさいわねえ。いい加減に泣くのは止めたらどうなのさ。そこの十九号、クラレンスお前だよ。いらいらして来るじゃないか。いくら泣いたって三年は固いとこだよ。」

そう怒鳴りながらジゼルは、ミシュリーヌの腰に腕を回して引き寄せた。

「ね、いいこと教えたげる。逃げなくてもいいんだよ。ちっとも怖いことなんかないんだから。」

全身を火照らせたミシュリーヌは身悶えして、ジゼルの手から逃れようともがいた。同囚の女達が白い眼で眺めて鼻を鳴らし、そして一人が立ってやって来た。相当なグラマーで、ブラジャーなしの胸がぶるぶる揺れて居る。

「ジゼル。此のこは今入ったばかりじゃないか。いい加減にしておやりよ。いきなりそんな……卑らしいったら、ありやしない。」

「何だって!! 利いた風なこと云うわね。アンジェラ。やつかむのはみっともないよ。」

「何ッ。やるかい?」

強盗の共犯でぶち込まれたアンジェラも、あばずれ女、腕をまくって片眼を細めた。

「やーめたつと。お前みたいな小便臭い娘に傍杖喰って、手錠かまされるのは馬鹿々々しいからね。」

精一杯の貫碌を示したジゼルは、ミシュリーヌの胸許から惜しそうに手を抜き出し、回した腕を腰から離れた。

「ありがとうございます。」

身繕ろいをしたミシュリーヌは立ち上って、イキのいいグラマーにお礼を云った。

「あーら。ほんとに可愛い子ちゃんなこと。

嬉しくなっちゃう。いくつなの?え、二十九だって!! まあ、あたしより三つも上じゃないの。小柄だと得ねえ。どう見ても二十四、五よ、卑らしいことされそうになったら、構わないから大声を立てるのよ。いや、あたしにそう云ってくれた方がいいわ。何よ、いい年をしてさ。ジゼル、お前なんか縛り上げられて独房で修行させて貰うといいんだわ。あたしね、そんな趣味はこれっぽっちもないんだから安心おしよ、ミシュリーヌ。こっちへ

おいで」

ミシュリーヌはおそろおそろ席を移し、ジゼルはふてくされて鼻をほじくり出した。

ミシュリーヌは、主として此のアンジェラとジゼルの二人からいろいろなことを教わった。検察官や予審判事の取調べに対する要領、判事や陪審員の同情を買うコツ、そして果ては刑務所での身の処し方などだ。ミシュリーヌにとっては耳を掩いたくなることばかりだったが、そうする中に覚悟とでも云えるものが胸に芽生えても来るのだった。未だ純真さを残す初犯の女達が、こうして次第に軌道から逸れて、世を拗ねグレて来ると云うものだ。

「ま、そんなことなら大したことはないよ。せいぜい二年か二年半ね。うまく立ち回れば執行猶予にして貰えるよ。せいぜい男のせいにしてさ、しおらしく振舞うことね。」

「けど、こうなったら、もう、性根だけは据えておくことだわ。どっちみち、もう世間の奴等は白い眼でしか見ちゃくれないんだからね。」

「そしてさ、いろいろなことがあって、何度もこんな所に入りもする様になると云う訳よ。うるさいねえ。又、クラレンスが泣き出

しやがった。あら、ニコールもかい。つき合
いのいい女だこと。二度、三度となると、あ
あ云う風にめそめそする様になるねえ。そし
て私位になると、もう平気になっちまう。初
めての時には案外泣かないもんだよ。あんな
みたいだね。好奇心と云うのか、私だって最
初は珍らしくてキョロキョロしたものよ。三
度目あたりが一番泣けて来るねえ、豚箱は。
何だか自分の行末のことなんか必々と考えち
やったりしてさ。」

「それからねえ、ミシュリーヌ。もし、実刑
喰って本ムシヨへ送られたって、堂々と暮ら
しておやりよ。看守の奴は何かと云うと仮出
獄に響くって云いやがるけど、そんなことで
ビクビク卑屈になるんじゃないよ。満期まで
勤めりや文句あるまいって云う位の気持でお
やり。」

「そうだともし。なあに仮出獄なんていい加
減なものさね。いくら点数稼いだって、ムシ
ヨが空いてりや先ず駄目よ。満員になったり
奴等が手薄になったりすると、ジャンジャン
仮出獄さ。勝手なもんだからねえ。それにさ
ホラ、何とか審査委員とか云うおばさん連中
の忌々しいったら、ほんとに頭に来ちゃうん
だから。」

ジゼルとアンジェラは、交々ミシュリーヌ
に云うのだった。

未だ十二月初めの地下監房は、僅かながら
もスチームも通って、そう寒くはなかった。
しかし、これからの我が身のことをあれこれ
考えると、ミシュリーヌの胸に冷たい風が吹
いて全身が震えた。

（けど、仕方ないわ。私、あんな悪いことし
たんだもの）

彼女はうなだれて床を見詰めたまま、我が
胸に悲しく云い聞かせて諦らめても見るのだ
った。ジェラールに対する怨めしさと憎しみ
がともすればこみ上げて来て、考えれば考え
るほど自分の愚かしさが悲しくも腹立たしか
った。取調べの一応終った女達が連れ戻さ
れ、ミシュリーヌの檻にも三名ばかり帰って
来て、そしておひるになった。留置場の食事
は朝昼がパンと水、夜にだけ肉の切れ端しと
野菜そして薄いコーヒーが与えられる。食卓
もなく、檻の鉄棒に背をもたせての黒いパン
の昼食は、ミシュリーヌの咽喉を殆んど通ら
なかった。インクに汚れたままの指先に、一
口だけかじった黒パンと空のアルミコップを
持って悲しく見詰めて居ると、アンジェラが
眼を輝かせて黒パンをせがみ綺麗に平らげて

しまった。

午後おそく、遂に辛抱し切れなくなったミ
シュリーヌは便器の前で立ちすくんだ。立ち
上がりながら彼女は声もなく頬を濡らす。

「ミシュリーヌ。恥かしいのは仕方ないとし
てもあんな、紙を使い過ぎるわよ。三吋以上
使っちゃ駄目。一日の量が決ってるんだから
皆が迷惑するの。いいわね？」

アンジェラがきつい顔で叱りつけた。トイ
レットペーパーすらも自由には使えぬ身なの
だ。みじめさにミシュリーヌの頬を又も大粒
の涙が流れた。其の涙を拭おうにも、ハンカ
チの一枚すらもない悲しさだった。時々唸っ
て居た後手錠のジャクリヌが喘いで立ち上
った。昼飯のパンと水を口に運んでやって居
た娘も一緒に立ち上がる。用を足すのも自分
だけでは出来ないで、他人に手伝って貰わね
ばならないのだ。同囚達から憎まれて居る
と、こう云う時に知らん顔をされて、泣きた
い思いでもがき回わらねばならない破目にな
る。

「ちょっと、ジャクリヌ。先刻は、ポリ公
に傑作なこと云ったじゃないか。ほんとかい
？ どれどれ拝見するとうすうか。」

ジゼルが臆面もなく覗き込んで、ケラケラ

と笑った。

「ねえ、ジゼル。見てもいいわ。何をしたいいいからさ、これ何とかしておくれよ。」

ジャクリーヌが脚をひろげたまま情けなさそうに云って、手錠を背でガチャつかせた。

「フッフ。お気の毒だけど、そいつばかりは何ともしやれないねえ。これから何年もあ

ることだし、修行と思って辛抱するんだね。御覧よ、お前の喧嘩相手は泣き言一つ云わないで頑張ってるじゃないか。ポリ公にからかわれるだけ忌々しいよ。我慢おし。」

ジゼルは隣りの鉄檻を、顎でしゃくって笑った。

「丈夫で細いピンの一本さえありや、私なら何とかしてやれるんだけどねえ。」

呟いたのは窃盗容疑のクラリス・シモンだ。



「お、クラリスが居たわね。お前、あれだけ稼いでさ、パクられたのは初めてだってね。

儲けたじゃないか。年貢の納め甲斐があると云うものよ。」

アンジェラにおだてられてえくぼを浮べたクラリスは自分の指を眺めた。ミシュリーヌより一つ二つ年上の、いいスタイルの女だ。

「何年喰らい込むか知らないけどさ、此の指が又云うことをきく様になるかしら。それだけが心配だわ。扉やロッカーの錠なんか朝飯前、金庫だって三度ばかり破ったのよ。」

クラリス・シモンは得意気に云って眉を上げた。

「ピンさえありや手錠ぐらい何とかなると思

うけどねえ。そのピン一本がないと来てるのか。こいつはどうかしら？」

監視デスクを覗いながら鉄格子扉に寄ったクラリスは、素早く錠箱を調べ、頭を振って肩をすくめた。

「何かと云うとすぐ、こんなもの嵌めやがって。口惜しいわねえ。手錠で、ほんとに忌々しい道具なこと。ちくしょう。」

ベンチに戻ったジャクリーヌは、口惜しげに呻いて頭を振り立てた。

婦人警官が時々檻の周囲をぐるぐる巡視して、女囚達を鋭く見て歩く。原則としてはベンチに坐って居なければならぬし、交話も禁止が建前だ。だから、其の時だけは皆黙って、白い眼に憎悪をこめて婦人警官の姿を睨み、立ち去ると忽ちその悪口にうさを晴らす。

「ぶさいくな仕立ての服着てるじゃないのさ。あたしなんか、とても着る気しないやね。何さ、スカートの前にあんな大きなひだなんかをつけて。よく平気で穿いてられるものね。」

「重いワッパを持たされてるもんだから、型が崩れてるじゃないの。ザマ見ろってんだ。」

「それに、あの靴、あんな平べたい靴穿かさ

れて、威張って街を歩いてるんだものね。私なんか恥かしくって、とても……」

「お仕着せなんだから仕方ないさね。けどさあのツラはどう見ても、昨夜とっくりと可愛がって貰った顔だよ。あの歩く腰つきを見た？ ああ、ちきしょう!! 切なくて頭に來ちやうねえ。」

「ふん。あんなのを抱く殿方が居るものか。」



どう？あたしの此の脚!!
見てよ。」

アンジェラが太腿を露わに掌でピシャピシャ叩いて誇らかに云った。

「検事の前で見せてやるといいよ。ここじやいくら見せても初まらないね。フッフ」

と、嘲笑ったのはジゼルだ。ミシュリーヌは小さくなって、片隅で身を固くして居た。鉄格子扉が音高く開閉される度に耳を掩いたくなる気持だった。婦人警官達は檻の中の女達を冷たく眺めつつ、必要以上の音を立てて開け閉めして女囚を出し入れする。

「もっと静かにやったらどうなのさ。お嫁に貰い手がないよ、そんなにお行儀が悪くちや。」

顔をしかめたジゼルが毒ずき、

「あの錠の音、何度聞いても堪らないわね。」クラレンスが悲しげに云った。ふてくされたり少しでも反抗の気配を示した女囚は、忽ち情容赦なく腕をねじ上げられて悲鳴をあげ、ミシュリーヌは胸もつぶれる心地で眼をそむけるのだった。夕方になって、取調室から二人三人と戻されて来、やがて十数名の女達が一度に帰って来てデスクの前に立ち並んだ。検事局から帰って来た連中だ。鉄檻の中から其の姿を眺めて、ミシュリーヌは打ちのめされる思いがした。二列に並ばされた彼女達の内側の片腕の手首には、ガッジリと黒い鋼鉄環が嵌められ、其の鉄環の穴をずっと鎖が通って繋ぎ合わせて居る。連鎖手錠と云う奴だ。痛そうに顔をしかめて肘を突き出した。自由な片手で持ち添えて鉄枷をいじったりして居る女達は、何れもやつれた姿で打ちしおれ、疲れ切った様子をして居た。検事局へ回されるまでには少くとも五日間の留置場暮らしがあるのだし、今日の一日をじっと坐ったまま待たされて過ごしたのだから無理もない。婦人警官が連鎖の両端の錠を外してジャラジャラと抜き取って行き、こじる鉄枷の痛さに悲鳴が聞えた。馴れた女囚は最初から鉄枷を片手で押えて居る。片端から外される

鉄枷が台上にガラガラと積まれ、女囚達は手首を撫で揉みながら身体検査を服の上から受けて、それでもホッとした面持ちで、それぞれの檻や独房へ入って行った。

「どんな調子？ ダニエル」

ジゼルがあくびし乍ら訊ね、ダニエルは肩をすくめて顔をしかめた。

「殆んどバレてしまいそうよ。七、八年でとこになりそう。ショックだわ。あーあ、今度出て来たら四十越してる訳ね。」

「逃げ出しやいいものを、居直ったりするからよ。そっちのシャーロットの方はどうだい？ どんな検事に当たったの？」

検事局帰りのもう一人の女シャーロットは、疲れ果てた体をベンチに投げ出して居たが

「うふん。若くてとてもいい男。」

と、片眼をつぶって頬で笑う。

「うんと泣いてやったわ。ウフフ。この次が肝心ね。ああ、化粧さえ出来たらなあ、いちころなんだけど。」

「そうかえ。ま、あんたはどっちみて大したこたないよ。お腹すいたわねえ。」

「あたし、疲れたわ。検事局通いはほんとにガックリしちゃう。背と腰が痛いこと。」

「待ち時間が堪らないよね、全く。早く横になりたいわ。」

ダニエルは手枷を受けて居た右手首を打ち振りながら、吐息をついてこぼした。

やがて、当番女囚が配って回わる夕食の盆を、女囚達は鉄格子の間から争って受け取った。少しでも多いのを取ろうとして、浅間しい小競合いも起こる。

「これ、肉が少いわ。そっちのに代えてよ。」文句を云ったアンジェラに婦人警官が靴を鳴らして近寄り、盆を取り上げてしまった。

「不平云うんなら、食べさせてやらないよ。」

そして、スカートから取出した手錠をアンジェラの片手に素早く叩き込む。手を引いて逃げようとしたアンジェラが、忽ち手首の痛さにウツと呻き、片方の鉄環が鉄格子の一本をくわえてガツチリと閉じた。盆の差し入れは場所を変え、アンジェラは手錠を鉄棒にきしませて地団駄を踏む。

「ちくしようっ。外してよッ。外しやがれったら……」

許される限りの半径を描いて、アンジェラは乳房を揺すり片手を振り回わして喚き暴れた。まあまあ人間並みの食事、日に一度の其の夕食を取り上げられてしまったのは、口惜し

がるのも無理はない。グラマーでイキのいいアンジェラは、他の女囚達の食事を腕ずくでも横取りしかねないので鉄格子に繋がれてしまったのだ。手も足も届かない所で盆を膝に抱く同囚の女達をアンジェラは口惜しげに睨みつつ、鉄格子を揺ぶったり手錠をこぶしで叩いたりして唸って居た。後手錠をかまされたままのジャクリーヌは、世話する娘が喰べ終えるのを待ち切れならしく、ベンチの前に跪まずいて口を寄せて居る。食事だけが唯一の楽しみ身とは云え、其の浅間しくも哀れな姿に、ミシュリーヌは眼をそむけるのだった。とは云え空腹には勝てないで、彼女も殆んど全部を平らげた。薄汚れた木のフォーク一本だけで固い肉片を口に運び、薄くぬるいコーヒーを啜り終えると、涙が滲む心地だった。盆が運び去られ、婦人警官がアンジェラの前に立った。

「どう、食事させて欲しい？ 欲しけりや、謝まることね。」

「ちくしようッ。いつからここは刑務所になったの？ 人権蹂躪よッ。あたしは未だ罪人じゃないんだからねッ。弁護士にそう云ってやるから。」

鉄格子を握り膝をベンチに乗せてアンジェ

ラは喚く。

「そう。じゃ、そうしてるがいいわ。」

あっさり立ち去りかける婦人警官の後ろ姿に、アンジェラは虚勢を折って哀願の声をあげた。

「あッ、かんにんして……。食事させてよ。」

「コーヒーだけでもいいわ。お願い。」

「ふん。もっと、ちゃんと謝まりなさい。」

再び檻に寄った婦人警官の前にアンジェラは跪まずいて腕をベンチにおき、情けなさそうに云った。

「すみません。赦して下さい。」

うなずいた婦人警官は手錠を解いてやり、盆を持って来て与えた。

「ちょっと、アンジェラ。一度や二度の餌を辛抱できないのかい？ えらそうにしててもからきしだらしないじゃないか。へん。お赦して下さい。そんなセリフは刑務所へ行くまで取っときなよ。ムシヨでだって滅多には使わないもんだよ。みっともないったらありやしない。ねえ、みんな、そうだろ？ あのガツガツしてるザマ見てよ。たたきのお姐さんが聞いて呆れらあね。」

そう云って嘲笑うジゼルに眉吊り上げたアンジェラは、漸く嚙み下した肉片に咽喉を詰

まらせたのか眼を白黒させてコーヒーを飲み込んだ。先刻暴れ回ったせいだろう、その右手首には手錠の喰い込んだ痕がはっきりと残って居た。

初めて受ける点呼のみじめさに、ミシュリーヌは唇を噛んで胸を熱くした。鉄檻の内側に横一列にぐりと並んで番号順に立ち、一人一人番号を呼ばれて返事をするのだ。少々のことなら、大目に見逃がしもある婦人警官も、朝晩日に二回の点呼の時には仮借なくきびしい。高い天井灯の明るい光に、鉄格子天井の影を全身に受けて立ち並ぶ女囚達の列を、婦人警官は制服制帽に身を固めて檻の外から見据えて回り、其の分際の際を檻の中の女達に思い知らせるのだ。

「二十六号ッ」

きびしい眼を光らせた婦人警官は、カードを片手に鉄格子の外で鋭い声だ。

「ハイ……」

生れて初めて番号で呼ばれた屈辱感に、ミシュリーヌの返事は漸くのこと咽喉を絞り出た。鉄檻に入られ番号で呼ばれて立ちすくんで居ると、もはや人間ではなくなった様な心地だった。

「二十六号ッ。何故手を動かすのッ。手を下

ろして、まっすぐに立ちなさい。顔をあげてッ」

金髪を掻き上げた手で顔を掩って居たミシュリーヌは、わななく手をのろのろと下ろした。隣の鉄檻の二、三人が、差し出した手の甲を革スリッパで撲られて悲鳴をあげた。並ぶ順番を間違えたのだ。ジャクリヌが又しても身を揉んで哀願して黙殺され、ふてくされた返事をする女囚は鋭く叱りつけられて何度も返事のやり直しだ。まごまごして下手をすると、鉄格子に繋がれて寝棚に寝せて貰えなくなる。

「寝ていいわ。おとなしく寝るのよ。」

便器の周りが一しきり騒々しく、やがて女囚達は着のみ着のまま寝棚に潜り込む。

「ミシュリーヌ。あんた、私の上に寝るといいわ。ここよ。」

アンジェラがそう云ってジゼルの手からミシュリーヌを引き離し、寝棚に案内してくれた。狭く固いベッド、いや寝棚。三段ベッドの最上段に身を投げ出したミシュリーヌは、薄い毛布にくるまりながら溜息をついた。眼をつぶると、体が沈み込んで行く様だった。寝棚は湿ってカビ臭く毛布も枕も異様な匂いがした。五分後には電灯が暗くなり、デスク

の所の扉に鍵の音がガチリと響いた。やがて、あちこちで起こる忍びやかな気配と妖しい忍び笑い。固い枕に頬を当てて、ミシュリーヌは声もなく泣いた。頭のすぐそばに光る鉄格子を見ると、自由を剥奪された今日一日のことが、胸にひしひしとこたえて思い起されて来るのだった。

婦人警官が時々扉の鍵をあけて入って来て鉄檻の周囲を監視して回わる。三段ベッドの最上段は床から一米半ぐらい、各段の間は五十センチ程しかなくて、最下段は床すれすれだ。最上段の上にも屋根があつて鼻先がつかえそう。鉄檻の天井は、もう一段は充分に設け得る高さにあるが、檻の外から監視する都合もある訳だ。就寝中は両腕を毛布から出して居なければならぬ規則だが、未だ容疑者の段階でもあるし、いちいち咎め立てて居たらキリがないので、余程眼に余ることがない限り、巡視の婦人警官も見えない振りをする。

「眼れないの？ 無理もないけど眠らなきや駄目よ。」

婦人警官の顔がミシュリーヌの頭上すれすれに寄ってそう云った。着のみのまま、顔や肌の手入れもしないで寝るのは、物心つい

て以来初めてのことで、ミシュリーヌは櫛目のキチンと通った婦警のブルネットを盗み見て、切ない程に羨ましかった。隣りの一号檻で、女囚の一人が佳境に入つたのか、巡視の婦警を無視して妖しくもだえのた打ち、絶え絶えの声を呻いた。

「今夜も又!! いい加減にしないッ」

毛布を蹴立てて身をのけぞらせて居た其の女囚の髪が檻の外から掴まれ、激しく揺すぶられる。

「何さッ。あんたの顔なんか見たくもないよッ。折角の所なのに。ちくしよう、邪魔しないで行ってよ。」

女囚は息弾ませて喰ってかかった。

「こんな檻の中にもう一週間も閉じ込められて暮してんのよ。何がいけないの？ あんたも……。あんただって女だろ？ 満更男を知らない顔でもないじゃないの。」

「何だって!! 何とまあ不潔な……」

掴まれた髪を振り離そうともがく手首がねじられて鉄格子の外へ引き出され、忽ち手錠がバシッと喰い込んだ。

「そっちの手もお出しッ」

「あ、あッ。いや。いやよッ。ちくしよう。」
「おとなしく出すの。反抗する気?」

頭や膝を天井に打ち当てつつ起き直って暴れる女囚の胸許がこぼれて揺れ、既に喰い込んだ右手の手錠が手荒くこじられた。

「ううッ。いたいッ……」

「痛けりや、おとなしくおし。」

「ど、どうしても嵌めるの? いやよ、かんにんして。」

「仰向けに寝るのッ。そっちの手を出して」
又してもこじられる手首の苦痛に、観念した女囚は仰臥して左手も頭上へ延ばした。太い鉄棒一本を挟んで両手錠を叩き込まれた女囚の両手は、頭上へ延ばしたまま、もうどうしようもない。

「お前は当分の間、夜はそうしといて上げるわ。」

「そ、そんなこと。そんなのひどいじゃないの。ねえ、おトイレへ行かせて。」

手を洗いたいのだろう。婦人警官は、聞き捨てて足早に立ち去って行き、

「ちくしようッ」

喰った女囚は体をねじって起き直った。手錠を鉄棒にガチガチ鳴らせつつ、性懲りもなく試みて身を悶え、狭い寝棚で体をくねらせる。しかし、起き直ると、手錠の鎖が鉄棒に巻きついて更に短くなってしまふのだ。寝

四馬孝画廊

浣腸美媚態

大中判(13×19) 印画紙焼付

三枚一組 六〇〇円

略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描写し女性の美しさを女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に両

棚と鉄格子との間の二十センチ程の隙間もものかわ、今度は鉄格子に体の前側を寄せくっつけた無理な姿勢で死物狂いだ。

「ち、ちくしよう。宝石を落っこした様な心持だよ。」

隣りの寝棚の女囚が足先を枕元におかれて舌打ちして寝返りを打った。汗みずくになつて喘ぎに喘いだ女囚は、漸く何とか満足し得たのか、それとも諦めて昂ぶりも鎮まったのか、鉄棒を抱いた肘をゆるめて寝棚に体を延ばし、足で毛布を蹴って体に向け、吐息を長く洩らしてぐったりと眼を閉じた。

「呆れたもんだね、お前さんは。何とか済んだらしいね。」

黙って眺めて居た隣の女囚が声をかけた。「うん、何とか、ね。ああ、痛い。ズキズキするわ。」

一仕事終えた女囚は、そう云って手首を指先で撫でる。

「知らない間に締まっちゃったわ。こんなにきつく緊まっちゃって、どうしようかしら。」
「知らない間が聞いて呆れるよ。ま、朝には手が痺れて動かなくなってるねえ。」
「ねえ、毛布をちゃんとかけてよ。」
「いやなこった。」

隣りの女囚は鼻で笑い、毛布の中で手を動かし初めた。

ミシュリーヌの下の方で、泣き声の混った

呻きが聞えた。ジャクリヌの苦しげな声だ。

(あ、あのひとどうやって寝るのかしら?)

最下段の寝棚に漸く起き直って腰を掛けたらしいジャクリヌの悲しげな溜息が長く苦しそうに流れた。囚われの女達の哀れにも浅間しい有様に、眠れぬミシュリーヌは暗然として胸つぶれる思い。そして此の身も既に其の中の一人なのだ。突然、ミシュリーヌは痛切に死を想った。丈夫な一本の紐、鋭い一本のピン、それさえあれば鉄格子に首を吊り咽喉を刺して、彼女は自ら命を断ったことだろう。スチームが冷えて来て、夜の寒気がひしひしとミシュリーヌを襲って来た。

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかつて浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

処刑場面写真

新宮明夫氏提供

絞首刑

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

略号(るく)

引廻しと晒

大手札印画紙焼付

二枚一組 三〇〇円

略号(るに)

前を僅かに掩う越中褌一本の美女が嚴重に後手高手小手に縛しめられて目かくしをされた上、首吊りの刑にされようとしている。
首縄後手高手小手にきびしく固められた裸身を縄尻をとられて、引廻される美女の哀れさと、前手縛り目かくしのまま、放置されて晒される裸身の心もとなさ。

懸賞【告白、手記、体験】入選作品

コンフェッション

稲葉侑夫

関釜連絡船の出入港として賑わった本州南端の港町も終戦と共に一変した。

街では朝鮮人が勢力を日々に増していき、あちらこちらで日本人は袋だたきにあった。女同志のリンチなどは日常茶飯事の事であった。髪を引きずられ、乳房を踏みにじられ、のたうち廻る女を、みかけると当時小学生だった私は異様な興奮を覚え、いつも立ち止まって眺めていた。

エロ雑誌の氾濫もすごかった。（現在からみればそれらの本は実に、たわいのない雑誌であったが）中学生に成長した私は、それら

の一冊に目を通した時、再び数年前の興奮に似たものを感じた。

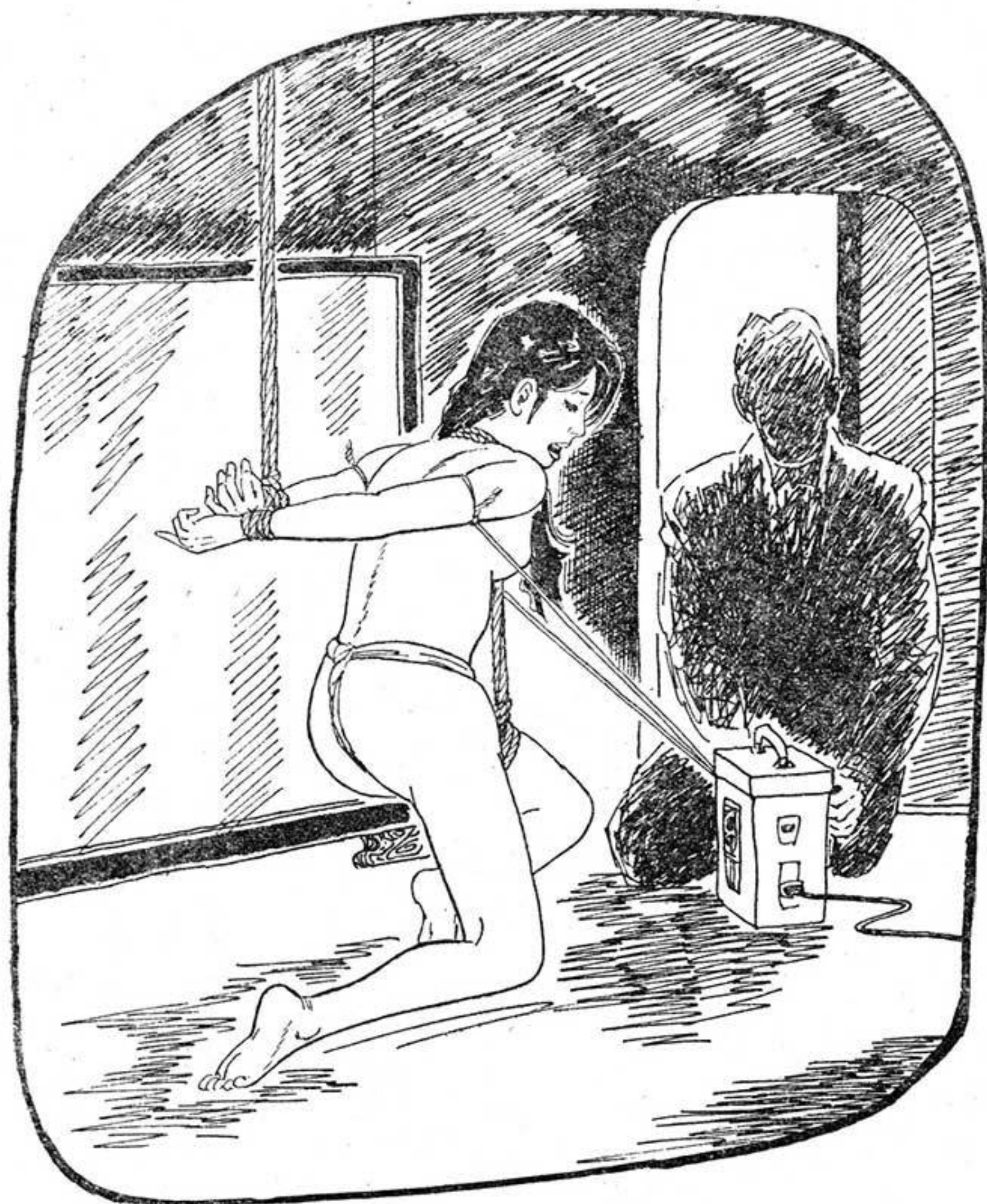
——終戦後満州で暴動が起り女性同志の争いから一人の女がリンチをうける。——という物語でグラビヤには全裸の女が谷間に逆吊りにされ苦悶している姿が載っていた。

女を虐めてみたいという願望は、空気の「肉体の門」を観た時に私の胸の中で次第に、その方向に傾むいていった。当時としては、ボルネオ・マヤが全裸で宙吊りにされ、リンチをうける実演は巷に一大センセーションをまきおこした芝居だった。サジストとい

う言葉を知り、その道の専門家で世に出ようと決心したのもその頃である。

W大に入学した私は、その方の文献を漁った。当時はS・Mの専門誌は皆無だったので、私の努力にも拘らず大して成果は挙げなかった。

そしてある日、私の身の上に一大変事が起った。前期の試験も終り暇になった土曜日の午後、先輩のお供をして日吉にある邸宅を訪問した。この邸では『若葉会』という、女性グループが週に一回デスカッションをやる為に集まった。（有閑マダム、未亡人の集りと



いう事に、気がつく筈もない年頃だった)

用事を済ませた先輩は、失礼しますといつて座を離れた。

「もう少し遊んでいらっしやいな」

女主人が声をかけた。

「俺は用事があるので、何ならお前はもう少し遊んで来たら…」

先輩の言葉に、他に用事もなかった私は珍

らしさも手伝ってか

「じゃあお言葉に甘えて…」と居残っているうちに忽ち数時間過ぎた。

「そろそろ僕もおいとましなければ」

立上った時、部屋にいた八人の女性が、一団となって私にタックルを敢行した。アツという間の出来事で、暴れまわって逃げようとしたが、所詮多勢に無勢で勝ち目はなかった。手足を押え込まれた私は、八人にかつがれると、ベッドの上に運ばれ洋服をむしりとられ、パンツ一枚のみじめな姿を仰向けにされ手足を固定されてしまった。恐怖が私を襲い必死になって暴れたが空しい抵抗にすぎなかった。

一人の女性は笑い興じると、私の顔へ大きな臀部をのつけた。その重みで呼吸は困難になり鼓動は早くなった。それを機会に残りの七人は腋下、足裏を筆でくすぐるもの、腕をつねるもの、脇腹を噛むもの……。

決して私はマゾを持ち合せた人間ではなかった。(当時は)とにかく恥しさのみが、私の体をかけずりまわった。私は泣きたかった。臀部を持ち上げた女性は「あら、ぼうや今にも泣き出しそうよ」笑いながら、いやという程私の鼻をねじり上げた。

「そろそろ順番を決めましょうか」

女主人の手には、ゴムバンドが握られていた。八人の女性は洋服をとるとパンティのみの姿でベッドを取り囲んだ。それは何とも云えない光景であった。

今これを書きながら想い出してもゾッとする出来事だった。私の目は血走り、大きく口をあけたまま夜明け迄、拷問に似た行為に耐えたというより堪えさせられたのである。続いて、彼女達のオモチャにされたが、残念ながら、ここに発表出来ない程のすさまじいものだった。

これを境に私の中に、マゾが芽生えて来たといっても過言ではないだろう。日吉を通るたびに今でも想い出す大学一年の時の悲しい(?) 物語である。

卒業した私はいつかTVタレントとして活躍するようになった。(読者欄にも投稿したので、お読みになった方も多分あるでしょう。奇クでは厚意から名を変えて下さったが) 本名が出れば私は肩身の狭いおもいでこの世間を歩いて行かなければならない。全ての人間がプレイとして認めてくれない限りは。でも私は健康人のみが持つプレイとして

徐々に友を作っていくつもりだ。

ふとした事から一人の女性タレントと交際する様になった。さりげなく涙ぐましい程の努力をして半年……とも子は普通のプレイには協力してくれる様になっていた。

研究材料として、とも子は良き理解者になってくれた。ある日、高度のプレイを彼女に実行すべく頭上で手を縛り上げ吊した。豊かな両方の乳房に、それぞれコードをセロテープではりつけ、電気を流した。とも子は身震いと共に異様な声をあげた。大学時代の私の姿がそこにオーバーラップされた。おもいきり虐めてやれ……今一人の私が、私に向って声をかけた。

「もう止めて」

とも子は叫んだが、電気アンマ(長い棒がついていて、その先に丸いコブが付着している。電気をいれると棒全体が振動する)を持ち出した私は、驚いているとも子を尻眼にスイチチを入れた。

次第にとも子は体を右に左にそして前後に迂らせ、「やめてやめて」と叫んだ。

汗を全身から流してグロッキー気味の彼女を横たえると、私は後手に、足首と共に、逆海老に縛り上げた。

「ひどいわ。やめてよ。」

今迄と違った私の顔を見て、とも子は不安を感じたのかもしれない。風呂場に引ずり込んだ私はホースを手に、力一杯彼女を容赦なく打ち続けた。とも子は何とかして逃げようとした。逆海老の彼女の肌は赤味を帯びていき、いつしか呻声に変わっていた。(ゴムホースは絶対に体を傷つけない事を私は知っていた)

仰向けにしたとも子の口へホースを突込み水道栓に一方を直結すると蛇口を捻った。手足は自分の体重で折れる様な痛さを感じ、そして腹部が次第に大きくなっていく。とも子は随分苦しうであった。ホースを抜いた私は逆にそのオナカを踏みつけた。

「ゲエー」

とも子は口から水を戻した。

一週間、とも子は体が悪いといって機嫌が悪かった。

「御免、御免。その代り何でも君の云う事をきいてあげるから」

「本当？」

その夜、風呂に入ろうと裸になった途端、とも子が声をかけた。

「何でも云う事をきくといったわネ」

(私はその意味がわからず迷った。おそらく高価なものをねだられるのだと覚悟した)

「じゃ、手を後に廻して頂戴」

この時初めて彼女が私を責めるつもりだと察したが、可愛さが先にたって笑いながら手を後にした。後手に縛り上げた私を、アグラを組む様にタイルの上に坐らせ、足首の小指を左右一緒にバインド線で離れない様に幾重にも巻いた。拇指には別個にロープが結ばれ後にまわったとも子は二本のロープを引張った。足裏は私の顔に密着する迄に持ち上げられた。左右にひらかれた足裏の小指はバインドがくい込みちぎれる様だった。二本のロープは顔と共にぐるぐる巻きにされた。

とも子が何時、何処でこの様な事を覚えたのか不思議だった。あまくみていた私は次第に悔みはじめた。

「おい苦しいよ」

足の裏から私は云った。

「この間のお礼をさせて戴くわよ」

隙間のない足と顔の間に無理に濡れた布が挟まれた私は、異様な臭気と呼吸の苦しさに喘いだ。

「それは私の汚れたパンティよ」

唾液がパンティの汚れとミックスされ、私の喉を通過した。(その後私はこれ程の苦しみを味わった事はない)

一週間前とは完全に主客転倒し、体全体はホースで乱打され、熱い痛みを感じるとスツと感覚が麻痺する。そこへ又容赦なくホースは打ちおろされた。しばらくすると、とも子は私の体を逆さに壁にたてかけた。頭をタイルに臀部が上に向いたぶざまな姿である。とも子は水道栓をひねると私の全身に、水をそそいだ。息をつく事さえ困難な足の裏を伝わって、水は口中を流れた。間に挟まれたパンティは水びたしになって殆ど顔は密封された状態に陥り、口をあけた私は微かに息をするだけだった。

「どう、少しはこたえた。今度は火攻めよ」

真上を向いた臀部に短いローソクを立てると火を点じた。熱い蠟涙はゆっくりと流れ始めた。臀部に急にものすごい熱さを感じた途端皮膚は焼け始めた。「ウー」私は呻めいて腰を動かし逃がれようとしたが駄目だった。

とも子は手を叩いて笑った。そして新たなローソクの炎を私の肌に近づけた。

私はみじめな虜囚であった。失神手前で私は解放された。

とも子とは一年後に別れた。現在銚子で元気に日々を暮しているそうだ。

彼女はSMプレイの良き協力者だった。

ここに告白した以外は、お互いに楽しみを倍增したプレイで日々を送ったことを今懐しく思い起すことが出来る。

現在は研究のみで、理解者に恵まれずイメージのみに追われている。

奇クを通じてSMクラブなるものを、結成出来ればと願っている。賛成者は男女を問わず、御意見等御一報下さい。

最近では「白日夢」(路加奈子の虐待シーン)「肉体の門」(富永美沙子、野川由美子の全裸の宙吊り)「越後つついし親不知」(佐久間良子の折檻場)「チャンスに体を賭ける」(リレーヒ・ベルイマンの新人女優がリンチをうけるシーン)「ショック」等……映画界も堂々とサジズムを全面に押し出して来た事は、私にとっても百万の味方を得た様です。「ショック」のロードショウでは(渋谷全線座)期間中、籠の中に半裸の女性を閉じ込め、吊す為にバイト女性を募集中だし……以上で私の告白を終わります。告白出来る対象というより、理解者のいらっしやる事を心から嬉しく思っています。

懸賞【告白、手記、体験】入選作品

SM族のホステスとして

戸 島 雪 枝
柴 島 令 子

「君は以前、中学校の先生をして、いたんだってね。」

河本がキャノンの焦点を合わしながら、モデルの雪枝に言った。雪枝は、古い切り傷に触られた様に、身体がビクッとふるえた。

「おっと、動いちゃ駄目だ、駄目だ。もう少し膝を曲げて、お尻をひいて」

雪枝は河本の言うなりに、人形のように動いた。然し雪枝は、彼の思い通りに動くのは、スタジオでヌードのモデルになっている間だけではなかった。この数カ月程、雪枝は河本の世話になっていた。河本は軟焦点の

レンズでアウト・フォーカスの情緒的な作品を発表して人気のある、流行のポートレート作家なのだ。

河本は、母と妹との三人暮らしの雪枝に月々五万円の生活費をくれた。然し、モデルとは名ばかり、実は、河本の二号である。教師だった彼女を、二号に墮落させたのは、教師の頃、PTA会長をしていた、絵島雄三郎だった。彼女が、絵島と特別に親しくなったのは七年程前の春だった。その頃、彼女は資格も何もない臨時教員だった。何時、首を切られるかも知れず、その上、給料はひどく安かつ

た。手取り一万二千元。家族三人が生活していくのは並大抵ではなかった。

或る日の事だ。授業が終り、生徒の作品を読んでいた彼女の教室へ絵島が入って来た。そして笑いながら、冗談のように言った。

「本当に、貴女のような人が生活に苦勞をするなんて、もっのて外ですなア」

「仕方ありませんわ」

彼女は、笑っていった。

「父がいらないのですから」

「そうそう、それで同情しちゃった。僕の父も僕が高校時代、亡くなりましてね、苦勞さ

せられましたよ。」

「まあ、ちっとも存じませんでしたわ」

こんな事から、絵島と雪枝は親しく言葉を交すようになった。絵島は、「お困まりの時は、何時でも相談にのりますよ」といった。その時は警戒していたのだが、優しい言葉に雪枝はいつしか絵島に父親のような信頼を感じてしまった。絵島から、一万円の借金をしてしまったのは、其れから、間もなくの事だった。

その日、突然、家から電話があり、妹が急に腹痛を訴え、医者に見せると、虫様突起炎で、すぐ手術しなければ危険だと言うのだった。費用は全部で一万円位だったが、妹の枕元で言う医者の顔を雪枝は、とほうにくれてぼんやり眺めた。その時、不意に頭に浮んだのは、絵島の優しいあの言葉だった。

「金の事なら、心配いりませんよ。私は二年前に家内に死なれて、息子が一人きりですしもし、貴女さえ、よければ月々何して、あげてもいいんですよ」

絵島は熱い目で雪枝を見た。すがってみたい様な、逞ましい男の愛情、二十三歳の雪枝の理性は突然、目の前に開かれた現実、クラクラと崩れていくようだった。

雪枝が初めて、絵島の愛を受け入れたのは、初夏の休みの一日を利用して比良山登山の職員旅行をした時だった。総勢十五人の男女の職員達は、幾組かのグループにわかれ、足どりも軽く歌などを歌いながら、元気に登っていった。然し登るにつれて疲れてくるのと、だんだん、バラバラになっていく。雪枝は高校時代にスポーツできたえていたので一人ぐんぐん先へ登っていった。そしてふと、気がつくと絵島会長がすぐ後ろを歩いている。雪枝はその時、中年とは思えぬ彼の健脚をたのしく思った。

辺りは漸く萌えそろった新緑の雑木林で樹々に囲まれた小径に人影はなかった。その時雪枝は、なぜか息苦しさを感じて立ちどまり、大きく息づいた。絵島の両手が肩に触れてきた。絵島はガラガラした目で見詰めている。本能的に危険を感じ雪枝は不意に駆け出していた。然しいくらも走らない中、絵島の逞しい腕につかまれていた。次の瞬間、抵抗するひまもなく雪枝は絵島の唇を受けていた。そして、むせるような新緑の中で、ぐったりと不思議な安定感に引き込まれていた。

「僕が責任をもつ、其れに生活の方も、月一

万円位だったら」

「嫌、そんな事、おっしゃって」

雪枝は生活のため身をまかせたと思われたくはなかった。絵島を愛していると思った。二十三歳の生娘が中年の男を愛するという不自然さ、然し、その時の雪枝には、そんな常識は問題ではなかった。

その日以来、絵島のガッチリした肩や、厚い胸、そしてそのたくましい身体が支えている豊かな経済力を思うと、他の若い先生方はみんな貧相に見えるのだった。そして放課後の薄暗い体操倉庫の中で接吻を交す事もあった。勿論、絵島は他の職員に知られる事をひどく恐れていた。雪枝も同じ事だったが、絵島はPTAという立場がそうさせたのかも知れない。然し雪枝は早く結婚したいという気持ちの方が強かった。夕方ガランとした広い校舎のなかには人目には、つかなかった。そこをねらってか、雪枝が通信教育の準備で、おそくまで調べものをしていて、いつの間に入ってきたのか、絵島に後ろから、抱きすくめられる事もあった。

然しこうした事は、何時何処からと言う事もなく、人の噂にのぼるものだ。其れから三カ月も経ない中に職員室全部に知れ渡ってし

まった。其れと分ると絵島は急に冷淡になった。以前のように入ってくる事も、めったになくなった。雪枝が誘いかけるように目を向けても、視線をそらせて避けるようにした。それはPTAの会長という立場を守るためか、それとも雪枝と言う女に興味を失ったのか、どちらかだろうと思った。然し、それでも約束どおり月末にはお金を入れた封筒が机の抽出しに入っていたが、その額は、最初の頃とくらべて、少なかった。

日が経つにつれて、絵島の足は次第に遠のき、机の抽出しにも、もう彼の心付けは入っていなかった。それがそのまま、彼の心がわりを物語っているように思えて、悲しかった。それに、彼の援助が切れると、再び家の暮らしが苦しくなった。自分はやはりお金で買われていたのだ。そう思うと一層自分がじめに思われた。そして間もなく、雪枝は決定的な打撃を受けてしまったのだ。

二学期も終りに近い、或る日、同僚の松田先生の忠告を受けた。絵島会長には奥さんがあり、大変な女たらしの名人と聞いた。そして絵島は、PTAの会費を大分使い込んでいくらしく、今度の決算期に問題になるらしいとの事だった。毎月の抽出しのお金は、或い

はPTAの会費だったのだろうか、雪枝は人前も忘れて、道ばたに膝をついてしまった。

翌日から無断で学校を休み、それきり辞めてしまった。だが雪枝は考えなければならぬ。学校を辞めたら、一家は、飢死にするより外はないのだ。

こうして雪枝は、河本の世話を受けるようになった。もう恋愛なんてこりごり、二号になった雪枝を、教員をしていた女のくせにと人は笑うかも知れない。然し墮落し身をもち崩すのは、何も家出娘や意志の弱い女が男に裏切られた場合だけとは限らない。それがどんな職業であろうと変りはないのだ。

「よし、もう一枚、右脚を大きく曲げて、もう少し、そう、そこで上半身を少しそらす、動いちゃ駄目だよ」

河本は雪枝のポーズをつけるとシャッターを切った。

「雪枝、これが終れば、気晴しに少し面白い処へ連れて行ってやろう。」

雪枝は河本を見て媚るような微笑をかえした。

彼等は横縞のシャツを着てツイストを踊る世代でもないし、深夜、酔いつぶれて、喧騒する連中にも縁がない。勿論、麻薬密売団に

も、グレン隊にも、又ニセ札造りにも何の関係もない。表面はなんの暗さも影もない真面目な紳士の集団なのだが、ある時間ある一定の場所に集まると、異常な突然変異を起して、ジギエル氏がハイド氏になるのだ。人名、場所、地名について、はっきりそれと指す事が出来ないのは、その内容上止むを得ない事とはいえ、残念であるが、河本は雪枝をその夜、小さなバーへ案内した。大阪新興歓楽地帯の一角、永楽橋筋に、そのバーはあった。

そのバーのカウンターに肘をついている人々は殆んどが、きちんとした身なりの中年の紳士ばかりだ。然かも、高級ホワイトカラー族と言ったタイプやアーチスト、とも見られる人達が思い思いの姿勢で、弱い酒を飲んでゐる。弱い酒だと言う事は、あとでわかった事だが、この紳士族と呼ばれる者達は、いい合せた様に酒が飲めないのだそうだ。おまけに煙草もあまり好まないようだ。

この妙な雰囲気のあるバーのマダムは小柄で眼の細い、肉感的な感じのする美人で、それにもう一人、女高生のようなタイプの女の子がいるきり。二人きりで大勢の客達を、何の無理もなくさばいている。他のバーに見られる

ような女の嬌声もなければ、客同士の話し声も聞き耳を立てないと分らないくらい低いのだ。煙草を吸っているのは、河本とバーのマダムだけのようだ。空気もにごってない。雪枝は河本の傍でビールを飲んでいた。

「このあいだの絵、いかがでした」

とマダムが中年の紳士に聞いていた。

「ウン、あの一流の絵書きの絵か、気に入ったから大事にしているよ」

「そう、ちゃんと、壁に吊るしてある」

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F等各種の文献、資料を御所持の方で御提供可能の方は御連絡願います。誌上発表の分につきましては、出来るだけの謝礼を差し上げたいと存じますので、文献誌としての本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少に拘らず御提供願います。写真、絵画、文章、パンフレット、広告、スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結構です。御希望により使用後資料は御返却いたします。

本誌編集部

横にいた、連れれの一人がそう言って、ふくみ笑いをした。

「マダム、この次の会には、この子も、連れて行っていいかなア」

河本はマダムにそう話しかけた。この子と言うのは、雪枝の事らしい。マダムは改めて雪枝を見詰めた。

「ほう、そりゃいいなア、新鮮で、ぜひ出席しなくちゃ」

と中年紳士、雪枝の腰元をチラッと見て言う。すると他の紳士、

「写真屋さん、悪い人だね。何も知らない子を引きずり込むなんて——」

と低く言う。

「ところで、今度は何時？」

マダムは河本の問いに答えたが、声が低いのでマダムが答えた日は、はっきり分らなかった。客達の話は一見何の変哲もないのだが絵と言うのは、このSM族の特別グループが観賞するSMの絵なのだ。Sとは、サデイズム、Mとは、マゾヒズムの事だと言う事ぐらい、読者は先刻ご承知の事であろう。

河本はS・Mの世界には顔の広いサムライだった。雪枝は別に何の事も知らず、河本達の話の聞いていた。マダムがその細い眼を一

層細くして微笑みながら河本の方へ寄って来た。河本とは勿論、顔なじみ、否もっと深い仲かも知れない。

「この方、お名前何んていうの？」

マダムは河本の耳元で囁やいた。

「ユキエ、マニヤかも知れない」

河本はそう呟やいた。雪枝はマダムと初対面。さて、いよいよ、出陣、SM族は何の連絡もない。秘密の会合はたびたび持たれても常の席上でするような名刺の交換は行なわれない。したがって、名前や肩書きを名告らない事が、SM族のエチケットでもある。

それは、その会の主催者だけが知っていい事で、会員達は、自分の横に坐わっている人物が何処の誰であろうと関係ないのである。作家。新聞記者。雑誌の編集長は絶対と言っていい程、この中に入る事は出来ないらしい。指定の七月一日、時間は勿論、真夜中の一時。場所、これは、この会の性質上、発表は出来ないが、只、尼崎の砂子高級住宅街だと言う事だけ書いておこう。商売気を絶対に出させないのが、この会の掟だそう。タクシー一台が真夜中の街を突進する、迷いもせず、大きな門構えの邸の前に着く。車には、運転手をのけ、四人、河本と雪枝、そし

て中年紳士二名、招き入れられた奥まった部屋には、三人の紳士がいた。薄暗い照明だ。十二畳位の洋間に、クッションのいいソファを並べて、誰一人話すものもない。七人はその部屋に静かに坐わる。雪枝のほか女は誰もいない。ここでは知らぬふりをしないと、いけないのだ。それが規約なのである。

やがて、三人の男女が静かに入って来た。バーのマダムと女高生タイプの女だ。男は、この主人と見える。時計を見ると、一時三十分。クーラーが音もなく回っている。部屋の中は暑さを全然感じさせないのだ。ドアに内側から鍵が掛けられると人々は黙って立ち上がり、坐っていたソファを重そうに壁ぎわに運ぶ。絨氈を敷きつめた部屋の中央に四畳半ほどの広さの空間が作られる。用意されていたスポットライトが、その四畳半程の広さのフロアを照らす。周りを男達が囲む。雪枝も河本の横へ坐る。一体この中央で何が始まるのだろうか。マダムが口を切った。

「では、はじめますが、初めに今日はまったく新しい、そう新人が皆様のモデルとして、出席されました。その名は雪枝さん」

雪枝はハッとした。河本を見詰めたが……「恐がる事はない。大人しく言う事を聞けば

それでいいんだよ」

と言ひ聞かす。男が二人雪枝の傍へ寄ると有無も言わず、両腕を取り、中央へ連れ出す。雪枝は、その時、ローンのワンピースを着ていた。若々しいスタイルだった。男二人は、黙って雪枝の白ビニール製のバンドを外して、背中のホックを外していた。そして、雪枝は両手を上げさせられ、一気に、ワンピースを身体から剥された。雪枝の美しい、ロングヘアは、くずれ、後ろにひとまとめに髪を束ねた、そのまわりの小さな造花の飾りもワンピースと共にについて行き、レース飾りの白いスリップ一枚となった。

雪枝は、決してグラマーではなく、バストは薄く、やせすぎの身体を持ち主。男二人はスリップも外し、雪枝は、ブロードのブラジャー。パワーネットのパンティガードルだけとなった。勿論、雪枝は、この様な姿にされるまで、相当、絨氈の上を転げまわった。然し、男二人の力には勝てなかった。

肩の骨が出て、痛々しい程、細い腕。男達は雪枝のそんな姿態から、まだ、ブラジャーを外す気らしい。これには雪枝は、相当あばれた。然し、結果は悪く、ブラジャーも簡単に外されてしまった。両手を後ろに回わし、

少し胸をそらしている雪枝の、まだ成熟していない様な胸の隆起を、紳士諸君は見詰めている。違う男が、部屋の隅のカバンの中から、新しい絹のロープを取り出した。これで雪枝を縛る気らしい。雪枝は自分の肌を誰にも見られなくなかった。恥しいというより、自分でも肌は、自信がなかったのだ。然し、細い身体だが、やはり、若い頃、と言っても雪枝は若い、スポーツをしていたので、細いながら、このきゃしゃな中にも、伸びやかに引きしまった体の魅力が、又格別というところ。

雪枝はパンティ一枚で、高手小手に縛られ両脚も、束ねて縛り上げられた。そして絨氈の上に転がされ、スポットライトを浴びさせられた。雪枝は、ついさっきまで何も知らなかったが、然し今、こうして緊縛されてみると、異に掛ったんだわ、と思うばかりか、この集団の凡その遊びの狙いもわかった。雪枝は本当に、生まれて初めて縛り上げられた。この自分の姿を見られると思うと、気が遠くなる様だ。

教員から、ヌードモデル。そして、大勢の見守る中で今、縛られている。ヌードモデルより、恥かしい思いだった。然し、今となっ

ては、もう、マナイタの鯉同然だ。観念するより方はない。雪枝は縛り上げられた時、顔を伏せ、こう考えていた。腕が痛い、少しでも動かすと、凄く痛む。そして考え込むのはやはり自分の今まで生きた生き方が間違っている様に、そして自分が、馬鹿に思えてくるのだった。然し今の雪枝にとってはもう観念するより方法はなかった。

教員から墮落した当時から、雪枝は、人間の屑同然なのだ。雪枝は、痛い腕をじいっとこらえ、スポットライトを浴びていた。さて雪枝は、女高生のような可愛い感じの女によって、苦痛の火蓋は切られた。その女は、バーで見た時とは、まったく人が変わった様に雪枝を責めつけ

る。赤ちゃんが乗る木で造った馬を、中央へ運び入れた。出されたのは、赤ちゃん用としては、大きすぎる。これは、明らかにこの集団の為の造り物だとわかる。木馬は少し変っており、背は、丸いパイプで造ってある。一

見サドルのない自動車のようだ。雪枝は、脚の縛りを解かれ、木馬に跨がらせられた。脚は床に着かず、宙ぶらりん。そして脚は、束ねて縛られ、両腕は木馬の尾の棒に後ろ手に縛られた。雪枝は、真っすぐ立っている。然し、その時

雪枝は、思わず大声を出した。木馬が上下に激しく揺れ出したのだ。相当ひどい苦痛が雪枝の全身を襲ってくる。男達は雪枝の全身の動きを見詰めている。誰一人、笑う者もなければ、目をそらす者もない。

静かな部屋の中で聞こえるのは、雪枝の悲鳴ばかり、泣いているのか、笑っているのか奇妙な悲鳴が続いた。緊迫したひとときが終ると、雪枝は自由の身体で床の上に転がっていた。マダムはつと立ち上ると、グッタリしている雪枝を抱き起し



手拭で強く猿轡をしてしまった。雪枝の顔はくびれて、まるで、引きつった様になっていた。雪枝は又、後手に縛られたが、今度は脚は縛られなかった。雪枝の前へ、男が二人、漬物石の様な丸いコンクリートの固まりをもってきて、床の上に置く。その丸石は高さ、二十センチばかり。上に、鉄の輪が取付けてあった。

雪枝は、膝を曲げて坐らされ、首に犬の首輪を取付けられた。その首輪には十センチ程の短いクサリが着いていた。丸石の上の鉄の輪に、クサリがはめられ、雪枝は海老責めのような姿になり、尻がいやでも上がる。雪枝は、その時、目に涙が光っていた。全員が、鳥の羽根を手にとっていた。これで、雪枝をくすぐると言うのである。先ず一人寄って来

て、雪枝の首筋を、羽根でくすぐる。雪枝は尻を少し上げ、こそばいのを耐える。次の者は、横腹へ。雪枝は、身体を横へやる、然し首が痛くなる。三人目の者は、下から手を突込み、乳房へ、これには、雪枝は、膝を割り身を崩して、頭を石で打つ。次は、背中、次は、足の裏、これには雪枝は、尻に力を入れおならをしてしまった。次の者は、顔の真中鼻の穴をくすぐる。

雪枝は、尻を揺って耐える。七人目、この家の主人である。手のひら。ここで雪枝は、腕に、ロープのあとが強く残った。次は河本である。河本は、腿をくすぐる。続いてマダム、女高生タイプの女。雪枝は、九人の男女に気が狂いそうになるまで、擦られつくした。

雪枝は本当に死にものぐるいだった。この絶妙な味わい、一度体験すれば、恐らく二度と忘れることは出来ないだろう。それ程、ここで与えられた印象は強烈だった。その夜の奇妙な体験は、これで終ったのではない、一カ月に二度位は、人々の寝静まった深夜に、こんなクレジイで、馬鹿気た会が開かれたのだった。

戸島雪枝（三十歳）の談。

私が、五月の中旬、友達の柴島令子の家に行き、そこで偶然奇譚クラブを見て、昔の自分を思い出しました。私は今、平凡な家庭の妻として、和歌山市の郊外で二つ年上の夫と暮しております。奇譚クラブを拝見して、思いつく事、しばし、こうして、私は、私の体験した、事を書き、資料として、柴島令子に渡しました。勿論、この稿に出てくる河本氏は仮名であり、今は、東京の方へ行っておら

れます。この三月に、五年ぶりに逢いました。会の人々は、何処で逢っても、知らぬ顔です。今はもう私も三十歳、以前のように、細くありませんが、でも、あの頃の若々しい魅力はないと思います。今まで七年間と言っても、私がこの会を離れたのは、五年前です。令子が私の体験したことを雑誌に出すというので、書き足りないところは、色々と話して上げたので、資料が多くなったと申ししております。

◎読者の皆様へのお願ひ◎

○電話にての問合せや照会等及び直接のご訪問は固くお断りいたします。連絡や通信はすべて書面にてお願い致します。面識のある方以外は、電話と訪問は受け付けませんからご諒承下さい。

○住所氏名年令職業用件などをご明記の上事前に書面にてご連絡下さった方には、時間に余裕のある限り、つとめてお逢いするようしておりますから、ご遠慮なくお便り下さい。

○常々お願いしている甲斐があり、最近読者通信のヨコ書きは殆どなくなり喜んでおります。ヨコ書きは全部没になってしまいますから悪しからず。尚、用紙は問いませんが、なるべく行間をあけて下さる方が好都合です。

私のゴム・プレイ

梅川幸子

奇クの愛読者の皆様、並にゴムマニヤの皆様、私は38才のゴムマニヤの女です。

三十七年九月号の読者通信に「ゴムマニヤのプレイ」と題して梅川幸子の名をつけていただいて、私の拙い文がのりました。それ以後の本誌にゴムマニヤの方々の告白や記事が

多く載る様になって毎月楽しみに愛読させていただいております。

何でも津田亜紀子様や森下雨奇男様の文章は、ただただ圧巻でございます。一人暮しの淋しさを奇クとゴムプレイに慰めている今の私でございますが、私の行っているプレイについて書かせていただきます。

先ず身のまわりの品は、次の物を用意します。

(一) ゴム手袋

お台所やお洗濯に使う色物のゴム手袋で十分です。

(二) ゴム長靴

これは農家の人が田植仕事や魚つりの時によくはいている茶色い裏表共に総ゴム製の長

靴です。底が地下足袋のように平らたく、そして爪先も地下足袋のようになっていて、腰までとどく様に長く出来ています。文数は自分の足によく合ったものを選ぶことが必要です。

(三) ゴム引きレインコート

近頃では都会では全く見かけなくなりましたが、羽二重や絹の裏にゴム引きしたレインコートです。五、六年前迄は、よく流行していたもので、この品についてはマニヤの方々がよく御存知でしょう。

襟の形や釦の位置で何種類があり、いずれもフード、ベルト付となっています。大きさは、普通は「44」サイズですが特大の「46」サイズがあり、胴まわりも丈も非常に大きく

読者体験記





ゆったりと出来ています。私の持っているのは全部この大きな「46」サイズで色は赤、ピンク、ねずみ、緑、茶など五着揃えております。(いずれもフード、ベルトは失くさないよう大切にしています)

(四) ゴムマント

ゴムマニヤの方々の告白に、何故あまり、このマントが出てこないのか不思議です。私はレインコートよりむしろ、このマントの方が好きなのですが……。自転車に乗った男の方が着ているのをよく見かける黒いゴム引きの防水マントで、裏は茶色いごつごつとした木綿地です。

これは男女物の区別がなく、大きさも一定しています。勿論フード付です。

(五) ゴムマスク

薬局で売っている極く普通のものです。以上の品を用意します。

これからプレイに移りますが、ゴムマニヤの方々の告白や体験記と似た所もあると思いますし重複してもいけないと思えますけれども御参考までに筆を進めます。

プレイをする時間は夜中の午前二時頃、テレビの深夜放送が終って一息ついた頃に、はじめます。先ず着ているものを脱いで裸になり、鏡台の前に立って自分の姿を鏡に写しな

がら、ゴムマスクをはめます。(息が出来るように鼻を出しておきます)それからゴム手袋をはめ、腰まで届くゴム長をはきます。ヒヤリとしたゴム長の感触が快く両足を包みます。

その上からガサガサと音をたててゴムレインコートをまとい、腰のベルトを結びフードをかぶります。小柄な私がこの姿になると、レインコートの裾が足首までかくします。

その上からゴムマントをすっぽりと羽織りフードをかぶり、フードについているベルトを締めると、私の身体は完全にゴムマントに包みかくされてしまいます。私はこの自分の姿を鏡に写して眺めます。

黒いゴムマント、魔法使いのようなそのフード、ゴムマスクにかくされた顔、わずかに鼻と眼がフードからのぞいています。ゴムマントは引きずるように長くゴム長をはいた爪先が、ちょっぴりマントのすそからのぞいています。(レインコートやマントのボタンは

全部行儀よくきちんとはめます)

それから……

雨の降っている場合から申しましょう。

そっと戸を開けてまっ暗な雨の降る戸外へ出て行きます。

夜半の激しい雨はどしゃ降りになり、その溝は湧き立つようにあふれ、泡を立てています。暗やみと雨の音にちょっと恐怖を覚えますが、そこは勝手知ったプレイのことゆえ、田圃の方に歩いて行きます。

(私の家は街はずれです。人目につかず助かります。)

雨はしだいに激しくなり、音を立ててゴムマントをようしゃなくたたいて、滝のように流れてゆきます。息をはずませる度に口にニチャニチャと吸いついたりふくらんだりする

【伝言板】

○六月八日消印にて切手二〇〇円送られた愛知県海部郡七宝郵便局留御指定の方、封筒にも文中にも御氏名がありません。○六月二四日消印現金書留にて三〇〇円御送金の方、名古屋市南区大同郵便局留の指定があるだけで御氏名がありません。○尚切手を貼らずに投函された当社宛郵便物は受取拒絶いたします故御注意願います。

ゴムマスク。素肌になつわりゴムレインコートの冷たく、そして汗ばむとべとつく感じ、腰まで届くゴム長のくすぐったい様な歩きにくい感じ、そしてそんな姿の私をすっぽりと包んだゴムマントを打つ雨の音。

雨の中をしばらく歩き続けます。

ゴムマントのフードから、しずくがしたたり落ちて顔やゴムマスクをようしゃなく濡らします。やがて小川のほとりの草の背高く生い茂った所にやってきました。

まっ暗な天地、激しい雨、ゴム引雨具に包まれた小柄な女ひとり、私は何度、このプレイに我を忘れた事でしょう。

私は立ったままの姿勢で少し股を開き、ひざを曲げ上体を少し前にかがめます。ごらんなさい。ゴムマントを着た女が、次第に体を奇妙にくねらせ、雨にうたれているのではありませんか。

気がつくとき汗でゴムレインコートもゴム長も、ゴム手袋も、ゴムマスクも、体にびっしりとまつわりつき、ゴムマントを打つ雨が滝の様に流れています。やがて草をふみ分けて小川に入ります。(勿論そのままのゴムづくめの姿で――)

冷たい水が次第に体をひたし、ゴム長に流

れ込み、腹部から胸のあたりまで水につかります。(深い所で胸のあたり迄の所を前もってよく探しておきます)

さて、それから、胸まで水につかって、さっきのプレイを今度は小川の中で、もう一度行います。ひざを曲げて体がかめると首まで水につかってしまいます。

何という奇妙な姿でしょうか。

そして、濡れねずみの姿で家に帰り、お風呂に入り、ゴム雨具の手入れをしてから、ぐっすりと寝るのです。

これが雨の夜の場合ですが、雨の降っていない夜の場合は、やはり前述の通りゴムづくめの姿になって、ゴムマントの姿を鏡に写しながらお部屋の中でプレイをします。後はそのままの姿でお風呂に入り、お湯の中でもう一度プレイを楽しみます。

以上が私のプレイでございます。

編集部の皆様にお願いがございます。というのは、私のプレイぶりをグラビア写真にして頂けないでしょうか。モデルの方は小柄で肉づきのよい方を希望します。

読者の中でゴムマニヤの皆様、告白なり体験なりをどしどし発表して下さいませ。

(京都市右京区西院八梅川幸子)



高志

お互いが育った頃は只今と違って世相そのものが、ひどく封建的であり、万事が窮屈であった頃とて、昔から女性につきものの言葉である「オテンバ」だから、どんなに暑くともショウツパンツ一つで外を歩くななどという離れ業は到底当時は許されませんでしたし、まして今ならすっきり露出しても、少しもおかしくもない脚でさえ、不用意に着物の裾からのぞくことすら嚴重にいましめられており、何かと風俗を乱す恐れありとされていたのです。

だから姉の所謂風俗壊乱的な姿などというものは表でだっでは見ることなかったのですが、それでも長い間には、たった一人の遠慮の要らぬ弟だという気安さもあったのでしよう、思いがけなく、ああ暑いわネ……とかワア、とうとうこんなに蚊に刺されちゃったわ……などつぶやきながら浴衣の上半身を惜しげもなく脱いだり、ある時は立膝のまま真赤な縮緬のお腰がこぼれるのもかまわず平気で裾を捲くったりしたものでした。

そのたびに私は当時の流行挿絵画家で一世

私には今は、もう逢うすべもなく悄然と、この世を去った出戻りの、しかも、たった一人の姉がありました……。

この姉と私の二人姉弟は一つ家の中で世間で云う家族構成の要員である『子供』というには余りにも数が少なく、また性格的には、お互いが余っ程寂しかったと見えて、小さい

時から、ろくすっぽ喧嘩らしい喧嘩もせず、従って姉と云うよりは寧ろ母親に似た感情でそれこそ云いたいたい放題のことをお互いにぶちまけたりして暮していたのですが、今思うと姉には何処か一抹の憂れいがかくされ、人に云われぬ性癖というものがあつたようでした。

を風靡した竹久夢二画伯の描く何処か頹廢的な絵のようなある種の『やるせなさ』さを相当強く感じたものです。

こうした感情が物心がついてから、しかも年月が経つにつれ次第に姉弟の間柄を超越して来たそもその根拠は、私自身にもよく判らなかつたのですが、姉が嫁に行ったあと、実は姉が他家から貰われて来た赤の他人の養女であり、弟の私が実子であったことを知らされて、当初はただ無性に口惜しく、姉はともかく、私はしばらくは毎日土蔵の蔭で空虚なおもちで人知れず泣いたものでした。

この姉が何処の産で、どういう仔細で家に貰われて来たのか、ついぞ両親に訊ただす機会を失い、未だにとうとう判らず終いになりましたけれど色が特別抜けるように白く、肌が際立って滑らかな処から見ると、おおかた北方の雪深い国の産れだったのでしよう。

俗に『色白』は七難かくすというたとえのように、姉は春秋のきものにせよ、洋装にせよ、齡頃になってからは着ごなしが非常にうまく、いつも楚々とした東洋美人的な面長の顔に微笑を浮べているのでした。

この娘でもあり姉に縁談が持上ったのは、私が十五になったばかりの年でした。丁度九

つ違いですから姉が二十四才の時であり当時ではいささか婚期を失したいわば女のうば桜でもあったのですが、それでも一世一代の厚化粧をし、山一つ越した町の素封家のあととりに折柄庭一面に咲き乱れる萩の花を踏み分け、冷めたい満月の光を白いつのかくしの上にいっぱい浴びながら幾張りかの提灯に囲まれて嫁ついで行つたのです。

この時の情景は取り分け日本情緒溢れるばかりだったと見え、折よく展覧会出品の絵の素材のため私の家に逗留していたさる絵画きさんも客分ながら古式にのっとりた伝統の婚礼模様をつぶさに傍観して、ひどく感無量のおもちでいたようでした。

申し遅れましたが、こうした姉との関連事を直接ご披露する舞台や背景ともなった私共の家は先祖代々の古い屋敷でしたが、街道筋のものとしては数少く残存する老舗で当時は旅籠屋兼居酒屋といったやや間口の広い商売を営んでいました。そしてその頃は年老いた両親もまだ健在であり、また一方暮らし易い世の中でもあったせいか、余程の借金でもない限り人並みの生活も保証されて、特別新聞の三面記事を賑わすいまいましい事件も無かつたようでした。

処が、姉が嫁いで丁度三年目のある晩、その日は風がひどく、おまけに雨まで土砂降りに降るさ中に忽然、乱れ髪で身心ともに憔悴した一人の女——姉が飛び込むように戻って来たのです。

その時の表向きの理由はともども愛し愛されもした良人の思いがけない急死に逢い——その実はみじめな発狂死ということがあとで判つたのですが、一先ず心と身体の安住を求めて戻って来たというのでした。

当時、離れて臥床^{ねた}つ限りの父と時々涙ながらに語っている姉の後姿を今でも、はっきり覚えております。

姉が帰って来てからというものは、たまさか外に出て無責任に云いふらす町内で口沙汰評判さえ気にしなければ、元の鞘に戻った昔の家族暮らしが蘇がえったよう、姉自身もつとめて淋しさをまぎらせていたようでした。ただ、使用人の手前何かにつけて出戻り娘だという言葉が先に立つようでは一事が万事可哀いそうなので、ひよっとすると、これが最後の心ずくしになるかも知れない父母の温い指金で奥まった土蔵の隣にささやかな離れが新築され、兎も角そこへ傷心の姉が暫らく寝起きすることになったのです。

姉が戻ってから翌々年の暮に申合せたように両親が逝ってしまいました。

幸い土地柄親戚縁者もほど遠くない処にかたまっていましたので旧式ながらも葬儀万端を終ることが出来ましたが、さて急に家の中から年寄りが居なくなつてとうとう、さながら荒野の古寺のように徒らに柱と敷きつめた畳の数ばかりが眼について、さしもの母屋も空屋同然のようでした。

店舗の方は後見人の伯父が町の有力者でもあったためなのでしょう、別に逼塞もせず、却って空気が更新され以前よりは寧ろ盛んになった位でしたし、私も一応若旦那として折々は、さまざまな酒席へも顔を出したりして何んということなしに若い娘達から騒がれたりしていました。

離れの別宅に住みついた姉は月日が立つにつれて次第に妖艶さが増し、そのため「お雪さん——姉の呼び名、を今更実弟である若旦那すなわち、私——の嫁とする訳にも行くまいが、何もこの儘放つたらかしにして置く理由もないじゃないか、第一、まだ水々しくって若いんだし、それにあの通り美人だものねえ……」などと町の人の口喧ましさは善意に取れば本人に取って有難い厚意から出た助

言のようでもあるし、悪く解釈すると、あわよくば脂ぎった狎々おやじの妾奉公位な処を暗にほめかしていたのかも知れません。

当の私自身はどう思ふかつて……それは暫らくおあずけとして置きましょう。さて、こうした噂話を聴いてか聴かずか、そんなことはおくびにも出さず、姉はほとんど毎日といつてよい位、こまめに動き、根気のいる針仕事からミシン踏み、さては尻を端折つて裾から赤い花模様のお腰しをヒラヒラさせながら廊下の拭き掃除などをやっていました。

ある日、風呂上りで珍らしく長火鉢の横に坐つた姉が洗髪を櫛けずるような恰好をして

「ねえ……こうちゃん（私の呼び名）、お盆だから、こんなもの着たらおかしいか知ら？ 見て頂戴、あたしがお嫁に行く前にこしらえて貰つた着物なんだけど……。それに男のあんたじゃ判らないだろうけど、これでも西陣一越の矢絣つていうの、ホラ、この柄昔からお屋敷のお腰元がよく着ていたでしょう。これにあれを……（と別な白襟付無地緋縮緬の長襦袢のたたんであるのを指して）下に着てこの黒帯を締めると、あたしでも御殿女中に見えない知らねえ？ 見えるって……本当に

見えたら、それこそ大変ねえ。こうちゃんを一層毛むくじゃらにした何万石かのお殿さまがすぐ目尻を下げて飛んで来て……ホホホ、いえいえうちの若旦那様に限つてそんな事はありませんとも……。

はしたない腰元風勢なんぞに手など出すものですか。でも亡くなつた私の旦那様はともとてもお好きでした、おいッお雪、あれを着てみるよ、そして昼間から着せられて……ホホホ、馬鹿ねえ、とんだ仏様の供養なんぞしちやつて、御免なさいね、髪洗い序でに男のあんたにつまりらぬこと相談したりしちゃって……女って、つい甘えなくなるのねえ……」

「いいじゃないですか、お雪姉さんの腰元なら惚れない方が余つて程どうかしてますよ。一寸頼らない僕の殿様だけど、大いに力になつてあげますよ、どうぞお召替なすつて下さいちつとも遠慮は要りませんよ……」に「そう」とうなずいた姉は、別段年齢頃の若い男が、そばで一部始終を見守っているという意識を一向に持たないらしく、私の前で惜し気もなくパリリ普断着の着物を脱ぐと手早く中腰となり、赤のメリンスのお腰の上に同色の緋縮緬の裾除を巻き白の肌襦袢をはおつて、

その上からさい前の燃えるような赤重目一越の長襦袢を重ね胸下に伊達巻をくびれるように締めたのです。

そして亡夫が無生に好んだという紫矢絢の着物を着たのですが腰元の着るような裾曳きになっていないので本来なら当然お端折りを



する処を、わざとパリリと裾前を垂らし「どう？ 何処から見てもくたぶれ切った奥女中さん……でしよう？ どう折檻しようにも折檻のしがいのないような、ホホホ……」と半かば自棄的な笑い皺を眼尻に寄せながら部屋の中をあちらこちらと歩き廻るのでした。

そもそも、こんな素振りを見せる姉自体の心根が判らない私でもなかったのですが、娘時代から異常な読書家でもあり、一方性に対してやや晩成型であった私に較べてやれ「近松門左衛門」だの「十返舎一九、食満南北」などと歌舞伎全般からいわゆる男女間の世話物人情物に人一倍詳しくあった姉にしてみれば、ただ漫然とした目標なしのゼスチュアでもなかったのでしょうか。

こうしたことがあって以来というものの、今さら亡夫の亡霊に悩まされた訳でもないでしょうが、姉が時折異常と思われる素振りを見せ始めたのは事実で、またそれに安易に歩調を合せようとした私も軽卒だったかも知れません。一番身軽な夏の行水……と云っても今の若い人には恐らくピンと来ないでしょうが居間の縁側に程近い庭先に設けられた形ばかりのすのこの真ん中に置かれた檜盥の湯の中に浸って立ったり坐ったりする脂のよく

のった白い女の肉体は夕暮れに咲く夕顔のように一段とあやしい光を放って美しいものでした。

お産の経験のないふっくらとした両乳房、心持ちこんもりと出たお腹。そして腰から脛に至るなだらかな曲線は、そのままが日本画家深水の描くデッサンかと見紛うばかりで、かい間見るその道の久米仙ならずとも絶好な一幅の浮世絵を身近に觀賞するようで、その都度ひとしお心のときめきを誘うのでした。

前にも一寸申上げた通りこの姉と私との間には何んの血のつながりありません。だからといって姐さん女房を持つような觀念を抱くべく余りにも身近かに暮していたため、たとえ変則的な愛欲の渦に巻かれようとも、みにくい溺死にも似た結末に対してはおのずと自制の心が湧いていたのです。しかしよそ目には何んと見られようと当時決して夫婦ではなかったこの姉との同居生活の想い出は今思うと何ものに較らべようもない程懐しいものでした。

こんなこともありました。それは秋と云ってもひどく寝苦しいある晩のことでしたが、姉の方から突然奇想天外な申出があったのです。

「こうちゃん、今晚あたしの身体をきつう縛って呉れない？このところ何んだかしきりに夜中にうなされるようだし、ひとりでにお床の上であばれたりするのよ。きつとコンコンさまでも悪いたのか知ら？」

「縛るって……どうするんです？」
「教えてあげるわ、変なお願いだけど聴いて下さるわねえ……」

こんな遊戯ごとにしても姉は少しもためらわず卒直に云い張る一面を持っていました。

夜になってから私は半ば好奇心にかられて姉の部屋を訪ねてみました。今しがた夜廻りの拍子木の音が通り過ぎたので、もうかなり夜更けだったかも知れません。白シーツの寝床を枕ごとはいしの方に寄せ狭いながらも総檜造りの部屋の丁度真中の処に姉は端然と坐っていました。鶴の模様を鹿の子の総しぼりで染めあげた燃えるような真紅の長襦袢に黄地に紫の藤の柄の伊達巻を胸下にきちんと締めて、夜寒に備えてか、はいた真白な足袋の色が凄く印象的でした。私が近づくと

「こうちゃんも早くいいお嫁さんを貰わなくっちゃいけないねえ……、そして一人前の大旦那さんになって早くお家を継いで下さいねさア、それじゃ、あたしの云う通りにして頂

戴」

と云いながら、いつの間に用意したのか、白い木綿よりの縄紐を取り出し

「まず初めにあたしの両手を後ろ手にしっかりと縛って頂戴、かまわずきつくくくって頂戴……、このまま仰向けに朝までならすぐ痛いけどすぐ横に臥せるから大丈夫よ。女のひとを縛ったことはないの？ そう……？ そりや悪かったわねえ、でもいい経験になるわよ、後手に縛ったら今度は別の紐で三、四本たばにしてあたしのお乳のところをぐるぐる巻きに縛って頂戴、きつく、きつく……それじゃまだ緩いいわよ、ぎゅっと曳きしぼるようしてくくって頂戴、お少し苦しくなってきた。もっと、もっと……そしたらさっきの手首の縄を胸の紐にひっかけて上の方へ曳きあげて御覧なさい。あたしの腕の骨が折れる位、もっと……もう無理ねえ、本当に苦しいわ、こうちゃん、逃げないで……最後まで聴いて下さるわねえ、あの人（亡夫）の言葉じゃないが女って、むごたらしく縛れば縛る程いいんですって……。何んて姉さんってお馬鹿さんなんでしょう？ 鏡を取って下さらない？ そうね、いつもだと身体のアちこち肉団子が出来る位縛られたんだけど……でも、

いいわ、上はこれ位にして、さて執拗な悪魔をこの女性から追い出すには、まだまだ生ぬるい。お腹も脚も、それこそきつう縛らなければなりませんわね。脚を投げ出したぶざまな恰好で御免なさいね。長襦袢の上からでも

いいけど縄目が身にこたえるには……長襦袢をめくってじかに腰の上からくるのかとても効き目があるんですって……。序でだからこの赤ちゃんの居ないお腹もきつく縛って下さいね……」



それから先は私も、まるで無惨絵のような姉の姿態をよう見つめることは出来ませんでした。

確か、この時はまた姉のすすめで手持ちのコダックカメラで写真を撮った記憶があるんですが、これも印画の無い処から、判っきりしたことは申し上げられません。

この呪文にも似た狂気沙汰は、その後姉がどうにか安眠出来るようになった為なのでしょう。その場限りになってしまいました。が、ふとかい間見る柱に寄りかかった姉の姿態とか真疑は兎も角、不用意に口から出たセリフ例えば痛いけどしびれる位な折檻を受けてみたいわ……などといった日常何気なく行われたものを、あれこれ拾い集めてみると、それはそれなりに興味深く、女の半面がうかがわれるのですが、これはいずれ機会を改めて申上げてみたいと思います。

処がそうこうしている裡に兼ねて流れて居りました町の噂の一つが身近かに起り始めていたのです。それは確かに誰かが云いふらしたことが的中したようで、名前からして少々古くさいキン兵衛とか一見若造りのご隠居さんで金貸し業を営んでいる先様

からは是非とも後妻にと話が持ち込まれたのでした。

人を介してのこの再婚談も当の姉にしてみれば、いつまでも私一人のためにまわりの人に迷惑をかけてはと思ったのでしようか、まるで人身御供みたいな後妻の座も案外すらと事が運んで、先夫と死別して丁度二年目、姉が二十八才の時にほんの身内だけでしたが、こじんまりと二度目の婚儀が行われました。

この時の模様は私が生長したせいか、何んだか非常にみじめな感じがして屠所に曳かれる羊のように無生に姉が可哀そうでなりませんでした。という理由の一つとしては姉が最早や女としては爛熟期の真盛りから少し下り坂でもあり、一方年輩者であるキン兵衛氏からの特別の要請もあって花嫁衣裳からして、二十代とまる切り違ったこぼれんばかりの色気たっぷり、長く裾を曳いたピシク地に桜の花びらをあしらった色直しの長着の裾からは、黄ろい裾裏地にコントラスト



も鮮やかな真紅しぼりの長襦袢がなまめかしくこぼれており、聞くところによると、当のキン兵衛はこの緋縮緬の長襦袢の下に同じく緋縮緬のお腰をしめた姉を山中の狒々猿が小娘をかかえるような恰好で早々と寝所へ連れて行ったそうです。

後でも一寸申上げますが、この日の姉の日記には、〃奥州安達ヶ原の一つ家に運ばれた

あたしの身体を〃云々と誌るされてありました。

まあ、腹を割かれなかったのが、せめてものことだったのでしよう。処が、このキン兵衛との夫婦生活は、そう長くは続かずそれからおよそ一年目に姉は勿論のこと当のキン兵衛氏も何故かひどく憔悴し二人の間には何んとかなくひびが入ったように見えたが、特

に姉の方は生れつき丈夫でなかったのが次第衰弱して瘦細り、あまつさえひどい肺炎まで併発するなどがもとで、とうとう二十九才の春、彼女なりに波乱に満ちた一生を閉じたのです。亡くなる前まで誌るされた姉の日記には絶筆として、『長かった奴隷妻よ、ほんとにさようなら……』と書いてありました。姉の一生は幕末の頃、玉泉寺に通った唐人お吉に一抹似通ったところがないでもないのですが、ハリスはまさかお吉をガンジガラメに縛ってまでわが意を通したという事実は一向なさそうなのに薄命の姉には歴然と、その事実があったらしく、それは兎も角、姉が逝ってから間もなく子供も居ないという理由で遺品として夥しい品物が先方から送り返えされて来ました。

もともと衣裳持ち、道具持ちとは思っていましたが、今ならさしずめトラック三、四杯という量で、両親の居ない実家の居間も再び道具で一杯になってしまいました。

丸三日かかってあらかた片付け女中の手を借りて兎も角衣裳やら小物を手始めに私なりに整理をしたのですが、物が物だけにそれに生前姉が愛玩した品は、たとえ一握りの物であつても姉の靈魂がこもっているようで、正

直な処私の方がすっかりグロッキーになってしまいました。その中で取り分け女の生命と云われる衣裳……悲運ではあったがそれでもきらびやかな婚礼衣裳、季節向のお召、訪問着、振袖、西陣の袋帯といった豪華で逸品ぞろいの衣裳三十点ばかりは売却するには余りにも惜しいので暫らく蔵の中に入れて保管することとし、かすかに姉の余香が残っている肌着襦袢類の下着は、たとえ裾がほころびたお腰であつてもくず屋に払下げることなく全部姉が愛用したタンスの中に生前のまま入れて置きました。

ただ、やや骨董品類に属する琴や三味線、日傘、雨傘、かんざし、ぞうり、その他日常生活のこまごましたものは、いずれも品質がよいので特に懇望する方も居って殆んど全部差上げて了いましたので、只今は何一つ残っておりません。

もっともそれらの中で姉の生涯の秘密を永久にとどめていると思われるものは二束三文みたいな物でも私の詮索好きな性格からつとめて散逸を防いだつもりです。

このようにして遺品を整理しているうちに日記類、感想文を含めた数十冊の図書類に混じって姉の玩具とも余戯の手慰みものと思わ

れるものが行李で三つ程出て来ましたが、令女界、女学世界、婦人の友といっ雑誌のスクラップ、丹念に蒐められた折紙類、刺しう、多少自分でも絵心があつたためか水彩画の数々がざっと行李で一杯、あとの二つの行李はどういうものか細紐で縛ってありましたので少々日が暮れて薄暗い部屋の隅でその紐を解いたのです……。

中にはピンクの布切れに包まれた黒塗りの木箱が入って居り箱は秘としるした薄紙でさらにその上を包んでありました。

私はこの木箱の中から、生前姉が人知れずしかも秘そかに丹精こめて愛撫したであろうところの、一つの精巧極まりない日本人形を発見したのです。

白紙で包んだ顔のベールを剥ぐと一見して市販のものでないことがすぐ判りました。つまり絵心があつた姉が描いた顔付であることに間違いありません。

丈の長さがおよそ六十センチ少々位で高島田の髷はこれれ襟もはだけて白い肩の肌もあらわにむかれた腰元風の女……。いや、ひよっとすると播州皿屋敷のお菊になぞらえたものかも知れません。勿論着物は紫矢羽根ですが立矢の帯は黒ではなく銀地に金糸で織った菊

花模様が多少違う点で、赤無地の帯揚げの端が垂れ下り白丸ぐけの締帯も片方が緩く下って腰の赤のかかえ帯の結び目も、ほどけんばかり……。しかもこの人形は到底人形とは思われないふつくらした両腕を後ろに廻わされて白い両手首は綾に細紐をかけられ、重ね縛りに縛られており、胸に廻わした二巻の黄色縄は縄目が見えない位に肉に喰い込んで縛ってありました。よく見ると後手に縛られた丁度帯の上あたりのところに二本のやや長目の縄が（人形用に造られた縄ですから、勿論本当の縄の何分の一かの小さなものですが）結んでありました。

私は恐る恐る、しかも丁寧に人形を両手に抱えて箱の外に取り出してみました。人形をそのまま垂直に立ててみると裾を曳いた着物の長さが一米近くもあって白足袋をはいた脚は、たちまちかくれて見えなくなりますが、裾を捲くると本式に縫われた緋縮緬の長襦袢があり、その下にはこれも寸分も違わぬ白腰布紐付の赤いメリンス風のお腰し湯文字が巻かれてあったのです。

そう云えば着物帯類を始め和装小物という小物は何処で作ったのか、足袋のコハゼに至るまで本物の何分の一かの精巧さで出来てお

り、じっと見ているうちに顔形まで次第に死んだ姉の顔付きになって来るのに錯覚を通り越してむしろ恐怖の感に襲われるといった有様でした。あとで箱の底から小さな豆しぼり手拭が見つかりましたので、このお菊人形は猿轡をかまされていたに違いありません。

実は私は表向きな人形の衣裳だけをあれこれ申上げた外に、この人形がただの人形でなく判っきりと姉である、姉の化身に間違いないと直感した証拠、しばらくしてつかんだきっかけを序でお話しなければならぬのですが、それは例えばその人形の脇の下、下腹部あたりを想像願えばほぼお判り下さることと思います。何故ならば姉の身体の一部始終は弟である私が一番よく知っていたからです。

少々長くなりましたのでこのお菊人形のほかに発見された一対の男人形については詳細な描写は略させて頂きますが、一人は顔の蒼白い白緋の部屋着を着た殿様風の風采——どうも先夫をもじったものらしく、今一人は二度目の老夫を暗示するような赫ら顔白髪の見るからに狍々おやじ風のご隠居風態の男でした。

さてあとに残った最後——三番目の行李は

初めから少々重く蓋を取ってみると案の状、人形の大道具類がぎっしりと入ってありました。

中でも比較的大きいと思われる四角な四つの柱、自然木のような長目の柱、そして屋根に続いて車井戸用のつるべのようなものが申合せたように出て来た以上、先き程の腰元風の女と想い合せて見ると、いよいよ以て姉の作である人形は車井戸に吊された腰元菊に違ひありません。

しかも、そのお菊は取りも直おさず死んだ姉自身を指しており、小道具の割竹や竹光を持った男役は狂死した先夫と二度目の夫である金貸キン兵衛であろうことがほぼ察しられたのです。

そう云えば姉であるお菊の股や肩に刺し傷やたたき傷が克明にしろされておき、時こそ違え二代に亘っての主人仕えに飽くなき責め折檻を受けたつめ跡をまざまざと眼の前に現出させたような感を深めました。私は夜の更けるのもかまわず誰も居ない広い部屋の中でまず車井戸を、ひっそりと組立ててみました。そして、姉人形を背中の中に入れて結び合せてあった二本の長い縄尻をつるべにかますと予想通り姉の身体は井戸の上に見事宙吊りにな



ったのです。

しかも、不思議なことに、割竹や竹光の刀を持った殿さま風の男と狒々猿のような老人人形は、まるで生きた人間のように、どのようなポーズでも出来るような仕掛けになっており、重心が下がって安定がよいので例えば車井戸の桁に片足を乗せ刀を上段に振りあげて見得を切らしても、結構持こたえる程の精巧さには重ねてびっくりしたのですが、敵役の男人形だけに下帯もちやんと嵌めており場合によっては嫌悪を催す胸毛や脚の毛なども上

品に本物のように植付けてありました。

私はこの手の込んだ一組の責め人形をしばらくの間、ただただ茫然と眺める一方、これらの人形が恐らく日数をかけて製作されだであらうその経過をつとめて姉の日読から探ろうとしました。

今回は姉の作った人形についてお話するのが本筋なので、姉が丹念に書き綴った日記類特に嫁入り後のものは前にも申し上げました通り十分整理の上、改めて御披露したいと思いますが、取敢ずパラパラと捲って、

それらしい処をぬき書きにしてご覧に入れましょう。

三月十五日 曇

× × ×

春めいては来たが桜の蕾はまだ固く薄ら寒かった。商談で来宅された村越さん(注、亡夫の取引先の商人)が帰えられたあと、良人から裏の納屋へ行けといわれる。まだ妊らぬは神仏の祟りとばかり梁に下り吊し責めを受く。経前(注、メンス前の意)のためかふしぶしがひどく痛んだ。夕食の折、主人の前で皿を取り落し数枚

を割ったが別にとがめなし。深夜文学評論を読む。

七月十日 晴

むし暑い。

川上さん(注、隣人らしい)から頃あいの梅を頂戴した。早速焼酎漬の準備をする。虫ぼしには少し早かったが矢絰が良人の眼にとまり裾廻

しを取り換えろといわれる。

午後、中井医院で診断を受ける。乳がんではなくほっとする。夜、書院の前（注、ここに昔風の車井戸があった）で例の矢絣のまま松の木に吊されたが身体が廻って裾がひらき鼻持ちならぬ女コマだと良人に笑われた。

九月二十四日 豪雨

台風の前触れか、夕べからひどい雨。風邪をひいたかね（女中の名）と母屋の戸を全部釘づけにする。真っぴる間、良人から帯を解けといわれ、お腰一枚で書院の前へ行く。後手にされ初めて車井戸に吊された。ずぶ濡れの良人と一緒に築山をめぐり、猿すべりの樹に縛られた。

夜中、お腹が痛み苦しかった。同窓会誌の原稿の催促を受く。『生ける人形』人形の空想……。

十一月二日 曇時々晴れ

栄通りの書店から先日頼んでいた人形の本がきた。早速衣裳の柄を注文しておいた。午後この間フラッシュの故障を理由に車井戸の場撮り直おし。荒縄で矢絣の上から後手にされ長襦袢の肩を出す。島田のかつらがズリ落ちそう。割竹というもので初めて打たれた。お腹が痛む、妊ったのかしら？

二月十七日 雪

かね暇を取って帰郷する。中井先生によれば良人の異常発作は血統と結核からと仰言った。屑簾から血痰の紙を発見する。大雪となる。化粧する手がかじかんで、ようやく立矢の帯を結ぶ。二尺の雪に冷めたく降り残さされた車井戸で荒縄と麻紐で後手にされ井戸の中に吊された。手と足の感覚なし。後、雪中にうつ伏せの儘雪で埋没……生前の数駒の間に飛ぶ（注、生死の境を彷徨した意か？）

× × ×

以上、第一回目の結婚生活といわれる姉の日記をご紹介した序でに、続いて第二回目となったキン兵衛氏との再婚生活については勿論相当量のものがあるのですが、特に人形製作と関係の深いものを一寸申し上げておきましょう。

十月一日 曇

文学と現実との隔りは、わたしの人形についてでもいいえそう。主人の求めるものは、あくまでわたしの……（省略）と、わたしの性の表情だけである。にも拘らずわたしは敢えてそれを人形に托しようとする。この矛盾が堪らなくわたしを刺激する。深夜、人形の顔作り、三四回描き直した。腕の綿入れは少々持

てあまし気味。

一月一日 晴後曇、夜更けてみぞれとなる『コブ巻』って嫌やな言葉。でも仕方がなかった。帯を胸高に締め嫁入り時の赤い帯揚げをする。わたしなりに苦心した人形、ようやく完成。動かぬ人形とは別に動く盛装人形の方は床柱にくくられて晩酌のつまとなり、頃合をみて床に転ろぶ。白鷺城の井戸から腰元お菊、何とか同情しないかしら？

二月四日 曇

例によって長襦袢、そして最後はお腰一枚で晩酌のお相手……。男人形（主人を含めての）のポーズを考える。ひる前、西村さん（注、懇意筋の奥さん？）から奥様のご趣味は？ と聞かれて返事に困った。まさかお女郎さん以下ともいえず……。

先代の歌右衛門は、若く美しい数名の腰元を常時侍らせていたという。主人もきつとその類いに違いない。

五月十七日 雨

朝診察。身体が兎に角だるい。も早や老人（注・主人のことであろう）というせいもあって、烈しさが無い代りに衣の着脱が意のままになる人形以上に裸になれとのご要求。お小水以外は離脱はご法度がこのところ……。

後手に縛られる時に入れ歯が鳴った。人形は人形、お前はお前といわれる。

カルシウムの注射を打って戴く。

……以下略。

× × ×

まあ日記類は兎も角として私自身その後は折ある毎に博多人形だの郷土色も豊かな泥人形とか近代人形といったものを、つとめて見て歩いたのですが、潜在意識があるものか、どの人形もいふなれば姉作の人形に優るものはないと心秘そかに自負していたのですが、姉が逝った後、誰いうことなくこの丹精込めて作りあげた「責め人形」を是非拝見させて欲しいという申し込が舞い込む始末にはいささか有難迷惑でした。

展示会といえどこんなこともありました。町制十何年かの祝賀会の飾り物として生花、手芸品、絵画写真類と一緒に公民館みたいな処に出品した時は特別出品の歌舞伎人形として特に婦人会の人達に手伝って貰い、はだけた襟元、裾、帯のあたりなどは一応直して、大喝采を受けました。これに気を許したわけでもないのですが、行きつけの小料理店から、瀬戸物の招き猫代りに玄関に飾りたいと主人直々の懇請についで折れて一カ月ばかり貸

与したところ、場処が場処だけに、リアルに一層残酷美が誇張され、これを目あてにわざわざ遠方から来る客もあって、これまた忽ちその界限の評判になっていました。

どなたの作？ いや人形の着ている衣裳の縫い方が女性くさい、すべてが本物そっくりだ。是非譲れるものなら価格を問わず譲って欲しい、などの噂が立ち始めましたので、早々に手元に引取ったのですが、その間、さる新聞社のカメラマンにも撮られて当時戦争の雲行きで娯楽が非常に乏しかった新聞紙上にいい潤いとなったこともあったようです。

遺品として外に洋風の人形もないわけでもないのに、何故姉はこのようないわゆる責め人形に精魂を傾注したのか……。申し遅れましたが、小料理屋に飾られた人形の姿態に共鳴した客の注文で若くて美しい酌婦さん達が次から次へとモデル代りに供用され飲んで縛って寝るといふ三拍子に夜っぴいて客足が絶えなかったという事実は、勿論当時の厳しい世相や吐け口のない鬱憤などがからみ合っ

らせた精巧さには皆さん、ひとしお驚嘆されていたようでした。

私に取って、何物にも代え難かったこの姉の責め人形も定められた宿命だったのでしよう。昭和二十年の春に疎開先の空襲で、ひとたまりもなく焼失してしまいました。いや人形ばかりではありません、姉の豪華な婚礼衣裳も、美しい緋縮緬や総しぼりの長襦袢、部厚い丸帯と袋帯、総しぼりの帯揚げにダイヤの帯締めなどの一切も人形と運命を共にして灰となってしまったのです。

ただ幸か不幸か、手元に放ったらかして置いた行李の中から姉の少女時代の普断着だの肌着や下着の一部が焼け残ったのも、何かの因縁かも知れません。

姉を偲ぶ手だてとして日記を読み僅かに余香のある着物に、哀惜の涙を流したことは申すまでもありません。

最後に姉の名は堀川雪江、墓は如源寺にあって戒名は貞徳院革操慈雪大姉と申します。序でに私の名ですか？ 同じく堀川晃一と呼びます、夜長とは申せ思わず長談義を申し上げました……。そう語り終った彼は静かに煙草をくゆらせるのでした。

えせ巴里日記

……悦 虐 絵 灯 籠 その九……

万 田 不 仁

森の宝庫の寝間に

藍色の幕は黄色い息をはいて

陰湿の暗い暖炉のなかにひとつの
絵模様をかく

大手拓次「藍色の墓」

☆

L大学で仏蘭西文学を教えていた宗直義の
胸部疾患は悪化するばかりだった。「この夏は越せないだろう、もう一度武蔵野
の秋を見たいんだが……」

直ぐ痰が絡み、咳が出るために殊更低い声

で彼は云った。

「いや、そう失望したものじゃない。よく云
うじゃないか、病と寿命は違うって……」桑木譲は病人のベッドに椅子を近づけて慰
めた。彼はL大学の国文科の講師だ。「気安めはもういいよ、僕には解ってる……
それよりネ、君、その抽斗を開けてくれ」痩せた、青白い病人の手から譲はキイを受
取った。書籍や雑誌が積み重なったマホガニ
イの机の、一番下の抽斗を開けた。「その下の方にある、セピアの表紙のノー
ト……ああ、それだ、古ぼけたやつだ……そいつを君に預けておく、僕がネ、死んだら、
もう直き死ぬだろうから、そしたら焼いてく
れ……なアに留学してた頃に書いたものさ……
ネ、焼却してくれよ」

直義はかすれた声で、ゆっくりと云った。

彼は黙って首肯いた譲に、また別の抽斗を開
けさせて、極彩色の春画を数枚贈った。七月の末、直義は大量の咯血をして死ん
だ。譲は葬儀に参列したT出版社の社長から
直義が生前文芸雑誌に発案した仏文学関係の
評論、随筆を一本に纏める仕事を委嘱され
た。

冬にかけて、譲はその仕事を進めた。神楽の笛の音が風に乗って高台の彼の家に聞えて来る宵、彼はふっと直義に託されたノートのことを思い出した。——若い直義が鋭敏な心で書いた仏蘭西文人の批判、覚書か何かじやないかナ——直義の集を編む参考に、いやそこに収録すべき文章があるかも知れない、と云う期待も胸に湧いて、譲は書棚のガラス戸を開けた。古いセピアのノート。それは上下を飴色のテープで封じてあった。——そうだ、封じてあったんだ、焼いてくれと云っていた……悪いかな、見ては。ノートは直義の前で無造作に鞆に入れ、帰宅するとその儘書棚に入れておいて顧みもなかったものだ。子供の多い彼は掛持ちの講座に何時も追いかけていたし、傍ら文芸批評のアルバイトも結構忙しい旦暮だった。彼は一寸ためらったが、結局テープを剥がしてしまった。

譲はこうして始め漫然と、やがて熱心にそのノートの横書きした文字を追って読んでいった。ノートの紙はもう黄ばんでいた。

☆

明け方、夢を見た。色の白い、大柄な若い女が藤色の着物の前をはだけて、取乱した様子で僕の後を追って来る。(夢の中で僕は東

京にいる)僕は学校の傍のさいかち坂のような急な坂を恐怖におののきながら駆け登って行く。その後から女は何やら大声をあげ、大股で身軽にぐんぐん追って来るのだ。僕は既にハアハア息切れがして、腿が突張り、脛が痺れて、今にもものめりそうなのに、女の足は愈々速くなる。到頭右手に木造ペンキ塗りの心霊術研究所と云う札の下がった家の前にさしかかったところで、石ころに躓いてバツタリ倒れた。したたか膝頭を打って、それでも急いで立ち上ろうとする僕の首に忽ち追付いた女の長い、日向臭い黒髪がきりきりと纏きついた。女の髪は、その一筋々に凄じい力が籠っているかのように恐しく食い込んで執拗に僕の喉を締め拉ごうとする。う、うううう、ううう、声にならぬ呻きが僕の喉の奥に溜まり、唇から粘る唾液が洩れる。うう、ううう、僕は悶え苦しむ。白い埃がうっすらと舞っている真昼の坂道には折から人っ子一人見当らぬ。

さてかの女は山伏を、逃がすまじとて追っかくる、折節日高川の水以っての外に増さりしかば、川の上下をかなたこなたへ走り回りしが、一念の毒蛇となって、川を易々と泳ぎ越し……

と、重厚に語る渋い声、ああ、あれは父の声だ、と思うと、雪深い山国の生家の炉端で老いた父が目を半眼に開き、黄ばんだ大きな前歯をあらわに謡っている姿が彷彿と現れた。お父さん、助けて下さい。少年のように叫んだ、その己れの声で目が覚めた。鳩尾にじっとり汗が浮いていた。夜のとぼりは漸く動きかけて、青い黎明のかがが窓にしのび寄っていて、鶏が鳴いた。僕は夢の中の女の顔を思い出そうとしたが、それはあれ程鮮明な、怖ろしい面影であったにかかわらずはや茫として取留めもなく、淡々しい。そして強いて頭に描き出そうとすると、女の面輪は俄に現実味を帯びて、大きな碧い目、高い鼻筋、少し厚い唇、輝くブロンド、彫りの深いマチルドの顔にすり替ってしまった。

☆

ブルーローニユの森の湖でボートを漕いだ。水面に影を落す白鳥、愉しげなボートの男女、二人でボートに乗って、森の樹陰をそぞろ歩きして、それからレストランで食事して——若き日の幸福、明日を煩わぬ愉悦。恋愛の自由。罪の意識に途惑う、暗鬱な男女関係の多い故国の封建的な社会の相がつくづく忌わしくなる。僕はボートの中に寝ころんで、

大空を流れる白い雲を眺める。そこはかとな
いかなしみ、湧き出ずる郷愁の念い。が、目
を閉じれば、明るい日差を自ら遮断した紫紺
のくらがりの中に、白い華やかな建物が浮か
ぶ。それは小さな城壁のようだ。灰色の塑像
の少年が蹲まる間に置かれた低い円椅子に腰
掛けて待っている僕、葡萄色の幕の重たく垂
れた、濁り淀んだ空気の溜まった窄い部屋の
床に倒れている僕、鞭の撓む音、排泄物の濃
い臭、高い女の笑い声……。湖の岸辺に休ら
う白鳥。暗い、暗い、而も陰湿な夜に折々燃
えあがる憧憬の炎。明暗の境を僕の影が往き
来する。

☆

刺戟は更らに刺戟を求める。マチルドを知
る前の僕は、白い建物の中で逢う女で満足し
ていた。その前は故国の遊廓の女で免も角止
み難い欲望を和らげ、眠らせていた。それは
本当に欲服の美酒を酌み尽くすなどと云うも
のではなかった。日に当らぬ、栄養の悪い
女、貧しい国の殊に貧しい環境で育った哀れ
な女の体を見ると、その女を如何に夢想の目
で、情念の泥絵具で粉飾しても所詮遅い、生
命力に溢れた一個完璧なサジスチンには程遠
い存在だ。第一どうにも抑え切れぬ自意識が

チクリチクリと胸を刺して、ふかぶかと痴迷
の淵に溺れ込めぬ。ところがこの自由の国に
来て、はじめて、白い豊満な肉体の濃密な体
臭と重圧を心ゆくまで味あうことが出来た。
歓喜。狂熱の被虐愛の世界が今こそボクの前
にひらけたと思った。何よりあの遊廓の屏風
の陰でした戯れのさ中にともしれば砂を噛む
味だった日本人同士と云う自意識の錘が除れ



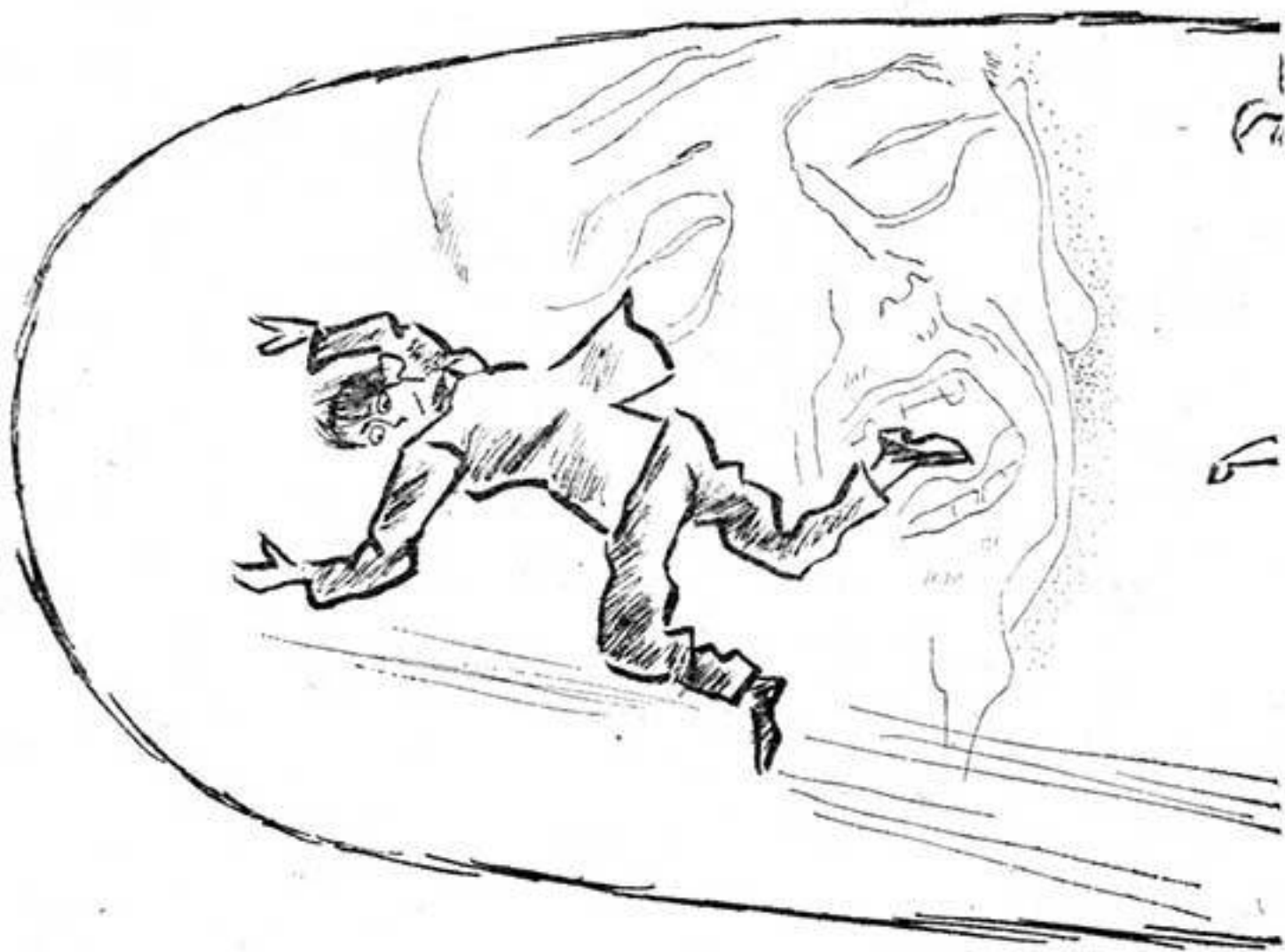
ているのが有難い。きん色の体毛を濡らす
汗、その汗のしみたキュロットの臭い、乾い
たチーズの臭いのする足裏の味……。女はメニ
ューを示すようにこちらの希望を聞いた。無
論すべてが演技であるが、白い、大きな肉体
の外国婦人に責められる歓びを年来求め、あ
こがれていた僕には未だそんな客観に達し得
ようもない。

☆

ルウアン出身の文科大学生ダルランは、緑
色の絨氈の上に這いつくばって、椅子代りに
なり、その臀の上に半裸体のマチルドを乗せ
ている。ダルランの鼻先にある青磁の壺の中
へマチルドは髪に挿した真紅の薔薇を投げ込
む。「さアお飲み、たんとお飲み、バツカス
のようにお飲み」形ちよくくびれた腰を揺
すってマチルドが命ずる。ダルランの首が伸
び、唇が可笑しく尖って、壺に湛えられた薔
薇に彩どられた液体を飲もうとする。ごくご
くと喉を鳴らして彼は飲んだ。ハハハハハ、
マチルドは笑って、立ち上りざま彼の腰をハ
イヒールの先で、強か蹴った。「ハハハハ、
ムッシュウ宗、飲み物はイヤですか？」わざ
とらしいが、魅惑的な笑みを浮かべて訊く。
僕は曖昧な薄笑い。異邦人に東洋人の不思議

な笑いと言われる微笑だ。「ホホホホ、勿論無理にお勧めはしませんわ」「いや、僕はこちらを頂きます」何時ものキャンテイ酒をグラスに注いで貰う。「ダルランとは違うわネ、でも所詮同じ穴のむじなネ、フフフ」ボクは未だマチルドにコプロのかなしびを打明けられぬ。背徳と汚辱の境にしながら猶仮面を被っているというのか。「さア、ダルランこっちへ来てよ」隅の禁欲的な小型の鉄製のベッドへダルランは誘われる。マチルドの手の嵌口器が鈍い光を放った。苦痛と凌辱のひと時が僕の前を過ぎる……。「ムッシュウ、踊りましょう」再び絨氈の上に俯したダルランを尻眼に、マチルドが両手を開く。マチルドとボクは踊る。女は俯して苦痛の名残りの法悦境にいる男の体を何度もまたいだ。「ダルランはひとの見ているところで辱められたり、打たれたりしたいのよ、ムッシュウにも解るでしょう」マチルドは片目を閉じて蠱惑的な笑顔を見せる。ダルランの粘っこい目をボクは五体を感じながら虚勢を張って踊った。レコードの旋律がだれて来ると、ダルランは周章でて身を起し、蓄音機のハンドルを廻した。

☆



マチルドは黄色い縫包の馬を持っている。驢馬ほどの大きさのその馬の前肢から後肢へ弓状の薄い、堅い革が渡してある。つまり子供の木馬のようだ。橙色の鞣革の洋鞍を置いた縫包の馬に跨ったマチルドが静かに腰を揺ると、馬は前後にゆらゆら揺れ動く。マチルドは竜騎兵のような緋の上着、白い乗馬ズボン、拍車のついた黒光りする長靴と云う

勇ましい姿だ。マチルドがボクの顔を見詰め腕を組んでにっこり笑う。僕もそんなマチルドを眺めるのが何とも云えずうれしい。様々な空想が夏の日の雲のごとく湧いて来る。ドラゴンのマーチのレコードをかけるとマチルドが云う。僕は口笛で、「雪の進軍」を吹いてやった。やがてマチルドが目で合図する。僕は絨氈の上に仰向けに寝る。ボクの腹の上にマチルドの馬が載る。大きく股を開いて、マチルドは再び馬上の人となる。はじめはそつと、段々勢いをつけて、しまいには落馬しそうになるまで、洋鞍に肉付きのいい尻をはずませる。僕は七十キロ余りのマチルドの体と、縫包の馬の重量の下に押し拉がれ扁平になる思いのうちに高まって来る歓喜の激情に呻かすにはいられない。

☆

ダルランが学校の帰りに寄って、「紫の獵人」誌の通信欄を読めと云う。

敬愛する懐かしい女王様、貴女の忠実な下僕である私は商用が永びいた為、心ならずももう二カ月余も当地に滞在してしまいました。その間、例の革袋のなかの美酒によって辛くも日々募る憂悶の情をまぎらわせている私で

す。貴女の体の臭いを偲ばせる美酒に酔うと私はあの十七世紀の調度類の置かれたあの暗い貴女の部屋で、充分貴女に鞭打たれた後、貴女に背後から抱えられ、貴女の白いかいなに首を締められる幻想に浸るのです。貴女の双の膝頭にきつく胴をはさまれた私は唯ひくひくと弱々しく跪くばかり……私は遂に気絶してしまいます。そこで貴女は美しい御顔に酷薄な笑みを湛えながらぐったりした私に蘇生術を施すのです。それは予て私がお教えしたあの方法です。貴女はもう習熟しているのです、とても手際よくして下さるので、私の幻想はとめどなく続くのですが……。ああ、今夜も船の汽笛が侘びしいことです。早く、ああ早くパリに戻りたい。そして女王様の前に跪きたい。女王様のお体の臭い、分泌物の臭いに包まれて、半獣の睡りの底に沈みたいものです。女王様のおみ足へ謹んでくちづけを贈ります。(在マルセイユ・K・B)

ダルランはこの文の中の蘇生術は日本の柔道の手をさしているのだと云う、「ことによ

るとお国の人かも知れませんか」と云う。

☆

ロアン河のほとりのアパートにマルタを訪ねた。中世文学史のノートを借りる為めだ。狭い運河の両側のポプラ並木の下をマルタと散歩。マルタは頻りに日本の風俗や生活について質問した。ロチの「お菊さん」や「日本の秋」に基づく知識が彼女の日本観を形造っている。近づく夏休みを待遠しがっている。ハンブルグの生家に帰省して、弟妹と遊ぶのが愉しむらしい。遊びに來ないかと誘われた。僕はピエールのプロヴァンスの家へ行くことになっている。残念だが……マルタは金髪に手をやって残念だわねと云った。が、僕は別のことを考えていた。ハンブルグには、洗煉された職業的サジスチンがいると云う話——僕は暮夜ひそかに彼女たちのいる、あやしい館の扉をほとほと叩く自分を想像してみた。ポプラの葉をきらめかせる夕風に白い服の裾をなぶらせて、ゆっくり歩むマルタの横顔は如何にもドイツ女らしい堅さが感じられる。体もがっちりとした重々しい。がっちりした肉体の女の傍にいと、僕の胸におのずと暗い嗜好が頭をもたげる。陰った欲望が疼きだす。僕はマルタに虐げられる場面をあれこ

れ頭に描きはじめる。マルタの体に僕が中学生の時、仏蘭西語を教わった女子大生の家庭教師の稍肥り肉の大柄な体の記憶がシルエツトのように重なった。大きな女の体重で潰される瘦蛙が僕の象徴なのだ。少年の頃から僕は救い難きマゾだった。今、もし僕が胸の奥に棲む暗い偏奇な欲望を打明けたとしたら、彼女はどんなに呆れ、驚愕することだろう。彼女はドイツの学都に來ている日本人の医学、哲学徒の優秀な頭脳に敬意を払っているのだから。僕は次第に重苦しい気持になった。

☆

衣裳箆の鏡に僕のふやけた顔が映る。右の目のふちが青黒くなっている。疲れているしるしだ。昨夜久しぶりで、白い建物の扉を推した。ボルドオの商人と云う男に久々で逢った。彼は肥太漢で、血圧が高いらしく、フウフウとせわしなく鼻を鳴らし、低い、濁った声で喋る。「つまりなんでサ、どこへ行ってもわしの望みの極まるところはない、おそろくそんな処はありませんや。しかし、なんてったってこの家にいるような商売人の手で苦痛や凌辱を受けるのが一番手っとり早い方法でしょう。けどわし等は我儘だからナ、そん

な約束ごとにすっかり酔っぱらう訳にはいかねエ、それも初めのうちはいいい、一応雰囲気は出来てるし、女も心得た連中ばかりだから……でも、やがて飽きが来るんだなア、刺戟そうだ、新鮮な刺戟がなくなるんだよ。だから最もいいのは、酒場なんかで偶ある女と逢う、その女がはからずもこう云う趣味の持主だ——と云う風な偶然にぶつかることさ。尤もそれだって、そいつと何度も遊ぶうちには飽きちまうだろうよ、ハハハハ、ええ、ムッシュウ、そうだろう、一体わし等はどこまで行きやア満足するのかネ、ハハハハ」商人は猶喋った。彼は少年の頃、遊び友達の年上の少女と喧嘩して、押さえつけられ顔にいっぱい唾を吐きかけられたことがある。丁度庭にリラの花が美しく盛りだった。彼は今でもリラの花が紫にひらく時分になると、かの少女に唾をかけられた時の感動をまざまざと思い出す。少女のおこった、自分を抑えつけて動かさぬ少女の体重、少女の赤い唇からほとばしった唾液の臭い。「忘れられん思い出だ。あれ程体の痺れるような感動を再び味わったことがない。わしは、あの時の生き生きとした激しい嵐に揉まれるような……」商人が適切な変現を探す目を宙に挙げた時、ギャルソン

が僕を呼びに来た。僕は葡萄色の幕の重々しく垂れたあの部屋に入った。これから先のことは解っているのに女の足音が廊下に聞えると、やはり体中の血が騒いだ。が、僕もうじきあの商人と同じく感覚が擦り減ってしまいうだろう。

☆

マチルドの部屋で、ダルランとブランディを飲む。マチルドは近頃よく睡れない。中央市場へ野菜を運ぶ夜汽車の音が耳について睡れないなどとおつぶつ云う。酔が回って来たダルランの挑戦を受けて、人間馬の根くらべをやった。無論大男のダルランに太刀打出来る筈がない。ダルランはピンクの絹のピジャマ姿のマチルドを背に乗せて、楽々と何回でも絨氈の上を這い回る。トロット、ギャロップ、マチルドの命ずる儘に軽やかに、得意げに。「ダルランはアラビヤ馬のようネ」マチルドが満悦して笑う。そこへいくと僕は情ない、すぐに参ってしまう。マチルドは答で僕の尻を容赦なく叩く、「支那の驢馬みたい、もっとスピードが出ないの？」わざとマチルドが腰を振る為め、僕は益々切なくなる。「フフフ、ダルランはアラビヤ馬、ムッシュウ宗は何馬かしら？」「これでも小柄でも

丈夫な木曾駒だよ」「え、クツゴマ？」僕は笑ったので力が抜けて、マチルドのお尻の下に潰れた。「フフフ、弱虫、弱虫、つぶしてしまえ、フフフ、低い鼻がつぶれるわよ、黄色い蛙が押つぶされる、ホラつぶれる、つぶれる」嘲りの言葉を唄うように云いながらマチルドは豊かなお尻を僕の後頭に据えていづかな動こうとしない。ダルランが拍手する。僕はやっと顔を横に向けた。マチルドの濃い体臭がそれまでひしゃげていた鼻を蔽う。「ビヤン、今度はダルラン、お前の番よ、図々しいあばれ馬、乗潰してあげる」ダルランに乗換えて、マチルドはアマゾン気取りで答をふるう。流石のダルランもブランディの酔がギャロップを強いられて一層回ったらしく遂にのびてしまう。ハアハア喘ぐダルランの口へマチルドは例の青磁の壺を押付けた。

☆

今日は「闘牛」で遊んだ。紙の赤い三角帽をかぶったダルランがピカドール役、赤いきれをひろげて牛——僕の前に立つ。僕が四つん這いになって突撃すると、彼は右に、左に赤いきれをひらひらさせながら身をかわす。段々僕が疲れる。僕はダルランがひらつかせる赤いきれが日本の腰巻きみたいで可笑しく

てならぬのだが、ダルランとそうして纏れているうちに、玩具のサーベルを持ったマチルドが僕の前に立ちふさがる。僕と彼女はまるで舞踏劇のような仕種で、程よく戦った末、僕の肩口に彼女の剣が閃いて刺さる。ぐったり前のめりに倒れた僕の背に片足かけて、頻りに踏みにじり、マチルドが高笑い。牧歌的な遊びと云うか、ダルマンも子供のようにはしゃぎ笑っている。僕とダルランが交互に牛になり、演技のよかった方が——マチルド

の判定に従う——闘牛遊戯で汗ばんだマチルドのキュロットを頂戴に及ぶ。今日、僕はそれを貰った。「少しよごれてるかも知れないわ、フフフ」マチルドは無造作に僕の膝に投げてよこした。

☆

マチルドはバカンスにブルターニュ地方へ写生旅行に行く。ダルランは帰省して父親の時計工場の仕事を手伝うそうだ。僕にはプロヴァンスの夏だ。ピエールに誘われて去年も

行った処、白い埃ッぽい道、色褪せた青い屋根、オリーブの樹立……

ここまで読んで、桑木譲はノートを閉じた。細君が紅茶を持って来たからだ。

「笛がよく聞えますこと」

神楽の笛の音に細君は耳を傾けた。

「うむ、夜神楽や鼻息白き面の内、其角だよ」譲もそう云って、笛を聞くふりをした。彼は明日、庭の隅の芥を焼く穴で、宗直義のノートを焼いてしまおうと思った。（おわり）

臨時増刊

花と蛇

小説、絵画、写真▽特集号

四馬孝画「花と蛇」各章クライマックス・シーン巻頭口絵十六葉
グラビヤ・フォト「花と蛇」各場面描写特別撮影写真三十六頁
長篇サディズム小説「花と蛇」第十五回完結まで一挙登載
オフセット印刷緊縛写真／縛られた女体オンパレード／

愈々堂々完成（乞直接お申込） 定価一部五〇〇円 略号（花）

満天下Sファンの血を沸かせた団鬼六作の傑作サディズム長篇小説「花と蛇」は、皆様の声援により、ここに全篇一挙掲載の特集号として、堂々完成いたしました。冒頭に掲げました巻頭口絵、グラビヤ写真の外に、豊富

なオフセット写真を加えて、文字通りS派垂涎の特集号をお贈りします。未見の方は一刻も早く直接お申込みを——。

内容

第一グラビヤ

【花と蛇】幻想 新作写真集

本誌写真部 特写

- | | |
|------------------|-------|
| 柱に縛られた美体…… | 玉田美佐子 |
| 厳しき縛しめに喘ぐ…… | 玉田美佐子 |
| 浣腸器による責めの幻想…… | 大塚 啓子 |
| 美貌翻弄（鼻責めの幻想）…… | 大塚 啓子 |
| 禪裸女緊縛の幻想…… | 大塚 啓子 |
| 両手首くさり吊りの美女の幻想…… | 大塚 啓子 |
| 美女手吊り晒し悶々の幻想…… | 大塚 啓子 |
| ガラスシンダーと裸女責め幻想…… | 玉田美佐子 |
| 柔肌と麻縄の織りなす幻想…… | 玉田美佐子 |
- △花と蛇▽画集 四馬孝・画
- 一、静子夫人捕わる
 - 二、静子夫人と桂子の対面
 - 三、静子夫人に迫る魔手
 - 四、川田の悪どい企らみ

- 五、桂子と静子夫人のオシメ責め
 六、令夫人に対する浣腸の洗礼
 七、深窓の美女夫人の晒しもの
 八、あぐら縛りの特別席
 九、カメラに向けられる苦悶する美貌
 十、京子探偵への惨忍な報復
 十一、田代と森田にいたぶられる静子夫人
 十二、美人探偵京子頑張る
 十三、静子と京子の後手吊り
 十四、捕われた美津子の姿
 十五、京子と妹の美津子
 十六、受難の静子令夫人

私のアルバム

私の緊縛フォト・コレクション

- 私の可愛いペット……………梨花悠紀子
 明眸のいましめ……………大井小夜子
 美女の柱しぼり……………絹川 文代
 二女連縛 美しき羞らい……………大塚 啓子
 着衣剥奪と緊縛シーン……………竹野ひろ子
 算盤責めのお仕置……………大塚 啓子
 乱れ裾緊縛絵模様……………愛川 悦子
 荒縄と竹竿の責め……………絹川 文代
 扉 淫蛇に襲われる美女 四馬孝・画

団鬼六作、四馬孝画

長篇「花と蛇」

第一章 発

端…静子令夫人―誘拐
 された令夫人―送られた着衣―ズ

ベ公の本拠

第二章

陥 罠…二度目の嫌がらせ
 ―運転手の正体―地獄の結婚式

第三章

美人探偵…落花紛々―美人探
 偵京子―浣腸地獄図

第四章

浣 腸 図…浣腸強制―屈伏

第五章

救 援 者…羞恥地獄―観念の
 座―京子の活躍

第六章

救援の失敗…逆転―颯りもの

第七章

好 餌…京子の屈伏―淫獣
 の餌

第八章

悪魔の哄笑…毒牙は迫る―新鮮
 な生贄―悪魔の笑い―遂に美津子

第九章

地下室…悪鬼の饗宴―美津
 子のおとり

第十章

翻 弄…屈辱と羞恥―身代
 りに立つ夫人

第十一章

蛇の執念…裸踊り―おしめを
 使う夫人―屈辱の挨拶

第十二章

姉妹危し…屈辱の猿ぐつわ―
 浣腸競演

第十三章

調 教 師…遂に京子も―土牢
 の中―調教師来る

第十四章

美津子受難…二人の美女―調教
 師―狂乱の美津子

第十五章

結 末…美津子の屈伏―二
 つの肉塊―絶対絶命―美しい童女
 ―スター誕生

第二グラビヤ

花と蛇 グラフィック・ファンタジー

- 責めに悶える女体の幻想……………大塚 啓子
 浣腸器の恐怖につかれた幻想……………大塚 啓子
 玉簾越しの女体非情の幻想……………玉田美佐子
 両手首両足首連縛の幻想……………玉田美佐子
 苛められ尽した女体の幻想……………大塚 啓子
 羞恥さらし責めの幻想……………大塚 啓子
 柔肌に喰い込む縄の幻想……………大塚 啓子
 着衣剥奪と浣腸に悶える幻想……………大塚 啓子
 光と影による浣腸器の幻想……………大塚 啓子
 輝美といましめに泣く幻想……………大塚 啓子
 怨嗟と愁嘆、苦痛と忍耐……………大塚 啓子
 足吊りに至る過程の幻想……………大塚 啓子

女体緊縛アルバム

- 美女姉妹仲よく縛られる……………絹川 文代
 手吊にもだえる八態……………桜井 葉子
 美しき捕われの餌物……………絹川 文代
 雨中泥まみれの折檻……………大塚 啓子
 伸びやかな四肢と縄目……………絹川 文代
 緊縛女体の優美ポーズ……………熱海 容子
 柱しぼり女体悦虐模様……………絹川 文代
 縄に憑かれた陶酔境……………梨花悠紀子
 ショート・パンツ哀感……………絹川 文代
 カメラに全身を晒して……………絹川 文代
 レインコートのかがやき……………絹川 文代
 紺色の囚衣をまとい……………絹川 文代
 予告いたしました通り臨時増刊号「花と蛇」
 特集号は、五月中旬発売いたしました。未
 入手の方は売切れにならないうち、お申込み
 下さい。略号「花」とお書き下されば、折返
 えしお送りいたします。

湖畔月影抄

(上)

瀬川泰子

匂う夜

「新之丞、肩はもうよい。腓^{はざ}をさすってたもらぬか」

雪江は、分厚い布団の中に埋まるように、ながながと体を横たえた。

白羽二重の寝衣の腰を、悩ましく絞^{しぼ}っている紅絹^{もみぢ}の細帯が、痛いほど目にしみる鮮かさだ。右脇で結ばれたその結び目は、寝衣の下に息づいている肌の秘密を、十五歳の美童の前に妖しくひけらかしているようにさえ見える。寝衣の裾からのぞいている足首——薄桃

色に色づいて見える形のいい踵は、やわらかそうな土踏まずに連なり、指先にちりばめたような小さな爪は、桜貝を思わせる。

新之丞は体を滑らせて、白羽二重の上からむっちりした腓^ふに触れた。

「もそつと強う」

少年のやわらかな掌の中から、快い刺激が腰まで伝いのぼって来るような気がした。少年は、伸びちぢみするおのが手先を、しがみつくような思いで見つめながら、ともするとずりあがりそうになる寝衣の裾々、奪われがちな心の波立ちを、必死に抑えつづけた。

雪江はその横顔を、枕がみからさりげなくぬすみ見ていた。——前髪立ちのこの小姓は、

そのずばぬけた美貌と利潑さのゆえに、夫が最も目をかけている少年である。襟足のういういしさは、処女^{おとめ}の清らかさを感じさせる。

それでいて、五尺三寸のうわ背と、弾力を秘めた肉付きは、すでに「男」なのだ。

「やはり男の力じやのう。侍女達のやわやわ手で、もんでもろうては、とてもこうはいかぬ。心地よい、心地よい」

雪江は大仰に目を細め、溜息まじりに、ときおり歎声をもらした。

肩がこって苦しゅうてならぬ。療治してくりやれ。……大殿様の御他出中ゆえ、はしなき口の端にかかつては心外じやで、忍んで参れよといいつけてから、今宵ではや三日目になる。——雪江は、一日、二日と、この少年の心の変化を入念に探って来た。

猪苗代盛国は、中ノ沢の出で湯に湯治に出かけている。初老をすぎた盛国の異常な愛情にまかせて来たこの肌は、それに馴らされ、それによって急速な爛熟を遂げ、揚句のはてに、初老の男一人を守り切る物足りなさをさえ体のすみずみに育て上げてしまっている。「そちも供をいたせ」

と、夫からしつこく誘われた出で湯行きを「それでは御湯治の甲斐がございませぬ。……おすこやかにおなり遊ばしての御帰城を祈ります。ひと月ほども御静養あそばされれば、若さがもどって参りましょう。さびしくとも、妾は、その日をたのしみにお待ちいたしております」

と、ようやく断りおおせて発たせてやったが、妾の肌を離れて、ひと月はおろか、半月の我慢も叶うまいと、雪江はとうに見通していた。

もとを正せば、雪江は、猪苗代湖畔中小松

村の肝煎千右衛門の長女である。お城勤めにあがって二年目、盛国の湯殿に奉仕してお手がついた。妻を喪っていた盛国が、情を通じた侍女は五指にあまる。その中で、特に雪江を選んで後添えに昇格させたのは、雪江の中にひそむ妖しい魅惑のせいにはない。

雪江を後妻とすることに真向から反対したのは、嫡男の盛胤だった。盛胤の胸の中には、侍女雪江に対する抜きがたい蔑視がある。「義母」と呼ばねばならぬ立場に堪えられなかったのだ。それを納得したのは、一つの条件が満たされたからである。それは外でもない。父盛国の隠居と家督相続だった。藩士の衆望は、嫡男盛胤にあつまっていた。年若い領主として士気を鼓舞し、藩政を取り仕切る権勢の座につくことは、父の行状をにがにがしく思っただけで来た盛胤にとっては、最良の道と思われた。

盛胤は本丸に入り、盛国は出丸に移った。成り上り者の侍女が「奥方様」に納って、浅はかな権柄ぶりを発揮しようとも、馬耳東風と聞き流し見すごせばよいのだ。——盛胤はそう肚をきめた。

もともと雪江は侍女暮しの頃に、若く凛々しい盛胤の中にこそ「理想の男」を感じてい

た。片肌ぬぎになって馬場を駆けめぐるたくましい筋骨、うっすらと汗にぬれた胸毛、「ヤオーツ」と雄叫びあげて振りおろす鞭さばき、……ぬすみ見るような視界に浮きあがった若武者ぶりは、娘ごろをときめかせるに十分だった。雪江は、盛胤の中に「男」を見た。しかし侍女と若殿という取り合わせは、一篇の喜劇にすぎない。盛胤は、及びもつかぬ遠い存在だった。——それが「義母」の座を目前にしてはげしい慥突をくわされた時から憎しみに変った。盛胤の凛々しい目鼻たちは、先妻の面影をまざまざと刻んでいる。胸にしみついたその顔貌までが、今やうとましく反感をそそった。——それでいて若い妻を十分には満足させきれぬ初老の夫のたどたどしさに直面すると、いつの間にか心の隙に、盛胤の一途な若さが幻覚のように忍びこんで来るのである。雪江は、われとわが身が、ふとうとましくさえ思われることがあった。

盛胤の蔑みの目は、雪江の胸に棘のように突きささったままだ。それを意識しつつけることは、雪江を苦しませた。その苦しみを積み重ねて、雪江の憎悪は、固く、しこりのように根づいて行った。

雪江が、美童新之丞を引き入れようとはか



ったのは、自分でもそれとは気づかぬ、盛胤に対する復讐に近い隠微な意識が低迷していたからかもしれない。「今度は、こちらの胼を」

雪江は、そういうながら寝返りをうった。裾のわれ目から、白いなめらかな胼が、こぼれるように新之丞の目にとびこんで来た。部屋中にただよう燻香のにおいとはちがうかくわしいものが、少年の脳髓にしみわたった。驚くほど胸が高鳴り、手先がふるえた。瞬間、頬が紅潮して来るのが、われながら浅ましかった。

もう落ちる。ふるえながら落ちかけている。新之丞は溺れるであろう。妾が求めていたのは、この若さじや。かけがえのない男の若さじや。……妾の胼を伝って来るこの小刻みな手先のふるえは、そのまま新之丞の心の響き。物音ひとつせぬこの闇の中に、新之丞の血脈の音だけが響きわたっているのじや。機は刻々に熟している。堰はまさに切れようとしている。V……—雪江はじっと目をつぶり、つと少年のふるえる手を握りしめてやる一瞬を心の中にはかっていた。

咽喉がカラカラに干あがつてしまうような息苦しさが新之丞を捉えた。締め木にかけられて脂汗をしたたらせる時のあの絶望的な苦痛が、時を追って強まり、それは無限につづくのではないかとさえ思われる執拗さで少年を押しひしいだ。堪えようとする喘ぎで胸の奥が鳴った。

「新之丞」

雪江が、つと頭をもたげ、耳をすますような素振りですらに名を呼んだ時、新之丞はギクリとして、思わず雪江の目と見会った。狼狽し、動揺する心の翳が、新之丞の目の中に入った。

「人のけはいがせなんだか。……見て来てく

りやれ」

「はい」

——くたくたと力のぬけて行くような救われた思いが、新之丞の胸を吹きぬけて行った瞬間、心の底まで何者かにのぞき見されていたような、別の狼狽と罪の意識が、新之丞を突きあげた。

すり足で畳の上を走った新之丞は、全神経を指先に集中して静かに襖を開けた。闇の中に闇の灯が一条さしこんで、その先のまんなに、新之丞自身の影が、驚くほど大きく次の間の畳に描かれた。新之丞は、おのれのその投影に胆を冷やした。……しかし、森閑とした静寂だけがあった。

後手にしめきった襖から、新之丞はまたすり足に大板戸まで走った。板戸をへだてて、磨きあげられた廊下がある。新之丞は、板戸に身をすり寄せて、じっと聞き耳をたてた。……が、猫の仔一匹のけはいさえしない。

板戸は音もなく開いた。そのわずかな隙間から、新之丞は廊下の左右をおずおずとうかがった。曲り角の常夜灯が、かすかにゆらめくように円形の光の輪を描いているだけで。ここもまた、ふかいしじまにとざされている。

△奥方様の空耳であつた！▽

新之丞は、はじめて全身の呪縛を解かれたような安らぎをとりもどした。

ひき返した新之丞は、襖のきわに正坐すると、明るい表情で、

「奥方様。大事ございませぬ。お気のせいかと存じます」

と両手をついた。

雪江は布団の上に起きあがっていた。目もとにかすかな感情の動きがあったが、それは新之丞には通じなかった。

「安堵してよいのじゃな。……新之丞、近う？」

△誰もいるはずはない。最初から妾の仕組んだ手だてじやもの。……ただし、念のためにという氣の入れ方は、むろんあった。それを確かめさせただけの意味はある。……新之丞の、あの駆けのぼるような感情のたかまりをふと外らせた効果も十分じや。解きほぐされたような心の隙を、一気に突き崩す機会が、目の前に来た。……この若鮎のような美少年の体が、妾の中につつまこまれるのは、もうすぐだ。……今だ。年下の、無垢な男の心と体を、思いのままに引きまわす惑溺の奔流が、今こそ妾の足もとに迫って来た。▽

「どこをお揉みいたしましたしょうか」

再び布団のそばに寄った新之丞は、雪江の背中に声をかけた。

「肩を、少し……」

「はい」

雪江の水月のあたりが、ドキッと波打ったようだった。腹の中に、じわじわと行き渡って行く得体の知れぬうごめきを、雪江ははっきり意識した。

つと雪江の右手が、肩をおさえている新之丞の右手を強く握った。それをかわす隙はなかった。

「新之丞！」

少年の手は、そのまま雪江の襟もとから胸に引きこまれ、掌いっぱい豊かなやわらかい乳房が触れた。新之丞の手は、その盛りあがった肌の上で、いじらしいほどに慄えた。肩越しに傾きかかった新之丞の袖が、雪江の左手でグッと引かれた。「ア……」とかすかな声が洩れた時には、新之丞の体は、崩した雪江の膝の上に他愛なく横倒しになっていた。体じゅうが燃え、胸が喘いだ。起きあがろうとする新之丞の体は、雪江の手におさえられた。

「新之丞！」

吊りあがった目が、濡れて、光つ、て新之丞を見すえた。あらわになつた胸もとから顎にかけて、白い純ぬめのような肌が、寝衣一重をへだてた女の太股におさえつけられている新之丞の上にちかちかと迫った。新之丞の瞳の中に、雪江の顔があった。

「新之丞！妾のために命をかけてたもるか。……万が一、露頭のおかつきには、妾と刺し違えて死んでたもるか。……新之丞！」

——刺し違える——ということばが、鋭く新之丞の脳髓を貫いた。

△刺し違える！ この世のものとも思えぬ美しいこの柔肌を……刃の先にかけるのか！ かぐわしく息づくこの肌を……▽

「……」

「新之丞」

「奥方様！」

それ以上はことばにならず、新之丞の手が雪江の背をひしと抱きしめた。

新之丞は全身で慄ふるえた。その震動が雪江をゆさぶった。

「命をかけてたもるな！ まことじやな！」

「はい」

雪江は、両手に力をこめると、いきなり新之丞を抱きかかえながら、淫靡いんびに濡れたふく

よかな唇を、美童の上におしあてた。「ウツ……」という呻きが、雪江を狂わせた。

密使潜入

中ノ沢は、吾妻山系の南端に位置して、磐梯山を西にひかえた山深い温泉場だ。——猪苗代盛国は、従士十余人を伴ともにして、もう十日をすごした。女色を断つた十日の時間が、四十五歳の盛国に、新しい活力を呼びもどしたようである。

昼間は内湯につかり、夜になると外湯を愛用した。一丈あまりの巖壁に二方をとりこめられた外湯は、満々と湯をたたえて、南西の方角に開けている。山気をはらむその高みから、猪苗代湖の水面がはるかに見下された。水無月の満月を中心にするこの十日間、盛国は、湖上に遍満する月光の妖しい美しさを満喫した。

一人ひっそりと場に沈みながら、この岩湯の中に、ちかちかと雪江の白い肌を対置してみたかった。霧のようにたちこめる湯気をへだてて、雪江の、あのひきこむような両輪を、まざまざと描いてもみた。

八十日！よくも堪えて来たものだ。われながら……フッフ……もはや頃合ころあいいであろう。

……殿が若さを取りもどしてお帰りあそばすのを楽しみに、さびしくともお待ちいたしますといいおった。……殺し文句だな。ひと月といわず、わしはもうこの通り、五体の活気をたくわえたぞ。……頃合ころあいだ。この活気を隠居暮しに使いきるには、まだまだ心残りが少くない。あっぱれ若殿氣取りでおろうとも、わしの目から見れば、盛胤の青さ、未熟さは鼻持ちならぬ。……いっばし成人ぶって雪江に楯たてつくあの挙措きよそも腹にすえかねる。……雪江と家督相続を天秤にかけて、無理押しに膝詰めひざづめの談合に及んだ盛胤の小面憎さが未だに目先にちらついてならぬわ。……わしの留守をいいことに、雪江を、なにかと搦手からめてからいびりまわしておらぬとも限らぬぞ。……▽

戻らねばならぬな——と、思わず口に出してつぶやき、ガバッガバッと湯をかきまわした。

「殿。……」

「……」

「殿。伊達家よりのお使者にござります」

「なに？ 伊達殿から！」

「御意。羽田右馬助様と申されております。」

「よし。通しておけ。もうひと浴あびして、上

る」

盛国はそういうと、ゆっくり体を沈めた。

——伊達政宗から、内通の誘いがかったのは、すでに二度を数える。その都度、盛国はぬらりくらりと引き延して来た。頃合いを見るところという盛国一流の手練による駆け引きである。

政宗の野望は、わかりすぎるぐらいわかっている。——天正十二年十月、十八歳で家督をゆずられて以来、政宗は、会津に蟠居する百六十万石の名門芦名氏を滅して奥羽統一を策し、更に南下して中原の鹿を射止めようとの、ひそかな雄図を抱いているのだ。

米沢を本拠として、仙道一帯に武威を示して来た政宗が、天下の権を狙うためには、どうしても攻略しておかなければならぬ会津である。

しかし、奥羽南部から北関東にかけて割拠する、結城、二階堂、岩城、田村、佐竹の群雄は、おおむね芦名氏に好意を寄せている。その上、会津は四方嶮山難所にとりまかれた天然の要害だ。南下して芦名氏を滅すことは、一朝一夕の業ではない。

政宗は、この難問題を解決する唯一の方策として、利に転ぶ日和見主義者を内通せしめ

る手を考えた。しかしこの手段は、半ば成功し、半ば失敗した。内通者を先導として、幾たびか会津侵入を策しながら、常に、あと一歩のところまで敗退する憂き目を見せられたからである。

猪苗代盛国は、そうした政宗の失策のかずかずと、内通者の非命の跡を、じっと横目に見つめて来た。

——政宗が封を^{ほう}ついで間もなく、みずから進んで内通を申し入れたのは、安達郡塩松の城主大内定綱であった。政宗の襲封を賀して、長井(米沢)まで足をのばした定綱を見て、政宗は邸宅まで与えて厚遇した。翌年正月定綱は、妻子を伴って長井に移り住むことを約して、いったん塩松に帰った。ところが定綱は、いつまで経っても現れない。探知したところによると定綱は、日和見主義の本性を発揮して、またぞろ芦名氏とのよりをもどしているらしい。政宗の癪癖がカツと燃えた。

——定綱を遇する道が薄かったとは思えない。いや、むしろ厚きにすぎるぐらいのもてなしであったとさえ思う。妻子を連れて来た時の用意にと邸の新築までして待っていた。それなのに、伊達と芦名を天秤にかけて、犬は再び旧主のもとへ突っ走って行った。憎む

べき裏切者!……そして、その背後に厳然と構えてほくそ笑んでいる芦名一族……——定綱の神妙げなシャッ面を思い起すと、憤りはとどまるところがなかった。

政宗はあせった。——父祖以来しばしば敗戦の苦杯をなめさせられて来た会津の要衝^ひ原の城主穴沢氏への雪辱をかねて一挙に芦名の本城黒川(今の会津若松市)に迫ろうと決意した。

△謀事は密に、行動は迅速なるを要するV
——政宗はまず、耶麻郡関柴の地頭松本備中彈正父子に内応の手をのばした。松本氏のもと芦名氏の長臣の列にたつる家柄であるが、一族の松本太郎右衛門が、前年六月に謀叛のかどによって誅せられている。このことあって以来、芦名氏に対する松本氏の位置は、みじめな転落をつづけていた。この不平と不満を足場として、政宗は松本備中父子の寝返りに水を向けた。

次いで、^{ひばらせきもり}檜原の関守穴沢九郎五郎(檜原城主穴沢善右衛門の一族)をも味方にひきこんで、五月初旬、耶麻郡入田^{いりたずけ}から侵入し、近隣に火を放ちながら進撃した。

しかし十一日未明、三方を包囲された侵入軍は手も足も出ず、散乱する死屍をそのまま

にして遁走しなければならなかった。松本備中は戦死を遂げ、弾正は長井に奔り、備中の父・幽閑は、九十一歳の老体を引き出されて打首の刑に処せられた。政宗の深謀も、芦名の武力の前には、またしても一敗地にまみれたのである。

猪苗代盛国は、仙道の若武者伊達政宗の動きを、異常な興味の中に傍観していた。一国一城の主として、あらん限りの知謀と術策をつくし、武將の運命を賭けようとしている政宗のたくましい行動は、盛国に一種の羨望をさえ感じさせるのだ。芦名家はすでに老衰期を迎え、伊達家は未来を翹望する新興の意気に燃えている。それを一身に象徴しているのが政宗だ。数次の失敗にもかかわらず、政宗の中には不思議な魅力と可能性とが感じられる。——内通者が跡をたたないのは、そのためにちがいない。

△いつの日か、伊達家から誘いの声がかかるにちがいない——そうした思いが、ごく自然の成り行きのように、盛国の胸中に、むずがゆい期待となって育ちつつあった。

猪苗代氏はもともと芦名氏とその遠祖を同じくしている血肉の間柄である。——芦名家

初代義連は、はじめ三浦氏を名乗り、後に佐原氏と改称したが、これは義連より四代前の為通の代から、相模国三浦郷に住みついていたことから始まっている。為通の子・為継の時に源義家に仕え、これより後子孫は源家に属するに至った。為継の孫・義明は、源頼朝が石橋山に兵を挙げるやこれに従い、頼朝のために軍兵を繰り出そうとする間に、頼朝の敗北を知った。しかし、一度の敗戦で挫折する頼朝ではないと見込んだ義明は、敵將畠山重忠の来寇を見越して衣笠城にたてこもり、その子・義澄、義連らを頼朝のもとに馳せむかわせ、遂に孤塁を守って自害して果てた。時に義連は八十九歳。父の遺志をつぐその子らは、頼朝再度の挙兵に加わり、以後各地に転戦して武功大いに顕わられた。中でも義連は最も武勲すぐれ、後に平泉の藤原泰衡征討の折にも軍陣に従い、その功によって会津の地を賜わるの榮に浴した。会津における芦名家初代を義連とするのはそのためである。その子盛連を第二代とし、これに六人の男児があったが、四男・光盛が後をつぎ、相模国三浦郷・芦名村の出身地名をとり、はじめて芦名の姓を名乗った。母は矢部・禪尼の通称で著名な、駿河前司三浦義村の女である。矢部・禪尼は、は

じめ北条泰時に嫁して一子を生んだが、後に盛連に再嫁して四男・光盛をはじめ三人の男を生んだ。長男・経連は、第三代・光盛にとっては腹違いの兄になるわけだが、これが家督を継がされずに耶麻郡猪苗代に居城せしめられて猪苗代氏の祖となった。この十二代の孫がすなわち盛国で、一万八千石を領して磐梯山麓に住みついたのである。

猪苗代氏の歴代城主は、本家芦名氏に対して、少なからぬ劣等感を持ちつつけて来た。芦名家第三代は、当然嫡男である経連が継ぐべきところを、父の後妻矢部・禪尼の家柄と後楯に押されて、禪尼の第一子・光盛に跡目を奪われたという『敗者の怨念』にも似た感情が、隠微のうちに流れて来ている。

たまたま天正十二年十月六日、芦名家第十代・盛隆が、家臣大庭三左衛門のために弑せられ、生れてひと月あまりの亀王丸が跡目を相続するという不慮の事態が起った。幼主・亀王丸は、名ばかりの城主にすぎない。家臣達の派閥争いは、これを機として台頭のきざしを示しはじめた。——いつの日か、芦名の本城になだれこもうとする伊達政宗にとって、本家芦名氏に不平をいだく猪苗代一族の抱き込み策は、当然政宗の胸中に描かれるはず

だ。……盛国は、政宗の心中を掌上に見るような思いで、誘いの手を心待ちしていたといつてよい。

過去二回に及ぶ伊達家の密使に、内応の確答をあたえなかったのは、『頃合いを見る』盛国の手練だけが理由ではなかった。嫡子盛胤が、主家芦名氏に弓引く無道さを、口をきわめて諫止しつづけて来たことも、大きな因をなしている。

「謀叛人が栄えたためしはありません。もとを正せば血肉をわけた本家分家ではありません。仙道の暴れ者伊達のこわつぱ小童にたぶらかされて、人間の道を踏み外されぬようお願い申します」

と正面きってまくしたてられては、二の句がつげぬ盛国であった。特に、隠居の身となつてからは、一藩の動向は盛胤によって左右される。胸に鬱勃たる謀叛心をかきたてながら、盛国はするすると無為の日を重ねていた。——しかし政宗の放った隠密の報告は、盛国の本心いずこにありやを的確に伝えていた。政宗は根気づよく時機を待った。単身中ノ沢の湯治に出かけた盛国を見遁すはずはない。

へこころで高く売りつけてみるか——盛

国は、節々がとろけてゆくような湯心地の中にひたりながら、使者につきつける注文の個条を、じっくりと思ひめぐらした。

考えてみると、盛国が本家芦名を裏切ろうという心事の底には、父盛親の非業の死がからみあっている。父は、芦名家第十三代盛高によって、謀叛の証跡明らかになりと烙印されて、文亀元年六月二十八日に誅伐されている。実は、巧みにしつらわれた陥穽におちたにすぎなかったのだが、本家の仕打ちは、仮借なく無残をきわめた。本家に対する怨念は歴代の猪苗代城主が抱いて来た、単なる『劣等感』や『敗残意識』とはまた異質のものである。——政宗が狙いをつけたのも、盛国のこの胸奥を見ぬいてのことだ。

へ踏ん切りをつける好機かもしれぬ——

盛国は、自分にいい聞かせるように、改めて心にくり返した。

内応の取り引き条件は、すでに盛国の頭の中に熟した。

一、謀叛の軍が成功した暁には、会津領の北半分を所領として賜わりたい。

一、降臣中、席次第一の地位を支えられたし。

一、もし不幸にして敗れた場合は、伊達氏

の領地内にて三百貫文の知行を下し賜わりたい。

以上三か条は絶対に呑んでもらう。否とはいわせぬ、と勢きおいたつものが盛国の中に醗酵していた。第三条の『もし不幸にして事敗れなば……』の一項は、われながら深謀遠慮の頭あかしわれだと、ひそかにこみあげて来る微笑をたたえ、ガバツと湯壺に突っ立った盛国は、「善右衛門。上るぞ」と、張りのある声で供の者に呼びかけた。

女 妖

中ノ沢から先触れの注進で、

「明日申さるの刻、大殿様御帰城」

と知れたのは、伊達家の密使と談合した次の日だった。

この注進を、はげしい衝撃と受けとったのは雪江であり、狼狽と混乱にうちのめされたのは新之丞だった。

むろん雪江は、こういう日のために、すでに思いをこらし、策は十分に練りあがっていたはずである。だが、明日の帰城をひかえていよいよその策を実行するのは、今宵をおいてほかにはないのだと思うと、やはり身内がおののいた。

絶対に失敗は許されないのだ。——一度の失敗は、もはや退^のびきならぬ破滅を意味している。細心に、しかも大胆に、すべてを賭けねばならぬ瞬間が、雪江の体の中を、音たてて刻々に迫って来ていた。雪江はひとり部屋にこもり、追われるような思いで夜を待った。

城中が寝しずま^なったいつもの刻限に、新之丞は音もなく閨^{ねや}の中に滑り入って来た。心なしか、新之丞の面は、苦悩に青白んでいるように見える。——盛国が帰城して後、はたして雪江との関係がつづけられるものであろうか。おそらくその機会はあるまい。しかし、新之丞の心と体には、すでに雪江のすべてが泌^{しみ}つき、肉の魔力に脳髓はしびれはてているのだ。

「奥方様！」

新之丞は雪江の膝にとりすがった。その手の上に、つと雪江の手が重ねられ、グツと力が入った。新之丞の目の中に、吹っきれような情炎がきらめき、その間を縫って、追いつめられた小動物が、必死に救いを求めるいたいけな哀訴がよぎった。

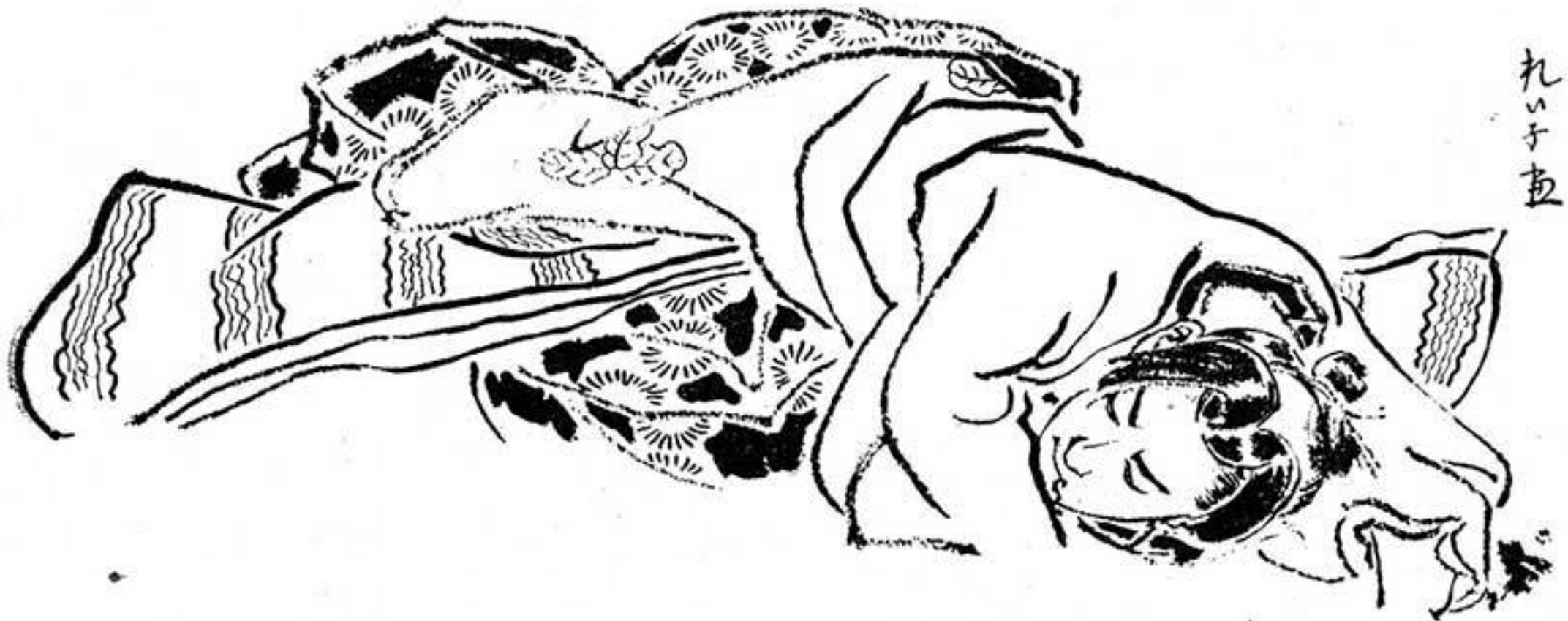
「新之丞、よく聞くのじゃ。明日は大殿様御帰城との先触れがあったことは、そなたも知

つての通り。妾はその注進をうけてより、こうしてそなたが忍んで参るまで、じっと思いをめぐらしていた。一時も早うそなたの顔が見たかった。その上で、妾の胸のうちを、しかとそなたに語りたかったのじゃ。……先の夜、そなたとはじめて契^{ちぎ}りを交した折、そなたにただした妾のことばをおぼえていやるか。……万が一、露頭のあかつきには、妾と刺し違えて死んでたもるかというたな」

「はい。忘れはいたしませぬ。心の底にしかと納めております」

「妾は、そなたを知ってこの方、もはや他の男と枕を交す気持は消え失せた。心も体もひとつに燃^もえたはじめての恋じゃ。心ならずも大殿様にとりこめられて、これが女子^{おなご}の宿縁じゃと、われとわが身にいい聞かせて来た忍び心が、そなたという可愛い男の手で、わけもなく突き崩されたのじゃ。離しはせぬ。……離れとうない。……新之丞！ 妾は心をきめましたぞ。よいか。大殿様御帰城と相成らば、その夜から、妾はまた大殿様の弄^{もてあそ}びものとなるは必定^{ひつじよう}。大殿様のあの執^{しゅう}ねさを思うただけで、身の毛がよだつ。……まことの恋に目ざめた妾には、もはや堪えきれぬ苦しみじゃ。……新之丞！ 妾は臍^{はぞ}をきめました

ぞ。この燃える情火に身を灼^やくのじゃ。そなたと二人きりの恋の業火に身を投げのけるのじゃ。……大殿様のお顔を、妾はもはや見とうない。妾の前にあるはそなた一人。



れい子



この世の中にあるは妾とそなたの二人だけ。
この悦びの中に死んで行きたい。未来永劫、
誰も二人の仲を邪魔だてできぬ遠い世界へ遁
れたいのじゃ。そなたに手を引かれて、はる
かな恋の白道を、寄りそいながらたどって行
くうれしい姿を、妾はじっと暎の裏に描いて
みた。……その美しい夢を抱いて死ぬことこ
そ、二人の恋を成就させるただ一つの道じゃ
と思いつめたのじゃ。……新之丞！ 今宵を

おいてほかにはない。……この世の名残りの
悦びをつくして後、潔う果てようぞ。そなた
と共にじゃ。……よいな」
新之丞は、しだいに熱して来る雪江の語調
に突きあげられ、揺さぶられ、女の情炎のは
げしさに、今更のように身内が燃えた。紅色
にぬれた唇は、ふくよかで、淫靡で、媚妙な
熱気を吐きつづける。二人の交渉は、あまり
にも短い生命の燃焼だったといわねばなるま

うっすらと汗にじむ永い抱擁から解放され
た時、雪江の体の内奥には、まだ恍惚の尾を
引くはてりが、うずきのように残っていた。
△この少年の肉体のすみずみまでも味わい
つくすには、短かすぎる幾夜でしかなかった。
た。しかし、冒険のおののきに支えられた秘
戯の耽溺は、美酒のように妾の体にしみわた
り、満ち足りた想いに誘う。この少年の十六

い。しかし、一瞬に凝縮して味
わう充実感の時空を越えて、絶
嶺の歓喜に酔いしれるには十分
だともいえる。新之丞は、この
感動にふるえた。
「奥方様！ あの夜から、新之
丞の命は奥方様のお手の内にござ
います。生涯一度の恋を遂げ
得ました私めの幸せは、もはや
絶頂を極めました。……奥方
様！」
雪江は、新之丞の重みに堪え
ぬげに床の上に崩れた。高灯台
の灯が急に薄れるかと思えた刹
那、新之丞はあらあらしく雪江
をかき抱いた。

年の生涯は、妾のためにあったのだ。……妾のために。……節々がぬけてしまったような充足感とけだるさの中で、雪江は、われとわが身にいい聞かせた。

「新之丞！ 妾はな、肝煎の家柄に生まれて、下々の身分としては、なに不自由なく育ちましたが、これが十分の家柄であったなら、どんなによからうかと、くやしくもありうらやましくもあったものじゃ。それ故、縁あってお城勤めに上れるとなった時の喜びようは、並ひととおりではなかった。それのみならず、いつしか大殿様のお側にはべる身分にもなれた。娘時代を振り返れば、まるで夢のようじゃ。それほど侍という身分は、妾のあこがれの的であった。……妾は、その侍の誇りを貫いて死にたいと思っている。武士の家に生まれたそなたは、正真正銘の侍じゃ。そなたの体を流れている血は、誇り高い侍の血じゃ。女々しい死に様は、よもできまい。……そなた、しつかと妾の手を取って、死出の旅路の案内をしてたもれよ。武士は、死に際が大事じゃ。見事腹切って、侍の誇りを全うするがよい。妾も、そなたに見習うて、あっぱれ武士の妻たる面目を見せてくれよう。……新之丞、妾の心底わかってくりや

るか」

二人は、まだ向きあったまま横たわっていた。雪江は、新之丞の手を導いて、乳房の上におき、その手を上から強くおさえながらいつづけた。うるんだ眸の中に、はげしい意慾がこもっている。

「お心のほど、私めには、よくわかります。嬉しゅうございます」

「見事腹を切りおさせた後は、寄りそうてここを刺し通すのじゃ。……ここを」

雪江は、乳房の上の新之丞の手に、ひときわ力を入れた。新之丞は、思わず掌いっばいに、その乳房を握りしめた。掌の中に、動悸が波うって感じられた。新之丞は、そのままじっと動かずに、雪江の咽喉もとから胸の傾斜を、吸いつけられるように見つめた。

「奥方様！ 刺せませぬ。新之丞には、とても、この肌を刺すことは叶いませぬ。このお美しいお肌を……」

「……」

「とても叶いませぬ」

「妾の力だけで死ねといひやるか」

「いえ、なれども、私めには、できませぬ」

新之丞の掌に力が入った。雪江の頬に、うつすらと微笑が浮び、目もとに優しい光が宿

った。

「よい、よい。新之丞、案ずるには及ばぬ。

妾は武士の妻の誇りを抱いて死ぬはずであつたな。弱い女子としてではなく、雄々しい女子として死ぬはずであつたな。……よい、よい。そなたの作法どおり、われとわが手で相果てよう。臆しはせぬ」

「……」

「されば新之丞。この心の張りの失せぬうちに、諸共に。……な」

雪江は、そういうとガバと身を起した。

身装をととのえた新之丞は、いわれるままに、小机の上から硯と杉原紙を持って来た。

「辞世の一首をしたためようぞ。悦び死んで行く二人の心を、あからさまに書き残すのじや」

雪江は、紙をとりあげると、

「女われ命燃やしし恋なれば、蓮のうてなもうれしからまし」

と書き流した。新之丞は、しばし想を練っていたが、

「もろともに消ゆる命は惜しからじ ただひとすじに燃えし情火よ」
と書きしたためた。

「新之丞、いささか妾が筆を加えますぞ。もそつと、調子をととのえたがよい」

雪江は、筆をとりあげると、まず上の句に線を入れ、傍に細字で書きこんだ。

「ひとすじに燃えし情火はたまゆらの命に代えて悔ゆることなし」

「いかがじゃ」

「かたじけのうございます」

新之丞は、添削された歌を、新たに書き直した。

高灯台を十二畳敷きの隣室に移し、経机の上に、折りたたんだ辞世の杉原紙を並べて置いた。

新之丞が先に坐し、それに相對して、畳一枚をへだてて雪江が坐った。新之丞の前には小刀が横たえられ、雪江の前には黒塗りの懐剣が置かれた。

右袖、左袖と抜いた新之丞は、それを膝の下に敷きこみ、肌襦袢の前を大きく開きながら、最後に袴をグッと押し下げた。遅しく盛りあがった胸の筋肉からかけて、張りきった腹が、臍下二寸のあたりまであらわにされた。

雪江は、紅絹の細帯の結び目をゆるめて、

腰半ばに結びなおすと、襟もとに両手をかけて、思いきり引きあげ、その手はそのまま滑って、細帯の上で大きく左右に開いた。惜しげもなくさらされた乳房とふくらかな腹が、その時、思いがけぬ弾みを見せて息づいた。

新之丞は、吸いつけられたように、一間の先に露呈された雪江の肌に目をこらした。その肌は、雪江そのものであると同時に、すでに新之丞のものでもある。この肌に魅せられこの肌に触れ、男と生まれた喜びを満喫したのだ。この肌は、新之丞にさまざまなことを教えた。それらはすべて、生涯にはじめて味わう甘美の狂気に色どられていた。——悔いはない。……新之丞は、小刀に白紙を巻き切尖一寸五分を残して、右逆手にとった。

「新之丞！ 心たしかに、見事に切るのじや。妾は、凜々しいそなたの最期をしかと見届けますぞ。話に聞いた切腹を、まじかに見るは、これが初めての最後じゃ。……妾も、すぐあとに続きますぞ、そなたを見習うて、な」

「嬉しゅうございます。……奥方様……さらば……」

小刀の柄頭をやや下りめに構えた新之丞は左手でゆっくりと腹一面を撫でまわし、やが

て左脇壺にぴたりと手をとめると、第二指と三指の隙間の上に切尖をあてた。雪江の息がとまった。いつの間にか、雪江の右手には、切尖二、三分を残して白紙で巻かれた懐剣が握られていた。新之丞の面を、かすかな笑みがよぎったように見えた。

「奥方様っ！」

低い叫びとともに、切尖はふかぶかと指の間に潜って肉を裂いた。

「クーツ」

という声が洩れ、新之丞は雪江の腹を見つめながらグッと右に引いた。刃が二、三寸滑った時、タラタラと血が噴きだし、刃を伝って白紙を染め、襦袢の白地にしみた。その手もとを見する雪江の目に、恐怖とはおよそ縁遠い嗜虐の好奇が、異様な光となって宿った。

新之丞は、渾身の力をしばって、臍下一寸のあたりに刃を引き、唇をかねて激痛に堪えた。冷徹な刃先が、まるで熱鉄と化したように、下腹の奥ふかく、無残な痛みを叩きこんで来る。

「奥方様も、俺のこの目の前で、あのお腹を召されるのだ！ その白い、厚みのある、ふくらかな腹を！ そなたを見習うて、見事

に腹を切るのじゃと仰せられた。奥方様の腹の中にも、いま俺が味わっているこの烈しい痛みがのたうつであろう。それに堪えて、奥方様は、美しい唇をかみしめ、乳房をふるわせ、切ない息づかいで……一文字に引きまわされるのだ！ ウウッこれしきの痛みに呻いてなるものか。……これしきの……V——

「ウッ」

と、おし潰した声とともに一気に左脇いっぱいに切りお世話と見るや、とまった刃を扶るように上にはねた。血がシュッとほとばしり、上下にはじけた肉が、言語に絶する凄愴さで雪江の目の前にあった。

「見事じゃ、新之丞！」

腹一面の激痛は、背骨をはって脳髓にぬけた。目先がかすみ、上体の支えが、他愛もなく崩れるような思いが新之丞を不満に駆りたてた。

「止めは、いかがするのじゃ、新之丞！」

雪江は、左腹の上に懐剣を擬し、まさに突き立てんとする構えで声をしばった。

「は……はい」

新之丞は、抜いた刃先を水月にあてがい、

左手を持ちそえると、クワツと目を開き、雪江の肌のすべてを網膜に焼きつけようとするように眸をすえた。

「奥方様！ お腹を召させられませっ！」

その一言に命をかけて、新之丞は、心の臓ふかくブツリ刃を突き通した瞬間、体が前にめった。倒れ伏した体の下から、たちまち畳をはって鮮血があふれにじんだ。

雪江は、懐剣を構えたまま、呆然とこの凄惨さに見入っていたが、左頬を畳にうけたまま動かなくなった新之丞を見届けると、張りつめた気持が、一瞬にして解きほぐされて行くのを感じた。

「へしてやった！ まさしく謀りお世話！ V」

雪江はすばやく立ちあがると、懐剣を鞘におさめ、身装をととのえた。次いで経机から新之丞の辞世だけを残して、おのれの一遍を取りあげ、灯火の火を移してそれを焼き捨てた。

高灯台を闇に持ち運び、あたりを見まわして、入念にすべての点検をおわった。それでもまだ懸念があった。——再び経机の前に行き、新之丞の辞世を開いてみた。

「ひとすじに燃えし情火はたまゆらの 命に代えて悔ゆることなし」

「へこれでよい。もろともに消ゆる命は惜しからじ」では、この謀殺の尻がわれるのじゃ。……これでよいV——雪江は、わが胸にいい聞かせた。

いったん境の襖をしめると、雪江は床の中に横たわった。

「へ仕上げは、これからじゃ。このひと芝居が肝心じゃV」

頭の芯があわただしく回転し、咽喉が干あがるような緊迫感にしめつけられた。

「へひい、ふう、みい……Vと、はね起きるきっかけをみずから作り出そうとあせったが、それとはうらはらに、体は重く床の中に沈んだままである。」

「へひい、ふう、みい……V——何度目かの思い入れで、雪江は床を蹴った。小走りに間の襖を力まかせに引き開ける。灯火がサッと新之丞の崩れた体を照らした。」

「誰かおらぬか。……誰か……来てたもっ」けたたましい悲鳴が、深更の静寂を破って廊下に流れた。

宿直の侍女を先頭にして、人数が馳せ参じた時、雪江は、襖に取りすがり、新之丞の死体を指さしながら唇をふるわせていた。

「怪しげな呻き声に目覚めると、この始

〔最新版〕 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B1	全裸エビ責仰向け(関谷)
B2	逆エビ責め全裸像(水本)
B3	乳首ペンチ挟み(竹野)
B4	後手十字縛肩口上(梨花)

B5	足の裏擦り責め(竹野)
B6	おへソいじめ大写真(関谷)
B7	剥いだバタフライ(関谷)
B8	貴方に捧げた裸身(大塚)
B9	乳房責め絶叫苦悶(大塚)
B10	無防備双手吊り(絹川)
B11	豊満臀部エビ縛り(水本)
B12	糸纏わぬ股間縛り(水本)
B13	全裸亀甲股間縛り(関谷)
B14	足踏付け二つ折り(大塚)
B15	尻突出しムチ打ち(関谷)
B16	手錠にもだえる(竹野)

B17	尻突出てエビ責め(水本)
B18	椅子開股鼻責触手(梨花)
B19	息もつがせぬ猿轡(竹野)
B20	投げ出した全裸(関谷)
B21	美しき尻部の露出(絹川)
B22	猿ぐつわ悦虐境(竹野)
B23	後手柱縛り脚線美(竹野)
B24	強制鼻挟水吞ませ(梨花)
B25	苦悶にねじる裸身(関谷)
B26	責めに気を失って(関谷)
B27	さアどうでもして(関谷)
B28	豊満乳房膨隆縛り(竹野)
B29	投げだされた女体(竹野)
B30	裸身をくびる麻縄(梨花)
B31	強烈縛りに悦ぶ(梨花)
B32	全裸逆エビ片脚拳(東浦)
B33	踏みつけマゾ境地(東浦)

B34	すべてをさらけて(関谷)
B35	ムチ打ち失神寸前(関谷)
B36	クリップ鼻挟み(絹川)
B37	台上のマゾポーズ(大塚)
B38	吊られゆく美体(絹川)
B39	拷問に無惨な美貌(梨花)
B40	マゾ女性の表情美(東浦)
B41	喰い込む股間縄(絹川)
B42	灸責めに悶える(梨花)
B43	犠牲台の人身御供(大塚)
B44	美肌無茶苦茶縛り(絹川)
B45	裸身に立つ蠟燭(大塚)
B46	手枷足枷大写真(四方)
B47	鎖に悶える足首美(柳初)
B48	蛇責めに柔肌栗然(梨花)
B49	鼻の玩弄恍惚境(大塚)
B50	女囚菱縄さらし(絹川)

末じゃ。思いもかけぬ事態なのじゃ。すぐさま表へ知らせたもれ。……そら恐ろしき椿事じゃ。……大殿様の御帰城を前にして、何たること……」

大芝居の最後の見得は、雪江の思わくを完璧に仕上げた。

それから間もなく——すでに時刻は八ツ(午前二時)をまわっていたが、目付頭の検

視を経て、老職柚木兵庫のはからいにより、新之丞の亡骸は箱詰めにして親許へ運び出された。

事態は一見して明らかであった。——奥方様に道ならぬ恋慕をひそかに燃やした小姓新之丞が、深夜闇近くまで潜入し、遂げられぬ想いのままに、自害して果てたというのである。殊勝げに書き残した辞世の一首が、そういう想定を有力に裏づけた。

新之丞の父は、二百五十石取りの番頭である。事の次第とともに、不肖の子の死体を下げ渡された両親は、家名の汚辱を恥じ、その日未明、猪苗代盛国夫妻にあてて、綿々たる詫び状を認めた後、自害した。

(つづく)

— アブ小説 —

／＼ 甘い 屈従

— 緑川良夫の独白 —

／＼ 伊 帆 保 胆

1

俺という人間は何というお人よしなんだろう。女房を一人の男にとられそうなのだ。実際女房の心は、その男と一心同体のように結ばれているのは明瞭だ。でも俺はむしろ女房をとられるように仕向けたことも確かなのだ。——而もそれを是認しながら尚も別れもせずにいるのだ。

現実の甘い陶醉に別れを告げることが恐しい私なのだ。そればかりか生れつき人一倍奇妙な性向をもっている私のことだ。どうしたってそれから脱れられはしない人間である。

宿命として諦めるとしても、淋しいことではないか。といって、こんな奇怪な生活の中で俺は絶望など味ったことはない。それだけじゃない。進んで俺らしい楽しみに耽りもした。それは自己嫌悪にとりつかれることもある。

俺だって男として恥かしい。俺好みの甘い生活に深い焦燥や反省を感じて夜も眠れないこともあるが、もうどうにもなることじゃない。俺にとって、この生活が終れば、すべては闇のようなものであり、生きて行く元氣もないのだから……今はただ女房と、その男と

が私をあのかく奇妙で而ももの悲しい雰囲気の中から追放するような恐しい考えを起してくれないことだけが私の願いなのだ。誰だってこんな私の秘密を知ったら、あきれかえったたわけ者だとか、一体お前は自尊心を持っているのかとかいって笑うにきまっている。

だが、これこそせっぱつまった私の幸福なのである。そして確かに云えることは、似たもの夫婦というものは、余程の幸運なしではうまく行かないということだ。

2

梨子と結婚したのは、もう七年も前のこと

だ。別に恋愛したり、知り合って結ばれたわけではなく平凡な見合結婚だ。梨子は少々やせてはいるが眼の適当に大きい、特に頬から顎にかけての線の美しい、まあ、美人といってよい女だった。

私もやせているので二人共同型なのが心配だったが、私はともかくとして、「梨子も、そのうち肥えることだろう、女のことだ」と考えてすぐに結婚してしまった。私は正直な所、別に結婚を真剣に考えたことはなかった。女房が居た方が便利だから位の気持だった。

新婚旅行、そして平凡な社宅での二人の生活、別にどうということもなかった。それ程楽しいことだとも思わなかったが、大抵の夫婦なんて、こんなものだろう位に思っていた。

その前にことわっておかなければならぬことがある。それは生れつき持っている私のおかしい性癖で、私という男はすべて丸味をもったもの、太ったものに愛着をもつ人間なのだ。私という男が子供の頃からやせていて、いくら栄養剤をのませられても、少しも太ることの出来ない体格の持主であることが太ったものにコンプレックスを抱くようにな

った最大の原因でありそうだけれど、それ以上にはよく判らない。不思議きわまる性向なのだ。だから子供の頃から町で太ったおばさんに会ったりすると、何となく嬉しくなったり話しかけられなくなったり、二重顎をした紳士がお腹をつき出して電車の中に坐っていたりすると、何故かしらそばに坐って、こっそりその紳士の肥満体を盗み見しているのだった。

中学校へ入っても、太った教師の学課は何故かしら身に入って勉強したりした。人一倍やせっぽちの私は、道を行くビヤ樽みたいな紳士に不思議な位好ましさと愛着を抱く少年だったから、そんな男女に会うとそつと後をつけ、いつしかその肥満した体軀を頭の中でヌードにして楽しんでいたりしたものだ。生長しても一向にそんな癖は止まなかった。ただそんな太った男女を見たり、河馬の写真に出会ったりする時、面映い気分がして赤くなったりするようになっただけである。

それだから職業柄保険加入者の身体検査の際、若し相手が肥え太った人物で、血圧を測る時などは時々胸がときめいて困ることがある。特に相手のつき出した太鼓腹に巻尺を廻して腹囲を測定する時、うっかり興奮して赤

面することさえあった位だった。それならばどうして太った女を女房にしないのだと云えば、前述のようにそれ程結婚を重大に考えなかったし、又私の肥満体への愛着が、私のやせっぽちの体格から来るコンプレックスによることが多いらしく、私の小児性の強い性格にもよるものだと思っていたからで、而もこんな奇妙な性格は、きっとその内消滅するに定まっていると思ったためだ。それに私は眼の大きく、頬から顎にかけての線の美しい女が、私とも思っていた。太った女を妻にすれば、私の性格からきつと溺れるに定まっている。益々そんないとうべき性向がかえって募ったらと思つたためもある。

同じ肥満体でも私のうるさいエピソードアンボりから、理想の太った女を探し出すことが至難に近いとも考えたためでもあった。

3

梨子はどことなく風変わりな所もあるが、中々いい女房だった。よく気がつくし、家計のきり盛りも上手に見えた。一見平凡なように見うけられたが、よく観察すると、なかなかの才女であった。何気なくいたずら書きをしたものを私は発見して驚いたものだが、彼女は画が上手なのだ。



「勿体ないね、君は、サラリーマンの妻になつたりして。まるで玄人はだしだよ」
と思わず云った位だった。その内彼女は流産をしてから、徐々にかくれた本性をあらわし出した。結婚生活も単調だが、といって倦怠といった程ではない。女房は時々Uの実家へ行くのが気がかりだったが、この間の時間は私にも実は嬉しい時なのだ。私は写真好き

で、太った男女を見かければ、そつとフィルムに収める性癖から脱け出せなかったし、雑誌や印刷物のそんな切り抜きの蒐集が相当たまっていた。人物だけじゃない。グロな肥満した所が気に入って、それ迄何枚も動物園の河馬をうつしたり、とにかく珍妙な蒐集狂でもあるわけだ。

角力とり、ガスタンク、象や犀、布袋様―世の中には太った形ものが、なかなかあるものだ。

――ただ象という巨獣が案外肥満していないことに気づいた事と、豚はどうしても好きになれない事が私の場合変っていた。以前学生時代、社会見学で屠殺場に行き、豚を横殺する所を見てから、私がいくら太ったものを好むとはいえ、何となくムカムカして来るためらしかった。

これらの奇妙な蒐集物を、いつもは机のひき出しに入れておき鍵をかけて梨子には絶対見せないことにしていた。いくら女房にでも私の秘密の性向を知らせることだけは恥しかった。女房が実家へ行く夜、私はこっそり社

宅をしめきり、鍵をかけ、夥しい肥満のスクラップの中に思いきり、やせた私の身体を埋めなつかしい郷愁と陶醉を味うのだ。そしてそれは私だけの知り得るリクリエーションでもあったのだ。そして私は安らぎを覚える。安定した月給とりとして人並に女房との不和もなく、こうしてたまに私のみの知る楽しみを趣味として持ち得る生活に幾分感謝したい気持ちだった。ただ布袋の置物を経済の許す限り蒐集したかったのだけれど、梨子にあやしまれるだろうからと、ただ一個で我慢していることは辛かった。

私は古道具屋が好きだ。そこには必ず布袋像があるからだ。そこに入って眺め、手にとる楽しさは、私のようなものでなければ判らぬだろう。でも体の方はともかくとして、立派で美しい顔の布袋様というものは案外少ないものだ。だから時に惚れられするような豊かで美しい容貌の像を見かける時、梨子への手前、買わずに我慢する辛さは相当なものだった。

蒐集物の中の何枚かは梨子の実父の写真である。Uの相当大きな茶問屋の老主人で、見るからに堂々たる恰腹と立派な容貌の持主で、正直云って梨子と結婚した一つの理由

は、彼女の父親が私好みのタイプであったためでもある。物判りはよいが、どこことなく気むずかしくこわい感じだが、梨子はこの父親をととても尊敬し、好いていた。私も実を云えば梨子と一緒に、この立派な肥満者の許に出かけ、堂々たる裸体姿でも心ゆくばかり眺めたいと思うのだったが、私の奇妙な性癖が、ふとしたことから洩れでもしたらと考えると余り会わないことにしていた。

4

或る日、テレビで相撲を見ていた。勿論肥満体がいくつも見られる相撲を私は好きである。而も重量を誇るK関にはかげながら多大の声援を惜しまなかったし、若し彼が敗けたりしたら、その日一日はガッカリして力が抜けたようになる程なのだ。四十数貫という重量も驚異だったし、最大の太鼓腹の持主の上、そのすばらしい腹が見るからにはりきっている、だぶついている。

この人の体は腹の他、尻でも乳房でも太腿でも、他のアンコ型力士がだぶついている中に全く特筆ものの見事なはりきり方で、風貌も堂々として、やや尊大な所がすばらしいと思った。

この人がその堂々というだけでは物足りな

いようなボリュームで土俵入りする所などは涙が出る程嬉しくなる私だから、その見事な太鼓腹をつきつけて相手を危げなく寄り倒す迫力が、どんなに私の胸をときめかせ、安らぎを与えてくれたことか。そんな時体重の相違や、この関取のやや尊大な面構えから、相手はまるで子供か禪かつぎにしか見えないことが多くて、何ともそれが爽快でたまらなかった。とりわけ相手がこの肥え太った関取の巨体の下に自分からつぶれてしまったり、K関得意の鯖折りで、あのすごい太鼓腹の下で潰されたり、打棄りで、相手が先に落ちK関の大きな尻が、その上へのっかりでもすれば私の喜びは益々大きかった。

マニアの通例で私は好みとするものの等級をつけたがる性質が強く、角力取りにもそれをいつしか適用しているのだった。勿論前述の張りきった見事な太鼓腹便々、四十数貫の

超肥満力士が最上位で、以下体重や体形や太鼓腹や容貌や実際の強さなどを加味して上下をつけてもいた。それだけではもの足らず過去の大力士で肥満体の持主も混合して、上下をつけようとした。全く子供っぽい楽しみだが、結構私には慰めともなった。でも過去の角力取りとの比較はとても難しく、ランキングに苦労したりした。

子供っぽいといえば少年時代、私のお伽話の国で、普通獣王とされているライオンが漸次引き下されて、おちぶれてしまったのは滑



稽だった。始めてライオンの実物を見た私は、その意外に小さいのにびっくりした。それにやせて尻や腹がちぢこまっているのに、がっかりした。まだしも虎の方に私らしい感じから威光と頼しさを感じた。そこで最初私の王国の獣王として登場したのはアフリカ象だった。これなら最も巨大で太いし、実力もNO・1だからだ。

獅子や虎が象には、とてもかなわないのは容易に考えられるし、本当に実力のないものが獣王として扱われている不合理を子供心に思っ、私は象を獣王に、ライオンをその家来にしたことに満足を覚えた。この時、象、虎、ライオン、犀、白熊、河馬、熊、ゴリラ、豹の順序の階級をつけて喜んでいた私であつた。

それが何度か順序を変えて行つたのだが、次には象、犀、虎、ライオン、河馬……となり、やがて間もなく、ライオンの稠落に比べて河馬がぐんぐん栄光の道を誇らかに上つて行つたのである。どうしてはじめの間、河馬が下位に低迷していたかと云うと鈍物で臆病であると書かれた本を読んだからであり、豚に似た恰好であることも損だったらしい。所が或る猛獣映画で河馬を見た時から私の好み

が河馬にこそふさわしいと思つたし、別の本で河馬が怒るとライオンも敵せず逃走するというのを読んで私の河馬への評価は急上昇するのだった。それでもまだ河馬は象、犀に次いで三位で未だ象王の支配をうける家来だった。そして或る日、私は動物園で河馬のふてぶてしく昼寝しているのを見てから一躍犀も象もとびこして栄光ある王冠をかぶせたものだった。象よりも犀よりも不敵に肥え太っていることを思えば、随分廻り道をしたわけだった。私は河馬を獣王になし得たことをひそかに喜んだ。もう不変のランキングをなし得た安堵の中で私は河馬王の豪華な戴冠式を見るのだった。象以下を王座よりずっと低い場所に平伏させ、一頭づつ臣従させるべく肥大の巨軀をふんぞりかえらせて、巨大な口を開き悠々と吼え給うのを見た。

やがて一頭づつ河馬王の御前にうやうやしく進み、平伏する。河馬王は家来共を一頭づつその太短い前足をひれふした家来の頭上に置き、臣従の誓いを述べさせ、そして巨大な肥軀の後に廻るを命じ、太い尻つぺたを長時間ねぶらせ、糞の雨を注いでやるのだ。残忍な私の趣向はもっと発展した。今迄最も強く肥大した獣王河馬様を身分もわきまえず自分

の家来としていたライオンや象、犀などは、その罪をとわれ、一頭づつ河馬王のもてあそびの罰を受けねばならないだろう。河馬王は象、ライオン等を一頭づつ大口にくわえて軽々と投げたり、自分の肥え太った腹でふみ潰したりして豪快に哄笑したりする。家来達は情なく河馬王にお慈悲を乞うという構図、勿論寛大なる心の所有者でもある獣王は「うむ情ない奴じゃ、余に心からの忠勤をつくさば命だけは許してやるぞ」と誇らかにうそぶくのだ。而も河馬王は絶対君主で、家来は象、犀と続くのだが、ライオンという元の王は河馬王の召使にまで落ちぶれたものだった。

彼はいつも河馬王の体中を、その舌で清め参らせなければならず、そうでなければ河馬王の巨大な尻の後にうやうやしくひかえて主人の命を待ち、いつも河馬王のご機嫌を伺い、雷の落下せぬことを祈っている。河馬王は時々巨体を横たえながら自分の便利な召使であるライオンを大口や尻でもてあそぶのも好きだった。

子供心に何故か知らぬが肥大したものへの讃美と、主従の逆転とが、私の魂を揺り、歓喜をもたらした不思議さは、中学の下級生時代歴史を学んだ時、あやしく私の心の中で発

火したものだ。下剋上がそれだったし、戦国時代や支那にはそんな逆転劇はさらに存在した。野球でも逆転試合が一番劇的で面白い位だから、そんな遊びでない生命がけのゲームに於ける主従逆転がこの上なく面白いのはうなづけるが、私にとってはめくるめく光彩と郷愁に満ち、その光景を思い浮べただけで面映く、胸の高鳴りをどうすることも出来ないものであるのだ。

安禄山、陶晴賢、など色々あるが、この二人は太っちょだと聞いて益々私好みだと思った。が二人のようにすぐに又滅されてしまうことが多いのが一寸物足りなかった。それに元の主人はすぐ殺されるのも物足りない。元の主人が新しき主人に滅され、反対に臣従を誓わされ、而も奴隷となることにより生きて行く、而もその新しき勝利者が巨腹便々たる太っちょだとしたら、私の陶醉は最高だった。ちょうど少年の日、私の秘密のお伽話の世界に於て、獣王獅子が河馬のために哀れにも王位を奪われ、而も新しき獣王、河馬王に臣従を誓わせられ、肥躯を誇る河馬の巨体に奉仕する召使と落魄したように。

こうして私というおかしな少年は暇さえあれば、そのような残酷な物語や歴史等を探し

求めたものであった。

5

所が梨子も大変相撲マニアであることをすぐ私は知らされた。休日、テレビを熱心に見入っていた私の隣りに彼女は坐って殆んど席を立たないのだ。而も時々彼女の方を盗みみると明らかに眼を輝し、時に亢奮さえしているのだ。ほっとしたり、祈ったり、ため息をついたりしているのを知って私は驚いた。

聞けば毎日一人ではらはらして見ているとのこと、K関が悪戦の末勝った時、私はわくわくして仕方なかったが、見ると梨子もそうであるらしいし、話して見ると彼女もK関のファンだと云う。

「君、それ本当かね？」

「ええ、あの人とても立派で、勝って下さると一日中楽しいのよ、負けたりすると滅入って仕方ないの」

「へえー、大へんなファンだね、でもあの人余り太っているためか案外人気に乏しいらしいね。特に女性なんか、余り太っちょで気味が悪いなんて云ってるらしいがね」

「気味が悪いなんて失礼よ、立派ですわ、本当に、あんなに素晴らしい太鼓腹が、どうして嫌いなのか判らないわ、あの人を見ると他の

お角力さん皆けち臭く見えて仕方ないのよ」
「それなら、今迄どうして僕に云ってくれなかったの」

「ごめんなさい、私やっぱり普通の人は違っていることを意識しているのね、それが知れると恥しいからよ」

私は驚いた。「まさか」とも思った。こんな性向は珍しいので自分位のもものと思っていたのに、而も女の梨子が私と同じ性向の持主だとは。彼女は今迄云わなかった告白をすっかりしてくれた。男兄弟の中のただ一人の娘だったため、父親に大変可愛がられた彼女は、その人をこの上なく愛し、而もその人が堂々たる肥満者であるためか、太った男に非常に心をひかれ、とても好意を持つのだという。そして彼女も子供の時からひ弱で、いくら栄養剤を飲んだりさせられても、一向に太らなかったことから肥満体コンプレックスになったらしいとも云うのである。私は驚いた。まるで私と一緒にではないか。彼女が眼に余る程実家へ行くのも、きっと太って立派な実父の側に行つて、人知れずどうにもならない悩みを晴らそうとするために違いないと思った。

「いつも父は私をお湯で洗ってくれたわ、そ

れで今でも恥しいことだけど、私、父とお風呂に入るのよ、ホホ、私恩返しにこの頃ではいつも流してあげますのよ、私あの太った背を流すとともに安らぎを覚えてしまつて……ごめんなさいね。あなた怒つて……」

「怒るもんか、それより驚いてしまった」

「何故ですか？ 私がへんな女だと思つてらっしゃるのね、それにあなたやせてらっしゃるし、悪いこと云っちゃったわ、でも私のこの癖つて、どうにもならないの、許して」

「そんなこと。驚いたつていうのは、そんなことじゃない。僕と趣向が、とても似ているからさ」

私はそう云い終つてから、面映さにどきどきした。

「エッ？ あなたも、まあ」

「仕方ないよ、もっと前に云わなければならなかったのだが、でも恥しくて云えなかったのさ」

彼女はびっくりして、私をまじまじと眺めた。自分と似ているという私の言葉が信じられない風だったので、信用させるために私はあの奇妙な肥満体や河馬の写真や、肥満体を扱った記事や小説の切り抜きのすべてを彼女に見せたものだ。少年時代の異常な執着や、

河馬王の私だけのお伽話や、主従逆転への強い興味などを洗いざらいぶちまけてしまった。何となく泣きたいような嬉しきで、そうせずにはいられなかったのは、梨子が意外にも私と同趣向という考えもなかった喜びから、今迄私だけの胸の中にしまつておかなければならなかった抑制への反動でもあったのだらう。彼女は「まあ」と心から感動の叫びをあげ、私の告白を眼を輝して聞いていた。私達は抱き合っているのだった。同病相憐む感傷的な気持からである。

6

そんなことがあつてからというものの、私の気持は複雑だった。先ず第一に私は安堵せざるを得なかった。人にも話せないことだと思つていたのに、女房が珍しくも同様な性癖の持主と知つて、嬉しくなつてすっかり喋ったことによる、ほっとした気持。そんな万に一つのような幸運を感謝したい気がしたわけだ。

「まあ、よかったわね、夫婦が同じ趣味だなんて、人に喋れないことが夫婦だけで話せるのは当然のようだけど、嬉しいわ、これでお互いを一層理解出来るというものよ」と梨子が心から云つたが、その通りだつ

た。だが同時に不安の方も、どうにもならなかった。太った者に二人共強い愛着をもつていて、とてもふりきれない程なのに、何とお互いにやせているとは奇妙なことだ。いや奇妙で済ませることでもないかも知れない。そう云えば私も妻も明らかに慾求不満らしいことは容易に想像がついた。

お互いの肉体には殆んど感興を抱いていないことが今はっきりして来た。私はとてもこのやせこけた恥かしい肉体を、梨子の心から憧れる肥え太った便々たる体軀にするなど、考えられもしなかったし、梨子だって同様なのだ。若し梨子が肥満する時があるとすれば、お婆ちゃんになつてからだらうし、それさえ期待が持てないのだ。我々は太れない体質に生れついたらしいのだから。そう考えると一体お互いの告白が我々にプラスになったか判らないと思つた。告白さえなかったら……：その方がよかったのかも知れないのだ。でも済んだことを悔んでみてもどうにもならなかった。だが、その夜からお互いの肉体を我々は拒否するように自然になつていた。お互いに虚偽の操作をすることが、何よりも愚かなことと自ら意識していたのである。

「ごめんなさいね、でも、どうしてもそんな

「気持になれないのよ」

「うん、君だけを責めるなんて僕には出来ないよ、僕こそそう云いたい位だ。あんな告白はよせばよかったかも知れないね」

「そんなこと……そうかも知れなくてね……でもいつかは判ってしまったわよ、きつと。」

それに夫婦が秘密を持っているなんていやだわ、だから話してよかったとも思うわ」

「君はインテリだから……それに僕は永久にやせっぱちにきまつてるし、悪いよ」

「あなたって、やさしすぎるわよ、仕方ないじゃない。二人でお角力の話でもしましょうよ」

毎夜私達は肥満体を讚美しあって、クスクス笑いながらいつしか眠りに入っている奇妙な夫婦になっていた。河馬が大好きで、若し長者にでもなったとしたら、南の国で河馬の群を放し飼いにしたいとか、河馬の糞を食べろって命令されたら俺は食ってみせる、とか河馬のでっかい尻や腹や、太い首から胸に幾つかあるだぶだぶしたひだを見てると耐らない。などと子供っぽい変てこなことを云うと彼女はケラケラ笑った。

「君はいいよ。立派なお父さんがあって」

「あら、あなただって、もっと行って頂戴

よ、父も喜ぶわ」

「そうしたいのを我慢してたんだよ。お父さんはとても立派だろ、僕のへんな性向が若しばれたら困るからね」

「ホホホ、父ならば構わないわ。秘密は守って下さるわよ。私の願いは何でもきいてくれるんだから。そうね、いつか私の代りに父と一緒に風呂に入つてよ。そして背を流してあげてよ」

「うん」

毎夜私達は倦きもせず、こんな風な会話をくりかえしていた。私達は少くとも外観はい夫婦だった。家の中だけでは大っぴらに私達は奇妙な蒐集物をひろげて楽しんだし、梨子は私の写真の現像を手伝ったりした。それに今迄のように布袋の置物で気に入ったものがあっても我慢するような遠慮がいらぬのは嬉しいことだ。

給料とりの貴重な金が布袋像の蒐集のために屢々乏しくなりがちなことをのぞけば、梨子は全く得がたい妻であった。

7

あの告白は、しかし決して幸福のみをもたらしたはしなかった。若い私達はただ、あの奇妙な性癖を共に抱いて、それを語り合えると

いう理解のみでしか成り立ってはいないのだ、とさえ私は時々思わざるを得ない風になつてしまった。

そして毎日抑制もなくお互いに肥満体への讚美を語り合うことが、我々のもつ不幸な性向を満してくれはしても、それで済むことでもなさそうだった。毎日肥満体について語っている内我々の奇妙な性向は、皮肉にも日ましに募って行くばかりなのだ。仕方なく我々は子供のよう粘土や薬などで太った男女や角力取りや獣などを作って遊ばなくてはならなかった。我々の行ふ遊びは、殆んど太った男女が優位にあつて、我々みたいなやせっぱちを支配し、奴隷化させる話ばかりだった。我々は二人共強いマゾなのだ。

梨子は被支配者にとって実に見事な程残酷な太った支配者の行為を次から次へと考え出して私を驚かせた。それに人物の画を彼女はとても上手に描くのだった。でもその内人形にも倦き、8ミリ映画に奇妙なストーリーを刻むことになった。脚本は二人で作り、画は梨子が、後は共同して何日もかかって製作したが、二人はまるで学生時代に戻つたような表情で熱中したものだ。勿論太っちゃが君臨する主従逆転のストーリーのもののばかりで、

例の河馬の王様とライオンの奴隷という私の少年時代のなつかしくあやしいイメージが白布のスクリーン上に映された時、私は感激の余り涙が出る位だった。

「ホホ、あなたにとって河馬は聖獣ね」

と梨子は笑ったが、彼女の画のうまいことに私は感激し、とにかくスクリーン上を闊歩する太ったものに胸をときめかしたものである。笑う梨子も、その頃では私のように河馬が気に入ったと見え、私の勤務中、こっそり動物園へ行って河馬や象をスケッチしたり、写真にとりて来たりするので、私の書斎はこの太ったユーモラスな怪獣で満ち満ちる一方だった。

でも、やがてこんなイメージだけでは満たされないようになって行く我々だった。私達はお互いに度を過ぎないよういましめあって来たのにもかかわらず、ふと我に返り、この上なく淋しさにとらわれるのだ。梨子はそんな時実家に帰ることで、太った父親に子供のように甘えてまぎらしていた。そして好機嫌で父親からせしめてくる土産ものを見せ、厳格だった父親の壮年の頃の雇人達や、彼女の母親への厳しい叱責ぶりを語ったり、その頃三十貫もあったという肥満ぶりを思い出して

話してくれたりした。私はそれを聞いて胸をときめかすのだ。ある時、梨子は父親に貰った貴重な酒というのを珍重そうにとり出して私にすすめる。私は喜んでグラスに注ぎ飲んだ。強い酒精分を含有していてすぐに私はクラクラする程だったが、気がつくとなんとなく古臭いようなほろ苦いような感じで、幾らか塩辛くもある。

「おいしかったでしょ？」

「うん、とても、変わった酒だな。余程時代ものらしいな。何んて酒なの」

「ホホホ」

彼女がケラケラ笑い止らないことで、私にはやっと思味が判るのだった。私は思わず赤面し、その癖太った腹をつき出した、いかめしい將軍みたいな顔付きの梨子の父親を思い浮べるとカッと身体がほてって仕方なかった。

「ホホ、あなた好みじゃない？」

「うん、そうだね。でも君、お父さんにまさかー」

「いいえ、大丈夫よ。私達のこと父は知らないことよ。それでも随分苦労して手に入れたのよ」

「そりゃ、すまなかったね」

「今度又持って来てあげるわ」

「うん」

私は又赤くなって呟くだけだった。屈辱と陶酔が小波のように私の心の中に拡がって行ったが、流石に私は「頼む、酒精分はなるべく少くていいから」と云いたいのを恥かしいので我慢していた。こんなグラスでなく、そのまま飲んだらどんなにいいだろうと思いがら。とにかく梨子の堂々たる初老の父親は梨子のみならず、私にも主として間接的に大事な存在だったのだ。

だのに彼が間もなく自動車事故で即死するといういまわしい事件が起った。梨子とその後長い間非常に嘆き悲んだことは云う迄もない。と共に彼女はともすればヒステリックな女になってしまった。彼女の強い性癖が立派に肥え太った父親に甘え、湯などのお伴をして、あのお厚く肥えた背を流すことなどで満されていたのだから、その頼しい父親が存在しなくなれば、それは全く無理からぬことだった。

漸く私達奇妙な夫婦に危機が訪れようとしていた。私達好みの話や8ミリ映画をうつしたりすることが、以前程の陶酔を私達に与え

ないことが多くなっていた。自然とどちらからともなく離婚の話がなされる程にさえなってもいた。父親の残した遺産もあって梨子は自活出来るし、若し離婚が出来れば、我々程理想的な離婚もなかったろうと、私達は笑って話したものである。「暫く別れてみては」と、これもどちらともなく云い出し、梨子は実家に帰ったことがあったが、十日程して彼女は戻って来た。

彼女の思慕した父親が既になく以上、当然早々にして実家を後にする位は、私も彼女もはじめから判っていたのだが……

私達は別に愛し合っていないから、奇妙にもその際も淡々としていた。彼女の実家から持ち帰った亡父のいくつかの遺品、とりわけ身につける巨大なサイズの下着や下帯類は、彼女のせめてもの奇妙なフェチズムにいくらかの満足を与え、私も例外ではなかったし、亡父が時々用いたという尿瓶の汚れたものは特別私の蒐集癖には貴重なものとなり、その後長い間客間に飾られたりした。

或る夜、彼女とあの肥満した父親の思い出話をした後私はこんなことを口にしていた。

「このままじゃ、どうにもならないね」

「そうね、といってどこへ行ったって、同じ

趣味の人なんかいないわ」

「そうだよ、とりわけ我々のは変ってるんだから」

「このままじゃ仕方ないけど、これさえなくなったら何にもなくなるわ。おかしい話や遊びごとを二人でして持っているようなもんだからよ。少し前にはこんなこと思わなかった。二人して蒐集物をひろげたり、河馬の王様だとか、肥満王のサディズムなどという映画作ってみてるととても楽しかったのに、へんね」

「お父さんが残念なことになってしまったからだよ」

「そうね、考えてみると私だけ父に甘やかされて育ったため人並はずれてぜい沢なんだから。我慢出来ない筈なのに」

「僕だってそうだよ。しかし確かに僕達はお互いを理解しすぎてしまったものさ。僕達二人は別々に太った愛人を探すより仕方ないと思うよ」

私は何気なく云ってハツとした。だが梨子は別に何のこともないように、

「そうね、そうでもないかと私も何となくこわいわ。それがいいわ。でも私に自信があるかしら？」

「自信を持つんだよ。君は中々奔放な所があるし、魅力があるよ。それに比べると俺の方が自信がないが、どうにかなるさ、どうだい、いいこと考えたんだ」

「何のこと？」

「お互いに若し太った愛人を持ったら、知らせ合うんだよ、細部に亘って——」

「ホホ、よくってよ。でも、きっと嫉妬するわね」

「勿論だよ。ハハ、それがかえって面白いさ」

「余程立派な人を探さなくちゃ駄目ね、ホホお互いにその太った人の写真を沢山交換しないこと？」

「いいアイディアだね、すばらしく独創的な小説みたいだね、ハッハッハ、でも僕は正直云って余り自信がないんでね、こんな小心者だから」

「ホホ、あなたってその純心な所がいい所ね、父もよくそう云ってたわよ」

驚くべき会話だが、私達にとっては別段不思議な話ともいえないのである。

私は一月もの間Aへ出張を命ぜられ、Kを後にしなければならなかった。寒冷地だとい

うので梨子は心配して色々下着を用意して鞆につめ駅まで見送りに来た。

「気をつけてね、風邪などひいちゃいやよ、しっかりやって来て」

と、にこやかに笑って私の肩をかるくたたいた。

私も笑ってしまった。彼女の言葉の意味を知って、Aにつき、歓迎会などがあって、その翌日から県中、外務員のつれて行く保険加入者の家へ赴き身体検査をする。いつも乍らの単調な仕事だが、所々積雪のある珍しい土地なので面白かった。それに土地の人が概して好感のもてる素朴な性質のこともあって悪い出張ではないと思った。こんなことを梨子へ手紙に書いてやると、すぐに返事が来て、あなたのお客に太った人が存在してくれるのを祈っています。等とかかれていて私を苦笑させた。確かにたまにそんな肥満体に出会って血圧を測り、聴診器を当て、つき出した太鼓腹に巻尺を廻して腹囲を測定し、検尿のために尿管を貫くのは好ましく微笑ましいことだ。でも保険では肥満体を敬遠しがちで、案外そんな型の客に出会うことは少いものではないが……だがAに行ってから十日後に好運にも堂々たる男女の夫婦の客に会った上、意

外にも暇だからと云って歓待されて気をよくした通り、その晩、私は思いがけない幸せに遭遇したものだ。長くなるから簡単に云うと私の理想的な女性を発見したことで、彼女は四十少し前と思われるが、肥満した体躯と、なかなかの美貌の持主であるその地の女支部長なのだ。よく太っているが、西洋女を思わせるスタイルで、堂々たる尻は寧ろ美しい位だし、その上私好みの頬から顎にかけての線のとても美しい女なのだ。勿論女丈夫で、男女の部下達を、心服させながら、叱咤して使う快よさが私のマゾ的亢奮をかきたてたのだ。

仕事が終わると彼女は土地特有の料理と酒で歓待してくれた。彼女が意外に女らしい一面をもち、愛情に濃かな女性であることは、そ

妊娠七カ月のストリッパー

瀬 沼 四 郎

週刊新潮六月十五日号に「ストリップ見物人の人権」と題して、面白い記事がのっている。まず見出しにゴジックで、

「特出」という言葉を存じですか。つまり「特別出演」を略したものです。関西ストリップに限って、それは、見せるぞと、いうことだそうです。その関西ストリップの「特出」にからかわれすぎる東京の客の人権(?)を探ってみようというのですが、「オリンピックを前に、いくら取り締まっても」「特出」ははびこる一方。妊娠七カ月の踊り子まで「特出」しているというのですから『どもならん』のです」

とある。この「妊娠七カ月」というところが気になるので本文を読んでみると、さる五月十九日夜、東京・豊島区巢鴨にある庚申塚ミュージック劇場で、公然わいせつ罪の現行犯で踊り子九名と照明係および支配人の十一名が逮捕された。この踊り子九人のうち妊娠していたのが二人、子持ちが一人いた。検束された踊り子の名前があがっているのを見ると、妊娠していた踊り子の一人(二十六歳)は妊娠七カ月(もう一人は三カ月)ということである。この記事では、妊娠七カ月の踊り子が踊っていたことについて、これ以上ふれてはいない

の後何度も接している内よく判り、一日と私の彼女への思慕は募るばかりで、出張期限の残り少なくなった或る日、遂に私は彼女に打ち明けたものだった。そして帰宅後も何回か彼女との手紙は交換された。梨子にうちあけるべきか迷っている内、梨子はめざとく感じとっていたのには驚いた。例によってはしゃぐようにして梨子が私の幸運を喜び、「うまく行くといいわね」と云ったが、その言葉の中に一抹の悲しみがかくされているのを知って私は梨子に済まなくてならず、そう云うと「馬鹿ね、しっかりやりなさいよ」と云った。こんな梨子に私は感激した。遠く離れれば、あの年増女の歌うような美しい会話や、私好みの肥満女のポリウムが私の思いをかりたて眠れなかったものだ。でも私は悲しくも失恋の痛手をうけなければならなかったのだ。彼女もあれ程乗り気であったのに私の嘘言が拙かったのだ。私が独身と偽っていたものだが、彼女は会社に問い合せて私に女房のあることを見破ってしまった。とにかくこの間の消息はこんなに簡単ではないが、失恋の痛手をとててもごちゃごちゃと呟く気にはなれないのだ。

(次号「第二部」完結)

が、小生が興味をもったのは勿論この点である。

妊娠は妊娠第四カ月の末にお腹が目立ち始めるといわれている。第五カ月末から胎動を感じるようになり、第六カ月に入るとお腹がどんどん大きくなる。第七カ月では、もうとても隠せぬまでにお腹が膨らんでいくのが普通である。いくら「特出」に目にくらんだとはいえ、妊娠七カ月にもなる妊婦を、しかも裸で見て観客が全然気がつかないということは考えられないことだ。ぼつてりと太くなつた腹を見なくたって、乳房の異常な着色に気がつくはずだと思う。恐らく(あの踊り子は孕んでいる)とお客も承知で見ているにちがいないのだ。あるいは(まさか)と思ったのかも知れないが。現に妊娠七カ月の踊り子が、ステージで踊っていたという事実があるのだから、妊娠したストリッパーが踊っていることは、一般的にありうることなのだろう。しかし二カ月や三カ月ならともかく、実際に(警察の発表だから、まさかではとらめとは思えない)妊娠七カ月もの妊婦がストリップをやっていたということにはおどろく。検査されなかったら、八カ月になっても、九カ月になっても、臨月になっても踊りつづけるつもりだったのだろうか。そうなのでもお

客は(すごい腹をしているなあ)と思いがら、眺めつづけたのだろうか。

本誌六月号「変天古林短信」に、「最近ストリップ劇場が再び往年の盛況をとり戻しつつあるが、トビタOS劇場では、なんと出産五日目のストリッパーが踊っていて当局からお目玉を頂戴したとか。臨月のお腹を見せてはしかった、とあとで羨やむこと羨やむこと」と書いてあったが、分娩後わずか五日で踊らねばならないような事情があったのなら、臨月になっても生まれるぎりぎりまで踊ってもおかしくはない気がする。どうせ労基法違反だろうと思うが、産後の労働が禁止されているのにくらべて産前の妊婦は自分から申し出ない限り、分娩当日まで働くことも違法ではないからだ。もっとも劇場の方で妊娠した裸体では困ると思えば別である。臨月の妊婦がストリップに出ているなら、さしづめ小生などは大いに歓迎するところだが。小生もときどきストリップぐらい見ることがある。観客の中には、そういうことに関心をもって見ている人もかなりあるのかも知れない。ただそれが、本誌上などで余り話題にならないのはどうしたわけなのだろうか。たまたま目についた週刊誌の記事をきっかけにして、小生は以上のように考えた次第である。

続十三人の女死刑囚

(最終編で終らぬのが、素人の嬉しいところ)

佐 出 須 登

1

「被告アンを死刑に処す」

裁判長の声がまだ耳に残っています。わたしに対する助命運動も遂に空しく終り、わたしの一生はせまい、八角型のガス室で閉じることになりました。

わたしの犯した罪を、或る人は止むを得ぬことだと言い、また或る人は、世にも恐るべき行為だと言っています。識者と自称するこれらの人々の論争は、これから長々と続くことでしょう、わたしはとくに死刑になっているのに。皆さんはどの様に考えますか、

まあ、わたしの話を聞いて下さい。すごい話ですから、おどろかないように。

わたしの乗っていた船が嵐のため沈没し、わたしは海に投げだされました。必死で泳いでいると、幸い目の前にボートが見えます。生命からがらボートにのり移れたのは、わたしとナタリー、デビーの三人にすぎませんでした。一日に一回はやってくるスコールのおかげで、渇きの方は何とかしのげましたが食糧は全くありません。

わたしたちは靴や皮バンドまでも食べようとしてみましたが、いくら海水にひたしても

軟らかくはならず、却って唾液をむだにするだけ、空飛ぶ鳥や水中を泳ぐ魚は見えても、それをとる道具もありません。

それでもわたしたちは、七日の間は我慢しましたが、八日目の朝、ナタリーが妙なことを始めました。

マッチ棒を三本とり、その一本の頭を折ると、三本とも手のひらにかくし、二人の方に突きだしました。その表情は全くこわばっています。そしてやっと聞きとれる様な声で、「アン、これを引くのよ」

と、たったこれだけでしたが、もう十分で

す。彼女が何を云おうとしているのかはすぐにわかりました。

しばらく沈黙の時間が過ぎました。今までいろいろなくじ引きはやりましたが、こんな生命を賭けたものは始めてです。負けたらほかの二人に食べられてしまうのですから、緊張を通りこして恐怖となるのは当然でしょう。

わたしは思いきってその一本を引きぬきました。幸いなことに薬がついています。その時の嬉しさと云ったら……しかしナタリーとデビーの顔はますます血の気を失いました。

ナタリーの指がぶるぶるふるえています。デビーはそのすきまから見えないかと、のぞきこめば、ナタリーは、あわてて両手を使っておおいかくしました。デビーは、どちらにしようかと迷っています。遂に一本をつかみました。まだ考えています。ああ別な方に変えました。ぐいと引きぬく。薬がついています。こうして食べられるのは、云いだしたナタリーと決りました。

ナタリーの顔はもう生きた人のそれではありません。やがて口をやっとひらくと

「あなたたち、何のつもりだったの。わたしは、ただのいたずらにやったのよ」と云いました。

今となってみれば、ナタリーの心境は察するにあまりありますが、当時はそれどころではなく、わたしはバンドを両手に握り、じりじりとナタリーに迫りました。ナタリーもまた傍にあった棒を拾って身がまえます。せまいボートのなかですから、逃げることはできません。それもわたしが撲り殺されたら、食べられるのは、わたしになるでしょう。わたしも必死でした。

二人がにらみあっている間、デビーがそつとナタリーの背後にまわり、手にした大型ナイフを肩胛骨の真下に、グサリと突き刺します。悲鳴をあげて倒れるのに、わたしはとびかかり、バンドを、その首にまきつけ絞めあげました。デビーは続いて頸根を刺し止めます。ナタリーは、そのままあけなくこときれました。

ほとばしりでる血潮を、デビーは傷口に唇を押しつけすすっています。わたしも更に下腹をナイフで切り裂いて飲みました。生涯にこれほどうまいと思ったことはありません。

これからが「悪魔の仕業」と云われるのでしょう。斬り落した生首は布でつつんで海に投じ、手足は一本づつ分け、まず最初に胴体を食べることにしました。

いたみやすい肝臓や腎臓が先でしたが、むしろ心臓や子宮の方が歯ごたえもあり、なかなかの美味でした。腸管もきれいに洗って乾かせば長くおかれます。しかし何といっても一番おいしかったのは卵巣でした。

節約はしたのですが、五日で食べきってしまい、再び空腹がやってきます。一度人肉を味わった虎は完全な人喰虎になると云いますが、わたしたちがまさにそれでしょう。デビーの腕を伏せた様な乳房、ふくよかな腹部が目につきます。これは彼女にとっても同じでしょうから、油断もすきもできません。

わたしがはっと気がつく、デビーがナイフを手に迫ってきます。わたしはその刃をかわし、逆にとびかかり、その脚をはらうと、デビーはボートの舷につまづいて、ザンブリと海中におちました。

わたしは、その一本の脚をつかみ逆さにぶら下げると、デビーは必死で水をかきもがきましたが、こうなつては、もうどうすることもできず、間もなく絶息しました。

死体と変ったデビーをひきあげ、喉と心臓を刺して止めとします。今度こそわたしひとり、身体全部を食べられるのです。

わたしが救助されたのは、皮肉にもその翌

日でした。殺人以上の行為をしているのですから、折角助かってもしなんにもなりません。せめてあとかたもなくなっていれば、おそろくわたしの犯罪は知られずにすんだかも知れませんが、ちょうどおいしい部分だけ食べたところだったのです。同情はされたものの、その場で捕えられ、そして……。

こうしてわたしは、明日ガス室の人となるのですが、もはやジタバタせず、いさぎよく死ぬつもりです。ガスがでて十秒たったなら、深呼吸して、検死人が拍子ぬけする程あっけなく、あの世に行きましょう。

2

遠くから足音が聞えてきたと思うと、獄舎の戸が荒々しくあけられ、二人の兵士が入ってきた。最後の時がきたのだ。

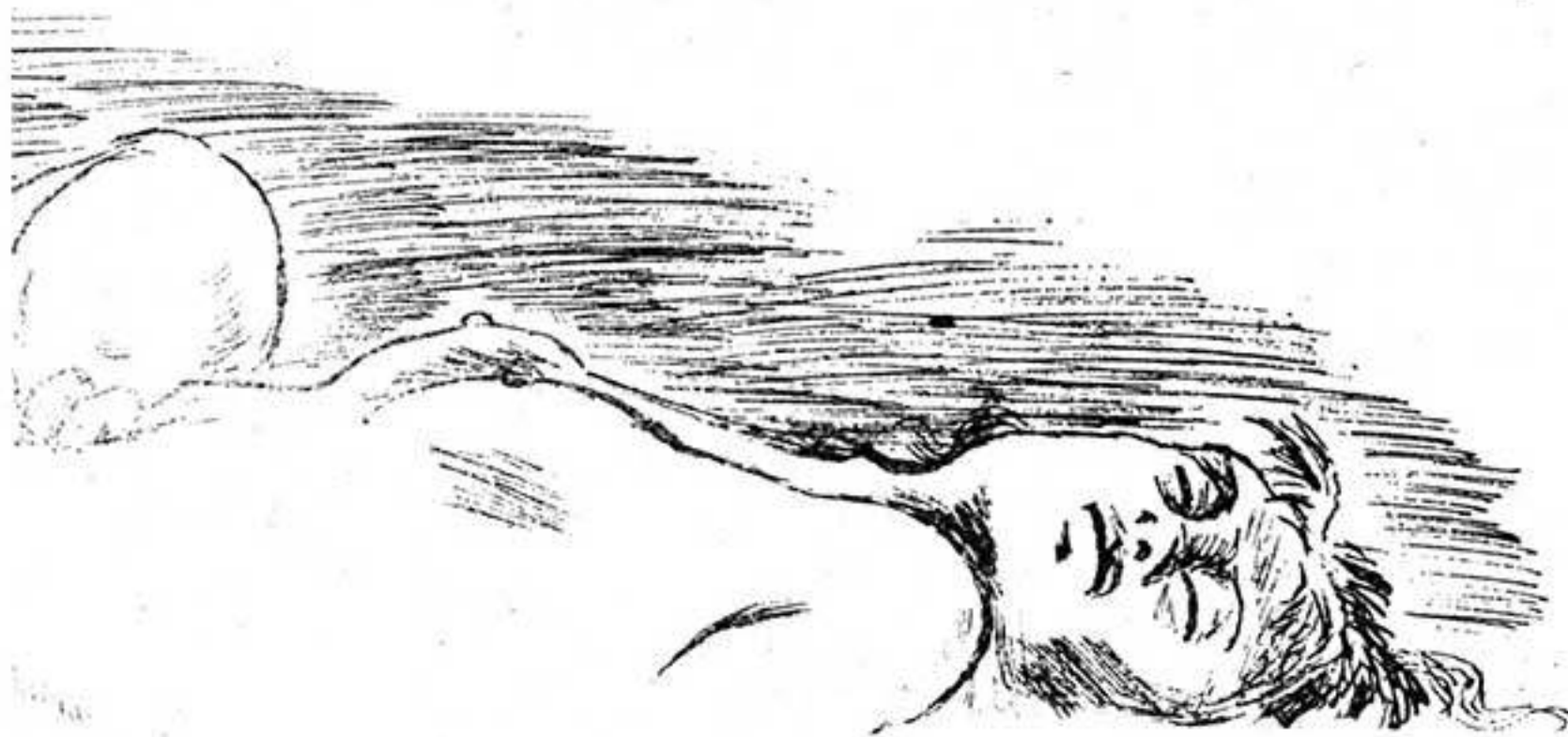
両脇をとられ刑場へ行く間、祖国を守るための、抵抗運動の犠牲となって死んだ、多くの同志たちの面影が目に見えてくる。

道を歩いている途中、突然爆音と共に粉みじんになってケシとんだフランソアーズ。彼女は人形の中に時限爆弾をかくし、そしらぬ顔で抱いたまま、これで敵の施設を爆破しようとしたのだが、惜しくも故障のためか、それとも時間を誤ったのか、無念の最期をとげ

てしまったのだ。足首から先と、首しか残らず、しかもその生首は敵の手に奪われ、晒しものとなっていた。靴の底に手紙をかくし、同志のもとに運ぶ役目をしていたエレオノラが、秘密警察に捕えられてから三日目、彼女と思われる、まっばだかの死体がS河に浮いて、プカプカと流れていた。彼女と思われる“と言うのは首が斬りとられてあったのだ。しかも乳房と下腹部がえぐられていて、わたしたちの悲憤の涙をさそったものだった。おそらく首は最後に斬られたのだろう。

味方の空襲があった時、ライトや花火で合図し、敵の重要施設の方向を教えていたオードリイやシルビヤは、二重三重の死刑をうけた。即ち銃殺や絞首刑をうけてから、首を刎ねられ晒しものになったのだ。念の入ったのはデボラで、首にロープをかけ吊り上げ、絶息する前に下腹に拳銃弾をブチこんで苦しめ確実に息絶えてから、首を斬りはなした。それでも彼女らは、正式の死刑だから、まだ幸運だった。戦車でひき潰されたり、プロペラに縛りつけてぐるぐるまわされたり、どんな風にして殺されたのか、死体さえ残らぬ同志もあるんだもの。

ミレーヌは幸いにも死一等を減ぜられた。



終身刑といっても、実際は戦争が終るまでだから、彼女がとびあがって喜んだのも当然だろう。ところが敵の総統はこれを許さず、どうしても殺せと命令したので、彼女は気の毒

にも屠殺場のクレーンで、ジリジリと引きあげるロープの端に首をくくりつけられた。動物並の扱いの上、あまりもがいたため、僅かに許されたブラジャーとパンティもはがれ、衆人環視のなかで、しかも苦しみは普通の絞首刑の数倍もあるのだ。泣きわめきながら死んでいったブロンドの美女。

しかし、最も哀れなのは、ジャクリーヌであろう。この十七才の処女は、秘密警察の数々の拷問に耐えぬいたのだが、もう一人のメリーが口を割ったため、数人の同志が生命を落した。ところが悪質な秘密警察は、このメリーの方を絞首刑として晒し、ジャクリーヌを釈放したのだ。誰が見ても白状したのは彼女だと思うだろう。

同志の追求をうけ、必死の弁明も空しく彼女に「制裁」がくだされ、若い生命を散らしてしまった。首が胴をはなれて五分後に、その事実が証明され、あわてて獄門に梟けようとした生首を、胴体に縫い合わせて手厚く葬り、メリーの死体を引きだしてズタズタに斬りさいなまいたが、ジャクリーヌが生きかえるわけではない。

裏切者のロンダの狂言銃殺は面白かった。彼女は身体と魂の両方を売り渡すことによっ

て助命されたのだ。即ち銃殺の場合、三斉射しても倒れぬ時は、放免という不文律があるのを利用し、空包を使うことになった。

ところが彼女は、かんちがいをして、銃声と共に倒れてみせた。放免されるのは「倒れぬ」場合だけなので、彼女は止めを射ちこまなくてはならぬことになった。

裏切者は敵にとって好都合とは言っても、やはりにくまれる。普通は額に射ちこむ止めのかわり、なんとおへソにぶちこまれた。実際は死んでいないのだから、彼女がもたえ苦しんだことは言うまでもない。

しかも、そのまま放置されたので、われわれ同志たちの手で足首から逆吊りにされ、冷笑をあげながら、約三時間後に息を引きとった。裏切者の悲惨な末路として評判になったものだ。いつのまにか、壁の前にじっと立っているわたし。

白い壁にところどころついている黒いしみは、同志たちの血しぶきのあとだ。同志たちの肉体を貫ぬいた無数の弾痕が、いたいたしくわたしの目にとびこんでくる。

隊長がわたしの左の胸、ふくらんだ乳房の上に、直径十センチ位の的をつけた。まぶしそうにわたしをみつめる銃殺隊員は十二人。



このうち実弾は八発から十一発入っているという。もちろんただの一斉射でバタリと片附くことだろう。

昨夜みた夢が思いだされる……。実際に坐って、さびしく外を眺めているわたし。その

背後に黒い銃身が突きだされ、後頭部めがけて引金を引く。顔が苦悶にゆがみ、右手が途中まであがりかけたが、そのままガックリとうつぶしてしまふ。右手が窓の外にダランとたれていた……

……わたしの死体をどうするかでもめている。逆吊りにして晒せというもの、首を斬って晒し首にしろというもの。結局は絞首刑と同じ様な恰好で、首にロープをかけて晒すということになったらしい……

はっとわれにかえる。あと一分とは生きられないのだ。幸いこれまで恥ずかしいことはない、ピアの名は汚していない。

ああ、銃口がこちらをむいた。隊長が剣をあげる。その口から「射て」の号令が……

3

わたしは一日に三十分だけ許されている散歩にでました。外を歩けるのも、空を見るのも今日が最後です。明朝八時には、わたしは殺人の罪で、ギロチンによる死刑に処せられるのです。

それにしても判決からわずか二週間。裁判も六週間しかかからぬスピードぶり。どうせ死刑になるなら、何年もかけたりせず、サッ

サと片附けた方が嬉しいのです。

死刑になった人間に、正式の埋葬は許されません。刑務所内のどこかに埋めるのでしょいか、どこにあるのでしょうか。多分北の隅の丘の陰あたりでしょう。わたしはその方に歩いてゆきました。看守は行かせたくない様子でしたが、今日が最後の日というのを思いだしたのか、なすがままにしてくれました。

わたしの想像はあたっていました。雑草の茂っているなかに、粗末な十字架が四つ立っています。この刑務所が出来てから、四人の女性が処刑されたわけです。いずれも話題となった女たち、やがてわたしもその一人となるのです。四人目はキムという、一昨年二十才の若さで処刑された女。その隣に穴だけが掘られています。しかも明らかに今日掘ったもの。ここにわたしが投げこまれるのでしよう。明日の今頃、わたしはこの穴の中に横たわるのです。両脚を大きくひらかれ、その間に斬り落された生首をおくと云う、何度考えてもおかしな、みじめな恰好で。だけどこれがギロチン死刑囚の規則なのです。

キムの処刑はわたしも見ました。彼女は美しいブロードの髪をなびかせながら、平然と台上に立ち、ギロチンの穴に首をさしのべま

した。合図と共にてこがひかれ、巨大な刃が落下したのですが、どうしたことか途中で止まってしまい、二度目も失敗。三度目もきしんだ音をたてて完全におちず、わずかに首すじを傷つけただけでした。

いかなる重罪人でも、三度処刑を失敗すれば放免という話があります。キムもこれを期待していたのか、穴からつきだしていた顔がニッコリとしました。しかし刑吏は平然として再び刃を上にもどします。やはり許されぬと知って、はりつめた気がゆるんだのか、さすがのキムも悲鳴をあげました。いかなる罪のむくいとは云え、この精神的刑罰はちょっとひどいようです。そして遂にキムの美しい首はバスケットの中にころがりおちました。

斬りたての生首は、バスケットから吊り台にのせて引きあげるのですが、この台が傾むいて生首がコロコロと地上をころがり、噴きだす血汐が地をそめて、わたしたちは思わず叫び声をあげたものでした。血の滴たるものもかまわず、髪の毛をつかんで高高と晒らされた生首。台上にがっくりとうつぶしている胴体。あの光をわたしは昨日のようにおぼえています。明日はその運命がわたしにやってくるのです。一度でスッパリと斬り落され

ば有難いのですが……。

最後の夜がきました。いよいよあと十二時間。看守が独房に入ってきて、わたしの栗色の髪の毛を、首を斬るのに都合が良い様に、根本からザツクリと切つてゆきました。これこそ執行があると云う、最も確実な知らせです。怖ろしい夜でした。看守は薬をやるからすべてを忘れて、ぐっすり眠れ、と云いますが、薬をのんでもねむれそうもないし、また最後の晩は起きていたい。思いきり泣いてみたい。こんなことを考えている間、わたしはいつのまにか、まどろんでいました。最後のねむりです。

「ミッチイ、もう時間だよ」

わたしは身体をゆすられて始めて気がつきました。朝がきたのです。広場に作られた断頭台の前には、もう今日の処刑を見ようという群衆がひしめいていることでしょう。獄舎を出たところに荷車があります。わたしはその上に手を後にまわして固く縛られたままのせられ、なにかの見せ物の様に町中をひきまわされるのです。しかも帰えりには首のない胴体が横たえられ、生首は槍の先に梃けられて車の前を進むことになるのです。

刑務所の門の傍の旗竿に、黒い旗がかかげ

てあるのが見えました。これは本日死刑の執行があるというしるしです。その下の三角の旗はそれが女性というしるしです。

広場の中央に、厳とそびえ立つ断頭台。その上方に鋭い刃をもったギロチンが見えてきた時は、さすがにわたしの顔から血の気が引くのを感じました。広場は群衆で、ぎっしり埋められ、あきれたことに売店まで出ています。わたしの首までが商魂に利用されるとは……。わたしはキムの首が刎ねられた瞬間の写真が、秘密に売られている話を思い出しました。わたしの場合もおそらく……。さぞかし高価に売れるでしょう。

刑事がわたしの罪状を読みあげます。二人がわたしの両脇からおさえて、首穴に首をつっこませる。すると二メートル二十の高さから、八十センチ、六十キロのときすまされた三角形の断頭刃がすべりおち、わたしの首は滝の様にほとばしる血汐と共に前にとぶ。一秒とかからぬうちに終るのでしょう。沢山の見物人は、わたしの首がバスケットに落ちてゆくのをみるでしょう。刑事は例によって例の如く、わたしの生首を群衆にさししめし、それから台上にくずれおちたわたしの首なし死体をけりおとすのでしょう……。

わたしはまだ台上に立っています。八時の処刑時間にまだ二分ほどあると云うのです。今までのちょうど二十三年の生涯と、同じ位の長さに考えられる二分間。

わたしは半月型の切りこみの上に首をさしのべます。上からも逆半月の板がおりてきてわたしの首を動かぬように固定します。てこに手をかけている刑事。首が遠くまでころがらぬように置いてあるバスケット。首を吊りあげるための台。死体を運ぶための手押車。わたしはその車に首の斬口を下に、脚を高くあげた恰好で運ばれるのです。首を梃ける槍の、鋭い穂先が目につきました。

刑事の手があがり、群衆がいっせいに立ちあがって、視線をこちらにむけます。わたしはけんめいに首をねじまげて上をみると、巨大な刃が舌なめづりするように、キラリと輝きました。三秒前、二秒前、一秒前……。

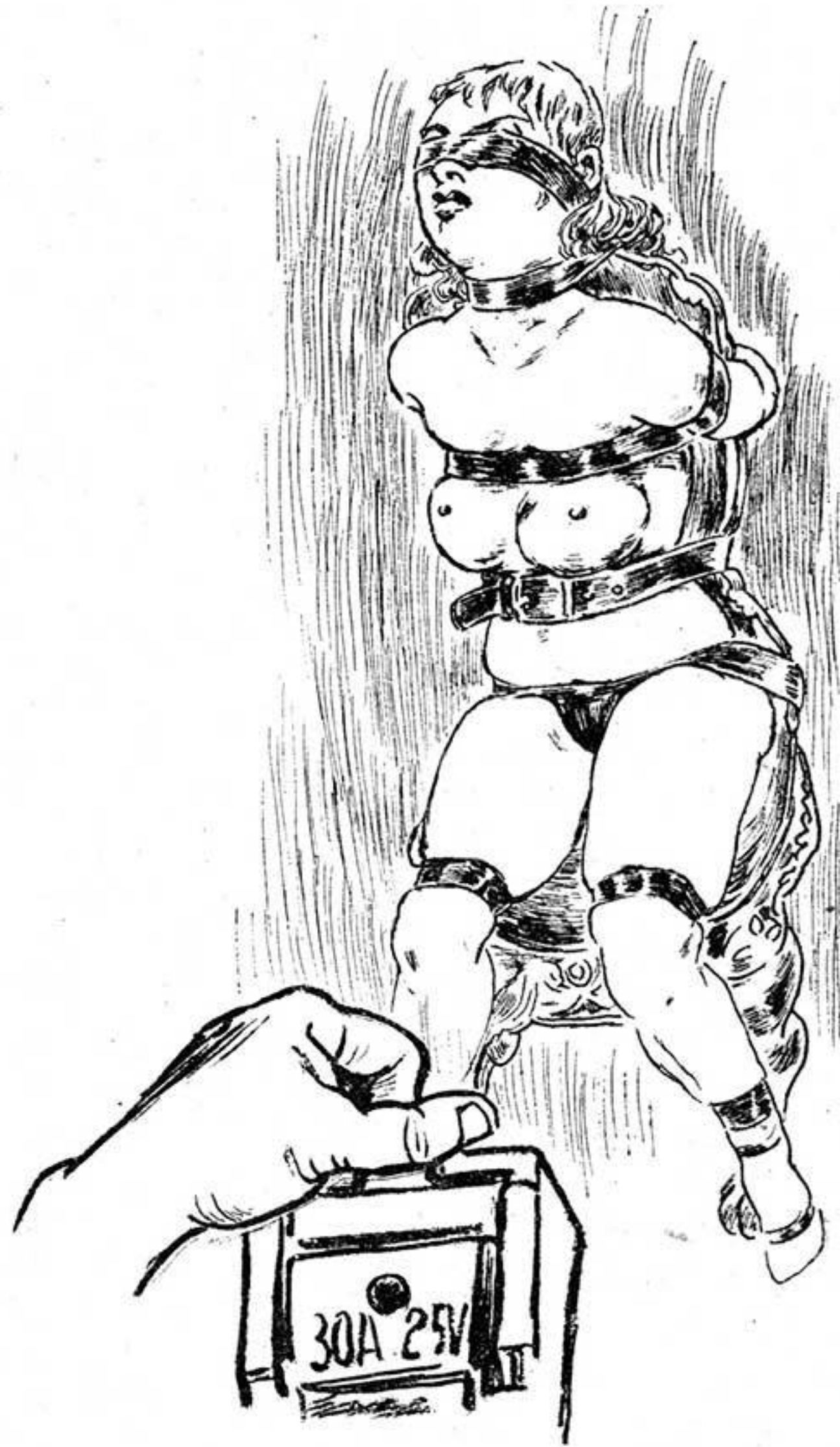
八時！

ズシン！！

ワアッ!!!

4

ふん、あたしかい。死刑囚さ、明日電気イスでこの世からおさらばするわけ。まだ十九才だけど、悪いことはたいていやった。あた



しが死刑にならなかつたら、死刑になる人間なんてなくなっちゃうさ。

それにしても馬鹿におちついていてるってかい。あたりまえさ、このなかに仲間が入りこんでいるんだ。大親分の情婦だもの、うんとはずんでね。

ボタンを押すと、千五百ボルトの電流が体内を貫ぬくわけだけど、この電線の大部分を切っておくのさ。だから身体を流れるのは、

ほんの少ししかない。死ぬ人間がどんな恰好になるかも、ちゃんと教えてもらってあるんだ。

ピリピリときたら、手足をピンと強直させて、指はにぎったりひらいたり、もだえるふりをする。これが三十秒位。電圧が下ってきたら、イスの上にグッタリとしてみせればいいのさ。このショックが四回目の時に死んだふりをすれば、医務官も買収してあるから、

あとは棺に入れて運びだされるわけさ。いよいよお芝居の始まりだ。あたしをつかまえて、電気イスに縛りつけた刑吏は、余程の名優だな。すこしも、それらしい様子をみせないんだもの。ウインク位するかと思ったのに……。

時計が十二時三十秒をすぎた。執行は十二時一分という、はんばな時間に行なわれるんだ。あたしは悪魔のような女とまで言われているんだから、普通よりも長く、六分七分までがんばって、死んだことにしようかな。さすがは……と言われるだろう。

刑吏たちは皆緊張している。うまいもんだな。処刑室の外では新聞記者が待っているだろうな、知らぬが仏の馬鹿者共が……。

「彼女は、終始氷の様な微笑をうかべたまま、電気イスで死にました」

なんて記事を、あたし自身が読むともしらないで……。

ああ時間だ。

「ぎえっ！」

S 死刑執行所では、十九才の美女テリーの死刑執行が行なわれようとしていた。

特に重罪であるため、ブラジャーとパンテ

イ以外に身につけることを許されず、看守に両脇をとられてつれられてきた女囚は、電気イスを目の前にしても、顔色ひとつ変えようとしなかった。

冷い鉄のイスに腰をおろした美女の、ゆたかに盛りあがった胸を、プリプリとはちきれんばかりの太股を、皮のバンドが固くしめつけた。

額も、両腕も、両足首も次々と固定され、もう彼女は身うごきもできない。それにしても、あと一分位で死ぬというのに、うすら笑いさえ浮べたこの落着きよう。まだ十九才とはどうしても思えない。

鉄製のお椀のような形をした陽極が頭にかぶせられ、陰極はふくらはぎにつけられる。

別室では四人の刑事が同時に押すべきボタンに指をかけている。このうち一人のボタンが、死の電流を流すのだ。

二秒前、一秒前、ゼロ！

「ぎえっ！」

千五百ボルトの電撃に打たれた美女の口から、短い絶叫がほとばしり、四肢はピンと強直し、指はにぎったり、ひらいたりもだえ苦しんでいる。

三十秒後、彼女はイスの上にグッタリとく

ずれおちた。唇がむずむずとふるえている。

続いて二度目、三度目のショック。その度に彼女は死の苦痛にのたうちまわっている。皮膚の温度はみるみる上昇し、ふたつの電極のあてられた部分から、モヤモヤと褐色の煙がたちのぼった。

すでに六分経過したがまだ絶命しない。五度目のショックは二千ボルトにあげられた。罪のむくいとは言いがた、こんなに苦しまなくはならぬのか。処刑になれた刑事たちも顔をそむけるほどだった。

遂に三千ボルトの電圧が流れる。美女の白い肉体が黒ずんできく。生きながら焼き殺されるのだ。十分経過。まだ死ぬことができない。

「しぶとい女だ。もっとあげろ」

一気に五千ボルト。白光が全身を貫いたかと思われぬ悲鳴があり、この十九才の美しき女死刑囚は、哀れ一箇の炭化した物体と変ってしまった。この時、彼女に最も近く位置していた刑事は、彼女のこの世に残した最後の言葉を、次の如く聞きとった。

「だまされた……」

「それじゃ、何だな、お前。俺たちがあの子」

を救いだすつもりだとも言ったのか」「だって親分。死刑って言うのは、待っている方が辛いんだぜ。助けてもらえると信じこんでいれば、その点は平気さ。せめてもの情けというものさ。新聞にもでているぜ。彼女は終始氷の様な微笑をうかべたまま、電気イス上で死にましたって……」

5

「絶命しました」

医務官の声と同時に、わたしは新しい世界にとびだしました。わたしが、たったいまで住んでいた肉体は、薄暗い部屋の天井から、一直線にピンと張ったロープの先に、頸をくくりつけられて、ダランと吊り下がっています。その足首には、重さ八キロの鉄丸が二箇、鎖でもって結ばれてありました。

「ああ、苦しかった」

わたしは大きく背のびをすると、十三分ぶりで、たっぶり息を吸いこみました。絞首刑は死刑のうちでも、いちばん楽だなどと誰かが言っていました、とんでもない話です。やはり何事でも、実際に経験しなくては、わかりません。

小部屋のなかの、四角のしきりの上に立た

せられ、手を後にまわし縛られ、足首に鉄丸をくくりつけ、最後に首にロープをかけられる。そして刑事たちはわたしひとりを残して出てゆくのです。

暗やみのなか、前方に赤ランプがついているだけ、これが消えて十五秒すると踏板が落ちるのです。この世の最後の呼吸、ひとつ、ふたつと数えながら、大きく吸いこんだときの哀れな気持……。

ボタンと踏板がはずれ、身体がフワリと宙に浮く、次の瞬間、頸部をものすごい力でぐっと絞めつけられ、あとはどうもがいても呼吸はできないのです。目は大きくひらいても何も見えず、耳に聞えるのはゼイゼイという喉の音だけ。鼻孔がピクピクとふくらみ、なんとか息を吸おうとしてもだめ。足の拇指は前にそりかえり、他の四指は反対に内側に曲がり、もうこれ以上曲がらないという極点に達すると、骨がパリパリと音をたてて肉を裂き、皮膚を破ってつきでる。そして最後の激しい疼れんがきて、わたしの身体は深い深い底へと沈んでゆくのです。

絶命と同時に幽霊となってとびでたわたしの身体は、処刑寸前と同じ姿です。一糸もまとわぬ生れたままの恰好で、もはや誰にも影

響されぬ、また誰にも影響をあたえることもできぬ、即ち死後の世界で暮すことになるのでしょう。

わたしはもう一度、吊り下った死体をみました。絞首刑の場合、絶命後も五分間は吊るしておく規則です。他人からも美人だといわれたわたしですが、それが今やゾツとする死顔、目は大きくみひらいたまま、鼻汁が流れ苦悶のためひらいた口からは、はみでた舌がダラリとたれています。粗末な獄衣はズタズタに裂け、ふたつの乳房も、ふくよかな下腹も、まっしろい太股も、すべてがあらわになっています。

「さすがのグラマーも、この恰好では幻滅だね。罪のむくいとはいえ、かわいそうに」
「それにしても、随分、往生ぎわの悪いやつだったな。かみついたり、けったり、服がみんな裂けて。これじゃ、ストリップ・ダンスだ」

おとなしく、死刑にされる人間がありますか、わたしはこんな話をしている刑事を、もう一度けりとばしてやりましたが、幽霊となつたわたしでは、何とも感じないようです。

刑事は、死体となつたわたしの身体から、足の鉄丸をはずし、後手のいましめをほどこ

最後に獄衣をはぎとります。今のわたし同様すっぱだかになった身体に、上下四方から水が浴びせられ、足下に掘られた溝を通して流れてゆきます。すっかり洗い清められてからようやくわたしの身体は床におろされ、頸に食いこんだロープがはずされます。なんとなくホッと感じました。

タイルに横たわつたわたしの身体を検死官が調べています。明らかに女性であること、わたしに誤りのないこと、そして確実に死んでいることを……。

わたしの死体は医科大学に送られ、法医学解剖の教材になりました。生前悪いことばかりしてきたので、せめてもの罪ほろぼしでしょう。

広い階段教室の中央の台に、わたしが横たわっています。学生たちが、そのまわりにむらがって何か話しています。

「これが死刑になつたあの女だ。この喉のところを見ろよ。絞めあとがはっきり残っている」

「歯の間から、舌の先がはみでているよ。苦しかったのかな」

「絞首刑はボタンとおちたとたん、神経が切れて気を失うから、案外楽だと言うぜ」

「苦しかったかどうか、一番知っているのは彼女さ」

確かにその通りです。彼等に教えてやれないのが残念ですが、間もなく教授が入ってきて、学生たちは席につきました。

わたしの顔を、目、鼻、口などひとつひとつ指摘しながら、絞首死体の外観的特徴を講義しています。「案外苦しくない」が結論ですが、目には見えないとは言うものの、当のわたしがすぐ傍にいるなど、教授も学生も夢にも思っていないでしょう。

八人の学生がわたしの死体につきました。頭部、胴体、上肢、下肢がそれぞれ二人づつ左右にわかれて解剖するのです。

まずわたしの喉にメスが入られ、ふたつの乳房の間を通過して下方に切りひらいてゆきます。あつい皮下脂肪がみるみるあらわになります。おへそはどうなるのかと見ていると、右側にくるとまわり、再び正中線に浴って、脚のつけねへと進んでゆきます。

心臓をはじめ、腹部内臓がひとつひとつりだされ、標本箱におさめられます。子宮とその附近の附属物は、すべてひとまめにされて、同じくガラス箱入りをしました。

「この前のは十七才の処女だった。その外陰

部には、粘膜組織の一片が淨らかに存在していたが、それを見たときは何となく敬けんな気がしたもんだった」

一人がつぶやくように言います。わたしはどうだというのでしょうか。

頭部の方では、頸のまわりの筋肉がメスで断ち切られ、あらわになった頸骨の継ぎ目のみをあて、金槌でトントンたたくと、わたしの生首は、もうくもタイルの上にとろがります。これも標本にするのでしょうか、それとも獄門に梃けるのでしょうか？

死刑囚には正式の埋葬は許されません。そのため魂は、この世にとどまるわけです。ふだんはお互い同志、それも女は女だけしか見えないのですが、何かの拍子で、現世の人に見えることがあり、それが幽霊としてさわれるのでしょうか。時間と距離に超越できるので、世界のどこにでも自由に行けるし、天国より余程ましです。わたしは、わたしに死刑を宣告した裁判長や求刑した検事に、はじめで感謝しました。

たいへん申しおくれました。わたしの名はクロチルド、愛称クローです。御存じの方もおいでかも知れませんか。

新作マゾ・フォト（新人モデル）

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（まの）

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（まわ）

股責めにあう顔面

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（また）

縛られて翻弄される

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（まひ）

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（まな）

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（はま）

玩具にする縛り人形

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（まて）

首を太股にて絞めあげる

大手札三枚一組 五〇〇円

略号（まや）

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13㎝) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ (愛川)
E 2	仕置を受ける裸身 (大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌 (愛川)
E 4	ムチに耐える美肌 (関谷)
E 5	豊臀と豊胸しほり (愛川)
E 6	捨身の後手観念像 (大塚)
E 7	足から眺めた裸身 (水本)
E 8	全裸エビ責尻強調 (関谷)
E 9	ハリツケられた娘 (大塚)
E 10	強烈後手高手小手 (愛川)
E 11	責め抜かれた疲労 (梨花)
E 12	逆エビにもだえる (大塚)

E 13	拘禁された美囚女 (大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛 (愛川)
E 15	海老責に泣く足首 (大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ (愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘 (大塚)
E 18	美しき全裸股間縛 (大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ (関谷)
E 20	ベッドにもだえる (関谷)
E 21	身体中に強烈な縄 (愛川)
E 22	放置された海老責 (東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる (東浦)
E 24	ローソクで責める (大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ (絹川)
E 26	足指先に漂う媚態 (関谷)
E 27	後手吊り正面裸像 (関谷)
E 28	嚴重な高手小手縛 (東浦)
E 29	女体の全部を晒す (愛川)
E 30	激しいムチ打の果 (関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ (東浦)
E 32	投げ出した脚線美 (絹川)
E 33	脐中心の腹部緊縛 (梨花)
E 34	セーラー服の哀歎 (梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部 (関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女 (梨花)
E 37	制服の女学生縛り (梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻 (関谷)

E 39	痛打にくねる裸身 (関谷)
E 40	乳房に加える金具 (大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔 (大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む (大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身 (梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶 (大塚)
E 45	敷布の上ののびて (絹川)
E 46	鼻いじめのアップ (梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄 (東浦)
E 48	縄にくびれる裸身 (東浦)
E 49	椅子に晒された女 (大塚)
E 50	脐そうじをされる (大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う (絹川)
E 52	火のついた煙草責 (四方)
E 53	踏みつけられた胸 (梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘 (大塚)
E 55	手足猪吊りの美態 (絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛 (絹川)
E 57	諦めた観念全裸像 (水本)
E 58	縄にもだえぬく姿 (絹川)
E 59	黒髪を吊られた女 (大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ (絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身 (竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す (竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目 (大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会 (絹川)
E 65	野外の後手宙吊り (梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中 (四方)
E 67	室内の後手宙吊り (梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態 (梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ (大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責 (梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み (竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責 (梨花)
E 73	梯子責にあう美女 (梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる (梨花)
E 75	娘十六しほり加減 (花坂)
E 76	踏みにじられた顔 (大塚)
E 77	逆エビニ反る足先 (大塚)
E 78	両手吊りのお仕置 (絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻 (梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像 (大塚)
E 81	食卓上の縛り人形 (大塚)
E 82	むしられる下着 (大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り (梨花)
E 84	寝台上の若妻狂態 (関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り (東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り (東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒 (関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図 (大塚)
E 89	令嬢後手高手小手 (絹川)
E 90	脐部乳房強調緊縛 (東浦)
E 91	責衣にくるまれて (東浦)
E 92	全裸逆エビ責め (水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ (梨花)
E 94	全裸後手縛り晒 (関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ (関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ (東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り (梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡 (関谷)
E 99	豆しほりの猿轡 (絹川)
E 100	強烈縛り脐いじめ (東浦)

本誌既刊号に注文殺到！

既刊号のお申込みは、お早く……

売切号続出、在庫僅少、乞至急御申込

本誌既刊号在庫案内

○本誌の既刊号は、非常な人気で毎日注文が殺到しておりますので、今まで在庫しておりました分も忽ちのうちに、売切れになってしまふ実情です。只今在庫しておりますものも、残部が極めて僅少です。一旦売切れになりますと絶対に補充がつかまませんので、この際欠号はお揃え下さるようお願いします。

○左記一覧表のうち、定価の記してあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、ご送金次第送本いたします。

○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなり在庫しておりません。昭和29年から30年頃の雑誌の有無につき、よくご照会があらますが、在庫はございません。

○限定版特別号の第一弾から第四

弾まで、全部売切れ、在庫はございません。サディズム特集号も第一集から第四集まで、全部売切れしました。

○「悦虐小説と悦虐写真特集号」の第一集から第四集までは在庫しています。一部定価三〇〇円で

す。第五集のみ売切れしました。○各月号の総目次は漸次誌上に掲載いたしますが、既掲載の分は左記の通りであります。

○昭和38年11月号誌上に（38年6月号、7月号、8月号）

○昭和39年1月号誌上に（38年9月号、10月号、11月号、12月号）

（35年9月号、35年6月号）

○39年2月号誌上に（36年3月号4月号、5月号、6月号）

○39年3月号誌上に（36年7月号8月号、9月号、10月号）

○39年4月号誌上に（36年11月号12月号、37年1月号、2月号）

○39年5月号誌上に（39年1月号

2月号、3月号、4月号）
◎39年6月号誌上に（37年3月号6月号、7月号、10月号及び35年7月号）

在庫品及び定価

昭和35年6月号	(定価三〇〇円)
昭和35年7月号	(定価三〇〇円)
昭和35年8月号	(売切)
昭和35年9月号	(定価三〇〇円)
昭和35年10月号	(売切)
昭和35年11月号	(売切)
昭和35年12月号	(売切)
昭和36年1月号	(売切)
昭和36年2月号	(売切)
昭和36年3月号	(定価一五〇円)
昭和36年4月号	(売切)
昭和36年5月号	(定価一五〇円)
昭和36年6月号	(売切)
昭和36年7月号	(売切)
昭和36年8月号	(売切)
昭和36年9月号	(定価一五〇円)
昭和36年10月号	(売切)
昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和36年12月号	(定価二〇〇円)
昭和37年新年号	(定価二〇〇円)
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和37年4月号	(売切)
昭和37年5月号	(売切)
昭和37年6月号	(定価二〇〇円)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)

昭和37年9月号	(売切)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(売切)
昭和37年12月号	(売切)
昭和38年新年号	(売切)
昭和38年2月号	(売切)
昭和38年3月号	(売切)
昭和38年4月号	(売切)
昭和38年5月号	(売切)
昭和38年6月号	(定価二〇〇円)
昭和38年7月号	(売切)
昭和38年8月号	(売切)
昭和38年9月号	(定価二〇〇円)
昭和38年10月号	(定価二〇〇円)
昭和38年11月号	(定価二五〇円)
昭和38年12月号	(定価二五〇円)
昭和39年1月号	(定価二五〇円)
昭和39年2月号	(定価二五〇円)
昭和39年3月号	(定価二五〇円)
昭和39年4月号	(定価二五〇円)
昭和39年5月号	(定価二五〇円)
昭和39年6月号	(定価二五〇円)
昭和39年7月号	(定価三〇〇円)
昭和39年8月号	(定価三〇〇円)
悦特第一集	(定価三〇〇円)
悦特第二集	(定価三〇〇円)
悦特第三集	(定価三〇〇円)
悦特第四集	(定価三〇〇円)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

(五)

芳野眉美

A 皮のドレス

前かがみに、膝を折って、足早に歩いている女性を街で見かける。ぴったりした短いタイトスカートに、三寸のハイヒールの女性を見るのは楽しい。

タイトスカートの時は、下に何も穿かないほうが美しいと思う。パンティの線がスカートの浮き出ているのは、悩ましいが、美学上ただけでない。美学上ばかりでなく、坐った場合でも、男性を楽しませてくれるというものだ、ね。

最も、きついタイトスカートにパンティの線を強調し、意識的に下着を露出する女性もいることだろう。

とにかく、細いタイトスカートで上膝部を固定し、その上、歩きにくい高いハイヒールでよちよち街を歩く女性の美意識は崇高であり、男性を魅惑する効果は絶対的である。

五月十九日東京新聞夕刊「世界短信」に、「濃い紅色の光沢エナメル皮のワンピースを着ているのは、ハリウッドの女優シャリー・マクレーン」

とあって、写真が紹介してあった。

「腰にキノコ型のふくらみをもたせ、スカートは非常に細いので、歩くときはヨチヨチ歩き」

映画 (What a way to go.) の一シーンのため、エディス・ヘッドがデザインしたものだそうです。

エナメル皮といい、ヨチヨチしか歩けぬロングスカートといい、このワンピースは、女性の全身を狭搾してしまうためのS的なデザインとしか考えられない。

皮の拘束ドレスといってもいい。裾が足首をかくす細目の長いドレスで、ヒ

ツプからぱっと朝顔型に開くシルエットは、驚くほどスマートに美しく見えるもので、舞台衣装や夜会服にはこの型が多いのである。

せめて、素肌に肢体の線をくっきりと見せた細身のドレスに、五寸もあろうかと思われるプラットフォーム付きの、おそろしく高いハイヒールの女性を、映画やステージの上でもさがして楽しむことにしよう。

B ビニールのレインコート

一人でウィンドーショッピングしているハイティーンが気になったのは、彼女が黒いレースのストッキングをしていたかららしい。それに、靴もエナメルとレースの黒いハイヒールだった。

黒いレースで包まれた細いすんなりした脚の魅力に負けた。

「君と買物をしたら楽しいだろうな」

肩越しにその子に云った。

「プレゼントしてくれるの」

「そんな気持」

くすつとその子が笑った。

「へんなの」

「おかしいか」

「だって、今、会ったばかりじゃない」

「それもそうだな、じゃ、やめておくか」

「あら、つまらない」

「つまらない、はよかったな」

「じゃ、買って」

十八金の細いネックレスなのだが、その子はおくるくると右腕に巻いた。腕輪というわけである。

その腕を私の腕にからませた。

「ビートのきいたダンモを聞かせる店を知っているんだ」

「モダンジャズか、それもいいな」

「どうやら、個人面接に合格したらしい。」

「エマ、よろしく」

自己紹介した。

「エマ、面白い名前だな」

「面白くないわよ」

「モダンを聞くと、いたづらしたくなるかもしれないぞ」

私はエマに云った。

「いいわよ」

「いいわよ、か」

「ダンモを聞きながらペッティングするなんて最高」

「おどかすなよ」

モダンジャズ専門の喫茶店を出たとき、小

雨になっていた。

エマがハンドバッグから、小さくたたんだビニールのレインコートを取り出した。

「便利なものを持っているね」

「百三十円」

透明なレインコートを着たエマと歩いていたら、梨花悠紀子の「雨装束とチュール」を思い出した。

「今、何を考えているか、あててみましょうか」

とエマが云った。

「うむ」

「SEX」

「えっ」

「ペッティングだけじゃ、つまらないんですよ」

「そりやそうさ」

「でも、SEXはだめ」

「ちがうよ、そんなことじゃない」

「ちがうの」

「全裸のエマにね、失礼」

「どういたしまして」

「そのビニールのレインコートを着せたら美しいだろうな、って考えついたんだ」

「なんだ、そんなことか」

「そんなことか、はないでしょう」

「着てあげてもいいわよ」

「裸でか」

「そう、すっぱだから」

「おいおい」

「見るだけならいいわ」

百三十円の携帯用の雨具が、ささやかなアバンチュールの最高の思い出になった。

ビザールなエマに幸あれ。

C 喪 服

正絹縞の喪服の美沙夫人は、それだけで目立ちすぎた。通夜の帰りだという。

「主人の代理ですの」

会社の上役とのことだが、突然なので出張中の御主人はまにあわなかったらしい。

ハイアップにまとめた髪も美しく、まっ白なうなじが黒の喪服に映えた。

駅前の喫茶店に呼び出されたのは、九時近かった。

「御用は」

と云ったら、

「いじわる」

「いじわる？」

「――」

「何かいじわるなことをしましたか」

「知りません」

「困ったな」

喪服の人妻は悩ましすぎる。黒は官能の色だ。黒は男の心を激しくゆさぶる。

「明日の夜にならないと帰らないの」

「御主人が」

「ええ」

「それで」

「――」

「それで」

「知りません」

「困ったな」

黒の喪服を着たことで、美沙夫人の秘められた官能が頭をもたげたのかもしれない。夫以外の男と寝るといふ罪の意識をかかえて、淫らな戯れは妖しく燃え上がる。

駅前の商店街の終いのホテルの前に立つと、美沙夫人はいやいやをした。

「ばくのアパートがいい？」

「いや」

「困ったな」

「わたくしのお部屋に行きましょう」

黒い喪服はおそろしい。

青白い焰が静かにゆれているかと思われるレースのカーテンは、美しい光の影を美沙夫人のまっ白な裸身に落していた。

寝室の美沙夫人は一糸もまといっていない。全身にスプレーした黒水仙のほのかな香が、美沙夫人の豊満な肉体に漂っていた。

すでに昼を過ぎていた。私はベッドから起き上がった。

「帰るの」

「御主人に会いたくないからね」

云い終らないうちに私の口は美沙夫人の濡れているような唇でふさがれた。

「うっ」

「抱いて」

「苦しいよ」

「抱いて」

「帰るよ」

「いや」

「さあはなして」

「いや」

「困ったな」

「困る」

「そりや困るよ」

「どうして」

「帰るのがいやになるからね」

明け方まで続いた奔放な情痴のあとのけだるさに、ややもすると、私の身体は再びやらかいベッドに埋没しそうだった。

「帰らなければいい」

「まさか」

「帰さない」



美沙夫人は、素肌に正絹縹の喪服を羽織ると、すくっと私の前に立った。

「抱いて」

美沙夫人を抱きながら、出張から帰った夜は、かならず主人に抱かれるという美沙夫人の言葉を思い出した。

今夜も、美沙夫人は湯上りの匂うようななめらかな裸身を、夫の胸に投げかけることだろう。

通夜の帰りに、美沙夫人が夫以外の男に始めて身体を許す気になったのは、黒い喪服のせいとは思えない。

D ブラジャー交換会

四月下旬、東京銀座のある婦人洋装専門店で、ブラジャー交換会バーゲンセールが開催された記事が、週刊平凡五月七号にあったので紹介します。

「あなたのつけているブラジャーを、女店員の見ている前ではずせば、お好みのブラジャーを交換にさしあげます」

というのである。

「但し、係の前で交換しないと失格です」

保安係の私服が四人張り込んだそうだが「おしかりを受けるほど、カモはやわ肌をこ披露しなかった」

そうでしょう。

週刊実話五月二十五日号には、スリッパを脱いでブラジャーを見せている女性のグラビアがあった。

とにかく、交換した女性がいたのだからすさまじい。

ブラジャーだから交換できたのでしょうれど……

デパートの苦情返品係には、一度穿いたパンティを返品に来る女性もいるそうだから、現代女性は強すぎる。

E 忍法「夢幻泡影」

山田風太郎忍法全集（講談社）の四「くノ一忍法帖」をおすすめします。

大阪落城の前夜、真田幸村の命を受けて、秀頼の子種を身籠った五人の女忍者は、千姫の侍女として城を脱出する。その情報を知った家康から、女の成敗を命じられた伊賀の忍者五人は、信濃忍法の妖女五人に挑戦する。というわけなのですが、文句なしに面白い。興味は、女忍者がすべて妊娠していることで、妊婦に關係のある忍法を二つ紹介しておきます。

信濃忍法「やどかり」

「ふたりの女忍者は、身にまとうものをすべてかなぐりすてた。四本の腕と四本の足は八匹の白い蛇のようにからみあい、そしてお瑠のふくらんだ腹は、お眉のくびれた腰にぴっ

たりとおしつけられた。それは抱きあったふたりの女というより、怪奇な万華鏡の花のような姿であった。

やがて、お瑠の腰が、律動を開始した。それは波濤のように去り、しだいに狂瀾の相を呈した。よほどのことがあっても悲鳴をあげぬ女忍者の口から、おさえきれぬうめきもれ、密着した四つの乳房はしだいにたかく波うち、そのあいだから白い汗がしたたりおち、そして戦慄し、痙攣する四つの下肢のすきまから、血と羊水がながれおちはじめた。

どれほどのときがたったか——麻酔のごとき時がすぎて——見ているか、水晶のように凝然と見はられた千姫の眼は見ているか、いや、それは、ただ夢をみていると同様であった。なんたる幻怪、上の女の腹部の白い隆起は、徐々にさがってきえてゆき、下の女の腹部が、しだいにむっちりとふくらんでゆく……」

信濃忍法「夢幻泡影」

腹を斬り開かれたお由比が秀頼の嬰兒を産んだあと、

「四十センチにちかい鮮血にまみれた子宮があった。子宮は口をあけていた。隼人の眼にそれがみるみる巨大な食虫花みたいひろが

って、じぶんを呑みこむような眩暈感をひきおこしたのだ。あたたかい粘膜があたまをつつみ、海底のような液が皮膚をひたす幻覚が襲ってきた。ふらふらとおよぎ出しながら、彼は遠く伊賀の山できいた幼い日の母の子守唄をきいたように思った。

鞠みたいなたたきでおいでいった鼓隼人が女忍者の腹部にあたまをめぐりこませたのだ。一個の成熟胎児を出したばかりの子宮はすっぽりとその頭部を呑んだ。

彼の鼻口は血塊と羊水につまり、その頭にやわらかい子宮筋と子宮粘膜がまといついた。そして、胎児そっくりにぎゅっと手足をちぢめた隼人は、子宮のなかで、会ってこの慄悍児がみせたことのない、円満具足の死微笑をうかべて絶息した。

お由比も完全に絶命していた。これは無限抱擁の母性の笑いに似た笑顔であった」

F 毛 皮

五月二十八日東京新聞朝刊に、水着の上に着るミンクが登場している。ロンドン。

「ホワイトミンクの短いコートで、これなら脚線美もかくれないですむというわけ」
夏のミンクとはカッコいい。

「冬にかぎらず、女性ミンクが
好き」

毛皮というミンクの代名詞み
たいに、女性ミンクに全く弱い
らしい。

吉行淳之介「痴語のすすめ」週
刊文春六月一日号に、

「五百万円のミンクを買ってやっ
たらばだ。きみ、その瞬間にオシ
ッコが洩れるか」

彼女は不意打を受けた表情にな
ったが、やがて決然として言っ
た。

「×××まで洩れちまうわ」

×××のところは文春を読んで
下さい。一万五千円から二万円ど
まりならオフィスレディも買えな
いことはないでしょう。ただし、ウサギ。

スリープレスのジャコウネコウサギのプル
オーバーとか、第二の皮膚といわれる全身に
ピッタリのタイツ型ドレスの上にシマウマ模
様の毛皮プルオーバーとか、黒ウサギ毛皮の
短いジャケットとか、手頃なのがあるそう
ですから、今年の冬は如何がでしょう。

本物とみまがうほどによくできている、



ヒヨウ模様のプリントはどうでしょう。

本物のヒヨウ皮コートはととても手が
出ないでしょうが、そこはよくしたもので
す。

小羊皮にヒヨウ模様をプリントしたジャケ
ットとか、ウールとジャージーにプリントし
た長めの袖にフード付きのドレスとか、ブリ
ナイロンにプリントしたタイツにブラジャー

とか、毛皮の雰囲気をつねに十二分に満喫できるも
のばかりです。

ヒヨウ模様のフードと細いドレスは、毛皮
と拘束というマニヤの夢を二つもかなえてく
れるというものです。

和服用防寒コートも魅惑されるのがありま
す。

黒のカシミアのコート、えりから前身いっ

ばいにつけた毛皮がすばらしい。

薄紫のシャギーモヘヤ、モヘヤの毛足が長くふっくらした感じ。ベージュのビュキナモヘヤ、モヘヤに高山動物ビュキナの毛を少し入れた、感触のやわらかいのが特徴。

高価なものでも二万円どまりのイージョーダーですから、夫人や恋人にプレゼントしたら、上品な美しさにあらためてショックを受けることでしょう。

ブリジットバルドーが、友人のパーティにミンクとハイヒールだけで出席したように、夫人や恋人の素肌にビュキナモヘヤだけを着せて、夜の街を散歩するなんてことは、最高のロマンチストじゃなければできないよ。

江戸時代、熊の毛皮を腰元の責めにつかったらしい。

熊の毛皮の毛は長くぴんと立っているでしょう。裸にむいた腰元を毛皮の上に坐らせると、いやでも毛の先が性感帯をちくちくやる。全裸の女体を左右にゆさぶると、

「筆のホ先にてクスグルなどはるかに及ばず、キチガイになること間違いなし」

熊の毛皮のかわりに、防寒コートを代用しておたのしみ下さい。そして、その結果を内緒でお聞かせ下さい。

G ノースリッパ

五月七日東京新聞朝刊に、

「いまやノースリッパ時代」とある。

「欧米では当たり前」

アメリカから帰国したデザイナーズ鈴木意見「スリッパのすそや肩のつりひもがちらりとでも見えるのは、やばくさいという考え方が強いのです。見た目の美しさを尊重するんですね」

フランスより帰国したデザイナー中林洋子の意見「下着が見えるより素ハダが見えるほうがよいという観念なのです」

いいですね、この言葉。

「日本でもモデルさんたちはだいぶ前からそうですよ」

芳村真理「わたしも着ないことが多いですね。ノースリッパは必要から生まれた合理性といえるのです。白いブラウスに色もののスカートという組み合わせのときなど、スカートの合わせた色物のスリッパでは白いブラウスにすけてします。かといっていまどき白いスリッパもなんだかイカサない感じ。そんなときにはいっそぬいでしまうということにな

るんです」

そうです。ぬいでしまうほうが簡単でよろしい。

日本の女性の下着ではスリッパはかかせないものでしょう。

でもね、若い子とつきあっていると、スリッパを着てない子は意外に多いんですよ。この傾向は、いまさら

「日本でも見えない流行へ」

どころではないですよ。十年前からシンブルの好きな子は多かった。

短いタイトのスカートに可愛いパンティ、サマーセーターかスポーティなブラウスという三点セットのみで、ブラジャーなんか勿論していない。このスタイルで半年はすごす。

寒ければ上にスエードのブレザーを無造作に着たりする。

「シングルガール」のヘレンブラウンというオバサンは、パンティまで不要だと云っている。

「あなたがスリッパを着るなら、パンティをはかないでみたはどうです」

次の言葉はふるっている。

「ある女優はパンティもはかず、素晴らしい良人を持ち、肺炎にもかかりません」

ノーパンティと良人とどういふ関係があるんだろう。

「キヤロルは、ブラジャーがないと、すけて見える薄いブラウスのときには、乳首のあたるところにバンソウコウをはりつけていました」

バンソウコウじゃ、まるでストリッパーだけど、とにかく独身女性の下着類のいくつかは不要であることの説明でした。

平凡パンチ六月八日号「ピンクアンコール」加賀まりこの「月曜日のユカ」日活は面白い映画だったが、黒いパンティだけの加賀まりこのベッドシーンは妖精のペットネームに恥じない美しい光景だった。

この黒いパンティと、一本の細い布のような黒いブラジャーだけの加賀まりこが、サマ

「奇譚三十九夜」物語について

今月はいよいよ「奇譚三十九夜」の最後を飾るべくお休みをいただき、来月の十月号では大団円ともいふべき第三十九夜を賑々しく豪華に皆さまの前に御披露したいと思っております。三年有余に亘って繰り展げられた奇譚三十九夜のラスト第三十九夜の会合を、どうぞ御期待下さい。

(辻村 隆)

「セーターのようなクールなワンピースを着て街を歩くシーンは、ブラジャーとパンティがすけて見えるのだけど、その大胆なデザインには敬服した。

何も着ないほうが、洗濯なくてすむものね。

H 肉体の門

日活「肉体の門」の野川由美子の全裸宙吊りは名作だ。

宙吊りの揚句、野川由美子は鞭打たれ、足をローソクの火であぶられる。

全裸の宙吊りを上からとらえたカメラアングルは、如何なる宗教画より崇高で美しい。

両手首を縛っただけの構図が新鮮な野川由美子の裸体に映えたといっている。

「このシーンの撮影、なんと十時間余におよんで、終わったときは野川由美子は口もきけなかった」

とある（スポーツニッポン五月十七日）

「どうせやるからには、思い切って裸になった方が精神的にさっぱりするわ」

野川由美子が気にしていたのは

「身体の線がきれいにとれたかしら」
バスト82、ウエスト56、ヒップ86。

仲間が思慕する伊吹新太郎（矢野龍二）と寝たため、ボルネオマヤ（野川由美子）がリンチを受けるシーンである。映画はこのためにつくられたといっても過言ではない。

柱を背にした富永美沙子の全裸十字架縛りも美しい。長い髪の毛が胸をかくし、腰から下はライトを暗くしてかすんで見えないようにしてある。

「ルネッサンス時代の宗教画のような味を出したい」

と鈴木清順監督が云っていたそう（五月十二日東京新聞夕刊）

ただでからだを売らないという仲間の掟を破った町子（富永美沙子）が、アジトの焼けビルで仲間のリンチを受けるシーンである。ななめ宙吊りの棒による臀部打ちの構図もすばらしい。

責めるのは、関東小政（河西都子）ジープのお美乃（松尾嘉代）ふうてんお六（石井富子）

日本古来の内攻的な性観念を完全に吹き飛ばしてしまったとまで云われる、田村泰次郎の終戦直後の名作の再映画化である。

野川由美子の全裸宙吊りの強烈な印象は忘れられない。

メロンのヴィーナス

——田中美佐子夫人の

「臨月腹」に寄せて——

瀬 沼 四 郎

大変ふざけた表題で申しわけないが、最近わが国に來ている——この原稿が誌上にのる頃には、もう日本から出發しているかも知れない——「ミロのヴィーナス」をもじったものであることは言うまでもなく、意味はメロンのようなお腹をしているヴィーナス、つまり裸の妊婦、田中美佐子夫人のことである。

昨年八月号（九カ月）、九月号および十一月号（いずれも臨月）発表の安原さゆりさんをモデルとしたフォト以後、妊婦フォトの分譲が絶えてなかったのだ、淋しく思っていたのは小生一人ではなからう。その間十二月号に「妊婦モデルの件、二十三歳になる若妻の

方、予定日が刻々と近づき、今やはちきれそうなお腹になっているのですが写真部員の手が足りず、いらいらしながら日が経ってゆくばかりです。どなたか腕に自信のある方、臨時に応援してくれませんか。産み月十一月」（KK通信コーナー）とあり、期待していたが結局実現せず、「今になって思えば、発表するあてのない妊婦フォトなんて撮影しても仕方ないと放置していたのは、まことに残念だった。これはいつでも撮れるというものでないだけに、悔まれてならない」と二月号で塚本鉄三氏が書いておられる通りである。

だから六月号の読者通信で、福岡市の田中

弘氏の、妊娠中の奥さんをモデルとして提供してもよい、「妻も自分の初産の腹部の大きなところを是非撮影してほしいと申ししておりますので、若し編集部の方で、おでむき下さるのでしたら、お願いできれば幸いです」との申し出を見て、胸をワクワクさせていたのだが、これも距離が遠かったためか編集部は出かけられなかったらしく、その代り、田中氏自身の提供によって、美佐子夫人の臨月ヌードが七月号で分譲されるようになったらしい。いずれにしてもありがたいことである。いろいろ事情もあって口絵グラビアにはならないらしいから、一般の読者諸氏のために、

内容を紹介し批評を加えることは許されると思う。重ねて言えば、児玉昌子さんのものも安原さゆりさんのものも、妊娠フォトは分譲品だけで、まだ誌上にはあらわれていないのだから。(是非誌上発表を実現してほしい)

これまで発表された妊婦フォトは、児玉昌子さんのもの(妊娠前および分娩後のものを含めて)二十七枚、安原さゆりさんのもの二十九枚、今度の田中美佐子さんのものが三十二枚である。枚数

だけ見ても、美佐子さんのものは三十六ミリフィルム一本分にはほとんど近く、その全部が臨月腹で、内容もとても充実している。以前の二人の分はそれぞれ三回に分けて発表されているから、美佐子さんのもの今後追加発表があるかも知れないが、一回分の枚数としては一層多いと言える。



全三十二葉のうち、縛りを併用したものが七枚、これは全部オール・ヌードである。縛りなしのものは、一枚が上下肌着をつけたままで着物の前をはだけけている外、全部胸と腹を裸出している。下ばき(パンティ)をつけているものも、全部、十分下の方までずり下げているので、膨れ上がった腹部が完全に裸出

している。縛り併用のものを除いてオール・ヌードが十三枚、そのうちポーズの加減で下腹でカットしてあるものが四枚ある。縛られたもので下腹でカットされているのが二枚あるから、六枚は下腹のところで切れているわけである。残りはすべて、七分身ないし全身が画面に入っているわけで、直立したもの、両ひざと足指を突いかかとの上に尻をのせて中腰で座ったもの、後ろに手について両脚を投げ出してたみにじかに尻をつけたもの、正座したものなどさまざまであるが、カットされたもののように、画面の上下のアンバランス、不安定なところがない。三十二枚全部、シンクロ・フラッシュを使ってとっているので、照明が平板ではあるが陰になったところがなく、鮮明にとれている。

以上、大まかに分類してみた上で、早速内容に入りたいと思う。

本誌に寄せられる写真の感想を見ているとほとんど、写真そのものについてよりも、写

真を通して見たモデルの批評に終始しているのに気がつく。被写体あつての写真なので被写体をぬきにして写真だけを論ずることが出来ないのは当然だが、われわれは対象——たとえば裸の妊婦——を見たいと思うので、写真はそのための手段にすぎない。写し方のよしあしということもあるが、ここではまず、モデルである美佐子夫人の体そのものについて述べたい。

安原さゆりさんが、どちらかといえばやせ型、わるく言えば無力型の美人（ほっそりとなよなよした）と思われるのにたいして、美佐子さんはムックリと充実した肉体の持ち主であるように思われる。この体型のちがいが同じく臨月腹であっても、非常にちがった印象を与えることになっている。さゆりさんは胸が長く、細長い袋に大きなものを入れたように下腹が膨れて突き出している（胸から腹にかけて伸びた感じを与える）のに対し、美佐子さんの腹はまん丸で、乳房の下からすぐ膨れ上ってポコンと飛び出したような印象を与える。さゆりさんの腹がなだらかで、へちまが膨らんだような形なのに、美佐子さんの腹は、メロンのようにまん丸く、あちこち妙にいびつなところさえ目につく。体型のちが

いから来る個人差にあらためて着目した次第である。

美佐子さんの腹は、それほどバカでかくはないが、固く充実しており、全くメロンのような感じである。メロンといえば、店頭で売っている網メロンを思いうかべるが、美佐子さんの腹にあのように網状の筋が入っているわけではない。妊婦によっては、そういう筋が入っているものもあるかも知れないが。またメロンの種類によって美佐子さんの腹のように網のないものもあるのである。丸く固い感じと、芳香のある高価な果実、語感から来るハイカラで高貴な感じがぴたり来るのである。メロンの腹をした女、この形容を小生は美佐子夫人に捧げたいと思う。

それから、さゆりさんには悪いが、さゆりさんとちがって異常に大きな乳房、まっ黒に着色して非常に大きくなっている妊娠乳房の魅力に次に挙げたい。多くは隠していない顔についても、女性の顔を批評することは非礼かも知れないが、どちらかといえば、小生の好みのかわいらしい顔であるのもうれしい。縛りなし、アップで、下腹でカットされたもののうち、何だかおかしくてたまらぬといった風に、ケラケラと笑った顔をこちらに向け

ているのがある。何故かということが妙に気になって考えてみたので、思いつくままに記してみようと思う。

この写真は彼女の *private parts* を露出しているところをとったものだ。夫婦の間ではお互いに *private parts* 見せ合うことは、きわめて自然である。でも何か照れくさい感じはつきまとう。おそらく写しながら、冗談でも言って笑ったのだろう。この笑いがこの妊婦ヌードをとられるものと、とるものとの関係をよくあらわしていると思う。下腹でカットされていることから分るように *private parts* を見せていることがおかしいから笑っているのだ。夫婦の間では秘密 *secret* ではないけれども他人にたいしては *secret parts* でなければならぬのだから。その反面縛ることはこの夫妻の日常ではないらしく、縛られている写真では彼女は殆んど向うを向っているか、横顔の一枚もさるぐつわで半分顔を隠しているし、顔が正面から写っているのが一枚あるが、固い表情をしているのである。縛られている写真をとるときは、ほとんど顔を上げてこちらを見ることが出来ず、ましてとても笑うような気もちになれなかったのだろう。

それらにくらべて、縛りなしの、丸い腹を突き出して立った、あるいは座った写真で、彼女が堂々と悪びれずに顔を見せているのが多いのを見よ。こちらをまともに正視しているものもある。どちらかと言えば縛りなしのものの中に傑作が多いように思う。勿論、みじめに縛られている方を好む人もあろうが。なお、縛りなしで全身が写っているもののうち丸い腹を正面からとったものが二枚あるが、側面からのとちがって突き出た感じが乏しいかわりに、張りつめて右左に大きく太くなつた妊婦の腹の感じが見られる。最後に、お臍が、面白い形になって、(真横からだと思え

ないが)いくつかの写真でとてもはつきりととれていることをつけ加えておこう。
メロンの腹をした女、美佐子さん、あなたは実に美しく孕んでいる。その美しく孕んでいる写真を、この沢山のすばらしい写真を見せてもらってありがとう。小生はあなたのご主人である田中弘氏を本当にうらやましく思わないではいられない。出来ればその後、この写真を撮影してから何日目に実際に出産なさったのか、生まれた赤ちゃんは男か女か、生まれたときの体重(もちろん赤ちゃんの)は何キログラムだったか、などデータを知らせてほしいと思います。是非誌上に発表して下さい。待っています。

メロンの腹をした女、美佐子さん、あなたの美しく孕んだ写真は多くの好事家の手に残るが、あなたはもう今では出産を済ませて、メロンのような腹はしていない。でも、もう一度、もう二度と孕むことがあれば、メロンのような腹をして、カメラの前に立って下さい。初産のときとくらべて鑑賞したいと思えます。今度はもっと大きなお腹かも知れない。そんな楽しみに小生の心は躍るのです。メロンの腹をした女、美佐子さん、くりかえしますが、あなたの美しく孕んだ写真を見ながら、小生はあなたとご主人と赤ちゃんとの今後のしあわせを祈る気もちで一杯です。妄評をお許し下さい。

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

A1	フミツケ汚辱縛り(新井)	一組一枚	一五〇円
A2	手吊り乳房責め(五月)	五組五枚	五〇〇円
A3	ハリツケ猿ぐつわ(新井)	十組十枚	九〇〇円
A4	全裸正面柱しばり(遠藤)	二十組二十枚	七〇〇円
		三十組三十枚	五〇〇円
		四十組四十枚	三〇〇円
		五十組五十枚	四〇〇円

A5	亀甲強烈乳房縛り(遠藤)	全裸手吊りムチ打	(遠藤)
A6	豊満乳房いじめ(遠藤)	乳房責め股間縛り	(遠藤)
A7	鼻責鼻梁いたぶり(遠藤)	全裸後手高小手	(遠藤)
A8	膨隆臀部さらし(長野)	全裸正面強烈縛り	(長野)
A9	うねる緊縛裸身(長野)	色禪の開股しばり	(長野)
A10	正面縛蛙股ひらき(長野)	裸自慢縛りヌード	(長野)
A11			
A12			
A13			
A14			
A15			
A16			

A17	正面アグラしばり(長野)	正面大の字開股縛	(長野)
A18	遅ましき裸しばり(長野)	荒縄縛豆絞り猿轡	(大塚)
A19	両手前縛り髪首絞(大塚)	両手吊り股間吊り	(桜井)
A20	両手膝下しばり(関谷)	両手縛り開股縛	(大塚)
A21	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A22	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A23	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A24	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A25	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A26	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A27	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A28	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A29	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A30	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A31	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A32	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A33	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A34	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A35	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A36	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A37	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A38	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A39	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A40	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A41	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A42	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A43	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A44	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A45	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A46	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A47	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A48	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A49	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)
A50	両手縛り開股縛(大塚)	両手縛り開股縛	(大塚)

A34	盛り上る乳房縄目(長野)	亀甲本縄鼻いじめ(大塚)	(大塚)
A35	ムチ打悶えポーズ(関谷)	椅子またぎ汚辱責(東浦)	(東浦)
A36	縦縄股間縛り正面(関谷)	ゴム猿ぐつわ全身(大塚)	(大塚)
A37	くさり乳房責め(長野)	強制片足挙げ責め(大塚)	(大塚)
A38	正面乳房くびり縛(関谷)	鴨居正面ハリツケ(梨花)	(梨花)
A39	手吊りパンティ落(東浦)	白バンド後手吊り(東浦)	(東浦)
A40	豆絞り高小手呻(梨花)	裸縛り鼻いじめ(梨花)	(梨花)
A41	ガンジガラメ立縛(愛川)	亀甲本縄股間縛り(桜井)	(桜井)
A42	立木縛竹棒責め(桜井)		

武田薬品から「ドナン」が発売されてからもう久しい。

それまで浣腸薬といえばグリセリンに極っていたもので、医学書をはじめ、軽便浣腸薬にも五〇%グリセリンと、相場は極っていた。ただ僅かに、ハート浣腸だけが、グリセリンに硫酸マグネシアを混入していたと記憶



【浣腸実験記録】

「ドナン」について

栗 瀬 長

するが、武田が新浣腸剤として、硫酸マグネシアの水溶液を発売したのは、遅きに失するの感さえある。何故ならば、硫酸マグネシアは、夙に、散薬或いは水薬として調合される下痢には必ず混入されていたもので、下痢としての効果は早くから確認されていたものだからである。

それはさておき、我が親愛なる友人諸兄から、ドナンにつき二三の話を得たので先ずその報告をしたい。

A君曰く、

「ドナンは凄い。喻えて言うならば、グリセリンは、拳で殴った時のような感じ、ドナンは、ギザギザしたもので、強く引つ搔いたよ

うな感じだ。兎に角猛烈で、自分は肛門から出血してしまった。ただ強烈なだけで、じわじわと迫ってくるグリセリンのあの浣腸ムードがなく、もう金輪際使用は御免だ。」

以上がA君の感想であった。

次にB氏の報告をしよう。

「私も強すぎるのでドンナはあまり好みませんね。でも、グリセリンだけでは単調なので石鹼水、食塩水などと共に、時々使用しています。一般にドンナのような特殊な薬は、普通の薬局にはあまり置いてないのですが、私は大学病院のそばの薬局で買うんです。はじめは照れましたがその中馴れてしまつて、今では、向うから『ドンナ』ですかという始末。薬局の話によれば、随分ドンナが大学病院に売れる。昔はグリセリンだったが、今ではドンナに切り替えたらしい。どうして大学病院がドンナばかり使うのか不思議ですね。」

ということであつた。思うに、我が最高の薬品メーカー武田薬品の発売にかかるという点、勿論、無害安全なる硫酸マグネシアである点、グリセリンと違って、二倍に薄めるといふ手間の省ける点、後述するが、兎に角有無を言わせない即効性があつて、看護婦としても、手間を取らせない点などが、病院で使

用される所以ではなからうか。

しかし、こうした漠然たる事のみ述べてみた所で致し方ない。百聞は一見に然かずともいう。経験してみるに越したことはないのでも甚だ僭越ではあるが小生の実験を御披露したいと思う。

先ず条件であるが、健康状況は良好、特に便秘下痢等のことなし、四十八時間前にイリガートルによる石鹼浣腸にて、宿便を完全に排除して、一日便意を押さえて、丁度四十八時間後、即ち丸二日目である。

使用せるドンナは、用法による二十CCの二倍、即ち四〇CC、私達マニアは多分に浣腸に対する適応性が出来ているため、敢えて二倍量にする。正直にいつて、グリセリンにしても、二倍に薄めた五〇CCでは、一時的に便意が襲つても、やがて遠のいてしまふからである。

さて、午後九時二十三分、秒針が、真上を指した瞬間、仰臥位、両足挙上、充分直腸奥深くドンナが侵入するような体位にて、グリセリン浣腸器で一氣に注入する。

十五秒冷やかな流入感のみ。

三十秒早くも、直腸下部、肛門に近い部分に、灼熱感を感じる。

一分、灼熱感、直腸やや上部にまで拡がる。

一分三十秒、早くも便意あり、(グリセリンは三分乃至五分後に感ずる便意である。)

二分、灼熱感と便意と相俟つて、やや苦痛を感じる。

二分三十秒、つい我慢の限界かと思いたくなるのを、意志の力で乗り切る努力をする。

三分、氣力によるのか、やや便意遠のいてほつとするも、灼熱感は同じ。

三分三十秒急激に便意強まる。鏡に写る肛門活動筋が痙攣しているように感ぜられる。

四分、便意と灼熱感と愈々激しく、我ながら肛門を脱脂綿で押えなくなるが、実験故敢えて放置する。我ながら声が出る、叫びたくなる一瞬。

四分三十秒遂に降参、下腹部に集中せる神経が疲れ、えい、もうどうでもなれという一瞬、肛門から滲み出た便が、下の差込便器に落ちる。灼熱感は相変らず去らない。

六分、便は充分に排泄された。でも肛門部の灼熱感は去らぬ。更にいきむと、便はなく粘液のみ流れ出る。

七分、いきむ度に粘液が更に続く。

八分、長々と続いた粘液も少くなり、後始

末。終っても、肛門部の灼熱感はおおしばらく続く。

十分、肛門の灼熱違和感やと薄らぐ。しかし、立って歩くと、何か灼熱感の名残りがあのように重くする。しかしそれは肛門部

のみで、直腸上部には全然ない。

十五分、違和感もとれ、実にすっきりした気分。イルリガートルによる石鹼液大量浣腸の折には、数時間にわたって、下腹部全体に何か重苦しい違和感が残るが、ドナンの場合

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を！

限定版頒価一部一〇〇〇円（送共）略号「限二」

〔モデル〕 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆奔放のかわずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するためにも、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フォト・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ（第四集）▽

- (一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
- (二)、胸と胴をくびった縄にもたえる女体……………長野 良子
- (三)、グラマーの縄目……………長野 良子
- (四)、豊満裸身の陶酔……………長野 良子
- (五)、うっとりとした表情は、縄にか紐にか……………長野 良子
- (六)、鼻をいたためつける……………長野 良子
- (七)、指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情……………長野 良子
- (八)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
- (九)、とげとげとした荒縄が柔肌を痛める……………大塚 啓子
- (一〇)、黒と白の対照……………大塚 啓子
- (一一)、白い晒と荒縄のケバとのコントラスト……………大塚 啓子
- (一二)、責めに疲れて……………大塚 啓子
- (一三)、責め抜かれてぐったりとなった女体……………大塚 啓子
- (一四)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
- (一五)、アパートの一室での緊縛プレイの一コマ……………新井マリ子
- (一六)、襲いくる魔手……………新井マリ子
- (一七)、恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる……………新井マリ子

にはそれがない。

しかしここで、完全に浣腸の目的を達したかどうか、今一度、エネマシリンジにて、水を五百CC、洗腸してみる。勿論、唯の水では便意もなく、ただ下腹部に膨満感あるのみ。敢えて排泄してみれば、唯二条、僅かに便が認められた。しかし、処々に、粘液の固りがみられたのは、直腸襲中のドナンの残滓であろうか。ややそれが気懸りではあったが一応浣腸の目的は充分ドナン四〇CCにて達成されていたことが実証されたのである。

以上で解る通り、自分で申すのも烏滸がましいが、グリセリンでは、普通量で、十分は我慢出来ると自負する私も、その半分の時間でドナンには降参した訳である。A君の言われるような出血というような事故は、何か外に原因が（例えば痔疾のような、痔の場合にはドナンは強すぎるかも知れない）あるのではなからうか。

確かにB氏の言われるように、病院では手軽であろう。「十分位我慢するんですよ」と肛門に脱脂綿をあてている必要はない。「五分位我慢して下さい。」といっても、普通の患者なら、二三分で降参してしまう事、請合いである。手間の省けること間違いなしで

(一)首締め縛り……新井マリ子
 (二)のびやかな肢体が疼れんする首絞め姿態。
 (三)猿ぐつわ非情……新井マリ子
 (四)開股しぼりの上に非情の猿ぐつわが……
 (五)開股棒しぼり……新井マリ子
 (六)革の口枷が頬もくびれよと締めつける。
 (七)絶叫のワンカット……大塚 啓子
 (八)縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味。
 (九)痛さに喘ぐ……大塚 啓子
 (十)責められて急所の痛さに思わず呻めく。
 (十一)首縄と足縄……大塚 啓子
 (十二)首に掛った縄と足の縄が女体を変える。
 (十三)悶えても拘束された麗身は逸脱しない。
 (十四)足首の縄目……大塚 啓子
 (十五)反りかえった足の指が縄目に可愛い。
 (十六)縄による姿態の変転……大塚 啓子
 (十七)二筋の縄がかくも美しい姿態を現すか。
 (十八)緊縛美の誇示……長野 良子
 (十九)誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす。
 (二十)美しき肢足……長野 良子
 (二十一)投げ出された肉づきのよい肢、足、脚。
 (二十二)全裸緊縛の羞らしい……長野 良子
 (二十三)はにかんで見せた美しい全身のポーズ。
 (二十四)両手吊りと足首……五月亜紀子
 (二十五)両手両足を縛られて一本棒に晒される。
 (二十六)けがされぬもの……五月亜紀子
 (二十七)清純な美しさが、この全身に漂っている。
 (二十八)猿ぐつわを噛ます……大塚 啓子
 (二十九)晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締める。
 (三十)荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
 (三十一)荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々。
 (三十二)珍しく完全に噛まれた猿轡……大塚 啓子
 (三十三)厳しい縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ。
 (三十四)大塚 啓子

(一)緊縛女体操縦法……大塚 啓子
 (二)縛りに変化をつけられた女体はどこへ。
 (三)くねらす豊満女体……大塚 啓子
 (四)瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった。
 (五)棒責めの序曲……新井マリ子
 (六)両足首の両端に縛られて、さて……
 (七)答打ちのポーズ……新井マリ子
 (八)さあ、打って、とながし目の艶なこと。
 (九)素晴らしき美身……長野 良子
 (十)輝くような美しい裸身もあらわに……
 (十一)縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感。
 (十二)情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ。
 (十三)開股しぼりになった女の顔のアップ。
 (十四)開股しぼりの全貌……大塚 啓子
 (十五)両肢を開けて縛り上げられたポーズ。
 (十六)伸ばされた足の表情……大塚 啓子
 (十七)ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚。
 (十八)開股ざらしの表情……大塚 啓子
 (十九)放置されて全身の痛さに耐えるシーン。
 (二十)強盗侵入の構想……新井マリ子
 (二十一)押し入った強盗は女を縛って転した。
 (二十二)緊縛女体の鑑賞……新井マリ子
 (二十三)家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞？
 (二十四)炊事場の嗜虐場面……新井マリ子
 (二十五)台所で縛られていたぶられるシーン。
 (二十六)美しきトルソ……大塚 啓子
 (二十七)胸、臍、ウェストが縄によって捕捉。
 (二十八)くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ。
 (二十九)後手高小手の美しさは素晴らしい。
 (三十)柔肌を喰いちぎるようにくびるコード。
 (三十一)大塚 啓子

ある。

さて、最後に、私達マニアはドナンに対し
 て、どういう態度を取るべきであろうか。

ドナンの即効性、これは、一方から言えば
 ムードがないと言えよう。グリセリンのあの
 じわじわと迫り来る便意。ぐっと我慢すれば
 遠のき、又しても徐々に激しさを増す便意、
 そうした趣きがドナンにはない。ただ浣腸の
 目的、即ち一気に排泄に連る。これは確かに
 私達のムードに遠い。

しかし、責の時にうまく利用するのも面白
 いかと思う。即ち、敢えて薄いグリセリン溶
 液で浣腸、徐々に直腸を刺激しておく。捕わ
 れの美女は、これなら何とか我慢出来るかと
 懸命に努力する。その時間が長ければ長い程
 よい。はかない希望を充分に持たせた上で、
 最後の止めとばかり、このドナンを一気に追
 加浣腸する。それまで我慢に我慢を重ねて、
 完全に脱水作用のゆきわたった直腸は、ドナ
 ンの刺戟には一たまりもないであろう。一瞬
 の叫び声と共に敢えなくも、羞恥に身もだえ
 する美女、こんな想像を、私はドナンに対し
 て抱いたことであつた。

最後に、ドナンに対する感想をお聞かせ下
 さった親愛なるA君、B氏に感謝致します。

連載傑作S小説

花と蛇

(最終回)

団 鬼 六

美津子の屈伏

美津子の肉体を痛めつけるというのは、本心ではなく、美津子の心の底からの屈服を狙っているズベ公達は、眼にしみるばかりの白い素肌をしばらくは黙って凝視する。

輝くばかりに綺麗な白磁の裸身をX型に縄で固定されてしまった美津子。もう流す涙も涸れ果てたよう。がっくりと首を垂れ、切なく肩で息づいていた。

そんな美津子の周囲を、美津子の肉体を綿密に観察するように、ぐるぐる廻り歩く銀子と朱美である。

「どうだい、美津子嬢。そんな恰好にされて

も、吉沢兄貴のスケになるのに嫌かい。考え直すなら今のうちだよ」

朱美は、柔かい白桃のようにふっくら盛りあがっている美津子の尻をつねっていった。

美津子は悲鳴あげて、裸身を悶えさす。

「仕方がないね。じゃ、まず、擦り責めといこうか」

銀子が仲間のズベ公達に眼くばせした。

「あっ、なにをするのっ、やめて！」

美津子は、狂乱したように吊りあげられている両手を悶えさせる。背後にいた朱美が、いきなり、うしろから美津子の胸をかかえこむように手を廻し、ふっくらとした胸の二つの隆起を両手でつかんだのである。

「あたいの得意は乳房責めよ。形のいいおっぱいに仕上げてあげるわ」

朱美は、盛んに手を動かしながら得意顔でいう。

「お、お願い！ かにんしてえ！」

美津子は、朱美の残忍な乳房責めに、逆上し、悲鳴をあげて悶えつつける。無垢な乙女にとって、何よりも辛い責めだ。

「今からでもおそくはないわよ。吉沢兄貴のスケになる決心をしな。皆んなの見ている前でこれ以上恥しい思いはしたくないだろう」

朱美は、責めの手は休める事なく、うしろから美津子の耳もとに口を寄せ、そういうのだった。

「——ああ——」

美津子は、齒をキリキリ噛み鳴らし、美しい眉を寄せ、白い咽喉を大きく見せて、あえぎつつける。

「お手伝いしましょうかね」

悦子とマリが、ニヤニヤし、朱美と調子を合わせるようにして、大きく波打つ美津子の肌のあちこちを擦り出そうとするに及んで、遂に美津子は、

「——聞きますっ。いう事を聞、聞きますから——お願い。やめて——」

美しい美津子の額には、べっとり脂汗がにじんでいる。ハアハアと激しく肩で息をしなから、美津子はズベ公達の執拗な擦り責めに抗し切れず、彼女達の要求を承認したのだ。「ほんとだね。吉沢さんの花嫁になる決心がついたんだね」

朱美は、やっと、乳房や脇腹の擦り責めを中止し、前へ廻って、美津子に念を押す。

顔を伏せながら、美津子は、屈辱にむせびつつ、小さくうなずいた。が同時に、美津子は堰をきったように、激しく身をふるわせて泣き出すのであった。

ズベ公もやくざ達も、どっと賑やかな喊声をあげる。

「よかったね、吉沢さん。こんな可愛いお嬢さんを花嫁に出来てさ」

銀子は、椅子に坐って、やたらにウィスキーを飲みつつけている吉沢の肩をたたいていった。

「お前達が、その娘をこれから、どういう風に責めるのか、もう少し見物したかったのだが、残念だったな」

吉は、いささか照れ臭そうな表情で、そんな事をいった。

「ちゃんと、美津子に宣誓させようよ。」

朱美が銀子に持ちかける。そうだね、と銀子は悦子やマリをも呼んで、あられない姿にされている美津子を取巻いた。吉沢のスケになる事を承認した美津子に吉沢の前で宣誓させるべく、その要領を教えにかかっているらしい。

吉沢は一応、親分の森田の了解を得る必要があるので、改めて森田にそのことの承認を求める。

「うん、うめえ事をしたな。だが、その娘も森田組の商品って事を忘れるな。自分のスケにするのはいいが、森田組のため、うんと働らくよう、お前からもよく聞いて聞かせなきゃ駄目だぜ」

森田は、吉沢にウィスキーのグラスを渡してやりながら、えびす顔でそういった。

「へえ、俺のスケにするからにや、今までのような我儘をいわすような事はしません。まかしておくんせえ」

そう吉沢がいった時、銀子が吉沢を物かけに呼んだ。

「美津子に宣誓させるからね。ちよっと、こへおいでよ」

ズベ公達に取囲まれている美津子は、眼の前に吉沢がすくと立つと、たまらなくなつたように吊られている腕の附根あたりに紅潮した顔をすりつける。

「ふふふ、何といったってまだ女学生なんだからね。自分の夫ときまった人に、正面に立たれると、羞しいのだよ」

銀子が笑っている。

「さあ、美津子嬢、今、私達が教えてあげた事を吉沢さんにはっきりいうのよ。そしたら縄を解いたげるわ。夫になる人の前だからといって、そんな羞しい恰好を何時までもさらしていたくはないでしょう」

と朱美。

美津子は、ズベ公達に尻を突かれ、脇の下をくすぐられたりして、遂に顔を正面の吉沢

に向けた。涙にうるんだ黒い瞳は、妖しいばかりにキラキラ光り、その凄惨なばかりの美貌を見た吉沢は、射すくめられたように、どきりとする。

「——吉沢さん。美、美津子は喜んで、貴方の妻になる事を——ち、ちかいます」

血を吐くような思いで美津子がいうと、わあ——とズベ公達は、勝ち誇ったように歓声をあげた。

「よく決心してくれたわね。これであたいた達の顔も立ったというもんだ。やっと肩の荷が下りたわ」

銀子は、満足げにうなずく。朱美が、狂い泣きしている美津子の耳もとに口を寄せ、インタビューする記者の口ぶりを真似て、からかうのだ。

「ところで、お嬢さん。目出度く結婚されたら、赤ちゃんは何人ぐらい欲しいとお考えですか——」

どっとズベ公達は笑い出した。

「お嬢さんの気の変らねえうち、式は早い方がいいな。てっとり早いところ、今夜にでもどうだ」

森田がビールをうまそうに飲みながら、がらがら声でいう。

「——ああ——」

美津子は、紅潮した顔を横へねじる様に伏せ、高々と吊られているしなやかな白い腕を苦しげに動かしながら、すすりあげている。

「さあ、吉沢兄さん。可愛い恋人に、キッスしてあげなよ。」

銀子にいわれて、吉沢はいささか照れた顔つきになったが、すぐにズカズカと美津子に進み寄る。恐怖に黒眼がちの美しい瞳を大きく開き、嫌嫌と激しく首を振る美津子。

「花婿のキッスをこばむ花嫁がいるかよ」

と、朱美は、美津子の真っ白な尻をピシャリと平手でたたいた。

如何に拒んだところで、X字型にきっちり固定されている美津子は、どうしようもなく、遂に、いやらしく突き出してくる吉沢の唇を我が唇で受け取めなくては仕方なくなってしまうのだった。吉沢は、何かにとり憑かれたような血走った眼つきになり、美津子のきらめくように白い肩、そして、背後にまわり、すべすべした雪のような背筋から、ふくらと盛り上った胸のあたりにまで、接吻の雨を降らしまくる。体中をまむしが這いまわるような、ぞっとする虫ずの走るような感触を美津子は、苦しげに首をのけぞらせ、齒

を喰いしばって耐えている。

「——あつ、何、何をするのっ、やめて！」

吉沢が、執拗にも、同じような動作をくりかえし出し、美津子はもう耐えられなくなつて、金切声をあげ、吊り上げられている両腕を必死になってひく。ふくらした尻の筋肉までが、ピーンとはった。

ズベ公達が笑った。銀子はもう、その位にしておおき、と口をゆがめながら吉沢を制する。

「あとの楽しみが薄くなるじゃないか。そういう事は、今夜、水いらすですりゃいいよ。まだ、これから、あんたがする事はあるんだから」

吉沢は、へっへへ、といやらしく笑いながら、ようやく美津子の傍から離れる。

銀子は、大きく肩で息をし、屈辱にのたうっている美津子に対し、急に手きびしい口調でいった。

「大げさな悲鳴をあげるんじゃないよ。吉沢さんはこれから、あんたの亭主になる人じゃないか。亭主のする事にさからっちゃ、これから私達が承知しないからね。いいね」

銀子は、美津子の鼻をつまみあげた。そして、カウンターの上のガラス製の便器をとり

あげ、それを吉沢にわたす。

ちら、と銀子と吉沢の方を見、はっとしたように耳たぶまで真っ赤にして、顔を横へねじった美津子。

「何もそう真っ赤になって羞しがる事はないだろう。あんたの亭主が世話してくれるんじゃないか。大きい方も小さい方も、これから全部、こういう具合に亭主まかせにするのよ。わかったわね」

酒くさい息を吐きながら、朱美が体中を火のように熱くしている美津子の耳もとに吹きこむのだった。

「それがすんだらね。このテープレコーダーに吹きこんで、三階にいるお姉さんに、報告しましうね。貴女が吉沢さんと結婚する事をさ。貴女のお姉さんも、きっと、賛成して喜ぶ事だろうと思うわ」

銀子は、おかしくてたまらないといった調子で、美津子にいい、吉沢の方へ眼くばせをする。奇妙な形のガラスびんを見た美津子は恐しさに体中を針のように緊張させて、吊りあげられた両手をねじるように必死に悶えさせる。

「嫌よ、ああ、嫌、あ、あんまりです。そんな事、絶対に嫌！」

美津子が逆上したように、わめきつづけるとズベ公達はますます調子を出してくる。

「何いってんのよ。吉沢さんにこういうものを使ってもらっている内、貴女、吉沢さんに対する本当の愛情がわいてくるものなのよ。そりゃ、最初のうちは、とても羞しいだろうけどさ、なれてくりゃ何でもないものよ。使わせてもらう時間がそのうち待ち遠しくてたまらなくなるわ」

銀子はそういいながら、ポケットから、ガライターを出して、美津子の鼻先でパチリと火をつけた。美津子に絶体拒ばせないためのおどかしである。

「その可愛いお鼻を黒こげにしてももらいたくなかったら、ふふふ吉沢さんに、甘ったるい声で、お願いするのよ。こんな風にね。ねえ、あなたあ、美津子、おしっこようー」

銀子が頓狂な声を出したので、やくざもズベ公も腹をかかえて笑った。

冗談ではなく、銀子は美津子に実際にそんなことをいわそうとしてムキになり、肌身をつねり、はては、ライターの火を尻のあたりで当て、美津子に悲鳴をあげさせる。銀子の残忍さに抗し切れず、遂に美津子は、固く眼を閉ざしたまま、

「——ねえ、貴方——」

「ねえ、貴方じゃ味もそっけもないよ。ねえあなたあーんと、色っぽく甘えかかるようにいうのさ」

銀子は、美津子の尻をつねって叱る。

「——、ねえ、あなたーあ」

美津子は、体中を火柱のように燃えたたせて、血を吐くような思いでいう。

「なんだい。何か用かね」

吉沢がニヤニヤしながら、ガラス製便器をかかえて美津子に近づく。

吉沢の赫黒い顔が、美津子の白い顔をぞきこむように近づく。狂ったように首を振り悪鬼のような吉沢の視線から顔をそらせる美津子であったが、早くいわないか、と銀子や朱美に体のあちこちをつねり上げられる。

「美、美津子、お、お、ああ——」

たまらなくなつて、激しく号泣しだした美津子を、ズベ公達は腹を立てて折檻し出す。

さあ、もう一度、最初からちゃんとやり直すんだ、と銀子と朱美にぐいと、あごを持ちあげられた美津子、もうズベ公達にさからう気力も失せたよう、観念しきったように眼を閉じ、女達に命じられた通りの事を口にするのだった。

二つの肉塊

「どれ、このへんで一息つこうじゃないか」
川田は、鬼源にコップを渡し、それにビールを注いだ。

こりゃどうも、と鬼源は、コップのビールをうまそうに一息に飲みほす。川田も鬼源も上半身裸になっている。汗びっしょりだ。静子夫人と京子の調教にとりかかって、もう三時間近くになるうか。川田も鬼源も、かなり疲れたらしく、窓ぎわの椅子に腰を下ろして一息入れているのだ。

部屋の中央に敷かれている大きなマットレスの上には、白い柔軟な二つの肉体が折り重なるようにして荷物のように投げ出されている。失心しているのか、二つの肉塊は、びくとも動かない。いうまでもなく、それは、静子夫人と京子であるが、無残にも後手に縛られたまま、精も根も尽き果てたよう、マットレスに身を沈めるよううつ伏せに倒れているのであった。

「全く、二人とも、いい肌をしてるじゃありませんか、え、どうです」

鬼源は、マットレスの上の女体を楽しそうに眺めつつ、ビールを飲んで川田にいう。

「どうだね。鬼源さん、この二人、商売ものとしての見込は？」

川田がニヤニヤしている。

「見込はどうだって？ 最高ですよ。顔はいうまでもないが、体にしたって、わっしゃ、こんないい体をした女を手がけるのは生れて始めてでさあ。」

鬼源はそういつて、立上り、マットの上の二人の美女の傍にしゃがみこむ。

「ただ難をいえばですな。縄つきのままだから、あんたと私が人形使いみてえな事をして演じさせなきゃならねえ。それが、面倒といえば面倒だ。だが、それもわっし達の役得ってわけですかねえ」

鬼源は、川田の方を向いて笑っている。

「縄なしでこの二人が今みてえな事を演ずるにゃ、まあ半年はかかるだろうよ。何しろ、この別嬪さん方の、育ちが育ちだからな。まあ、当分はお前さんと俺が人形使いの役をやるうぜ。案外、その方が客に受けるかも知れね。」

川田も、鬼源と並んでマットの上の氣息えんえんといった状態の美女二人に眼を落しながらいうのだ。

「ふふふ、奥さん、大分参ったようだね」

川田は、静子夫人のふくよかな肉づきのいい白い肩に手をかけ、ひっぺ返すようにして上体を起させる。静子夫人は、川田の懐の中へ、がっくりと首を仰向けに倒し、全くの放心状態であった。はち切れるばかりの胸の隆起が、切なげに大きく息ずいている。艶やかな夫人の大きく見せた白い首筋を川田は、ぞくぞくした気分で眺めている。

一方、京子も鬼源に肩を持たれて、上体を起されたが、がっくり首を落とし、中味が空っぽの文楽人形のように、夫人と同じ、忘我状態であった。

「さあ、しっかりするんだ。まだまだ、これ位で終りじゃねえんだぜ」

悪鬼のような男達に、肩を揺すられた夫人と京子、同時に正気づいたのか、うつすら眼を閉くのだった。静子夫人と京子の視線がぼんやりと合う。と同時に、二人はハッとしたように顔を赤らめ、互いに視線をそらし合っていた。川田と鬼源に強制され二人で今まで演じていた事を思い出すと、あまりの羞しさに夫人も京子も、まともに顔が見られないのだ。

川田は、そんな二人の様子を含み笑いしながら見て、

「何も、二人とも、そんなに照れなくてもいい



いじゃないか。とにかく、二人とも、これで普通の関係じゃなくなったんだ。お互いに励まし合って、立派なスターになってくれなき

や困るぜ」

静子夫人と京子は、齒ぎしりし、絹のような感触の房々した黒髪を振って鳴咽するだけ

だった。

そこへ、ノックの音。田代と森田の二人であつた。入って来ると、

「どうかね。御婦人方は、ものになりそうかい？」

森田は鬼源とマットの上に立膝をして、すすりあげている二人の美女を交互に眺めながらいう。

「とにかく、今夜、皆さんの前で、素晴らしい実演をさしてごらんに入れますよ。ま、それをごらんになりやよくわかりまさあ」

と、鬼源は自信ありげに言う。

そうか、それは楽しみだと田代は満足そうにうなずきながら、

「今、森田親分とも打合せしたのだが、ショウの第一回開催は、来月の一日という事にきまつたよ。まだ一週間ある。会員には、明日、案内状を出す事にしたんだ」

「そうですかい。一週間もありや、まだ色々芸当を教えこむ事が出来まさあ。」

川田と鬼源はうなづき合っている。

「そこでだな、川田、今、森田親分とも相談したんだが、こういうアイデアはどうだ」

田代は、川田と鬼源を部屋の隅へ呼んで、何か小声で話します。なるほど、そいつは面白えや。じゃ、とにかく、京子と一緒に遠山夫人も剃り落せばいいってわけで――」

川田は吹き出して、

「遠山夫人も、そのアイデアには、大賛成だと思いません。だって聞かせてみましょう」

マットの上に立膝をし、小さくちぢかんでいる静子夫人に近ずいた川田は、艶やかな夫人の房々と耳を覆っている黒髪をかきわけ、ニヤニヤしながら耳うちをする。

川田に耳元で何かささやかれた夫人は、その途端、電気にでもうたれたようにギクッと身を震わし、美しい柳眉をあげ、激しい憤怒をこめた瞳で川田を一瞬、睨んだが、たまたまなくなったように首を垂れ、嫌々と長い黒髪を左右に振りながら、マットの上に泣き伏してしまふのだった。

川田は唇を舌でなめながら、泣き伏している静子夫人に向ってつぶける。

「ショウを御覧になって下さった会員の方々に記念品として、一本づつ差上げる、てのは全くいい思いつきじゃねえか。まだ、一週間

もあるんだ。今日、剃ってしまったら、ショウを開く日までにや何とか恰好がついてくるもんなさ」

静子夫人は、マットの上に体をうつ伏せにしたまま、よよに泣きくずれている。川田達の立てている計画のその常規を逸した残忍さ。静子夫人は、そんな目に合う位なら、一そ、一思いに舌を噛んで、この生地獄から逃がれようと思うのだったが、

「奥さんと京子さえ、このショウを本心からやる気になって、成功さしてくれりゃ、桂子や美津子まで何も無理やりショウのスターにする気はねえのだからな」

川田が夫人の心を見すかしたようにいう。この悪鬼達に桂子や美津子の事をひき出されると、全く手も足も出なくなってしまう夫人と京子であった。

田代が、のっそり近ずいて来て川田と並び屈辱に悶え泣きしている夫人にいう。

「剃りとったものの中、その半分は、奥さんの最愛の御主人、遠山氏に奥さんからのプレゼントとして俺達から送ってあげるよ。どうだい。中々、俺達だって気が利くだらう。奥さんの失踪以来、遠山氏は気が違ったようになっっているそう。そんな遠山氏に対して、

何よりもいい送り物だと思うがね」

田代は、大鼓腹をゆすって笑い出した。そして歯ぎしりして屈辱に悶えている京子に対しても、

「京子嬢の方もその中半分はまあ、税金として森田組が頂戴するよ。あとの半分は、約束通り、山崎とかいう探偵さんに送りとどけてあげるからね」

といい、森田と顔を見合せニタリとする。

「じゃ、社長、どうしましょう。実演を先にやらんになりますか。それとも剃髪式の方を先に致しましょうか」

と川田が聞くと、田代は、

「剃髪式は少しでも早い方がいい。そうなた別嬪さん達のショウを見るのも、また一興じゃないか」

と笑い、

「そう。その前に、この奥さんにも、京子のように愛人に対しての声の便りをテープに吹きこましておきな。せっかくだから、プレゼントと一緒に声の便りも遠山氏に送ってやろう。遠山氏を悩殺するような、うんと色っぽいやつを吹きこませるんだ。わかったな。川田」

まかしといて下せえ、と川田は、マットの

上で泣きぐずれている静子夫人を舌なめずりしながら眺めた。

「さて、奥さんの方は、これから吹きこみ、京子の方は、もう録音はすんでるんだから、一足先に舞台の方へ行き、社長や親分に仕上げて頂く事にしようじゃありませんか」

よし、わかった、と森田は京子の肉づきのいい肩に両手をかけ、

「さあ、京子嬢、行こうじゃないか」と無理やり立上らせる。

「京、京子さん！」

「おお、奥様！」

たまらなくなったように夫人は後手に縛られている上体をくねらせて起き、連れ去られようとしている京子の肩に顔を押しつけて、激しく泣く。京子も、房々した夫人の黒髪に顔を埋めるようにして嗚咽するのだ。

「とんだ愁嘆場だな。一時でも別れるのは、辛いて気持はよくわかるが、すぐに又舞台で一緒になれるんじゃないか。」

川田は、強引に静子夫人を引き離し、マットの上にべたりと尻もちをつかせると、傍に落ちていた縄を拾いあげて、鬼源と二人で素早く夫人の均整のとれた両肢をあぐらに組ませて縛りつけ、テープレコーダを持ち出して

来て夫人の前にそれを置く。青竹や皮ムチをわざわざ取って来て、それをレコーダの横へ川田がおいたのは、夫人が教えられた通りの言葉の吹込みを躊躇した場合、責めあげるハラだからである。そんな静子夫人の方を、すすりあげながら京子は幾度も振りかえりつつ、森田と田代に縄尻をとられ、部屋の外へ引きたてられて行くのであった。

絶体絶命

田代や森田等が舞台と呼んでいるのは、かなり広い庭園の奥まったところにある古めかしい土蔵を改造して作ったもので、秘密会員は森田組からの通知があれば、ここへ集合する事になっているのだ。周囲は、鬱蒼とした竹藪に包まれていて、秘密会員の集合場所としては、うってつけのところである。

縄尻をとった森田に背をつかわれて、京子は緑側から沓ぬぎ石に降り、素足のまま、飛石伝いに歩かされる。このへんは、数日前、京子が静子夫人を救出し、森田組のやくざやちんぴら達と、激しい乱闘を演じたところであつた。

「あの時は、大奮戦だったね。京子嬢」森田は、京子を引きたてながら、愉快そう

にいう。柔軟な素肌をがっちり、どす黒い麻縄で緊縛されられている京子は、小砂利の上を上体をくの字に曲げて、恐ろしい密室へ向い、歩ませられている。浣腸、強制排尿排泄、そして、魂も凍るばかりの屈辱の演技、そういった数々のむごたらしい責めを受けた身を、更にまた、羞恥の極致へ突き落とされるべく、竹藪の中の密室へ、ふるえる素足を運んでいく京子であった。

「待ってたわよ」

竹藪の中から、銀子と朱美が顔を出した。田代と森田に、あらかじめ、密室の中の準備を整えておくように命じられたのだろう。銀子と朱美は、かけ寄って来ると、田代にいった。

「社長、支度はちゃんと出来ていますよ。さ早く早く」

と、うきうきした調子でいい、深く首を垂れて一步一步足を運んでいる京子に、
「ふふふ、京子姐さん、いよいよというわけね、さ、こちらへどうぞ」

森田にかわって、縄尻をとった銀子、どんと力一杯、京子の白い背中を突いて、
「あら、京子姐さん。ずいぶんとお尻の肉が発達してきたようじゃないの。色気たっぷり

よ。浣腸のせいだろうか。女になったからかしら」

などと朱美と顔を見合わせて笑い合う。

古めかしい土蔵に達すると、朱美は鼻唄をうたいながら、ガラガラと網戸を開ける。中はかなり広い。十帖敷の広間に作られてあって、眼のさめるような明るい色の絨氈が敷きつめられてあり、特別に大型に作ってあるらしいピカピカと金色の模様が光る豪華な絹布団が、その中央に敷かれてあった。

「これが今夜、あたい達や森田組の兄さん連が見せて頂く舞台なのよ。つまり、来月開催するショウの試写会を開くってわけね。このベルを押すと、屋敷の方に通じて、葉桜団、森田組がどつとここへやって来る事になっているの」

朱美は柱にとりつけてあるベルを、指で示しながら京子の背を押していく。

「だけど、実演に入る前、仕上げておく事があったわね」

この十帖の奥は、床の間のように一段高く作られている所があって、そこには二本の丸木が立てられてあった。それぞれの丸木の下方に一米位の横木が打ちこんである。十字架をちようど、さかさまにしたような形にこし

らえてあるのだ。更に不気味なことは、その奇妙な柱の前に洗面器が一つづつ置かれてある。得体の知れない恐しさを全身に感じ、京子はハッと立止ってしまう。

「何をしてるんだよ。早く進まないか。こっちの柱が京子嬢、こっちの柱は静子夫人というわけさ。令夫人の方も、おっつけ、ここへ引き立てられて来るだろうさ」

銀子は、京子の尻をけり、朱美と二人で京子の肩や腰に手をかけ、京子の背を柱へ押しつけると、田代や森田も手伝って、素早く京子の体を柱に立縛りに縄をかけ始めるのだった。京子は、もう一切の望みを捨てたようにズベ公達にひしひしと縄をかけられるまま、ぐったりと首を落していた。

その時、川田と鬼源が、静子夫人を引き立てて入って来た。

「ああ、奥様——」

京子は、夫人に気づくと、涙のにじんだ瞳をあげて声をふるわす。

「——京子さん——」

静子夫人も一種、壮絶な表情で、泣きはらした瞳を京子に向けたが、川田と鬼源に、背をつかれ、緊縛された乳白色の熟れ切った肉体を、丸い柱を背にして立たされるのであつ

た。新しい縄を手にした川田と鬼源は、ひしひしと夫人のむっちりした上半身を柱へくくりあげていく。

柱を背に立縛りにされて並らばされてる夫人と京子、申し合わせたように二人ともがくくりと首を垂れてすすり泣いているのだ。

「いよいよ始まるわけね」

悦子とマリ、それに森田組の幹部やくざである吉沢と井上が、酒で真っ赤になった顔を並べて、どやどやと入って来た。

「あら、奥様も一緒なの——」

悦子が、京子と並んで柱に立縛りにされている静子夫人を見て、頓狂な声をあげた。

川田がニタリと顔をくずしている。

「そうさ。二人ともこれから、子供のような素直な気持になって、森田組のために働きたいとおっしゃる。それには、まず、子供のような体になった方が、気持がすっきりすると奥さんは、いわれるんだ」

静子夫人は、口惜しげにキリキリと歯を噛みならし、首を深く垂れ下げるのだった。

柱の下方に打ちつけてある横木へ、夫人と京子の足をそれぞれ縛りつけようと、悦子とマリが新しい麻縄を手にとると、銀子がそれを制して、

「その前に悦子、奥さんと京子の髪をセットしてあげな。美しい顔も涙で半分曇ってるじゃないの。今夜は、森田組葉桜団全員がここへ集合して、試写を見る事になってるのだからね。美しくお化粧してあげな」

悦子は、昔、美容院に一年程勤めていた事があり、葉桜団員の髪の設定をたえずしてやっているのであった。

「あいよ。今夜は、特別きれいに仕上げてあげるわよ。」

悦子は、マリを助手にして、化粧箱をとって来ると、なれた手つきで、おどろに乱れた静子夫人の髪をブラッシュでとき流すようにしセットにかかり出す。房々と耳を覆うばかりの絹のような感触の夫人の黒髪は、初々しい若奥様向きヘアスタイルと、悦子のいう髪型に結い上げられ、夫人の美しい瓜実顔も、念入りに化粧されていく。

京子の方も、マリの手で、悦子にセットされた艶々しい髪にヘアローションをかけられ、念入りに化粧されていくのだ。悦子は、静子夫人のふくよかな肩から、縄に締めあげられている豊満な乳房に至るまで、乳液をぬりたくりながら、ふと、隣の柱で、マリに口紅をひかれている京子を楽しげに見て、いっ

た。

「あんたの妹の美津子嬢も、遠山財閥の令嬢も、あたい達が、花嫁化粧をしてあげたんだよ。見ちがえるようにきれいになったわよ。一眼、見せてあげたかったわ」

その瞬間、京子も夫人も、ひきつったような表情になった。京子は血走った気持で、
「あ、あんた達は、もしや、桂子さんと美津子を——」

京子は唇をわなわなふるわせながら、悦子や銀子の方を見る。

「あら、私達、まだ知らなかったっけ、これは失礼」

銀子は、おかしさをかみ殺すようにしながら、

「美津子嬢は、ここにいる吉沢さん、桂子嬢は、この井上さんとめでたく縁談が成立、これからのあんた達のショウが終ってから、結婚式を挙げる事になっているのさ。」

「美、美津子は、どこに、今どこにいます！」

京子は、銀子に向かって喰いつくような調子でいった。美津子の体だけはどんな事があっても——京子はただそれだけを念じて、死ぬよりも辛い数々の責苦に耐えてきたのだ。そ

れを今になって——京子の胸に熱い火の塊のようなものが、カッとこみあがってくる。

「美津子嬢も、あたい達の仲間に今、念入りに全身美容をされ、初夜の心得について色々講義されているわよ」

銀子は、そう言って、吉沢に顔を向けた。
「美津子と夫婦になりや、この京子嬢は、あんたにとっても姉だ。一言挨拶してやったらどうだい」

吉沢は、顔をゆがめるようにして笑いながら、抱えていたテープレコーダーを、京子の足もとに置く。衆人環視の中で、自分に浣腸し羞恥地獄へ突き落した憎みてもあまりある吉沢が、妹に対しても、その毒牙を向けだしたのだ。京子は、キリキリ歯を噛みならし、どうしようもない憤懣に燃えた全身をぶるぶる怒りにふるわせていた。

レコーダーにコードをつないだ吉沢は、

「へっへ、俺からおめえに何のかんのいうより、美津子の声を聞けば、一番よくわかる事だ。お姉さんにぜひ自分の気持を説明したいと美津子がいるので、美津子の生の声をわざとテープにとってやったんだぜ」

吉沢は、ズベ公達と一緒に、美津子を責めさいなみ、やっと録音させたテープを京子に



聞かそうとするのである。レコードは廻転し始めた。

「——お姉さん、美津子の我儘を許して。美

津子、もうどうしようもない程、吉沢さんが好きになってしまったのよ。吉沢さんの女になれて、一生こういう素敵な世界にいる事、

それが美津子の今のたった一つの希望なの。美津子は吉沢さんに誓いました。女子高校の制服の事などきっぱり忘れ、これから生まれたままの姿で優しい吉沢さんの傍に終生寄りそい、そして、吉沢さんのお仕事に協力するという事です。今の美津子、とっても幸せよ。両手は固く後手に縛られているけれど、何の不自由もないのだもの。優しい吉沢さんがおトイレの事、大きい方だって、小さい方だって面倒を見て下さるとおっしゃるのです。お姉さん、美津子は今宵、吉沢さんの愛を受入れ、いよいよ女になります。美津子も、もう十八、決して早すぎるとは思いません。お姉さんだって、きっと賛成して下さるわね。お姉さんに、あんな素晴らしい浣腸をして下さった方ですもの。お姉さんも吉沢さんには好感を持って下さってと思うわ。じゃ、これからはお姉さんも森田組のため、しっかり働いてね。私もお姉さんに負けない、りっぱなショウのスターになるべくがんばります」

そうした美津子の声を聞かされた京子は、気も顛倒せんばかり、激しく身悶えして、わめき出す。

「美っちゃんっ。負、負けちゃいけないっ、美っちゃん、しっかりするのよ！」

姿の見えぬ妹の名を京子は必死になって呼びつづけるのだ。これだけの事をいわされるのに、美津子はどれほど辛い苦しい責めに合わされたことか。京子はそれを想像すると、体中が、ズタズタに引きさかれるような気持ちになるのであった。

美しい童女

「どうでえ。これですっかり納得がいったらう。京子嬢」

吉沢は狂乱したように、しきりに身悶える京子を、愉快そうに見て笑った。同じく、森田組の幹部の一人である精悍な顔つきの井上が、静子夫人の前に立ち、

「桂子は俺のスケにするからね。一応、おめえさんにも知らせておくぜ。桂子だって、ぞっこん俺には参ってるんだ。へっへへ」

静子夫人は、唇を固く噛みしめ、憤怒のこもった瞳をキラリと光らして、井上を見たがすぐに顔を横へ伏せ、涙を流す。

銀子が、したり顔して、夫人と京子に対しいった。

「せっかく、きれいにお化粧してあげたんだ

から、涙を流すのはやめな。だけど、そういう風に髪をセットされ、化粧あれみると、二人とも、ふるいつきたいぐらいのハクイ女になったわね。」

悦子は、すすりあげる静子夫人のあごをおさえるようにして、ピンクの口紅を舌でしめしつつ夫人の唇にひく。

はい、これでお化粧はおわり、と悦子とマリは、自分のした仕事を点検するように、少し離れて二人の容貌を眺める。

京子の生々した新鮮さを失わぬ天然真珠のような美しい容貌。静子夫人の彫りの深い、端正さを失わぬ面立、二重瞼で切長のキラキラする瞳、高貴な感じの美しく緊まった鼻すじ、頬から顎にかけての皮膚の艶々しさなど、全くまばゆいばかりの美しさである。

田代と森田は、念入りに美しく化粧された二人の美女を蕩然として見つめ、

「こんな美人のものを剃りあげるなんて、ちよっと気がひけるじゃないか」

と顔を見合わすと朱美が、今更何をいってらんですよ、と笑いながら、二人の美女の間に立ち、

「さて、桂子嬢と美津子嬢の決意が、よくわかったでしょう。だから、二人のお嬢さんの

事は、こっちへ一切任して貴女達は何も心配することはないのよ。安心して、剃られっちまいな」

朱美は、そういつて、悦子達に眼くばせする。静子夫人の足もとに朱美と銀子が腰をかめる。柱の下に打ちつけてある横木に美女の両肢を縛りつけようというのだ。京子の方には、悦子とマリが小腰をかがめ、足首を握り左右へ力一杯引張り始めていた。

「な、なにをするの！ やめて！」

夫人も京子も、かっと頭に血がのぼり、逆上したように悶え出し、必死になって両脚をばたばたし出す。

「なにをするの！ たって、今更、いわなくなつてわかってるでしょう」

マリはそういつて、男達に、

「ぼんやり見ていないで早く手伝ってよ！」
吉沢と井上が、ズベ公達のしている事を手伝い出した。

男達の力が加わったとなると、もうどうしようもなく、夫人と京子は、かっちりと横木へ足首を縛りつけられてしまったのだ。

「——ああ——口、口惜しい」

京子は歯ざしりし、キリキリ身をもむ。その度、身もだえして、もがく京子のむっちり

した内腿の筋肉がピンと張るのだ。静子夫人も、キリキリ舞いするよう火のように燃えた顔を、右へ伏せようとしたり左へ伏せようとしたりする。足首をくびられた指先が、くの字に曲っている。

丸柱を背に、そんな風に縛りつけられた二人の美女を男達も女達も、しばしの間、うつとりするように見つめている。

「別嬪さんのそういう恰好は、いくら見ても見あきがしねえな。だが、そうもしてられないんだ。」

川田は、そういうと悦子に眼くばせする。

あいよ、と悦子は用意して持って来ていた化粧箱の中から、石ケン水、二本の剃刃、小皿、ヒゲ剃りあとにつけるクリームなどを口笛を吹きながら取り出す。

さて、と川田は、ピカピカ光る剃刃を手にして、それを静子夫人と京子の眼の前にちらつかせ、

「へっへへ、どうでい。よく切れそうな剃刃だろ。二人とも覚悟は出来てるだろうな。剃り上げられる前に、何かいいえ事があったら聞いてやるぜ。」

川田は、処刑者に対する教悔師みたいな事をいい、静子夫人の豊満な乳房を剃刃の背で

ピチャピチャたたきながらいうのだった。

「か、川田さん、お願い、それで一思いに殺して！ これ以上、生恥をかかせないで！」

静子夫人は、美しい顔をきっと上げ、激しい調子で川田にいうのだった。京子も、それに呼応するように眼を見開き、

「最後のお願いです！ 殺して、一思いに殺して下さい！」

必死になって京子も川田に向って叫ぶのだった。自分の命にかえても美津子だけは、と決心し、数々の残忍な責苦に耐えてきた京子であったが、美津子を救う事も不可能となった今、京子は死んで、この屈辱より早く逃がりたい一心である。

「いっとくがね。お前さん達がたとえば自殺なんかした場合、来月やる事になっているシヨウには美津子嬢と桂子嬢が、どうしても代役を勤めなきゃなくなる。いいのかい」
そう川田に浴びせられた夫人と京子、急に力が抜けたように、がっくりと首を落してしまふ。

ざまあ見やがれ、と川田は胸の中で勝ち誇ったようにいい、ニタリと顔をくすす。

銀子が、わざとらしく大きなのびをし、「モタモタせずに、やるなら早くやっちまお

うよ。屋敷の方にいる仲間達は、令夫人と京子嬢のウヨウヨが見られるというので、楽しみにしてくるのよ」

という、と、静子夫人の横に立ち、
「森田組のために一生懸命働くと何度も誓ったくせに、今更もったいぶるんじゃないよ。きれいさっぱり剃って頂き、葉桜団、森田組の皆さんにゆっくり鑑賞して頂くんだ。わかったね」

吉沢がぜひとも京子の方を俺に任せてくれという。自分の妻ときまった美津子の姉に対し、充分サービスをしたいのだ、などという出したので一同大笑いになった。

「それなら、奥さんの方は、俺に任してくんな。桂子のママに俺も孝行がしてえ」

井上がいったので再び大笑い。
結局、静子夫人は井上と悦子、京子は吉沢とマリに剃りあげられる事に決定。荒れ止めのクリームは、川田が受持つという事になった。

スター誕生

体中の血が音をたてて逆流するような羞恥と恐怖。反吐にも似た口惜しさ。

静子夫人は、白い歯を見せて、眉毛を八の

字に寄せ、艶やかな乳白色のうなじをくつきりと見せて、切なげに首を振った。京子も豊かな胸の隆起を波打たせ、苦しげにあえぎつづける。

ウイスキーをくみ合いつつ、ニヤニヤして見つめている田代に森田。おかしさを噛み殺すように口をハンケチで押さえながら見ている銀子と朱美。

川田は、井上や吉沢の肩をたたいて、グラスを渡し、ウイスキーを注いでやったりする。

白い素肌全体を充血さし、毛穴から血でも吹き出しそうな屈辱感に全身を鋼鉄のように固くしていた夫人と京子であったが、次第に一種の悲しいあきらめに似たものがさざ波のように胸の中に一杯わいてくるのである。もう駄目だわ、という言葉が大きく心の中を占めてくるのを二人の美女は感じとった。

「ふふふ、奥さんも京子嬢も、あとほんの少しよ。あと、ちょっとした辛抱だからね」

銀子が愉快そうにいう。

静子夫人と京子は井上と吉沢の執拗な攻めの中へ、すっかり、身を投げ出してしまい、そんな衝動にかられて来た。そんな自分にふと気づき、かっと体中を火のように熱くしてし

まう静子夫人であったが、いつしか、男達の術中に静子夫人は陥りかけ出したのである。

——私は、もしかしたら、この世界を喜べる女に——

ふと、そんな事を脳裡に浮かべた静子夫人は、ハッとして赤らんだ顔を激しく左右に振る。静子夫人に本当の意味の危機が近づいたのである。勿論、それは、森田組や葉桜団が一番待ち受けているものであるが——。

「出来上ったぜ」

吉沢と井上は、同時にやっと立上った。

うわっ！ とズベ公達は、バンザイをして喜ぶ。

「すばらしいわ、奥さん。魅力的よ」

「まあ、京子嬢たら、可愛いじゃない。まるで赤ちゃんね」

「もっと傍へ行って、よく拝見しようよ」

ズベ公達は、お互いの体を抱き合うようにして笑いこける。

「おっと、待ちな。仕上げがまだ残っているんだ」

川田がクリーム瓶を持って、ズベ公達をかきわけける。

「ねえ、奥さんの方は、これにしなよ。傑作だわよ」

朱美がチューブ入りのクリームをポケットから出して川田に渡し、川田の手の瓶をとって京子に立向かう。

チューブにはられてあるレッテルを見た川田、なるほど、と口元をゆがめた。

男達の術中に、はまりかけていた静子夫人は、遂に敵の思うつばへ完全に入って行ったのである。自分を忘れて、敵のはりめぐらした網の中へ飛びこんでしまったのだ。あたかも、はられた蜘蛛の巣の中に、飛んでゆく蝶々のように——。

美しい静子夫人の頬を濡らしている涙は、これまでの辛い故、苦しい故に流す涙ではないと、さすがにベテランの川田にはよくわかったのである。

——何分か過ぎて、静子夫人は、心地良い夢心地の眠りからさめたように、そっと美しい眼を見開いた。天国ではなく、やはり地獄の真只中である。数人のズベ公、そして数人の愚連隊が、クックッ笑いながら、柱に固定されている、静子夫人に見入っている。

肉体の芯までしびれきってしまった夫人ではあるが、野卑な男女の視線を全身に受けるとはっとしたが、もう静子夫人は、悪あがきはしない。女の生理の一部始終をはっきりと

これらの連中に目撃されてしまったという口惜しさは、完全な屈服と観念を夫人の心にあたえ、そこからほのぼのとした快感をくみとろうという変化にまで至ったのである。

銀子と朱美が、わざとらしい優しい口調で静子夫人の耳もとに口を寄せる。

「ほ、ほほ。若奥様、すばらしい場面を見させて頂いたわ。今までで一番圧巻ね。」

と銀子。

「奥様が、グロッキーなってしまうれている間に、ちゃんと、後始末はしてあげたわ。フ。だって、奥様は可愛い赤ちゃんなんですものね」

と朱美。

静子夫人は、一種、凄惨な冷淡さで、美しい瞳を見開き、じっと何かを思いつめたように前方を見つめている。

川田が、静子夫人の前に立って、仕事のあとの一服というようにいかにもうまそうに煙草を吸いながら、夫人の顔をのぞく。静子夫人は、ふと、川田の眼と視線を合わす。どういうわけか、今までと違い、川田を見る静子夫人の黒眼がち澄んだ美しい二つの瞳は、濡れた雨後の月の光のような輝きを走らせた。ぞくぞくとするような色めかしい夫人の

眼に川田はふとたじろぎながら、しかし、強引に一步踏みこんで、夫人の耳に口を寄せ、柄になく優しい口調でいう。

「満足したんだろ。返事してごらん」

川田は、夫人の頬を指でつつく。

静子夫人は、川田にうっとりとして視線を注ぎなら小さくうなずいたが、その途端、夫人の澄んだ切長の瞳に可憐な花のような初々しい羞恥の感情が走り、夫人は顔を赤めて川田から眼をそらせるのであった。

喜んだのは川田である。ようやく、静子令夫人を開眼させる事が出来たという喜び、知性と教養にあふれた絶世の美女、遠山財閥の令夫人が、街のダニといわれる森田一家の手で、完全な秘密ショーのスターになりきるのも、もう時間の問題だとわかった川田は、嬉しくてしかたがない。豊満にして艶麗、川田にいわすなれば脂の乗って熟れ切った肉体の持主、静子夫人は、いよいよ完全に生まれかわった女として、出発させられようとしているのだ。

川田は、静子夫人の白い額に垂れかかった乱れ髪を優しく上へ指でかきあげてやりながら、

「どうやら、奥さん。女として眼覚め出して

くれたようだね。それだけのいい体してるんだ。これからは、何時も、今のよう素直にならなきゃ損じゃねえか。ふっふふ。」

静子夫人は、川田に肉体を奪われたただけではなく、田代、森田の颯りものにもなったが、体は許しても心までは、と如何に彼等が、責めの秘術を尽しても、天の守護を念じるようにして決して示さなかったものがあった。だが、それも、今、川田の前に、しかも、衆人環視の中で、もろくも崩れ落ちてしまったのである。もうそれは、羞恥とか屈辱とかいうものを超越した一つの実体であり、その実体をさらけ出した事によって、夫の遠山隆義との幸せで懐かしい夫婦生活の追憶はあやふやになり、静子夫人の脳裡から、次第に消えて行きそうになったのだ。

「さて、遠山夫人、これからは、もう決して、駄々をこねたりしちゃいけねえぜ。あんたにや神秘のボールなんてものは、もう一枚もねえんだからな。俺達のいう事は絶対服従だぜ。いいな。身体だけじゃなく、心まで赤ちゃんのように素直になるんだ」

川田にいわれた静子夫人、気品のある美しい顔を川田に向け、すっかり観念しきったように、静かにいった。

「——わかりましたわ。川田さん」

川田は、うきうきした気分、今度は京子の方を見ていう。

「京子嬢も異存はねえな」

京子も、童女のようにされてしまった今、

川田達に抵抗する気力がある筈はない。一切をあきらめたように、澄みきった声で、

「——わかりました」

川田は、田代と森田の方を見て、どんなもんです。といわんばかりにウィンクした。

銀子と朱美は、夫人と京子が完全に屈服した事を喜び合いながら、奥から、大きな鏡を持ち出して来て、静子夫人の前へ立てる。

夫人と京子に自分のそうした姿を眺めさせ森田組に対する忠誠を、はっきりと心にきめさせようとしたのである。

静子夫人は、もう人間的な思念を超越したような、荘厳な美しさを盛った顔で、じっと鏡の中の自分を眺める。そんな夫人と京子の横顔を銀子に朱美等は頼もしげに眺めて、

「ねえ、すばらしいじゃない。奥さんも京子嬢も、その方がずっと魅力的に見えるわね」

といい、次に夫人と京子のものが入っている小皿を二人の美女の鼻先へ近づけて、

「——約東通り、このうちの半分は、貴女達とい

としい殿御へ送ってあげるわね」
川田が、女達に、屋敷に残っている連中をここへ呼びな、と命ずる。若返った二人の美女を酒の肴にして、ショウの前景気をつけよう、というのだ。
「ついでだ。美津子嬢も桂子嬢も、ここへ連れて来て、すばらしい試写会と一緒に見せてやんな」

森田がいい出した。

静子夫人と京子は、ハツとしたように首をあげる。

「——川田さん。」

静子夫人は、長い睫毛を哀願的にしばたきながら、川田に声をかける。

「何だい。奥さん」

「——何でも貴方のおっしゃる通りに致します。だけど、美津子さんや桂子に、私達のする事だけは見せないで——静子の最後のお願いです」

「おや、我儘は申しません。といった口の下から、もう我儘をいうのかい」

川田は、冷酷なものを眼の中に浮かべて、夫人を睨みつける。一言の哀願にも、耳をかそうとしない川田の手きびしい態度に、静子夫人も京子も、それ以上、口を聞こうとはし

なかった。

川田は、せせら笑って、

「屋敷にいる連中が、もうすぐ美津子と桂子をしょっぴいて、ここへどっとやってくる。奥さんと京子嬢は、その若返った姿を連中に鑑賞してもらったり、批評してもらってからいいかい。そのままの恰好で、こいつを使ってみせるんだ」

川田は、夫人と京子の肢の下に置かれてある洗面器を足の先でつつき、二人に示した。

「いいね。わかったら返事をしな」

川田に、乳房を指ではじかれた静子夫人、顔面真っ赤にしながらも、

「——わかりました——」

と、はっきり承諾の意志をしめしたのである。その瞬間、静子夫人は、自分の体内に、新たに生まれて来た別世界の女の血が、小さく渦巻き出して来た事をはっきり自覚した。抱きかかえた酒瓶をカチカチいわせながら大多数のやくざ、ズベ公が何か大声で笑い合っている、土蔵の近くへ迫って来たようである。

作者より

——長らく、御愛読頂いた「花と蛇」も一応これにて打切らせて頂く。長い間の御愛読を切に感謝する次第である。 団 鬼六

【本誌最近号総目次】

昭和三十一年五月号

(定価二五〇円)

△第一グラビヤ▽森の中の美形
(梨花悠紀子)▽後手高小手四
態(大塚啓子)▽松樹に捕えられ
るまで(絹川文代)▽鉄枷と足首
くさり(絹川文代)▽ハリツケら
れた囚女(大塚啓子)
△巻頭口絵▽アイデア画「レイ
ン」の女(四馬孝・画)女相撲
「禁じ手五題の内」(雪崎京人・
提供)責画「筆筒の鑑応用」(美
しき鼻吊り)(四馬孝・画)ドミナ
とスレイブの部屋「人間馬の試
乗」(ブラシの尻打ち)「女体切
腹」(若妻の自決)(四馬孝・画)
△第二グラビヤ▽廊下にさらす
生贄(梨花悠紀子)▽鏡の妖しさ
(山路ミヨ子)▽白肌は電光に映
えて(長野良子)▽縄の猿ぐつわ
と首縄(大塚啓子)▽柔肌のくび
れと腰巻(大塚啓子)
△奇クサロン▽悪女と悪妻と悪
書(編集子)○サロン楽我記(辻
村隆)○モデル哀歌(塚本鉄三)
○強烈マゾ絵画「巨臂に屈伏する
男」評(綾麻須男)○女相撲「出
し投げ」(畔亭数久)○アブ・ア
・ラ・カルト「煙草責」フオ
トについて(畠山好一)○私は解
剖を見た(上城裕)○変天古林短

昭和三十一年六月号

(定価二五〇円)

信○女腹切「落城の女」(飯森潔)
○短信往来「出産をすまして」(馬
場アヤ子)○女王様への思慕(犬
山畜男)○夫婦のSMプレイ「私
のうつした写真」(長田実)○現代
世相アプロム○簾巻き(畔亭数
久)○奴隷募集(津田亜紀子)○
チリ紙奇譚「夏山の出来事」(佐
美山新)○浣腸の告白「クリスタ
ールの効果」(完龍児)
△本文▽鬼六談義「小説作法」
(団鬼六)マゾコント「長煙管の
火の羅字」(福田久文)奇譚三十
九夜物語(辻村隆)殿中妖艶女相
撲絵巻(岡平吉夫)マゾ芸術考「女
性男装管見」(田島直士)女性切
腹の可能性「切腹の心理と腹部マ
ゾヒズム」(高野原美)続濡れに
ぞ濡れし(芳野眉美)マゾコント
「モルモット」(犬山畜男)連載
小説「花と蛇」に期待する(佐土
良志)宇宙のどこかで(佐治麻造)
雪夜に捧る「女装と自虐につかれ
て」(木下明)殺し屋ものがたり
(佐出須登)ラ・ムール・デスク
ラヴァー(三原寛)花と蛇(団
鬼六)夫婦SMプレイ雑感(新宮
明夫)アルバム列伝(芳野眉美)
懐かしい縛られ美女(東山映史)

△第一グラビヤ▽第三者の傍観
(大塚啓子)▽竹棒の小道具利用

(大塚啓子)▽後手吊りの諦観ム
ード(梨花悠紀子)▽豆絞りのア
クセント(遠藤百合子)▽猿ぐつ
わによる表情の変化(大塚啓子)
▽椅子活用の逆エビポーズ(大塚
啓子)

△巻頭口絵▽アイデア画「泥責め」
(四馬孝・画)責画「女体生体実
験」(洗車ブラシ)(四馬孝・画)
女相撲「禁じ手五題」の内(雪崎
京人・提供)ドミナとスレイブの
部屋「着衣剥奪」(吊り機構)「尻
打ち機構」女体切腹「武家娘の切
腹」(四馬孝・画)
△第二グラビヤ▽美貌弄顔(梨
花悠紀子)▽華々しきいたぶり(大
塚啓子)▽浣腸具のある風景(大
塚啓子)▽うごめく拘束女体(梨
花悠紀子)▽さるぐつわ哀情(大
塚啓子)▽足首と縄、柔肌と縄(大
塚啓子)▽あえかな女囚ムード(梨
花悠紀子)
△奇クサロン▽編集のジレンマ
(編集子)○8ミリ緊縛行第一作
「のたうつ女体」(登映治)○ヘ
ルセキサン(小山田久美)○お臍
と女優(多山皓)○映画通信「或
るキス・シーン」めんどりの肉よ
り(AT生)○サロン楽我記(辻
村隆)○変天古林短信○読後感
「四月号を見て」(神戸正雄)○
マニヤ通信「その瞬間」あるマニ
ヤの話(YT生)○映画のお色気
攻勢(軟映画通)○吉行淳之介著
「砂の上の植物群」評(日刊各紙)

○背負い投げ(畔亭数久)○卒業
式の午後の思い出(井沢京子)○
女相撲とメンスバンド(SK生)
○SMクラブへのお誘いとお願
(泉かおる)○SMの視黒「スリ
ルの快感」○拝啓、編集長様(見
上伏男)

△本文▽KKグラビヤ悦虐フォト
回顧(近藤一)奇譚三十九夜物語
(辻村隆)女性切腹の可能性「切
腹の心理と腹部のマゾヒズム」濡
れにぞ濡れし(芳野眉美)十三人
の女死刑囚(佐出須登)宇宙のど
こかで(佐治麻造)切腹研究夜話
「忍者TV切腹」(中康弘通)赤
いお腰しと長襦袢(牧高志)浣腸
の部屋(芳野眉美)FRAGNE
NT(三原寛)浅き夢見し(万田
不仁)ある夜の政代(大中忠)解
剖マニヤの手記「女体解剖」嶋田
雪子)サディズム小説「心傷たむ
遍歴」(西条操)花と蛇(団鬼六)

昭和三十一年七月号

(定価三〇〇円)

△第一グラビヤ▽樹間の妖美吊
り風景(梨花悠紀子)▽縄に喘ぐ
黒い下着(大塚啓子)▽布に嵌口
された表情(大塚啓子)▽猿ぐつ
わの種々相(大塚啓子)▽乱れた
白衣の魅力(大塚啓子)▽手摺に
責められる美女(梨花悠紀子)
▽手足並行吊りの表情変化(絹川
文代)▽鼻を弄ばれて(大塚啓子)

▽麻縄と荒縄のタッチ(大塚啓子)
 △巻頭口絵▽アイデア画「柔肌をくびる」(四馬孝・画) 責画「古寺の怪」(レイン・コートの外出)(四馬孝・画) ドミナとスレイブの部屋「臀部打撃」(五カ所責め)「ゴリラと美女」女相撲「禁じ手五題」の内(雪崎京人・提供) 女体切腹「若妻の後追い切腹」(四馬孝・画)
 △第二グラビヤ▽美しい鼻の荒療治(絹川文代)▽顔面醜弄四態(絹川文代)▽ボリウム女体抵抗(大塚啓子)▽カメラに囲まれた麗人(絹川文代)▽受縄の愛情と法悦境(梨花悠紀子)▽豊かな被虐表情美(絹川文代)▽新着外国SMフォト(高田勇・提供)▽夫婦のSMプレイ・フォト(新宮明夫・提供)
 △奇クサロン▽本誌は同人雑誌か(編集子)○サロン楽我記(辻村隆)○生首フォト礼讃(剣持逸人)○最近の縛り映画展望(東山映史)○夫婦のSMプレイ写真(新宮明夫)○Mフォト・モデル志願(喜多利一)○閑人漫語(S生)○私の「生首」作品(水野弘)○マニヤ通信「私の撮ったS子」(松永景子)○「8ミリ」緊縛行(登映治)○鑑賞用臨月妊婦(瀬沼五郎)○女の首級(前川成雄)○武智鉄二氏が「谷崎も」の製作○本誌45月号の迷評(佐藤耕作)○続世界残酷物語よ

り(中屋敷真)○森田敬三肉筆「腰元切腹」評(兵頭庫一)○変天古林○短信往来「同名異人の中田君へ」(中田明)○雑誌通信「男はみな女のドレイ」(高原逸見)○編集室だより
 △本文▽悦虐の美女を懐う(近藤一)逃亡(万田不仁)映画にあらわれた処刑シーン(黒田寿)妖異女斗美八景(佐藤健児)モデルの手記「野晒し」(大塚啓子)心傷いたむ遍歴(西条操)ラ・ムール・デスクラヴァージュ(三原寛)十三人の女死刑囚(佐出須登)奇譚三十九夜物語(辻村隆)強精飲食直接採集法(芳野眉美)花と蛇(団鬼六)宇宙のどこかで(佐治麻造)マニヤ雑誌「A感覚と浣腸」(小林薫)女子寮の押え込み(高木紀久枝)テレビの責め(牧高志)マゾヒスティック画廊(芳野眉美)北川京子きみに寄せ参らすふみ(波良桐太郎)可愛い啓子を求めて(近藤一)

昭和三十一年八月号

(定価三〇〇円)

△第一グラビヤ▽美しき晒し人形(大塚啓子)▽狂った仰角と生人形(大塚啓子)▽無防備の女体晒し(玉田美佐子)▽手吊りに悶える上半身(玉田美佐子)▽革製嵌口具と貞操帯(大塚啓子)▽前手錠と足手錠のアップ(大塚啓

子)▽豊かにこぼれる長襦袢の肌(大塚啓子)▽伸びやかな肢体を誇る(長野良子)▽荒縄に責められる女(梨花悠紀子)
 △巻頭口絵▽四馬孝新着想責画「熱気責めの着想」針の山戦術「屈辱の牛歩行進」女相撲「禁じ手五題」の内(雪崎京人・提供) 四馬孝画集「蒸気責めの構想」オシメカバリの活用(四馬孝・画) ドミナとスレイブの部屋「回転式女体責機」連続尻打ち機

△第二グラビヤ▽吊りマニヤ真迫のポーズ(梨花悠紀子)▽猿ぐつわと鼻責め(大塚啓子)▽胸と胴とお臍の表情(大塚啓子)▽抓ねられて変った臍窩(大塚啓子)▽緊縛による脚の表情美(梨花悠紀子)▽責めに陶醉する一瞬間(梨花悠紀子)▽女体切腹姿態連続六変化(大塚啓子)▽新着外国SMフォト紹介(高田勇・提供)▽椅子に責められる女(大塚啓子)▽板の間に縛られたワン・ポイズ(絹川文代)
 △奇クサロン▽紙の弾丸(編集子)○マニヤ通信「夫婦SMプレイの実際」(三隅良信)○煙草をくわえる女○TVより「直腸鏡検査」(安部明)○腕と脚(布施あきら)○コント・オブ・コント「あるアパートの出来事」(中野三郎)○トルコの個室で(芳野眉美)○私のアイデア写真「晒し

首」フォト(水野弘)○S子の撮った私(松永景子)○サロン楽我記(辻村隆)○浣腸と女(T・M生)○奴隷志願(蛇野正八)○裸女の死斗(前川成雄)○編集室だより○緊縛願望の囚人(笠川美一)○波多津女相撲土俵入り○変天古林「残酷ものいろいろ」○乗馬に興ずる女性○写真にならなかつたモデル「浣腸の女神」(塚本鉄三)○読者レポート「国電で下腹を搔切らる」(神崎一郎)○夫婦のSMプレイ「串刺しの首」(新宮明夫)ハミリ緊縛記(登映治)
 △本文▽ある特異なるA・F十二型など(脂満愛吾)オムツカバーの実験「奇奴な育児室」(原由貴子)クロチルドの遍歴(佐出須登)赤い腰巻と民族文化(森田敬三)女学生の生体解剖「危険な実験」(黒木節夫)手錠の話(水谷光男)濡れにぞ濡れし(芳野眉美)花と蛇(団鬼六)寒椿抄(雄松此良彦)小説に現われた処刑場面(黒田寿)雨の夜ばなし(万田不仁)近代感覚に指向された鼻の魅力(湯谷照夫)「貞女」(竹谷十三)奇譚三十九夜物語(辻村隆)妖異男女斗美八景(佐藤健児)KKグラビヤ悦虐フォト回顧(近藤一)



○

前略、小生、旅行の帰えり姫路の古本屋にて貴KKクラブを初めて拝見し（本年三月号）早速に該本を買い求め帰宅致しました。家族に内緒で拝読致しました、小生の精神的趣味たる浣腸関連の記事があった事は其の瞬間から全身の興奮を覚える程でした。小生は数年前から浣腸される事のみを（特に異性の方に依る各種浣腸プレイ）一生の夢として暮らしています。小生自身も各種浣腸器を買いたいと望みながらも、いまだ其れも出来ませず（お金が無いためではありません）近頃は各病院等を

見学し、薬品棚などを注意して其の器具類を発見しては、しばしの快感を味わっています。さすがは心の内から自分自身が女性から浣腸され尽くして、嫌だという位に経験したいのです、そしてつくづく小生の内向的な恥ずかしがり屋が残念でなりません。尚、女性なら誰方でも結構ですが、三月号の浣好生の方ならなんだかお逢い致してプレイを施行して戴きたいと思っています。小生の秘事を理解して下さい。良心的な方のお便よりをお待ちします。初めて読者として皆様に勇気を出して書きました事を申し添えます。（高砂市八浣好生）

○

拝啓貴社益々御発展御慶び申し上げます。毎度面倒な事ばかり申し上げます。扱て六月号に女性の禪もの久々の登場になり大変嬉しく思っています。今後も引続きどしどしと御作成の程御願います。貴誌で最初に女性の禪姿を見ましたのは、桜井葉子さんの「遅しき柔軟生物」でした。其の時の嬉しさは今でも忘れる事は出来ません。其後数人のモデルに依り種々のポーズに楽しんで参りましたが、ただ禪をして立って居るだけではもう満足出来なくなり

ました。これはマニア諸君も同じだろうと思います。ムードの出ないものは納得がゆかない様になってきました。素裸に晒の禪一本と云う男勝りの勇ましい姿になるのですから、BGスタイルではピッタリしません。何うしても姐御タイプでないともう出ません。それには髪型ですが、丸いまげをして赤い玉のかんざしを差すとグイとムードが出ます。鉄砲光三郎の奥さんの髪型なんかピッタリだと思います。映画の「花と怒濤」で久保菜穂子さんが全身刺青をなした片肌ぬぎになって短刀逆手に持った場面が出て居りましたが、女性の刺青もなかなか凄艶です。女性の刺青は全身するとグロになり色気が無くなりますから、腕に「妾一代御意見無用」とか蛇一匹位の方が凄艶で禪のムードを引き立てるものだと思います。次に禪裸女もの、第二弾短刀を持った女。1、白鞘の短刀（刃渡り九寸五分以上のもの）を左手に持った場面。2、乳房の間に差した短刀の柄に手をかけギリギリと鯉口を一寸位切った場面。3、短刀を口にかみ右手で逆手に持った場面。4、短刀逆手に抜いた背面。第三弾女の決斗短刀がかみ合う迫力ある立

ち廻りの数場面。第四弾鉄火場の姐御。1、片肌ぬぎで右腕には刺青、片ひざ立て乳房の間に呑んだ白鞘の短刀がチラッと見えている場面。2、ピンクの腰巻一つになり乱れた腰巻の間から禪のたれが見えている場面。3、禪一本の大あぐらで短刀引抜いて啖呵を切る場面。第五弾女やくざの殴り込み。白鞘の日本刀を禪にぶち込み「命は貰った覚悟おし」とばかり鋭く斬り込む数場面。この場面も刺青があった方がピッタリします。以上の如く短刀を使用する事により禪のムードを最高度に發揮出来るものと私は信じます。何うか短刀と禪のコントラストにより凄艶なそして今少し大胆なポーズにより禪のムードを十分發揮したものの御作成を期待して止みません。（註）晒は一丈以上のものを使用きつく締め込み前のたれ必要短刀逆手に持つ場面、柄頭に親指をかけること。日本刀は白鞘の一尺、二三寸位のもの。（黒の脇差しは玩具の様に見えます。日本刀のあまり長いものは女らしさを失い色気がなくなります）（倉敷市八上山太郎）

○

初夏の候となりました。皆様御

機嫌よろしくて何よりと存じます。貴誌いよいよ御繁栄へんしゅうの皆様御苦勞御察しいたし感謝いたしています。この手紙前に幾度か出そうか止めようかと迷い書いたものを破いて捨てましたが今後は出すことにいたします。生来の悪筆で読み難いと存じますが御判読下されば幸甚です。なぜ投函を迷ったか何だかある種の精神病者の様で恥かしいからです。でも貴誌を通じて見ますに私の様な人もある様で何だかうれしい様に感じ興味を持っています。美しいものが美しく滅びる、これ程美しい事がありました。その点で美しい女性が自からの命を絶つに最も悲愴な切腹を以てする。思うだけでも身内がぞくぞくする様です。従って貴誌の切腹写真良く見せて戴いています。大変結構な出来のが多く心をたのしませてくれる有難く思っています。本文にも切腹記事がありますが、どうも少なくて残念です。先頃切腹特集を計画した処注文部数が少なく中止したと言う記事も見ましたが、残念に思います。中康先生の切腹と言う本も読みました。大変結構な本でした。さて私はここで一つ貴誌に注文したいと思えます。それは御

芝居の名場面等載せられてはと存じます。始めにも書きました様に美しいものが美しく滅びる、そこに興味があるのだから、やはり美しい事が必要です。名優のかもしれない切腹ムードを誌上で発表するのも良いと思いますが、これは出版権の様なものにふれていけないのなら、止むを得ませんが出来れば結構たのしいものになると思います。近頃のものでも大阪歌舞伎座の山本富士子の琴の爪のおみの最後の場面等はたのしい見物になるうと思えます。こうしたのは材料はいくらもあり、それぞれの趣があつたのしいと思えます。次に読者通信の処で良く見る事です。私にも同好者の集りがほしいと思えますが、田舎者の私ではとても出来ない事と諦めています。せめて一人でもよいから（出来れば切腹に興味ある女性）紹介して戴けたら（遠方の方で結構です。文通でよいから）等と大それた望みを持っています。叶えて下されば有難いと存じます。次に私小説と言うのには余りにもおこがましいですが、作文を書きました。又折があつたら読んで戴こうかとも存じています。勝手な事ばかり書きまして、どうも恐縮です。皆様

の御健斗を御祈りいたします。
（愛知県額田町△石原政二△）

○

臨時増刊号「花と蛇」を読んだ。全く素晴らしいの一語につきる。小生はこれまであらゆる小説その他の読物を読んできたが、これほど完全で、そして興味深いものは未だかつて読んだことがなかった。団先生の執筆に深く感謝の意を表わすと同時に、貴社の企画に深く敬意を表するものであります。さて、そこで貴社の読者に対する親切なはからいに再びあまえて心の底からお願ひ。なにとぞなにとぞ小生を助すけると思つて「花と蛇」の続編を出して下さい。団先生にもお願い！ すこしでも速く！ 京子、静子夫人、美津子、桂子の四人の女性の最後の最後まで知りたいのです。女としての喜びを知った女性達が、これからさきどのようなにして、川田、森田、田代につくしていくのか、ああ、狂いそうだ。速く出して下さい。（福岡県八小川圭三△）

○

読者の皆さんお元気ですか？ 私は二十二才。どちらかと言えばSよりM的性向の持主です。この通信欄にはまだ一度もお便りした

女相撲と女斗美

女相撲組打ち

相撲マフシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号（すか）

女相撲投げ業

相撲マフシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号（すね）

禪裸女の争斗

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号（めん）

禪裸女の寝業

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号（めき）

裸女相搏つ

白晒六尺フンドシ着用
大手札印画紙焼付
八枚一組 八〇〇円
略号（えく）

事は御座居ません。(奇クを愛読する様になつてから三年以上もなりました)今度、どうしても私の切ない願いをお聞き届け下さいますようにと思ひまして……。それには、同好の趣味の皆様にお呼びかけする必要があります。まあどうぞよろしく。私は、くすぐり責めに非常な興味を持っております。この通信欄にはこの責めの便りが非常に少なく、私、残念に思つております。しかしくすぐり責めに関心をお寄せの方は多いと私は自負しております。さあ同好の方、一日も早くプレイしましう。くすぐる者の嬉しさ。くすぐられる時のあの喜び。全く夢の境地に貴女をお誘いする事でしよう。貴女を全裸にして(全裸が嫌でしたら、パンティ・ブラジャーの着用はかまいませんが)ベッドに大の字にして縛り又高手小手にして半吊りにして、貴女の肉体の余す所なく羽根や毛筆等でくすぐります。貴女は、初めのうちは笑うだけで済みますが、次第に苦しくなり、しまいには全身から玉のような汗やひよっとすると尿まで出るかも知れませんか。でもこれは楽しい素敵な責めです。貴女の次には私と順番にやってもいいで

す。又浣腸責めも好きです。どうぞこの私と楽しい夜を有意義に使いましょう。それに、私は、女性の下着の収集を初めたく思いますので、全国の女性の皆様御協力下さいますようお願いします。貴女の使い古しの汚れたパンティ、ズロース、メンスバンド、スリッパ、ストッキング、ガーター、ブラジャー等あらゆる下着を実費で分けて下さい。(大阪市天王寺区八岩下弘)

○ 奇クの皆様、始めておたより致します。小生つい最近奇クを知りどうしてもっと早く解らなかつたのかと残念でなりません。私は揮マニヤです。勿論六尺揮が一番好きで、現在、白晒、ナイスの赤ふんどし、ベンベルグ(水玉)各種等、その他いろいろ持つておりますが、一人でアパートに住んで居りますので、作る技術を持つておらず、どなたか女性の方で(勿論マニヤの方)作っていただけたらと思つています。僕が今最も愛用しているのは、真赤なナイスの六尺をタテに二分したものです。四方をたたいてありますので巾は約十二センチです。これを出来るだけきつく前袋一杯に締めるのが最

高です。そして尻に相当食い込みます。カッコよく締める事においては自信があるつもりです。風呂屋にも時々締めて行きます。奇クでふんどし愛好者のグループがある様でしたら私も仲間に入れて下さい。どなたか是非連絡していただけないでしょうか。この間神戸で昭和三十七年七月号を買いました。その中で東京の小倉いくよ様のおたより興奮しながら何度も何度も読みました。二年も前で連絡がつくかどうかわかりませんが小倉いくよ様是非連絡先をお知らせ下さい。編集者その他の方にもよろしくお願い致します。フンドシとビキニスタイル(ショーツ)はすぐくお尻に食い込んだもの)の好きな女性の方と結婚を前提とした交際並びに文通がしたく存じます。(大阪市八森下正雄)

○ 東京霞ヶ関の横溝とみ子様。七月号の読者通信を拝見致しました。貴女がマゾの男性を求めておられるのを拝見し、非常にうれしく思います。私は二十二才のマゾの男子で、身長一五八cm、体重五三kgです。貴女のような女王様があらわれるのを私は待つて居りました。貴女とプレイが出来たらどん

全裸の切腹悦楽

モデル 大塚啓子

△第一組V略号(ひた)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

△第二組V略号(ひと)

大手札印画紙焼付

四枚一組 四〇〇円

なにすばらしいでしょう。まず女王様にパンツ一枚にされ、四つんばいにされ、女王様にのせ歩き廻り、それからくすぐり責、鞭打ち針責、ローソク責等……どんな責めにも耐えるつもりです。女王様が入浴の時間となりますとお体のすみずみまでお流し致します。もしよろしかったならば一度お会いしたいと思ひます。この便りが掲載されてから、翌週と翌々週の月曜日の午後三時渋谷駅のカラーテレビ前(プレイガイド前)に左脇に週刊誌を持つて立つて居ります。それでは貴女とお会いできる日を楽しみにして居ります。さようなら。(東京八園田恒幸)

○ 横溝とみ子様。七月号読者通信にて貴女のおたより拝見しました。まさに私の理想としていた女

性です。私は一人息子として育てられ、小さな頃はよく近所の女の子と赤ちゃんごっこをしては「言うことを聞かない子だから、お仕置きをしましょうね」といわれ、おしりをぶたれたりお灸だといっては松葉を刺されたりしました。その頃より女性にいじめられることを夢見るようになり、特に東京に出てきて下宿住いをするようになると、その傾向が強くなりました。でも元来、気の小さい私です

ので、KK誌を読んで一人では慰めていました。でも貴女のおたよりを読むと、どうしても自分をおさえることができず、志願するの顔をした、二十一才になる青年です。七月二十六日(日曜日)一時から一時十五分まで代々木駅の伝言板のところに週刊誌を右手にもって待っていますから「村野さんの弟ですね」とお呼びかけ下さい。私は「横溝様のお姉さまです

〔最新版分譲品〕

(解説は旧号に出ています。分譲中ですが、打ち切りにならないうちにお求め下さい。)

乳房しぼり

略号 (うは)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

鼻責と緊縛

略号 (うい)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

木馬責三態

略号 (もく)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

椅子責の果

略号 (いす)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

血紅切腹

略号 (るな)

大手札五枚一組 五〇〇円

モデル 大塚 啓子

双胸の縛り

略号 (そう)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

動感海老責

略号 (とう)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 大塚 啓子

色禪開股縛

略号 (いふ)

大手札三枚一組 三〇〇円

モデル 長野 良子

か」とお答えいたしますから。では貴女のもとにひれふすことを夢みてペンをおきます。(東京八村野洋一V)

○ KKファンの一員として始めてお便り致します。僕は、いわゆるSと云うのでしょうか、女性への縛り、浣腸等到大変興味を持って居る二十三才の男性です。この頃の編集には残念ながら不満を持っております。しかし、「花と蛇」特別号を手にし、それが吹き飛んでしまいました。エネマファンの又とないプレゼントです。しかし写真にはもうすこし工夫してもらいたかった。まず空の浣腸器、どこも濡れて居ません。そして、薬品・容器類がない事、もっと実感の有る写真なら、こんなにノッペリしなかったでしょう。(編集の方針かも知れませんが) さて、同好の皆様この「花と蛇」をお読みになつていかがでしたか。僕はこの物語を読んでからと云うもの猛烈に写欲が出て来ました。そこで、同好の女性へのたのみ。三十才以下の東京・近県の女性の方、ぜひ主人公になつて、僕のモデルになつて下さい。遠方でも出かけて参ります。私達の写真

でKK誌を飾ろうではありませんか。御返事お待ちします。(東京八中野浩V)

○ 編集部其の他御一同の皆様御健闘の事と、心から御祝福申し上げます。先日「すね」御送附戴き有難く拝見致しました。いつも乍ら豊富なモデル陣を擁して次々と新しいアイデアにより我々マニヤを喜ばせて下さる事を大変うれしく思います。メトミを初め女体の肥大美を追及する私にとって「奇ク」の存在こそ唯一の艶麗賞美のきづなとなる事を確信して居る者の一人です。御座居ます。「すね」を手にとり其の組写真の中から色々感想の浮ぶままに私見をのべて今後の希望に代え度いとペンを取った次第です。格好な二人のモデルに様々な足癖や手取りの変化を見せ組み合つた図は全く、メトミ好者のよいフォトリートと申せましょう。然しその着用した禪は是非黒にしたかったと思われまふ。そして肌に喰い入る様に少し細い物であつたらなお好適で、失礼乍ら之では何か細帯か伊達巻でもしめた様でふさわしくありません、それに投げを打つ手や指先にも力が入つて居らず、又こそば

ゆいのか笑い乍ら組んで居る等もあり女闘美の表現に真迫感の薄れた感じになりました。然し他方昂り揚げられた足のブレや腰の動き等にはよく動感を味うに十分でした。それからその舞台土俵とも云うべき場所の設定にいささか難がある様に思えます。部屋のバックに襖の黒い縁は何とも目ざわりで有り、又構えた足元のマットレス等は不用でむしろ黒味勝ちな毛布か唯の布の方がよかったのではないでしようか。室内の蛍光灯による平等な配光はすっきりとした画調になりよかったです。思いました。ともあれメトミフオトこそは黒輝に依り締めつけられた肌の質感と盛り上る筋肉美を遺憾なく發揮する事の出来る最も一般的な黒白写真の独壇場である事に間違有りません。どうも此の様に申しますと演出者やカメラマンの方々から叱責を戴くのではないかと案じ乍ら、それを覚悟であえて僭越な愚言を呈した事を御許し下さい。今後共益々メトミの醍醐味を満喫すると共に女体の肥大美へのあこがれを抱き乍ら進みたいと思つて居りますので『奇ク』にも此の様な資料や記事の掲載の頁を広域に解放下さる様お願い致します。又私

が得た経験やそれに関連した写真等も本誌を通じ読者の皆様に御披露したいと思つて居ります。どうぞ読者の同好諸兄からも本欄を通じて、御文通下さる様心から切望してつたない感想とお便りを終らして戴きます。(神戸市長田区八増田トシロー)

読者の皆様御元氣ですか。本誌が発行されている事を偶然に書店で拝見、本月号より仲間に入れて頂きました。女王様の奴隷犬として飼馴らされて参りましたが、此の度本国に帰られました。今迄の体験や経験でいろいろと奉仕させて頂き度いと存じますが同好の方への連絡方法もわからずに居ります。どなたか女王様の奴隷犬として採用して頂けませんでしょうか。女王様の命令には絶対服従することをお約束致します。SM的な若い女性の方よろしかったら奉仕させて下さい。時間は何時でも結構です。年齢は三十六才、職業会社役員、身長一米六五、体重六十キロ、女王様に奉仕する奴隷犬、足なめから始まって体のクリーニング、その態度が悪いと蹴飛ばされ口の中にパンティを押し込またり棒でたたかれたり、メンスバ

鼻責めのアツプ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(はす)

膨満正面の縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(へな)

血紅切腹絶命態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ちの)

血紅美女の切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ちた)

ンドのボタンが外されイルリガートルが入れられる。そして人間トイレ、其他如何なるアイディアにも応じます。最高のプレーが出来ると思います。(東京都世田谷区八清水二郎)

河合芳子様。六月号でのお便り拝見致しました。小生今年二十二年才の浣腸マニヤです。残念なことに私はいまだプレイの経験がなく、ただ浣腸の空想にひたっているのが現状です。もし貴女とプレイが実現できたらと色々空想してみました。貴女を後手に縛り、猿

オムツ着用写真

大手札七枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号(むね)

バンド着用開股

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(つん)

マニヤ全裸緊縛

大手札三枚一組 三〇〇円
栗本 ミチ 略号(いな)

斬首処刑場面

大手札二枚一組 三〇〇円
新宮氏提供 略号(くし)

ぐつわをはめ、注入しやすい状態にします。そして、エネマで点滴浣腸の用意をしゴム管の先にカテーテルをつけ、注入を始めます。点滴浣腸ですので五〇〇CCの溶液が腸内に全部入るまで長時間かかり、やがてすでに腸内に充満した溶液の為に苦痛を訴えてくるでしょう。貴女が排便を願うのもかまわず続けます。時間が経てば経つ程、苦痛は増し、身をうねらせるでしょう。四十分もすると、ついに貴女の我慢は限界に達し排便してしまします。私は点滴浣腸を全部注入して居りませんので、罰

として、貴女に二〇〇〇CCの大量注入を受けさせます。二〇〇〇CCの溶液は、貴女の体内に一滴も、もたらさず注ぎこまれ、その為に腹部はぼつりと臨月を思わせる程にまでふくれ上り、その状態は浣腸マニヤの私を十分に満足させてくれるでしょう。それから空気ポンプによる空気浣腸、それから、カクテル浣腸、次々となされる行動は浣腸マニヤの二人を桃源

新宮明夫氏提供

「処刑」と「生首」写真

絞首刑

略号

(こけ)

大手札三枚一組

三〇〇円

磔

略号

(はみ)

大手札三枚一組

三〇〇円

生首の晒

略号

(さら)

大手札三枚一組

三〇〇円

晒台の生首

略号

(のく)

大手札三枚一組

三〇〇円

斬首の瞬間

略号

(のき)

大手札三枚一組

三〇〇円

郷に導いてくれるでしょう。私は奇クは五年も愛読して居り、その間の浣腸小説はほとんど読みつくしました。もし可能ならば、貴女とお会いして、ゆっくりとお話を聞きたいと思えます。もしプレイがだめな時はお手紙の交際だけでも結構です。プレイの際の神士的行動と秘密主義は必ずお守り致します。八月九日(日)午後七時から七時二十分までの間、国電水道橋駅、後楽園側出口(新宿方面より)にて、左手に週刊誌、右手にほうたいを巻きお持ちして居ります。その時、貴女は「お待ちどう様! キクさん」と話しかけて下さい。もしその日が御都合の悪い時は御一報下さい。(埼玉八ヒデカズ)

先月に続いて今月も採用となり喜んでおります。これで四回目ともなれば、素人としては好成績の方でしょう。ところで八月号が二十五日にピタリと書店に顔をだしたのは、昨年六月私が愛読しだしてから始めてのことです。内容も相変らず生首が並び、私にとっては満足の上ありません。水野様の生首は是非グラビヤか分譲フォトで拝見したいもの。その場合は

血のりを忘れずに願います。前川様の作品は気に入りましたが同様の印刷がはっきりしないのが残念です。新宮様の生首は先月号と殆ど同じものの、これでは合格点はずけられません。それにしても四馬画伯がちっとも首のとんだ面を書いてくれないのは、いったいどうしたわけでしょう。「十三人の女死刑囚」は度々言われた様に挿絵がぱっとしませんでした。今月はまだ良い方です。完全に吊り下った絞首死体、獄門台上の生首、確実に息絶えたか或は執行途中のハリツケ、火あぶり、股裂きと言ったシーンが、遂に見られなかったのは残念です。先月の首を絞められ鼻汁やヨダレを流している女囚、今月の首斬器に首をさしのべている女囚はいずれも我が意を得たものでした。挿画がこの調子ならどんどん投稿したいのですが、もうタネがつかないのではどうにもなりません。佐藤様の女斗美八景の方にアツと驚くようなすばらしい生首絵をみたいものです。連載物が次々と終わってゆくようですが、これを機会に奇クを完全な同人誌とする案は如何でしょうか。いわゆる専門作家は御遠慮願ひ、すべてを一般ファンの投稿のみとするので

す。いかに幼稚拙劣を極めても同好者にとっては興味ある筈ですから、一度位「アマチュア特集号」があってもよいと思います。最後に苦情をひとつ、長期予約の場合途中で値上げになっても、予約しただけは以前の価格で発送すべきではないでしょうか。しかも割引されていた分までがいつのまにか消えています。半年分一三〇〇円が一八〇〇円と言うことは一月分八〇円以上の値上げになるわけ。ちょっと淋しい感じがしたのは事実です。(福島市八黒田寿)

六月二三日夜九・三〇、TBS・TV「七転び八起き」でフェチ又はコプロ趣味者を、一寸ばかりシゲキするアイデアがありました。例によって珍妙なサギ師の物語だが、それがなかなかフルッてる。そもそも太閤さんの末えいの証明の決め手は、太閤着用のシミのついた褌である。というクサイおハナシ。若き時代戦の合間にさる遊女と一仕事、出陣ラッパに慌てて、つけ忘れて(?)おいて行ったのが件の褌だというわけだ。その歴史的褌をば、何にもまさる家宝として立派な箱におさめて日夜三拝九拝。うやうやしくも

とり出して、「おそれ多い」とか「頭が高い」とか、鼻にあてて「くさい」なんて云ったり、一寸ばかりオチルお話を笑わせる。芳野氏ではないが、これが秀吉の禪ではなくて、淀君の湯文字だった——というのはどうでしょう。考えただけでもコーコツとなってしまふ。こんなのを所有していたら、正に骨とう的価値NO・1——いや、ゼニ金どころではない、淀君のパンティ(?)を秘蔵して日夜こっそり密室中で、三拝九拝うやうやしく鼻にあて、キスをし、あぐくの果ては勿体ないけどペロペロとねぶり廻し、その豊満なるおヒップの下に顔を敷き潰されて重圧に喘ぎ苦しみ、その芳香をいやという程嗅がされて失神してしまうようなイメージを思い浮べたり、正に「歴史的オナニー」と浮ぶにふさわしいストーリーリイであつたら申し分なし。(聖粒三)

○ 小林様、赤井様お便りありがとうございます。うございしました。一方交通——決して信用云々の問題ではなく歯がゆい思いは私とても同じでございませうが勇気がありませんので失礼を重ねております。お許し下さい。赤井様、総ゴムのオムツカバ

ーはすばらしい幻想を誘います。当地ではどこにも売っておりませんので一層羨ましく存じます。そこで本誌にお願いがあるのですが一般に入手の難しい品(例えばオムツカバー・グリセリン坐薬、浣腸器具など)を分譲品同様代理部でお取次ぎ下されば便利だと思ひますが如何でしょう。オムツカバーの普通の大人用のものは「主婦の友」や「婦人倶楽部」の代理部案内に広告が出ております。なお「暮しと健康」七月号の相談室欄に、しばしば尿を洩らすためにオムツをしている女性の質問が出ておりました。オムツカバーの愛用者は案外多いのではないでしょう。なお赤井様、中日紙上で御連絡の方法ありましたらお教え下さい。当地は「三河版」です。(吉村英子)

○ 七月号の「東京霞ヶ関横溝とみ子様」御呼び掛け誠に嬉しく拝見致しました。私事都下在住三十一才の既婚M男性で、サラリーマン生活者でございします。御体験中の「牛乳配達少年」を羨しく存じます。私事、身長一六四釐、体重五七キロでございしますがオフィスワーカー故極めてきゃしゃな体軀

を致して居ります。性向は五月号奇クサロン中の「田麻須男」と全く同一でございします。強い肉体的苦痛には堪えられませんが、憧れの女王様の犬になる事ならば何事も厭いません。勝手な独り決めながら、或いはプレイの対象に御選びただけなのではなからうかとひそかに希いをこめて居る者でございします。勿論個人的な秘密は厳守致しますし、一切御迷惑は及ぼしません。何卒々々一度拝見の機会を御与え下さいませ。(都下八宮崎浩)

○ 奇ク編集部の方々、御苦勞様です。私はサド的性格の二十四才の男性です。数年来奇クを愛読しております。私は奇クを手に入れるのに車で一時間もかかる金沢へでます(呉服商なので仕入もかねて)。しかし売り切れの時、実にかかりします。貴社予約註文と考へますが、定期的に毎月郵送されるので事務員や店員にみつかるてはと思ひやめました。書店での予約もてれくさく直接買っています。私の呼び掛けに成りますが。北陸地方在住のマゾ性格の女性の方との文通御交際を切に希望いたしております。そして貴女を「花

と蛇」の静子夫人、桂子にある時は京子、美津子にと演じさせて差し上げます。まず互に納得のいくプレイから始めていろいろと奇クを手本とし研究してみたく思ひます。週一度(三時間くらい)のプレイで月一万円前後の謝礼をいたします。自家用がありますので近県ならすぐ行けます。(石川県八石川佐渡)

○ 八月号の読者通信に古い奇クを提供すると書いたところ多数の方からお便りいただきました。ありがとうございます。御座居りました。どれも各一冊しかありませんでしたので、お送り出来なかった方には誠に申訳ありませんでしたが、それでも、きっと喜んでいただけた方もたくさんあったと思います。引続いてそれ以後の各号も提供致しますから天星社で売り切れとなった号で読みたい記事のある方はお便り下さい。出来るだけ御希望に添う様努力致します。私達の一番期待している浣腸の記事が又少くなつた様に思ひます。ただ読通欄のみ満されぬマニヤの声で一ぱいです。浣腸が奇クで継ぎ扱ひされるのは、記事を一寸リアルに書けばワイセツの定義にふれそうだと云う事、

【代理部新版分譲品一覧】

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てほ)

六尺禪の変形姿態

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 二〇〇円
長野 良子 略号(てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 三〇〇円
松本アサ子 略号(まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆは)

白晒六尺禪(正面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しは)

白晒六尺禪(背面)

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(しろ)

黒フンドシの女(正面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くま)

黒フンドシの女(背面)

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(くう)

相撲禪を締め込む

大手札四枚一組 四〇〇円
遠藤百合子 略号(すい)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆお)

月経帯のまま縛り

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆす)

写真もエロ写真と紙一重だと云う事、投稿者が少いと云う事だろうと思います。確かに編集者としてみれば公開誌には扱いにくい項目かも知れませんが、大勢のファンが居る事を忘れないで下さい。一寸の心使いでワイセツにならずマニヤを満足させる事の出来る写真なども出来ると思います。投稿者も以上の点を十分考慮に入れて書いて下さればきつと載せてもらえ

ると思います。そして私達の奇くをもっと大きく育てましょう。エネママニヤの人でも是非お便り下さい。(静岡県清水八春野雪男)

年です。同好者の住所を教えてほしいというお手紙には、返事のしようが御座居ませんので通信欄をかりて返書にかえさせていただきます。皆様のお手紙には大変参考になりました。今後もおひまなときにも走り書きをお寄せ下されば幸いです。私はマニヤのノートの如く、女性の神酒崇拜者ですのでS女性のお手紙は最高に光栄です。(東京八芳野眉美)

七年ほどまえのKK誌に掲載された「私の縛り美五原則について」という一文が忘れられない。その文の筆者の筆名は「笛地佐渡」であった。しかし、私は、その後今日まで、絶えてこの秀れた筆者の名を見たことがない。ご病気のなかのどうか。入院療養中なのだろうか。どこに住んでおられる方なのであろうか。それとも、も

う他界されたのだろうか。私は、生涯のうちにいちど、この筆者にお目にかかりたいとさえ思う。いま、この方はどこでどうしておられるのだろうか。笛地さん、私のこの呼びかけを、もしあなたが読まれたら、ぜひとも、誌上で、いまいちどお元気な声をきかせてもらえないだろうか。私は五十才の商人なのだが、どうしても、あなたの健在を確かめたいという気が、散歩の途中などに、ふと脳裡を掠めることがあるのである。(昭39・7・3大阪八林正)

冬木様の文拝見いたしました。大いに興味を感じ、私でよろしかったら貴女のご希望にそいたいと思います。まだ一度もプレイの経験はございませんが、貴女様と紳士的なおつきあいが出来ればどんな遠くても都合つけてはせ参じます。貴女にお気に召すか解りませんが、一度お会いしてお話しして見たいと思います。貴女の都合のよい場所を知らせていただければ幸いです。是非お便り下さい。(埼玉八荒川生)

初めてお便りします。愛読者の皆様お元気ですか。僕は京都に住

む二十歳の青年ですが、幼い時から映画や芝居で女の人が縛られ拷問を受けている場面を見るといい知れぬ興奮を覚えますが、それがどうしてなのか最近まで自分では理由が判りませんでした。先日、ふと書店で見つけた「奇ク」を見て世の中には僕と同じ性向を持った方がたくさん居られる事に気が付き勇気づけられました。さて一冊の「奇ク」をこうして毎晩秘かに眺めて楽しい想像にふけっているのですが、僕には多くの「奇ク」を購入して保管する所がないのです。家族の者にでも知れたらと思うととても心配です。それで京都にお住いの方で僕と同じ性向をお持ちの方でM的な女性の方、勿論「奇ク」やS写真をどっさりお持ちの方、僕とお友達になって戴けませんか。楽しく語り合いたいと思います。なるべくなら三十代位の方で、異性との付合に人から誤解を受けない気軽な立場の方をお待ちしております。いきなりプレイなど僕にはとても出来ませんが親しくお話などして、お付合せせて戴いているうちには少しづつでもプレイをやりたいなと思ってきますから、そのような時にはよろしく。僕は九月の十五日から

十七日の十二時から一時の間に御所西北隅にある児童公園で待っています。ベンチに腰掛け編物をしていて下さい。僕は黙ってあなたの傍に腰掛けますから充分に僕を観察して後、あなたが御承知なら声をかけて下さい。嫌ならそのまま黙ってベンチを立って下さい。お互に秘密を厳守したく思いますから。(京都M・S生)

本日八月号入手しました。増ページ・内容の充実など編集部の方々の御努力全く頭の下る思いです。八月号読者通信の冬木尚子さん貴女の告白大変うれしく拝読しました。小生は金沢の近くに住む二十四才に成る一青年です。体重一九貫で柔道二段です。貴方の文を読んでいいますと、もう小生の頭の中は貴方を一人の女囚人化しています。尚子は小生に返信すべくさせず他の男性と旅館から出てくる所を小生に見つかり今倉庫の中で拷問をうけているのである。上衣はすべて脱がされスリッパとパンティ一枚にされて両手首をロープで縛られてバンザイ型に頭上高く吊り上げられ宙吊にされています。しかし尚子は相手の名前すら言おうとしない。ベルトをぬきと

りムチ打つ、しかし一向に白状しない。尚子は目をとじ放心状態で苦痛を楽しんでいるかのようである。やはり尚子も一人の女であった。スリッパをはぎとると羞らいた。尚子に対し白状するまで逆さ吊り、ハリツケ、梯子責め、水責めなどありとあらゆる拷問がまわっているのである。などともない想像をして申し訳けありません。尚子さん御便り御願います。できる事なら貴女の納得のいくプレイをしたいと思ひます。せめて文通だけでも御願います。遠方ですが参上も可能です。貴女の御返事を願ひつつ。まず通信欄で御返事御願ひします。(石川県八サド青年)

貴社益々御隆盛の段、誠に御喜び申し上げます。昨年の暮貴社の読者通信にて都島区の富永和子様を知り貴社の御連絡の労に依り和子様と御面接出来ました事を感謝致して居ります。おそまき乍ら深く御礼申し上げます。富永和子様とは、一回きり御会いして話合いました。和子様は結婚して平凡なる家庭を望み、私は家畜として飼われることを望み、お互い意志意見の違いでお別れして今日に至

って居ります。勝手乍ら今一度あわれな賤しき奴隷、家畜志願者の私の願いを御聞きとどけ下さる女王様の御出現を待ちてお便りする次第です。今では、私は道路を歩けば御婦人の後にしたがい御足許の方へ目をはしらせ脂でベタベタ汚れた御足裏を眺めたため息をつき其の場に這い伏して舐めたいと心かはやる時があります。又、御婦人の御鼻汁をかまれたチリ紙を手に入れて持ち帰り舐めかみしめて其の御婦人より屈辱され凌辱さ

れる事を空想して一人楽しんで居ります。此の賤しき私をお飼ひ下さい。犬なら雑種でも二三千円はかかりませんが家畜なる私なら御主人様の御言葉もよくわかります。一度犬としてお飼ひ下さるなら一生飼ひ殺し願います。此の世の中に親も兄弟姉妹も親類もない一人否一匹の家畜です。一般の奴隷志願者の様に傷を付けられ不具になったり命に別条ない限り私は制限致しません。普通の犬の様に一

度女王様にお飼ひ願った以上、家畜の生命は御主人様の胸三寸に有り傷を付け様が不具にしようが、殺されようが、私は本望です。
(大阪市八元山忠)

東雪枝様、貴女様のような御呼びかけを目にしますと、もうどうにも自制心を失くして、おずおずと、併し必死の念いを籠めて名乗り出ずには居られない私でございます。何時の日か女王様に廻りあう事を唯一の生甲斐として居るマ

ゾヒストにとりまして、東様の御出現こそは、此の機会を与えて戴けるなら総てを擲って悔いしない気持でございます。勿論どの様な残忍な責めにも耐え、又どの様な屈辱的な御命令にも絶対服従する事を御誓ひ致します。それでも万一東様が御満足のゆくお仕置を受けないうちに弱音を上げて御迷惑をおかけしたりする事の絶対にご様予め保証金を積ませて戴き度うございます。適当な額を御指定下さいませ。それを東様に誓約書と

最新版分譲品

豊満を切り裂く刃

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ほふ)

鎌腹を切られる女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らく)

咽喉笛を刺される女

大手札二枚一組 三〇〇円
モデル 愛川悦子、田中芳代
略号(らみ)

血紅使用 斬られる女

大手札七枚一組 七〇〇円
絹川 文代 略号(らふ)

雲斎の相撲フンドシ姿

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(ろみ)

凄んだ女賊スタイル

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(へに)

バンド、ゴム見せ

大手札五枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(へみ)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちら)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

淫らな長髪の乱れ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろも)

ふり乱す長髪のもだえ

大手札三枚一組 三〇〇円
長野 良子 略号(ろめ)

縄目にもだえる夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほく)

髪を引き回される夫人

大手札三枚一組 三〇〇円
関谷富佐子 略号(ほむ)

自から施す浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ちり)

知らせ下さい。最後に編集部の皆様御苦労に感謝致します。(布施市八中村哲夫)

すっかり夏らしくなりました。

御社益々御清祥の御事と存じます。私はもう五年程からの愛読者で、本も大きなみかん箱にぎっしり三箱保管し時々古いものを取り出しては見返えています。古くは大塚さん、梨花さん、最近では遠藤さんなんかが好きです。特に

さるぐつわには大いに好感が持てます。これからどうか素晴らしいモデル嬢の緊縛写真で私達ファンの目を楽しませて下さい。昨年十月発売の「文献」や今年五月発売の「花と蛇」特集号は私の最も珍重するものです。引続いて特集号の発行をお待ちします。(広島市八山中一夫)

本屋の店頭で七月号を見つけ、例によってパラパラと頁をめくっ

愛読者のみなさまへ おねがい

私ども三誌では、この数年間の世情にかんがみ、かねてから編集面の自粛刷新を計ってまいりました。

元来、私どもの雑誌は、けっして単なる性雑誌ではなく特殊な専門誌を自負して発行してきたのですが、青少年保護育成に関する論議が、とみに高まりつつある現今の情勢に対処すべく、いっそうの自主規制を、このたび申し合わせました。

愛読者の各位におかれましては、いろいろとご不満もございましょうが、なにとぞ、事情おくみとりの上、今後ともご愛読のほど、ここに、改めてお願い申し上げます。

「裏窓」 発行所 あまとりあ社

「風俗奇譚」 発行所 文献資料刊行会

「奇譚クラブ」 発行所 天星社

たら、「あった！」と快哉を叫んだ。新刊七月号である。ポケットの財布に手が届いた。いつものように二冊買う。保存用と座右用とである。他人は何があつたのかと思ふだろうが、マゾの私には、とても嬉しかったのだ。どれだ？百七十頁と百七十四頁の挿絵だ。ただこれが口絵の写真の方なら、もっとよかつたと思う。年上の女と男なら尚更よいが、同性でも結構。大柄なグラマーの美人と小柄な娘との対決、次号が待たれる。(横浜市港北区大曽根町八沢馬曾男)

八月号に「直腸鏡」を書いた者です。掲載感謝します。私はANUS MANIAと同時に女性の美しい鼻孔に興味をいだいていました。それもあまり不自然な責め方より、ごく自然な耳鼻科の治療などが心躍るシーンです。鼻孔を洗滌されたり、綿棒で鼻孔の奥に薬を塗られるとか、赤味がかった鼻孔の奥深く注射針を刺されたりというようなシーンが良い。モデルは鼻の特に美しい女優、例えば白川由美、真理明美、佐久間良子、万里昌代、滝咲子、藤山陽子、藤由紀子などである。最近の雑誌で

「越後つづいし親不知」で佐久間が泥田シーンで耳と鼻の孔にかたく綿を詰めこまれたという記事が出ていて胸がドキドキした。又、山本富士子、江波杏子など多少大きい鼻をなぶるのも面白からう。「白日夢」という映画を見た。歯医者治療台の上で仰向けにされた路可奈子の鼻の孔へ口をゆすぐ水の管が向けられ、鼻の孔へジャージャーと水が注がれる。苦しうにヒクヒクする鼻がアップで写し出される。「電流あそび」で責められて床をのたうつ可奈子の苦痛の顔のクローズアップも素晴らしい。スクリーンのまん中にポカリと二つ、鼻の孔が写り、苦しうに痙れんしながら「アー、アー……」とうめいている。美しい鼻毛までが、はっきりと写り、時々あえぎながらキラキラと光る。もっと鼻をいじめつけるシーンがあったら、あの映画は、もっと良いものになったにちがいない。映倫でカットされたシーンの中にエスカレーターか階段かで、全裸で這い上る所からの真後からアップがあり、明瞭に肛門が写っていたということが、某週刊紙に出ていた。

(東京都八安部明)

五十万円懸賞原稿募集

賞　　金

一　席	拾万円	一名
二　席	五万円	二名
三　席	参万円	五名
四　席	壹万円	十名
五　席	五千元	十名

規　　定

内容は本誌の掲載にふさわしいS、M、

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記▽

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるるのたとえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語▽

御自分の描く夢をまとめて

F、切腹、浣腸、ホモ等をテーマにしたもので誌上発表可能な未発表の作品。

一、枚数、原稿用紙五十枚以上。

一、締切、毎月三十日。

一、入選作品は翌月号に発表の上、掲載誌と賞金を贈呈いたします。

一、原稿には「懸賞応募作品」とエンピツ書きして下さい。

一、何卒奮って傑作を御応募下さるよう心からお待ちしています。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信▽

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信▽

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン▽

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の葉☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共▽
三月分(3冊)九〇〇円△送共▽
半年分(6冊)一八〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

九月号

(第十八巻第十号)
(通刊第一九四号)

昭和三十九年八月二十日 印刷
昭和三十九年九月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月二日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していますから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。